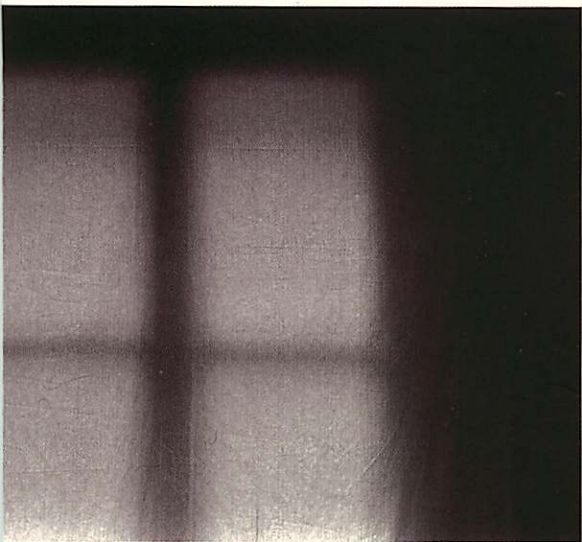


c h l a f l o s e N ä c h t e



眠られぬ
夜のために

ヒルテ
小池辰雄 [編]

F ü r s c h l a f l o s e N ä c h t e

眠られぬ
夜の
ために

ヒルテ 小池辰雄 画

白水社

眠られぬ夜のために

編者まえがき

「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらする所がない。」枕するところなく、一所不^{いっしょふじやう}住^{ぢやう}の雲水^{うんすい}そのものであったイエスは、広野であらうと、山奥であらうと、石を枕とし、木の根っこを枕として眠ることのできたひとであった。それどころか、あらしに木の葉と揺れ、いまにも沈むばかりの小舟の舟板を枕としてぐっすり眠れるたましいであった。弟子^{でし}どもが狼狽^{うはたい}してこの先生をめざまし、舟が沈みそうですと訴えれば、「どうしてそんなに信仰がうすいのか」といましめ、そのうえ、あらしをしずめることのできた人物であった。

生きることが、このおそれとうたがいと、さまざまの矛盾と罪業だらけの、どうにもならない人間と人間界に、救いをもたらすことであつた「人の子」イエスは、人生の重荷にあえいでいる者があれば、わたくしが軽くしてやるよといつて力を与え、長年の病に苦しんでいる者があれば、その病をたちどころに癒やし、親しい者が死んで泣き悲しんでいれば、その死人をよみがえらせてやり、罪を犯して石うちにされようとしている女にあえば、その女をバリのサイの偽善者どもからまもつて、罪をゆるしてやり、路傍に盲人がさけんで救いをもとめれば、ただちに目をあけてやり、つんぼの耳をひらき、いざりの足を立たせ、癩^{らい}病人^{びやうじん}をきよめ、たましいの飢え^{かへ}渴^{かつ}いている者には驚くべき天来の福音を語り、人間の霊肉を全人的に救うためにこそ生きていた。そしていまもなおそのごとく生きてはたらいっているキリストである。

福音書にまざまざと絵巻物のごとく展開しているイエスの言動そのもの、いっさいの神学的、信条的、

教会礼拝的な、いわゆるキリスト教の殻を破って、ありのままの原始の、あるがままの現在のキリスト・イエス！ これこそがヒルティが慕いてやまず、語り伝えんとしてやまないキリストなのである。

ヒルティは聖書をからだで読んでいた。けっしてあたまで研究してものを言っているのではない。「わたし」のことは霊である、生命である」といったイエスのことばをたましいで受けとり、いのちとして喰ったのである。だからヒルティを通して天来の權威ある思想が、豊かに生命的に流れているのである。ケーベル博士が「どの本のほとんどどのページをひもといてみても、澄明にして単純にして断固と表現されたいちじるしい思想にぶつかる」といったが、まさにそのとおりである。

最大の宗教家イエスが、いわゆる宗教くさみのない大自然のごとき人物であることを、多くのひとびとがみそこなっている。そしてこのイエスのあらゆる言動の奥にひそんでいる秘密は愛であることをヒルティはよくつかんでいる。

昼間活動するときは神の愛の力でうごき、夜眠るときは神のふところに全身をたくして眠ったイエス。その呼吸をうけとってヒルティも生きた。「愛はすべてにうち勝つ」とのヒルティの標語は、敵をうち負かす意味ではない。相手を荷ないあげ、救いあげる力をもった愛である。そして人生と世界をほんとうに美しくする原始力なのである。万人が実は愛に飢えている。愛の言動のみが平和以上の歓喜の花を世に咲かせるものである。ヒルティの百花繚乱ひゃっかろうらんのことばの華はなにかおる愛が、読者の人生の旅寝の枕べのなぐさめと力となることを！

一九六三年四月

小池辰雄

目次

編者まえがき	五
一 聖書について	九
二 幸福について	二七
三 苦しみについて	四一
四 勇気について	五七
五 信仰について	六九
六 愛について	八七
七 信実について	一二三
八 キリスト教について	一三五
九 仕事について	一五七
一〇 人生について	一七三
一一 結婚について	二〇七

一二	生命について.....	二七
一三	よろこびについて.....	三三
一四	自由について.....	三四
一五	天国への道.....	三九
解	説.....	三三

一 聖書について

つねに偉大な思想に生き、末梢的なことは軽視するようにつとめよ。これは、一般に言つて、人生の多くの苦しみと悲しみをもつともたやすく乗りこえさせる道である。

最大で同時に一般にもつともわかりやすい思想は、いまやキリスト教の形における神信仰である。

しかしまた昔からいままで、いじけたあまりにも狭いキリスト教がある。これはキリストの本質にも教えにも合わない、あるいは全面的には適合しないものであつて、そのためにすでに多くの氣高いまた教養の高いひとびとをキリストの教えから遠ざけてしまったのである。

もしあなたが人生の幸福を心にかけているならば、神学や教会主義をもつてキリスト教にかえてはならない。まさにあなたみずからキリスト教をその源泉に即して求めよ。すなわち福音書のなかに、しかもそのなかでもとくにキリスト自身の言説のなかに求めよ。実にキリストの言説はどんな哲学にもこれにくらぶ

べきものをみない。

マタイ二一。(一・一・一)

(1)〔訳者注〕「教会主義」(Kirchlichkeit) 教会組織、制度、祭儀などにとらわれたありかたをさす。

(2)〔訳者注〕マタイ二一は長い章であるが、イエスが当時のユダヤ教の本山エルサレム入りの場で、きわめて劇的。神殿を「強盗の巢」としている事態にたいして激しい怒りをあらわし、かつ祭司長や民の長老たちと、宗教が神の権威によるか、ひとの宗教制度によるかについて論戦。イエスは宗教制度的な神殿宗教家には捨てられ、みずから実は真の神殿の「隅のかしら石」(詩篇一一八・二三)たることを暗示する。

*

人生の唯一の理性的目的は、地上に神の国を、すなわち不和と生存競争の国ではなく、平和と愛の国を助成することである。われわれがこのことに参与しただけで、われわれの生涯は目的と価値をもったことになる。そしてだれでも奉仕や受苦によつてこのことに参与することができる。

たえずなにか有益な仕事をする、しかしあせったり憂いたりしないこと、われわれに近づいてくる事象やわれわれ自身の気分にたいしてつねに主たること、けつしてそれらのものをしてわれわれの主たらしめないこと、これは人生のどの新年初頭にとつても正しいプログラムである。しかしこれが実践されるのは、万物の主と緊密にしっかりと結びつき、主のみちびきに無条件に従うことを決意したときにかぎる。そうでなければどんなひと、たとえもつとも賢明な、もつとも強力なひとであっても、周囲のひとびとや諸事情の翻弄物となり、最善の場合にもたえずこれにたいして自分を守らなければならないことになる。そうになると人生は、大部分くだらない、しかもむだばねのおれる用務が年々推積する重い荷物同然

となり、この重荷の下に人生は、ついにどうしても、しかもおおかたはみじめにも、破滅してしまふ。

(I・1・3)

*

地上の天国は、人間が神とたえず思いを一つにすることのほか、なにものをもはや切願しないときのみ始まる。きたるべき天国もこの他のなものでもありえない。しかも、人間がこの心情なくしてはそのような天国にかないそこに安住できようとは、理性的にもまったく同様に認められえない。(I・1・13)

*

ヨハネ黙示三・二〇にいうごとく、われわれが、戸をたたき神の靈にたいして心の門を開くのであって、神がわれわれの願いに応じてさらによき存在への門を開くのではないというのは、人間の意志の自由に関する偉大な見解である。それゆえ、もしわれわれがそれをしないならば、それだけまたわれわれの責任は大である。なんとすれば、かかるしだいであれば、世にはなしえぬということはなく、ただ欲せぬということ、すなわち目の前に現に存在しているすぐさまえられる救いを拒むことがあるのみであるからである。(I・6・4)

*

現代の全然まちがった宗教教育はわたしたちに神を愛することをまったく教えない。せいぜい神を恐れることを教えるにすぎない。しかも神からのがれうるとしたらそのほうが元来よいのだという魂胆をともなっている。というのは「恐怖は苦痛である」から。神をもつ幸福は、わたしたちが残念ながらおおかた

非常に晩年にはじめてこれを知る。すでに旧約聖書には、神が自分ではなく他のありとあらゆる、しばしばきわめて不潔な神々が以前に所有していたところのものをまず受け入れねばならなかったということが、いくらか感動的な調子で表現されてあるが、この嘆きは今日も完全に真実である。エレミヤ三〇。ホセア二。のみならず、福音書は、まさに霊である生命である。とくにわたしたちがキリストから受けたことばにかかわるかぎりそうである。それゆえにあのように説かれ、また説かれねばならない。たましいのない説教やたんに形式的な教会員たることは、他のどんな方法よりも真理にたいして心をかたくなにする。これがためにかえって民衆はキリスト教から離されてしまった。ヨハネ六・六三・六八。(I・6・6)

*

わたしたちのキリスト教が、われわれを日常の生活と職業との責務課題にたいしていつそう忠実にし、金銭沙汰にたいしていつそう利己的でなく、富と名誉にたいしていつそう無関心に、すべてのひとにたいしていつそう親切に、心情をいつそうよろこばしく、将来にたいしていつそう希望満々たるものにしないのであるならば、それはいまだ真正のキリスト教ではなく、しかもそれはむしろ党派もしくは教会のことからであって、キリストのキリスト教ではない。たんに「キリスト教」という語を言っただけでは、どうもいくぶんひとを誤りやすい。この語の意味を、キリストのやり方や考え方に没入すること以外の人に解するやいなや、それは誤った概念となる。またもしもそのキリスト教とはなにかといいたるところたずね回る者があるなら、そのひとはほんとうのキリスト教を求めているのではないことがすでにおおたあきらかである。

教養ある者のおおかたが、今日遺憾ながらあまりにも多くあまりにも長く、いつたいキリスト教を扱ろうか、あるいはなにかほかの考え方が、それとも哲学を選ぼうかなどという問題にかかづらわっている。

そして彼らがおおかたは外的理由からいったんキリスト教を拒もうと決意したあとで、キリスト教のどの「派」、どの「見解」を選んだらよいだろうなどしているうちに、時はもはや残りいくばくもなくなり、キリスト教は本来なんであるか、キリスト教を信奉せんとする人間になにをもとめるかということを、真剣にしかも時代のさまざまな意思や学説の雑音にまったく拘束されずにとくと思ひめぐらす余裕がなくなってしまうのである。

今日の信仰の自由は、わたしたちの救いといのちにいたる道をいつ、そう、困難にした。とはいえ、またいっぽう、この道をいつそう信頼すべく、いつそう確実に正しい目的にみちびくものたらしめた——この道がいやしくも実践されるかぎり。(I・9・17)

*

キリスト教真理のよき証明にして、キリスト教こそあらゆる崇高な天性の人間の、真理と心情の完全なる平安への渴望を満たししめることのできるものであるという経験的証明にまさるものはない。このことを果たす者こそ、悩める人類の真の権能ある救済者である。

キリスト教は、一般にけっして非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、およそ存在する理想主義のうち、ただこれのみが実践されうる、またもつとも有効なものである。これがキリスト教のこの世界における永続的な意義である。(I・9・25)

*

一週の満載の仕事の重荷をおろしたあとの日曜日がいちばん快適であるように、苦難のあとの幸福がもつとも爽快な、もつとも安全なものである。

根本的に自己愛から解放されて後、これがなおしばしば立ち現われんとするや、むしろこの自己愛を形ある悪魔のように憎むにいたるならば、そのとき神の恩恵は確實である。なんとなれば、このことたるや、神の内在的なわざであつて、神が現に生きてここにいますことなくしてはけつして起こりえないからである。

高き山地を去りてゆく、

いざさらば、なんじ緑なす山地よ。

くれないに花咲きにおうなんじ曠野ひろのよ。

ころよき自由の夢は消えうせて、

秋風のいざなうままに別れゆかなん。

はかなくも飛ぶがごとくに夏は去り、

牛を飼う牧人まきひとははや谷間に降りぬ、

山々いただきの頂はみなやがてまた

白銀しろがねの衣をまとわん、のこるくまなく。

みどり濃き林よ、いざさらば。

このきよき地の目的めきては成りぬ。

なんじらの泉に飲みしわれは、

あらたなるいのちにあふる。

わが心、むなしきことを断ち切りて
健やかなり。わが意志も自由をえたり。

わが前に約束の地ぞ横たわる、
たれか知るその静けさに神いますとは。

この山を降りゆくわれは別のひと。

黄金のやすらいどきを今あとにして、

別れゆく心すすまず——しかはあれど、
げにわれは求めしことを見いでたるなり。(I・9・30)

*

キリスト教を簡潔な表現においてもちかつ把握しようと願うならば、全キリスト教は実際ヨハネ三に含
まれている。しかも現今なおこれについて、ほとんど二千年の昔と同様の誤謬がわれわれの間に、キリス
ト教界のただなかに、存在している。

今日もお、いかなる正式の教義も、いかなる学問も、またいかなる活動も、総じてこれらが天性を変
革しないかぎり、わたしたちをじゅうぶん助けて真の生活に到達せしめない。いいかえれば、キリスト教
の意欲するところが人間に自然となり、したがってこの教えがしたしみやすく自明なものにならねばなら
ない、あらゆる自然なものがまさにそうであるように。かくてひとはキリスト教についてもはや思案した

り、あるいはみずからなにか企ててみたりする必要がなくなり、むしろ反対にキリスト教に背反するものは自然の反感をひき起こさせ、これが克服の必要ありということになるであらう。事態がこのようであるならば、ヨハネがあきらかに自己の経験からその第一書簡で主張していること、すなわち神の命令は少しも困難なものではないというつねには信じがたいことさえ、実現するのである。なんとなればいったん自然となったものはすべて、たしかに困難ではないからである。

このことを熟慮せよ。あなたもそこまで到達しなければならぬ。また到達するであらう。これがこの人生の目的である。それまでは、わたしとともに、きみ自身をキリスト教の友であり生徒であると心静かに思うがよい。かくてもかく、わたしたちはまったくよい仲間になるのである。というのは、わたしはわたしの生涯で完全に自然になりきったようなキリスト者にいまだ多く出会っていないから。ところでこういうキリスト者は、（この際、じゅうぶん真相をおもんじて言うなら）新旧両教徒間にかなり均等にわたられており、しかも男性の間におけるよりも女性の間に多いのである。（I・10・9）

*

ともかく、一度キリスト教をためしてごらんなさい。そう呼びかけたい、すべてまどえるひと、不幸なひと、または寂しい心のひとたちに。あなたはほんとうにもうそのほかすべて可能なことをためしてみたいでしょう。まあ一度キリスト教をためしてごらんなさい。これはおのずからあなたをねんごろに招くでしょう。

マタイ一・二八・三〇、一九・二九。ヨハネ一・二三、六・三七、七・一七。

けれどももつとも単純な、もつともまがいのない、キリスト教でためしてみることです。そういうキリスト教のみがそのすべての約束にたいしてだじょうぶ責任を負うわけですから。このキリスト教は福音

書にあるがままのキリストのことばであつて、それ以外のなにものでもないのです。そのほかのものはすべて付加物です。おそらくそれは非常によき有益なものでしょうが、それでも付加物たるに相違なく、キリストのことばとおなじ価値を要求しうるものではないのです。それを要求することは使徒たち自身けつして思いもよらぬところだったでしょう。あなたは初めのうちはキリストの「神性」をすら信ずるにおよばないのです。彼自身が初心者にはそのことをじゅうぶんあきらかに免じているのです。後になって彼の「神性」の想念はまったく自然にあなたのうちに生じてくるでしょう。もしもあなたがキリストのことばとあらゆる人間のことばとの相違を、それらのことばを受け入れた結果において吟味するならば。

マタイ一二・三三。ヨハネ六・六八、六九。

キリスト教が千九百年を閲し、しかもあらゆる他の現存のものがかくもはなはだしく変遷をへて、今日なお、キリスト復活後の最初の日とまさに同様に厳存していること、またあの当時とまったく同様な信仰堅き信徒をもっていること、そしてまた、この長い時のへる間に、この真理にたいして、あるいは正当でないものをもつて、あるいは誇張したものをもつて接近してきたあらゆるものが次から次へと脱落してゆき、かくてキリスト教はその真理をのみいよいよあきらかにいよいよ説得力あるものとしてのこしたということ、——これらすべては、道理のわかるだれにでも、マタイ二一・四四あるいは二四・三五に言われていることの真理を必ずや納得せしめずしてはやまぬであらう。

そしてまたこの教えの「実」も古代神話や仏教やシナ哲学やモハメット教などの教えとはおよそまったく別なものであった。たとえこれには多くの欠けたところがあるとしても、それはこの教えに従うところに生ずるものではなく、この教えに従わぬために起こることなのである。キリスト教徒がみなイスラム教の諸民族のごとく忠実な信徒たちでありさえすれば、一般の世界情勢は、現状よりかぎりなくはるかによきものであらう。(I・12・2)

＊

「その友らに彼は眠れる間[＊]によきものを与えたもう。」これは次のようなことを意味せんとしている。すなわち、彼らはあせって仕事をしたり、へつらったり、あるいはさらによくない方途に訴えて立身出世するにはおよばないのであって、そんなことをせずとも、仕事も、生活の資も、幸福な結婚も、友人も、気力も、健康も、必要ならば休養までも、およそ人生のたいせつな宝はすべて与えられるということを。しかしながら、彼らは神の命令に即座に、忠実に聞き従い、「兩足で跛行^{はこぎ}する」ことなく（すなわち、二者択一に迷うことなく）、働き、神のたまものをまったく誠実に使用し、これをもって自分の隣人を助けようとしなければならぬ。

神およびキリストと共なる生活は、世にあるかぎりのもつとも容易な生活である。それはゆるされた一種の気楽さすらも生みいだすものである。それは人間の生存を、この世のあらゆる享樂より楽しいものになしうるし、しかもごくわずかの資力があれば足りる、あるいはむしろまったくなんらの資力をも要しない。というのは、それにはただ神との堅い友情のみが必要であるからだ、もしこの場合「ただ」という小さな語を用うることをゆるされるならば、これは不幸なひとたちのほんとうの助けで、もし彼らがこの助けを知りかつ欲するならば、けっして、彼らに欠けることのありえないものである。

マタイ一一・三〇、一四・三〇、三一、一九・二九。ヨハネ一五・七、一六・二四、三三。第一ヨハネ五・三。マラキ三・二四—二八、二〇。（I・12・5）

＊

「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。」

おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。

彼は水のほとりに植えた木のようで、その根を川にのばし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ。」（エレミヤ一七・五、七、八）

エレミヤ二一・五八。

これは始めのうちひとびとが考えるよりも、さらに真実である。これを信ずるひとは、人生の幾多の悲痛な経験をしなくて済むことができる。少なくともわたしにおいては、わたしが生涯ちゅう、人間に強くより頼んだときには、いつもその支柱はまもなくとりはずされてしまった。これに反して神への信頼は、それが確実に存在したときには、およそ欺かれた場合を、わたしは思い起こすことができない。

このことが真に信ぜられるまでには相当長くかかる。そしてこのことができるまでには、生涯はほとんど過ぎ去っている。しかもそのときになってはじめてひとびとをほんとうに愛し始める。それまでは多少なかなれひとびとを恐れているばかりである。（I・12・6）

*

これはもちろん完全に、「正教的」というわけではなく、教義問答の教えにもそぐわない。しかしこれはうたがいのなくキリストの考えであり教えであり、キリストの多くのことばのなかに容易にその実証を見いだすことができる。そこには、人間はたんに信仰のみによって天なる父の国にはいるとは、どこにも言われていない。「たんに」とはパウロでさえ言っていない、ルターがつけたしたのである。また同様にキリストのことばでは、歴史的な主の犠牲死によってもはやなにごとにもかたづいたので、それによって個人はそれを説く教会の一員でさえあれば、自然に永遠の生にはいるとは、どこにも言われていない。プロテスタント教会は、キリストの犠牲というこの一事実にあまりに重要な意味をおきすぎている。この事実を

人間はやはり自分なりに内面にうけいれて、それにくわえておのれの自分をつくし、それにもとづいてできるだけよく建設をつづけなければならぬ。もとよりつねに、自分の本分のつくしうが足らなくとも、恵みぶかい寛容とおぎながいを与えられようというなくさめをいだくことだ。ところがカトリック教会は、たんにこの教会に属するというそのことだけがあらゆる救いの根底であり、属さなければあらゆる不幸の基であると、あまりに強く信じすぎている。

キリストの真の教えをあらゆる細部にわたって、パウロ、アウグスティヌス、トマス・ア・ケンピス、ルターおよびカルヴァンよりも、ふたたびいつそう価値あらしめることが、そして、個々人は自分のこの世におけるまた永遠の運命にたいして自己の本来負うべき責任感を教会にゆだねてうしなうてしまったが、その責任感をふたたび個人にとりもどさせることが、わたしには、いませまりつつあるあらたな宗教改革の目的であるように思われる。教会はもろろん存続するであろう。そして教会が言うように、またローマのセント・ペテロ寺院の円天井の壁に大きな金文字でしるされているように、「地獄の門が教会を庄することはないのであらう」。しかし教会はかならずや改革して、その唯一の主であり師であるひとの本質と意志とのなかにあらたな存在基盤をとらえざるをえなくなるであらう。これは教会のまぬがれえない運命である。(II・3・7)

*

キリスト教の合理的な部分、すなわちものわかりのよいふつうのひとならだれでも理解力だけでわかる部分は、善意のひとならどんなひとにもしたしみやすいもので、これは、この宗教が少なくとも、これまで知られているどのようなほかの宗教よりも、すぐれており、人間のことがらにたいして親切だからである。

それに反して神秘的な部分、すなわち個人の神にたいする内的な直接の關係は説明がつきにくく、自身自身の經驗によつて把握する^{はぐ}のはかはない。そしてこういう經驗は、それをたんに研究したり、記述したり、いわんや批判したりするようなひとにはけつして与えられない。こういうひとで、かつてそうした經驗をほんとうにあじわったひとはおそらくひとりもないであらう。したがってこういうひととびとはともすればこの經驗を否定しがちであるが、神と神の直接のはたらきをしたしく知りながら、それらを否定したり拒否したようなひととびにくらべれば、まだしもゆるすべきである。神を知りながらしかも否定するといふようなことはたぶんきわめて重い罪であつて、すでに多くの不安な心に苦しみの種をまいたものである。それに反して、ただ内的な體驗を欠くばかりに神の否定者になつたひととびには、たしかにまだ恩寵^{おんちゆう}が存在する、たとえそれがおそらく来世においてはじめて与えられるにしても、存在する。(Ⅱ・3・30)

(1) わたしの考えでは、ここでは「聖靈」にたいするゆるされることのない罪をいつている。——聖靈を把握することはできないが、伝統的にそれからはなれえず、しかも形式に満足するには、またあまりに正直すぎるひととびのことをおそらく言っているのであらう。

*

「たとい地は変り、山は海の真中^{まなか}に移るとも、われらは恐れ^{おそ}れない。一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。」詩篇四六・二、四。

これは近づきつつある苦難の時代に際して、神を信ずるものの安心感である。キリスト教がこのような勇気をよびおこさないなら、それはまだじゅうぶんな生命力に達していないのだ。

これはまた神の都である。(詩篇八七・三。イザヤ一・二六。ヨハネ一四・二三。ヘブル一一・一六、一二・二三。)聖アウグスティヌスは世界を支配する教会という意味で、またべつな神の都を考えた。こういう神の都

は、個人的な信仰のみちびきにはまだじゅうぶんに適していないひとびとのためには、これまでもあつたし、今後いつまでも存続するであらう。

その点で彼らをさまたげないように。あなたは、あなたにゆだねられたことがらを楽しむがよい。第一テモテ六・二〇。(Ⅱ・3・31)

*

エレン・ケール流の「啓蒙^{けいもう}」をしたからといって、あるいは社会主義者、騒動屋、ローマ教皇黨員などにたいする国家的規正によって、なにか効果があげられうるなどとは、どうか考えないでほしい。上流階級はもう一度ただの美的享楽からはなれなくてはいけない。美的享楽が彼らの宗教となつてしまい、よく引用されるゲーテのことばをかりれば、「学問、芸術を有するものは、宗教をも有する」というわけである。下層階級にはともかくもう一度信仰が与えられなくてはいけない。しかしこれは多くのひとの個人的な努力と、真正正銘^{しんしょうめい}ほんものの宗教によってのみおこなわれるものだ。実際的にはそれはまた不幸によってもおそらくおこなわれるであらう。というのは、このような骨身にこたえる一般的教訓がなくて、ただ説教や講演では、世界は改善されないことは、経験済みだからである。上よりの範例と不幸、これが民衆にたいするもつとも有効な教育手段である。だからわたしの考えによれば、あらゆる努力を結集して、プロテスタント教会をいままでよりはもつとずつとよいものにしなければならぬ。これは可能なことであり、そのうえ改革の中核をなすであらう。それは、世界がいまやたしかにある宗教にかえろうとのぞんでいるからだ。国家の力と社会政策とだけではじゅうぶんではない。またそれも宗教がないと、正しい基盤を欠くことになる。学問、芸術は、それがほんものであれば、よいものであるが、宗教のかわりにはけつしてならない。(Ⅱ・5・18)

*

今日もつともわるい書物はまじめでしかも官能的な書であり、情熱からではなく、理論的な確信からひとを動物界にひきもどす。さらにそれとならんで、大衆むきのかたちの神学的批判的な書があげられる。これはこのそうでなくともみじめな世界で、もはやどのような天の国も、どのような優しい理想をも人間に与えない。

この著者たちは、たいていはまだ地上に生きているあいだに、おそらく神のもつとも重いさばきをうけるであろう。ところがいつぼうキリストはほんのゆきずりの罪人について、われわれがまねしようと思うだけでもゆゆしいほどの寛大な判断をもっていた。しかしこれこそ唯一の正しいさばきであるにちがいない。ダンテのフランチェスカ・ダ・リミニにしても、ダンテはむしろ煉獄れんごくにいられてやるべきであつたろう。これはもともとこの作品の美学上ではないにしても、心理的なあやまりである。同情や悔いというものは地獄のものではない。

この点、テニソンはランズロットやギニヴァーの描写が、ダンテに比肩する詩的力をもっており、心理的眞実ということではいくぶんすぐれている。それに〔四人の王をえがいた〕王の牧歌は、ずっとくだらない文学作品より知られていないけれども、ダンテにおとらぬとされうる。この作品は、ことに動物的なものを弁護する婦人たちや、大衆の不信仰をひろめる神学者たちにたいして、反対している。彼らは恥ずべきひとたちであつて、尊敬にあたいしないひとびとである。(Ⅱ・8・31)

*

二千年近くもまえの、まるで異国、異民族の、まったくいまとちがう事情のもとでうまれた世界観・人

生観に、いったいなにゆえしたがわねばならないのか。このようにいぶかりうたがう気持ちにはだれでもなりやすいものである。思うに、教養のあるひとならみな生涯に一度、あるいは何度も、この思いにはげしくつきうごかされたおぼえがあるもので、まことにむりもないことである。

けれども一面では、歴史的基盤をよりどころにするほうが、たえず新しい基礎をすえるよりも容易である。また他面、——これが主要な点であるが——いかなる哲学的人生観も、キリスト教以外のいかなる宗教も、まだ万人のための真の幸福をもたらすじゅうぶんな力を示したものはなかった。ある国にほんもののキリスト者ばかりいたら、と仮定するのはすこしむりにしても、もしそうと仮定してみると、おそらく「社会問題」はありえないであろう。それに反して哲学者ばかりの国には、けっして存立しえないであろう。また、回教国や仏教国の国民はわれわれのキリスト教にたいするよりもっとふかくその宗教に帰依してはいるが、彼らの国になにができるか、容易にわかることである。

また、社会主義国家形態なるものも、ほとんど幸福をもたらさないことがやがて立証されよう。これは確信してよい。だからわれわれはなんの「神秘的」な付加物もなしに、いわば信仰がなくても、いくたびとなくこう思うにいたる。すなわち、歴史的キリスト教が、真にその最初の告知者のころさす意味で地におこなわれたら、世界にとって万物を正しうる「よろこばしいおとずれ」である、と。(II・9・4)

*

ふりかえりみるな、
むかしのさいわいと
すぎ去った苦しみの
なつかしい谷を。

靈氣ただよう天つみ空に
べつな国が青がすむ。

国の宮居の造営に
おまえの手もくわるのだ。

いまおまえの手は
舵をしつかりにぎっている。
目標をあやまるな。
頭をけっしてそらすな。

あこがれの国へ
ひたすらすすみゆく。
すでに岸べは近い、
心にそれとわかるのだ。

神の国――

地上のかけは消えうせて。(Ⅱ・12・5)

二 幸福について

ヨハネ一五・七は、おそらく全聖書のうち最も注目に値する発言である。このことばがまことであるなら、ひとの地上生活の間、ひとをおびやかすどんなわざわいにたいしても、救助がつねに備えられているわけである。

しからば、このことばを語った者が、ふつうの人間でなかったこともほんとうである。(I・1・2)

(1)〔訳者注〕「あなたがたがわたしにつながつており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」

*

ひとが神の恩恵のなかにあるということは、通常次の二つの事象においてあきらかに認められうる。第一には、しばしばまったく突如としてなんら外的契機なくして現われる全然超現世的歓喜においてであ

り、次には、このようなひとびとは他の幾千のひとびとにおけるがごとく利己主義と結びついたことにはけっして成功せず、これに反して難事や非常事にはいちじるしくりっぱにかつ容易に成功するということによって、さらに確かに認められるのである。

それはともかく、このような恩恵をもっているか否かを思いめぐらすのは無用なことである。この恩恵を正直に願ひ求め、他のどんな人生の財宝を捨ててもこれをえようと心がまえあるひとは、あらゆる他の犠牲や準備なくしてこれをうるのである。しかし、そのひとはむしろすでにこれをもっているのであって、以上の兆候もこれに従い、まもなくもはやなんらうたがう余地なきにいたるのである。(I・1・16)

*

われわれはすでにこの現世において、ある幸福を知らねばならない。この幸福たるや、いかなる事情のもとにおいても、またいかなるひとにも、つねに享有しうるものであり、そればかりでなく、わたしたちの状態がどのようなものであろうとも、いつも歓喜をもって心を満たしうるものである。このような幸福をえさせることが、哲学の理想的課題であろう。でなければ、哲学はそのあらゆる体系をもつてしても、わたしたちを益することまことに少ないのである。

経験によれば、神にたいする信仰、神が身近かにおられるとの実感、ならびに有益な仕事のみが、そういう幸福を与えるのである。少なくともわたしは、このほかになんら誤りなき方途あるを知らない。またわたしの知るところでは、今日までまだだれもこれ以外の方途を発見したことがない。(I・1・31)

*

さまざまな矛盾対立のことがらがあるのだけれども、それでもなおこの欠陥だらけの地上でえられる幸

福とよろこびがあることを、大多数のひとびとが予感もしていない。

貧困のひとびとは、たえず自分のみじめさに氣を奪われて、眼前の憂いの雲のために大空を見あげることをけつしてしない。富裕のひとたちは、真に幸福になるためにはどうしても通らねばならない針の穴「これはエルサレムにある狭い門の名」をくぐることをめつたにしないのである。信仰を忌避するひとびとは、あまりにもしばしば彼らに非難の動機を提供する教會的篤信家たちの言動にたいして、たえず反感をいだいている。

一般のひとびとは、幸福とよろこびの全然ないところに、それらを享受したいと思っている。しかしこの世のすべてを経験し通してきたひとびとは、ひとり残らず言うであろう、この地上はそれでもなおけつして「悲しみの谷」ではない、と。

この世にありうるかぎりのみじめさは、老年になって、なかばあるいはまったく失われた生涯を回顧して、それがはるかに美しくありえたであろうことを思うときである。これが今日、幾万のひとびとの運命である。教養ある階級においてもそうである。これをしてあなたの運命たらしめてはならない。

バルナバ！「慰めの子」、これはすべてのキリスト者がまさに負うべき美しい名である。キリスト者はつねになぐさめを与えうるものでなければならぬ。ところがなおかたのキリスト者に接して受ける感じは、彼らがこの他人へのなぐさめを豊かにもつておらず、みずからたえずさまざまな準備をしてそういうなぐさめを与えようと心がけておらず、したがっていまだほんとうのよろこびの域に達することがないということである。それが、世人の彼らにたいして非難を浴びせる点であつて、それはまったく正当である。

卓越したひとびとが、彼らの死んだあとで、しばしば哀悼されることのきわめて少なく、これに反してまったく単純平凡なひとびとが、しばしば哀惜されることの深い理由は、まさに後者は慰めの子らであつ

て、そのひとびとのもとではつねに「平安」がえられたのに、前者はそういうひとびとでなかったからである。(I・2・12)

(1)〔訳者注〕詩篇八四・七に「^{ヤシメル・タール}悲しみの谷」の語がある。これは日本の新訳では「バカの谷」となっているように、「バーカー」という乾燥地に生ずる植物の名、バルサムという香木とおなじものとされる。「バーカー」という音の相似から「涙」とか「悲しみ」とか、かつては訳された。

(2)〔訳者注〕バルナバ、ギリシア語では「バルナバス」ドイツ語もおなじ。行伝四・三六、三七をみると、「クプロ生れのレビ人で、使徒たちにバルナバ（慰めの子」との意）と呼ばれていたヨセフは、自分の所有する畑を売り、その代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた」という記事がある。愛やなぐさめの花果をもたぬ信仰であつたら、はだ寒い。バルナバはエルサレム原始キリスト教団の有力な会員で後にアンテオケ教団の指導者となり、パウロと並んでギリシア人の間に伝道をした。伝道のために私財を投じた。パウロが幕屋づくりをしたように、バルナバも手仕事をして、その後の生計をたてた（第一コリント九・六）。「慰めの子」という名は彼のひととなりと言動から使徒たちが与えたものであろう。なお行伝九・二七、一一・三二・二六、三〇、一二・二五、一五・二、三六―三八参照。

*

およそ起こるすべてのことを、神の手から受けとることができ、もはや多くを思いわずらわず、ただ開かれた戸を通してゆくようになったとき、人生は幸福になり始める。それまではただおおいなる辛苦にすぎず、ときおりの休養はあつても、それはおおかたな自己欺瞞^{ぎまん}と結びついたものである。

「神が身近かにおられること」、あるいは神の霊が人間のたましいに「宿^{すま}っておられること」、これこそほんとに人間のたましいの幸福をつくりあげる。この「宿り」は、これをあらゆる他の幸^{さい}にもまして尊重する場合、なおきわめて不完全なたましいにおいてすら起こることがある。ところが、そのように尊重し

ない場合には、むしろ非常にりっぱなたましいにおいてすら、これは起こりえない。前者はかくしてしだいに確実に浄化されてゆくが、後者は少しも進歩しないのである。

われわれもまた、はるかに天分は豊かであっても、けっきょく友人としてたいして関心をもちえないようなひとびとよりも、欠点はあつても、われわれにまごころをもつて信頼してくれる友人のほうをはるかに愛するのである。こういう友のためならなんでもやる心がまえができるが、他方のひとびとのためにはそれができない。(I・2・13)

*

だれであろうと、神への信仰なくして、ただ自分のうつろいやすい力や人間の頼むに足らぬ助けをのみたよりにし、ふつうに生活の楽しみとしているものだけを樂しみと心得、したがって生活が實際はなかばは恐怖であり、なかばは氣晴らしか無神経かであるならば、そういうひとはいわゆる幸福な境遇においてすら、とくに老年にはいり、衰退し始めるにおよんではなおさら、いかにして生きうるものか、わたしはこれをいまだかつて正しく理解しえたことがない。

わたしとしては、神をまったくもたないよりは、むしろ偶像でもおがみたいと思う。

現代の戒律派⁽¹⁾のあるユダヤ人が、改革派⁽²⁾のあるユダヤ人から、ユダヤ教のおびたしい戒律的规定は一個の重荷と見えまいか、これはもう少し軽くされえまいか、と問われたとき、これにたいして与えられたすぐれた返答はこうであつた。それは確かに重荷ではある、しかしその重荷たるや、戦場の兵士にとつての銃や重い彈藥盒⁽³⁾にもひとしいもので、どうあつてもこれは身から離したくはないものである、と。

神の命令は、たしかに、（ただ自分の気ままにのみ生活したいと思うひとにとっては）、一つの重荷である。しかしながらこれには、他ではえられない、あるいは他のものをもってはおぎながたい、霊肉への祝福が結びついている。

申命二八・三〇。レビ一八・二五。ネヘミヤ九・二九・三〇。エゼキエル二〇・二一。

このことはとくに将来の医学が、あらたにとりあげて教えねばならぬところであらう。

とにかくどんなひとでも、最高の地位にあるひとでも、あらゆる制限と戒命からまったく解放されて、ただ自分の気ままに生活することはできない。神に従わないひとびとは通常、それだけいっそう人間の奴隷である。しかも生きたほんとうの信仰にはたえずよろこびが豊かにともなうから、神の命令はけっきょくやさしいものである。ところが人間の命令は、かかるよろこびを欠いているから、かえってむずかしい。これはだれでも、正直な心でやってみれば、自分でその正否をしらべることができる。第一ヨハネ五・

三〇。マタイ一・三〇。（I・2・16）

（1）〔訳者注〕戒律派ユダヤ教徒はユダヤ教の正党派で、旧約聖書の律法を重んじ、律法戒律の口授伝承がミシユナーとなり、ゲマラーとなり、集大成して煩多なタルムードとなったものをも聖書について重んずる連中である。

（2）〔訳者注〕改革派ユダヤ教徒は、十九世紀のなかばにドイツに起こったもので、預言者的精神を復興してメシヤ思想をもって人類救済の根本思想とし、偏狭な選民思想を捨て、タルムードの必要を認めず、一八六九年のフラデルフイヤ会議、一八八五年のビッツバーグ会議などの宣言をへて、犠牲制度、祭司階級、パレスチナ復帰思想などをすべて否定し、土曜安息日制をも廃し、律法遵守について個人の自由を認める。現代ユダヤ教は、伝統的保守派と、この改革派とその中間をゆく派と三派があるといつてよい。

*

わたしはかつて、無報酬で事務的なことのめんどうをみてやったあるイスラエル人（「ユダヤ人」）にたいして、なかばは冗談に、なかばは本気で言った、わたしは彼からよりもむしろイスラエルの神から、その支払いをしてもらいたい。するとこの神はただちにわたしのことばを聞き入れて、それ以来しばらくの間、ほとんど間断なく引き続いて、わたしの生涯のもっともつらい苦痛と侮辱を送った。それでこれを書いている今もお、この大なる贈り物を適当に評価し、かつよくこれを活用することに力をいたしている。この書物はこのことがなかったら書かれなかったであろう。なんとすれば有用な文献と真実の幸福とは両者とも重い基礎をもっており、そしてこれは非常に逆理的に聞こえるけれども、不幸は人生の幸福のために必要だからである。（Ⅰ・９・１９）

*

もしあなたがいつか本気になって聖書を読もうと企てるならば、そしてそれはキリスト教を知りかつ尊重することを学ぶのに、どんなときでもこよなくよきみちであり、いつまでもそうであろうが、そのときはまずあなたの弱さ、とくにそのことに気の向かない「古きアダム」と話し合いをつけておくのが賢明であろう。そしてまったく興味索然としてきたら、かいく見当がつかなくなってきたら、ただちにもうそれ以上は読まないがよい。

聖書の各篇をすべて知るのには、うたがいもなくよいことである。けれどもそのなかのいくつかは（それでもわたしたちはそれなしですまそうとはけっして思わないが）この段階の初學者には、無意味なあるいはとつときの悪い印象を与えることはいなみがないところである。まず福音書から始めるがよい。これはもっともたいせつなものであって、こちらが誠実であればだれも感銘を受けないことはない。次には歴史的な諸篇を読むがよい。古代のいかなる他の歴史書もとうていこれにはかなわない。次に詩篇とヨブ。次

に預言者の諸書、そして最後に使徒たちの書簡、行伝ぎょうでんと黙示、ここからわたしたちの歴史がすなわち始まっているのであるから。あなたは箴言しんごん、伝道、および雅歌を、古い詩歌や金言の興趣ある作品とみなすことができよう。これらの諸書は、仏陀ぶつだから由来したとしても、またはヴェーダ〔バラモン教の原典〕にのっていたとしても、きわめて高き称賛を博するであらう。

その他、聖書のどの篇をとくに愛好するかはまったく個人的なことがらである。詩篇三七および七三の兩篇は、「不信の徒輩とばが幸福を享楽していること」のために、こちらが内的な試みにおちいったとき、もっともよく心をしずめなだめてくれる歌である。詩篇九〇はおそらく最古の有名な祈りであって、今日もなお昔時せきじのごとく清新にして美しい。詩篇九一は古来すべての戦士、勇士の愛吟である。ヨハネはキリスト教の内的性質をもっともよく開示するものである。マルコはおそらく直接の証者のなまなましい追憶に相応する事実のもっとも根源的な物語であったが、非常に簡潔なもので、そしてその結末に関しては、わたしの知るかぎりでは、批判の論駁ろんばくをまぬがれえなかった。けれども読者にしてまったく誠実であるならば、どっちみちけつしてじゅうぶん信憑しんぴやうするに足らぬ歴史的批判よりも、読者自身において証明されうる内的真理のほうが、これらの諸書において重要である。

いずれにせよ、豊富な内容と激励の力において聖書に匹敵しうる書物は現に存在せず、いまだかつて存在したこともない。(I・12・3)

*

どんなひとめいめい祝福の泉とならねばならない。いっぽうからは神の祝福が、自我によってさまざまげられることは少しもなく、ながれいることができ、さらにまた自分と接触するすべてのひとにむかつてながれ出ていく。このことが果たされないかぎり、どんなひともし一生の仕事を大部分やりそこなったこと

になる。(Ⅱ・1・6)

*

どんな楽しみにたいしても神に感謝せねばならず、また感謝することができねばならない。これが楽しみを取り、たんなる「享楽」をすてる最上の試金石である。(Ⅱ・2・23)

*

聖書はいつでも、われわれの歴史的神信仰のもととなる本であることにかわりはないであろう。この信仰はたんなる哲学的信仰よりはるかに堅固な信仰であり、みずから体験した本来の直観的な信仰、この最後の決定的な信仰にいたる道をもっともよくひらくものである。聖書は、この種の経験をなすにふさわしい一定の民族にあらわれたこの経験の歴史にはかならない。疑問をおこすとすれば、せいぜい、この記録はなぜつづけられなかったのか、あるいは、こういう経験の継続の一種をなす書物はどういうものか、ということぐらいであろう。しかし、聖書を知らないひと、あるいは、聖書がなくともすむ、もしくはなにかほかのものでおぎなえると思っているひとは、自分の宗教的確信にたいする真にゆるぎない基盤をたもちえないであろうということは、まちがいない。

聖書を知るには、ときおりくりかえしてすつかり通読するのが有効である。

聖書の注釈などでほねおる必要はない。ほんとうにいい注釈があるわけではなく、そもそも注釈などはいらないのだ。もっとも主として旧約における純粋な年代記はべつであるが、これとて主要なことではない。

聖書のなかでどれが神の精神であり、どれが人間の解釈やつくわえたものかということとは、誠実に読

みはじめれば、すぐ自分でわかるであらう。そのために靈感説やその批判などを必要としない。(Ⅱ・3・5)

*

書物のなかで、福音書にまさるものは見あたらない。それを読書探求の一段階とするのなら、はぶいてもよい。けれども、キリストのことばをどう読むか、つまり、このような人生観、世界観を心から愛して読むか、それとも歴史のあるいは哲学的批判をくわえつつ読むか、それとも機械的、法則的なしかたか、あるいはうわっつらだけをふかく考えもせずに読むか、それぞれ読み方のちがいにしたがってキリストのことはあなたにとって、まるでちがうものに見えるであらう。主のことばは、主みずからも言っているように、すべてこれ「霊と生命」である。そういつたからとて、ほかのものはあなたにも読むな、というのはない。教養ある人間でありたいと思うなら、むしろ読むべきである。しかし、あなたをキリストのことばからそらせてしまうものは、正しいものではなく、あなたはそれをただ材料として使えるにすぎない。

ありとあらゆる一連の宗教的内容の書物については、わたしとしては教父たちやスコラ学者たちをもふくめて考えているのだが、彼らの書物は真の意味で「信仰をふかめる」はたらきをもつというより、むしろはるかに精神に重荷をくわえ、困惑させるものというべきものだ。あなたは神学を研究するのだから、なにも全部読んでしまう必要はない。それぞれの種類からの見本一冊ずつでじゅうぶんである。

わたし自身、それでいいぶん苦勞をした。そしてもしわたしが、なかなかひとに感服しながらないある種の健全な良識をもっていなかったなら、精神の危機にみちみちたこのジャンルを突破してこれなかったであらう。(Ⅱ・5・13)

あらゆる時代と民族のもつ全文書のうちで、「聖書」という名でわれわれがひじょうによく知っているとされているあの数千年にわたる諸文書の集大成ほど、精神のゆたかさや倫理的な高さをもったものはない。実際は、なるほど教養のあるひとでも聖書をくわしくは知らぬというひとがいくらもいるが。――他の諸民族の宗教書は、聖書とはまったくくらべものにならない。エビクテトスの提要、古代ストア哲学の精髓をふくむマルクス・アウレリウスの自省録、プラトンの対話篇、インドの（宗教叙事詩）マハバーラタとその最善部の抜粋、バガヴァドギータ、孔子の語録、なおそれにくわえて全回教文書も、どれをとっても聖書とは比較にならない。ことにコーランは、聖書にくらべて、ずっと位のひくい、ほとんど混乱の相をあらわした書物である。

こういうわけだから、聖書にふれてその精神を形成し、つねにそだててきた民族が、精神文化上最大の進歩をとげたということは、人間的にみてもよく納得がいく。しかしそれと教会の諸制度とをとりちがえてはならない。教会の制度はかならずしも聖書にふさわしいとはかぎらないし、さまざまな国民それぞれに差異の大きい発育をとげてきている。聖書には人間性のたえまない浄化と改善との力がある。われわれはふたたびそういう時代にむかいつつあるように思われる。ところでいまやたいの現代人のもつ重要な問題は、教会組織でも、既存宗教のなかでの選択でもなく、はたして彼らがことさらに人間的なまじいとそなたましいの欲求とをいっただみとめるのか、それともただ動物的な欲望をもつたんなる動物の一種族になりさがろうとしているのか、これが問題である。人間の動物化はつねに自然科学的唯物論（やうぶつろん）の最後の帰結であろう。現代的世界観の進歩はすでにてびろくこのような退歩をなしとげてきた。そしてこの意味で、カトリック教会当局が「現代主義」にたいしていどむたたかいは、われわれにも同感できること

である。それにしてもわれわれは、イエズス会とダーウイン主義者たちとがあらそっているときに、マタイ八・三の主自身の「死者は死者をして葬らしめよ」と命じたことをまもるのがいちばんよい。
(Ⅱ・7・2)

*

人生の幸・不幸を、もっぱらよろこびと苦しみのかすたんなる感じからだけで判断するならば、けっきょくショーペンハウアーや彼とおなじ方向のその他の哲学者のいう厭世観が正しいことになるであろう。それは、すべてのよろこびよりも苦悩のほうが、もっとずっと強くて長い、持続的な痕跡を思い出にとどめるからだ。

これとはべつのもっとずっといい見方は、幸福とは、人間をその最高の発展段階に近づけてくれるものことだという見方である。この見方をすれば、おなじ理由から、苦悩のときこそ人間を最高の境地に近づけるもっとも強い作用があった、だから、やはり苦悩もまた幸福だったという結論に達する。使徒パウロの最後の書簡は、いちばんすばらしいヘブルをのぞいても、こういう意味でついに完全には幸・不幸を超えた人間を示している。そしてこのような人間像において、彼みたいへん有名なことば、「神を愛するひとには、すべてのものが、変えられてよいものになる」が、完全な真理となった。われわれの場合でもやはりそうである。(Ⅱ・7・8)

(1) いつもそうではない。ことに婦人たちは、本性上男より大きい苦悩を負うべき運命にあるが、そのかわり、最高の幸福の瞬間を感じる。たとえば、健康な初子を産みおわたあとの若い母親がそうである。この誕生にくらべて、彼女のその前の苦痛も思い出のなかでは、かなり早く消えてしまふ。

＊

数多いおのれの経験から推してどうか決定的に信じていただきたい——幸福とは、主^{サブジクティブ}体的なものであって、自分自身のなかにあるにちがいないものなのだ。となるほど外的なできごとが瞬間的な幸福感をよびおこすことができるのはほんとうであらう。しかし、この幸福感はなくつづくものであらうか。人生にこういうできごとがたえまなくつづく期待できようか。そうではないことをあなたは知っている。だれだって知っている。しかし、あなたが決然として、つねに活動的、誠実であり、神と調和をたもち、すべてのひとにたいして愛ゆたかに生きようと決意したならば、そのときあなたはすいぶん苦しい目にあっても、かならず添いくる幸福の実感によってしつかとささえられるであらう。いやそればかりか、苦悩のなかにもあなたは、しばしばたいへん強い、内的ななくさめをあじわい、そのために、この苦悩のときも、のちにはしあわせなときとしてのみあなたの思い出にのこる。

そして外的にどんな幸運に恵まれたときにも、あなたは他人にたいする高慢と、いわゆる「幸福」なひとびとにたえず牡蠣^{かき}がらのようにこびりつく得意な気持ちとからまられる。(Ⅱ・9・12)

＊

神の恩寵^{おんどう}を意識することをのぞけば、義務をはたしたという意識が、もつとも強い幸福感を与える。前者は自分で手にいれるわけにはいかない。いつでもその資格がないのに与えられる恩寵なのだから。しかしもうひとつのほうはつくれるものだ。これはまったくあなたしだいである。(Ⅱ・9・17)

*

マタイ七・一―五。

いちおう、ひとをさばかずに、ともに生きるようにこころみなさい。会うひとごとに、自然の機会に応じて、よいことを願い、語り、なすようにつとめなさい。そのことがあなたにどういう幸福な変化をよびおこすか、あなたはすっかりおどろいてしまうにちがいない。(Ⅱ・9・23)

三 苦しみについて

「わたしは(今)これを忍ばねばならない、けれども至高者(きいとたか)の右の手は(やがて)すべてを変え、⁽¹⁾うるのである。」詩篇七七のこれらのことばを、誠実な心と全面的な同感をもって賛同しうるひとは、自分の苦難を乗り越えて、内的平安と平静に到達しているのである。それはストア学者が教えるように、たんに外見超然たるのみではない。ところがこれすらも実際にはめったに起こるものではない。

エレミヤ一〇・二四、一五・一一―一三。

あなたがのぞみまた願ひ求めるものが、すべてただちに成るというわけにはいかない。あなたにも他のひとにも、あらかじめ成長し強化すべきものがなおいくつかある。そして恩恵の奇跡の場合でも、多少は自然の道に従っておこなわれねばならない。われわれがなにかを具有していることは、自己感情にとっては唯一の主要事ではない。あるものをかちうるといふ確信、堅い信仰は、成就され具有にほとんど劣らぬものである。

「かたく信ぜよ、きみがため
最善がさだめられてあることを。
きみが心さえ平穩であるなら、
どんな苦悩からも解き放たれる。

ときがきたなら、神の救助は
力強くも突入してきたる。

きみが悲嘆を恥じろふときが
はからず、もくるであらう。」(I・1・8)

(1) 「訳者注」これは原典詩篇七七・一一「邦訳では一〇節」の本書ドイツ語原文を私訳した。邦訳では「その時わたしは言う、わたしの悲しみはいと高き者の右の手が変わったことである、と」あつて意味がまったくちがう。原典の学的な読み方からは邦訳のほうが原意に近いが、ルター訳はそれ自体として捨てがたい味をもっている。

(2) 「訳者注」ストアとはキュプロス島出身のゼノン(紀元前三三五―二六三)がギリシアのアテナイの中央広場の彼の講堂につけた名「ストア・ポイキレー」に由来しているが、ストア学派は実践倫理がその根幹で、認識論は感覚説であり形而上学は自然的汎神論的(はんしんろんてき)一元論である。宇宙理性(理法)としてのロゴスが万有に遍在し、秩序、調和、目的の原理として働く。それは必然的宿命的であると同時に摂理でもある。人間の道徳は、この宇宙理性の分身たる人間理性にもとづいて行動するところに存する。すなわち自然法と人間法とは相即する、合理性即合自然となす。そのような合宇宙、合自然、合理性の生活がアパテイア(Apatheia)で、いっさいのパス(激情)から超脱した心境で、これを道徳の理想とした。ストア的禁欲といわれるのもこの理念によるわけである。この派のおもな人物は、ギリシアではクレアンテス、クリシッポス、ローマではセネカ、エピクテスト、

*

アモス三・二は、善^よ良^いな^いひ^とと^びと^が受^うけ^る非^ひ常^{じょう}に多^{おほ}くの苦^{くる}難^{なん}にとつてたいへんよい解^と明^{めい}をふくんでい^いる。そうでなければ、それらの苦難は説明のつかぬものであり、ひとをしてしばしば神の義にたいする信^{しん}仰^{やう}をまどわせるものである。

「正しい者には災が多い。しかし、主はすべてその中から彼を助け出される。」⁽¹⁾これはすでに幾千年も前に語られたことばであつて、善^よ良^いな^いひ^とと^びと^が現^{げん}世^せでな^にを期^き待^{たい}しな^らばな^らないか^をき^わめ^て簡^{かん}潔^{けつ}にいつている。彼らは多くの苦難を受けねばならない。でなければ彼らは、彼らが到達すべき真^まの善^{ぜん}に達しない。彼らにしてこの苦難をたえず避け、しかもこの世の子らにおいてよく見、あるいは少なくとも見ると思われるような愉^ゆ楽^{らく}安^{あん}易^いな生^{せい}活^{くわく}を営^{えい}みたいと思^{おも}うならば、そこから彼ら善^よ良^いな^いひ^とと^びと^のあ^らゆる誤^ご謬^{りやう}、誤^ごつた道^{みち}、真^まに困^{くわん}難^{なん}な運^{うん}命^{めい}が生^{せい}ずる。これは、彼らがまったく超^{ちやう}脱^{だつ}しな^らばな^らない誤^ご謬^{りやう}である。多くの苦難、これはまぬがれがたいことである。であるから苦難を甘^{かん}受^{じう}せよ。できるだけ早期に、できるだけ完全に覺^{かく}悟^ごせよ。そのようにしてはじめてきみは完全にいたるまっすぐな進^{しん}歩^ぽの途^と上^{じやう}にある。

ヨハネ黙示三・一九。ヘブル二・六。箴言三・三。第一コリント一・三三。詩篇七一・二〇、七三・二六、九七・二、一一・七。

その際直接身近かにくるな^くさ^めは、神がそのように苦難を進んで受けるひとびとには他のどんな者よりも近くにおられるいうことである。したがって彼らには苦難そのものが甘^{かん}美^みとなり耐^{たい}えやすくなるのみでなく、万事がよい結果をもたらすにいたる。

このなぐさめなしには、どんなひとあ^の「狭^{せう}い道^{みち}」を通^{とほ}りえ^ないであらう。このなぐさめあつてこ

そ、すでに多くのひとびとが大きな苦難のなかで幸福であった。(I・1・9)

(1) 【訳者注】 詩篇三四・一九【原典では二〇節】。

*

「あなたがたが、いろいろな試練しれんに会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。⁽¹⁾」試練そのものにぶつかっているときに、使徒のこの訓戒に従うことは、なかなかむずかしい。かの使徒が最大の苦難に直面してこの無限のよろこびの情をはたしてつねにみずからもつていたかは、いくぶんうたがいたくも思われる。キリストですらこのよろこびをもたなかった。マタイ二六・三七、三八。それゆえに、いつでもこのことのできるひとは、すでに現世の生を超越しているものであって、たんに試練にすぎない試練は、彼にたいしてもはやなんらの目的ももたないことになる。しかし試練に会ったひとの大多数は、そんなことばではけっしてどうにもならない。彼らはしばしばそんなことばをもって、まさに彼らの苦難にたいする嘲笑ちようしやうか無情とみるのである。

これに反して、彼らにたいしてまじめに期待しうることは、茫然ぼうぜんと思念にふけったり、いわんや痛恨の念をもってその苦難にうち沈んだりすることではなく、「助けの来る山のほうを仰ぎ見て⁽³⁾」、たとえ簡素な短い嘆息をもってでも「主よ、助けたまえ」と言うことである。これはいつもいくぶん助けになることである。しかもたましいがひとたびおちついて、熟考できるほどになれば、しばしば予期したよりはるかにすみやかに、奇跡的にその終わりを告げたところの多くの過去の試練を顧みることが、さらに心を強めるに役だつのである。

ヘブル一〇・三三―三九。

個人にせよ、民族にせよ、必要以上にながく試練を受けることはけっしてない。しかも両者にとって、

ある瞬間がくると、その瞬間以後はあらゆる痛苦がむだなこととなり、したがって、またそれがやんでしまうことは、きわめてありうることなのである。そのうち、なおくるものはただ審判だけである。しかも今日多くの者がこの途上にいるのである。

エレミヤ二・一九、二〇、二五、四・三三、六・一四、二七—三〇。

登山の中腹で

(ヨハネ黙示三・八)

神に感謝する、門は開いている！

重い門かんぬきがうち砕かれてある。

わたしは「静かにして待ち望んで」いたので、

針の穴をやつとくぐりぬけた。

わが胸は勇をえて、意欲はまこととなった。

たましいは自由をえて深く息づいている。

遠方おちかたにかそけく響くとどろきは

ときよときよ時世をさばく雷いかずちの音。(I・2・10)

(1) 【訳者注】ヤコブ一・二。

(2) 【訳者注】使徒ヤコブのこと。

(3) 【訳者注】詩篇一二一・一、二参照。

(4) 【訳者注】イザヤ三〇・一五から引用したものとと思われる、ルター訳はこれとおなじ表現であるから。これは

またルターがとくに愛誦^{あいしゅう}していた聖句の一つ。

*

利己主義は、宗教と一致せざることもっともはなはだしいものである。それゆえわれわれが、どんなものでも正当にかつ心安らかに所有しようとするならば、それを必ずひとたび（少なくとも内的に、しかもときには外的にすら）明け渡して、さてあらたに神から返していただくかねばならない。それほど宗教とは相反するのである。財産、榮譽、名声、健康、働く力、家庭、生のよろこび、皆そうでないものはない。しかり生命そのものすらこの例外ではない。もしこのようにして神から受けとるのになかったら、すべてこれらの宝がかえってわたしたちを破滅におとすこととなりうるのである。これがいわゆる「試練^{しれん}」の意味である。それは、われわれがはたして自発的にこのことをなそうとしているのか、またなしうるかを試験するものである。創世二二¹。

これらの試練はこの断固たる善意志をもって終局にまでもたらされないかぎり、その役割をいまだまったく果たしたとは言えないのであって、神がわたしたちに恵み深くあられるなら、試練はその役割りを止めえない。人間がついに不平を言うことをやめないものだから、神が試みを早期に終わらせたり、あるいはそれどころか、そのひとがまったくおきつばなしにされるならば、それはまことによくない兆候である。このようなひとは、神に見捨てられたひとで、確かに破滅に向かっているひとである。それにもかかわらず、彼らはしばしばこの世の幸福者とみなされ、またときにはまったく自分でもそう思い込んでいるが、目ざめたときにはもうおそすぎる。

弥生やよひの雪

冬去りて

春なお浅きあいまどき、

いのちといきと光を求めて

わが心死ぬばかりなり。

すべてわが思い

深きおさえにおおわれて、

悩みと憂いと重き仕事の

軛くみの、われを苦しむるあり。

大地はその古き悩みをもて

われを深く圧倒す。

花を夢みて春を歌えば

あらたに散るか雪の花。

されど、雪にうずもれて

緑の芽ばえ頭をもたぐ。

主よ、なんじのひそかなるはからいは

必ずや現われざるをえじ！

*
*
*

今ひとたび降りゆけ

(ヨハネ黙示三・一)

高嶺^{たかね}を去りていとも深き谷底にゆけ、

今ひとたびの下山^{げざん}をあえてせよ。

さすらいのためなんじが心根^{こころね}をまたも鍛えよ、

やすらいの冠はいまだなんじがものならず。

なんじがみさおなお堅^{かた}からず、知^{さと}は聡^{さとし}からず。

主はなんじが鍛えを解くをえず。

おこないてとるをえざりしたまものを、

苦難に甘んじてこそとらえんとせよ。(I・3・1)

(1)〔訳者注〕信仰の試金石ともいうべき記事。すなわちアブラハムがひとり子イサクを神にささげる劇的場面である。

*

ひとがひとたび、あらゆる境遇における神のみちびきを堅く信ずることができ、ヨハネ一五・七にあることをしばしば現実^{じつじ}に体験したならば、地上でになうべき最大の困難も、不安もまた恐怖も、まったくおのずから消えうせ、人生のすべての困難は皆この信仰の鍛錬^{たんれん}のためとなるばかりである。しかもこの鍛錬

は、この地上でもっともいきいきした幸福であるところの勝利をもつて終わる。

もしわたしが人生の三十歳において、すなわち「わたしたちのいのちの旅路なかば」で、人生を貫きみちびくアリアドネの糸を⁽²⁾決然としてつかみ、どんな境遇にあつてもこれをしっかり持っていなかったならば、おそらくわたしはなかばあるいは全部失敗した生涯を送つたであらう。ハバクク三・一八、一九。(I・3・3)

(1) [訳者注] "Nel mezzo del cammin di nostra vita." イタリアの世界的詩人ダンテの『神曲』冒頭の起句。

詩篇九〇・一〇の「われらのよわいは七〇年にすぎません。あるいは健やかであっても八十年でしよう」という句がもとで、この句によりヨーロッパでは七十歳を一生とみなしているから、「人生のなかば」は三十五歳となるわけで、ダンテのこの句は彼の三十五歳を意味した。ヒルティはここでは彼自身の三十歳に応用した。

(2) [訳者注] アリアドネの糸、はギリシア神話による。アリアドネはクレタ島やエーゲ海の島に関係のある女神。ミノス王の娘で、アテネ人の若い男女のいけにえを食う怪物ミノタウロスを退治しようとする勇士テセウスに、糸まりを与えて、地下の迷宮にはいらせた。首尾よく怪物をほつたテセウスはアリアドネの糸に従つて無事に帰ることができたという。

しかしヒルティがここに言うアリアドネの糸は、神のみちびき、キリストの啓導を意味する。

*

わたしたちは、むしろこわがることしか知らなかった苦難を、よろこびよりも愛する境地に達することができる。そのとき、人生の最難事は過ぎ去つたのである。

わたしたちが苦難をただできるだけ早くとり除き、あるいは全然受動的に、ストア的にわたしたちにあるとかぎり無感覚にこれを耐え忍ぶというのは、どのみち正しいことではない。むしろわたしたちはこれを種まきの時期として善用しなければならぬ。そこからやがて祝福の実がみのりうるので、このような種まきの時期は、ひとたび過ぎれば、そう容易には、しかもおなじ様式でふたたびのぞむことはないもの

である。

神の最大の恩恵の一つは、ある大きなよい仕事の主要な困難が、その仕事の勝利がほとんど戦いえられたところにやっとわかつてくるということである。そうでなければだれでも戦いを開始する勇気をもちえないであろう。(I・5・31)

*

苦難はひとを強くする。歓楽は総じて弱くするのみ。無害な歓喜は、勇敢に耐え忍びたる苦難の合間のやすらいの地点である。しかも苦難はすべて、また必要なだけの歓喜をそれ自体のなかに秘めている。

もしあなたが、あなたを神に追いやる苦難を、あなたを神から遠ざける歓楽よりも愛するならば、そのときあなたは正しき道にある。

わたしは、神の子であって、全然絶望のうちに死んだ実例を史上にただの一つも知らない。しかしこの絶望の誘惑はしばしば最善のひとびとにすら近づいてくる。(I・6・21)

*

みずから苦しみ悩まなかったひとびとを、どんな悩める者も信頼しない。わたしたちの主がもし十字架の上で死なず、その人生行路の牧歌的開始が悲劇的終末なしにそのままであったなら、彼の生涯は一つの「美しい物語」にすぎないであろう。——貧しい人、悩める者の救済者には、もしあのころそういう者があったとしたら、おそらくパウロがなったであろう。それゆえに「こうならねばならない」⁽¹⁾とのキリストのことばは、わたしたちがかの犠牲を神とのあらゆる関係を抜きにして、ただ人間の天性と思考法のみを考慮して、まったく人間的・心理的に解釈した場合ですら、そのきわめて深い意義をもっていた。

今もなおそのとおりである。真正の冠はいずれも、高い段階にいたるまで荆棘^{いばら}の冠である。他の冠は選ばれた者たち自身にも、そのひとたちによって支配され指導されるひとびとにも、けっして好結果をもたささない。(I・10・26)

(1) [訳者注] „Es muss also gehen.“ (ルター訳) マタイ二六・五四。

*

だれもがもつべき十字架を自分もうけとって、になうべきである。それをふりおとしたところではなんの役にもたたず、それによっていつそう重くなるばかりである。最後には往々十字架がなくなったら、さびしさをおぼえるほどになってしまうこともあるが、多くはもはや十字架をぜんぜん必要としなくなってきたに、はじめてそういうものだときとるのだ。(II・1・21)

*

人生においても、つとも、困難なものはなにか、それをお知りになりたいであらうか。それにはもともと、ひとりひとりの個人的な答えしかできないものだ。一般的に答えるとするれば、神から遠いこと、といえようが、これはだれもおなじ程度で感ずるとはかぎらない。わたしにとって、いちばん困難だったのは、利己心の克服とか、もっとひろい意味での自己感情への執着を克服することでさえもなく、信仰でもなく、人間大衆と彼らの好評をあきらめることでもなく、忍耐^{いへん}がいちばんむずかしかった。ひとびとの好評をあきらめることなどは、むしろわたしにはいつも逆にやさしすぎることであった——それがまた欠点だったのである。人間のもつともよい性質というものは、ただゆっくり、しかも大いに忍耐^{いへん}してのみ伸びていくもので、悪^がと我意^がとはほんとにわずかずつしか後退しない。だから、ひとびとを助けようと思ったら、ほ

とんど超人的な忍耐をもって接しなくてはならない。(Ⅱ・4・3)

*

「救い主イエス・キリストは、げに、われらの苦難を負いたまへり。病むもののさまを知りませば、望みを失うひとあるべからず。」

ほんとうにこのとおりであって、これはあらゆる苦悩におけるよいなぐさめである。キリストは苦悩のうちにあつて、じつさい、みずからについて語ったとおりであり、その「本性」が「説明しがたい」、異常なひとである。ルカ一〇・二三。しかし、もし彼が二千年前にその生涯をおくった、ただの高貴なひとというだけであつたならば、キリストはなるほどわれわれに二、三のすばらしい規範をのこしたではあろうが、その規範を(多少事情がかわつてしまつても)まもりぬく力と、そしてこのためにキリストと同様にこの世と紛糾を生じたときのなぐさめとを、のこしはしなかつたであらう。それゆえユニテリアニズムには、人間が必要とし、宗教にもとめるもの、すなわち、超自然的な力と神助が欠けているのである。マタイ一一・二八―三〇。(Ⅱ・4・5)

*

「あなたがたは耐え忍ぶことによつて、自分の魂をかちとりなさい」(ルカ二一・一九)は、「教会の現代主義者」にくわわらず、しかも彼らの教会において真理をえようとするひとびとにとつて、まもなくとく

に必要となるであらう。

ピリピとヘブルとは、現今とじつによく似た時代にあつて、すべてのこのようなたたかいをおえたあと
の心のよるこびとたましいのやすらぎとを示している。(Ⅱ・11・7)

*

現在のわれわれにはいちばんつらいときだと思われているところが、思い出になると、いちばんよいとき
となっていることがよくある。それは、思いだすところになると、われわれも成長したか、あるいは、この
苦しいときがなければぬぐいきれずにのこつていたと思われる欠点をすてさったからである。第二テモテ
三・二一・三。ヘブル二・二八。(Ⅱ・11・14)

*

ヨハネ黙示一二・一〇、一九・六、七、九。

この声⁽¹⁾をあなただけはいつか自分自身、あなたの内面において、しかも非常にはつきり聞かなくてはならな
い。さもないと、教会の免罪も、あなたにはなんの役にもたない。しかし、そこへ行く途上にあるとい
うだけでも、そのひとはすでに幸福である。

ヨハネ黙示七・二四・二七、三・二、一九・二〇、二一・三六。(Ⅱ・11・15)

(1) 「訳者注」 「その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、へ今や、われらの神の救と力と国と、神
のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、投
げ落された。……わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それは
こう言った。へハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしは喜びまし

み、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。」

*

陰鬱な気分にかたむきがちなときは、小さいものに目をそそぎなさい。

小さな草花、小さい動物、それに、健康で自然のままであれば小さい子どもたちも、容易にあるよろこばしい感情をよびさましてくれる。ところが、われわれの出会いおとなたちの目からは、しばしば人生の苦しみやつらさ、どうかするともっとわるいものがのぞいている。しかしそのとき、彼らがあなたの目のなかに、元来上流社会につきものの表情であるひややかな無関心ではなく、もっとましなものをみてとるように、心することだ。(Ⅱ・12・8)

*

ヨハネ五・四⁽¹⁾、八・五〇⁽²⁾。この二個所のことばは、必然的につながりをなしている。というのは、神はそのしもべのはまれのためにはじゅうぶん心をくだいてくれる、と確信するものだけが、正直に下心なくあらゆる種類の宣伝を断念するであろう。そして、世間的なはまれに強く執着するひとは、かならずいつもそのときどきの世論のとりこになりはてて、今日ならどんな新聞にも胸をさがすであろう。敬虔なひとびとにあっては、ヨハネ五・四のことばは、彼らのたんに形式だけでない、まことの信仰であるかどうかを測るまちがいのない規準であって、それによって彼らの信仰はつねに確認されるであろう。

ヨハネ一二・一九、四二、四三、二九・三八、三九参照。(Ⅱ・12・10)

(1)「訳者注」「互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないうあなたは、どうして信じることができようか。」

(2)〔訳者注〕「わたしは自分の栄光を求めてはいない。それを求めるかたが別にある。そのかたは、またさばくかたである。」

＊

詩篇九〇、一一六、および一一八は、数千年をへたのちもまだいかに新鮮で、生の真実にあふれ、生におけるかずかずの苦難の試練にたえぬいたひとが、ついきのう自分のメモノートにかきつけたようにみえる三篇の太古の詩である。三七（二五節をみよ）、一〇九それに一一〇はなお補足になる。およそなか永続的な仕事をはたす使命をうけているひとは、みな多かれ少なかれこのような生のあゆみをへてきたので、古い文化形成の石材ではなく、新しい文化の、礎石となったのである。

ブー・ス將軍（救世軍の創始者）はその近年の例である。（Ⅱ・12・13）

四 勇氣について

けっしてうしろを顧みないで、たえずまえをみることに、ついにはたえずこの人生をも乗り越えて。うしろを顧みることにはならぬ。改善さるべきことがらに役だつために、すでになした失敗を今後用心するために、また受けた恩義に感謝して報いるために、という場合を除いては。(1・1・14)

*

内的進歩には二種のものが必要である。すなわちわれわれに語りかける声と、それを聞きうる耳と。

わたしは、わたしたちの霊とはまったく別な思考する霊の、指導的な配慮を信ずる別段の理由をたてゑもたないとしても、次のような経験がそれにあたるものであらうと思っている。すなわち、わたしの内的生活行路に重要な意義をもった書籍はすべて、「偶然に」わたしに出会ったものであって、自分から捜し求めた書籍からはならぬと学ぶところがなかったと言つてよいのである。おそらくそれはそのなかになにも

もなかったからではなく、それを受け入れる適切な瞬間がきていなかったからである。(I・2・11)

*

もはや快楽を求めないことがなんたる人生の快楽であるか、ということのみずからためすことなしにひとびとが信じえたならば、かれらは皆例外なく、この流儀に改変し、世のなかはいっつべんで改まってしまおう。

人生の大きな危機に際して、われわれはつねにまず敢行しなければならぬ。そうするとそれが可能となり、ついにはそれが正当であつたという見解が生ずる。

新しき国

船路果てたり、われあえて

小暗き潮^{うしほ}を 渡り来ぬ。

霊どもの船、われをよく

新しき国に 運び来ぬ。

珍しき国 別の星、

地の楽園と 名づけんか。

いと近くして いと遠く、

これを知る者 すくなかり。

はるかかなたに 残されし
古きいのちの 苦しみよ。
われを捨つるを「幸^{さいち}」といい、
「栄^はえに生くるを」生^{なま}という。

心よ、これが 国ならば、
なんじはあえて 欲するや。
そとの絆^{きずな}を 捨て去りて、
自由の大気に 耐えうるや。

この大地より たじろぐな、
ここぞなんじの すくい^{すくい}の地。
光となりし 聖徒らの
足跡^{あしあと}著るく 見ゆるかな。

つねにあらたに 自己に勝ち、
よろこびおどれ 朝ごとに。
苦しきときは はやゆきぬ、
やみは消え果て 光来ぬ！

(I・4・27)

信仰は弱くとも、全然信仰がないのにはるかにまさる。最後の小さい火種をまったく消したやさないようにせよ。そうすれば、またこれを吹き起こすのは容易である。だが、あらたにたきつけるのははるかに困難である。

「勇気を失うな、つねに勇敢なひとであれ。慰安はしかるべきときにあなたに臨むであらう。」勇気はたんに人間的なすべての気質のなかでもっとも役にたつものである。通常はただ短時間だけ用いさえすればいい。そうすれば事態はよくなってゆく。しかし急速に過ぎゆくまさに決定的な瞬間に勇気を失うならば、そのことのために全生涯の努力も水泡に帰することがある。

それゆえに、勇気を断じて、捨ててはならない。ただあることに関して勇気を捨てるのが、神の明白な意志である場合には、捨てるべきである。だがともかく神の強き助けをかく望むべきである。神の助けにはなにもものもさからいがたく、あらゆる損失をつぐないうるものである。

ヨエル二・二三、二二、二五―二七。ルカ二二・六二、六三。箴言一〇・二九。ヘブル一〇・三五。

この意味にとれば、次のような仏陀のことばもまたよい。「正しい思想が心によく保たれているなら、悪事がある余地はけつしてない。」ひとは正しい思想をつねに現有しているわけにはゆかないし、その正しい思想はしばしば吹き払われることがある。けれども、それを一瞬にしてとりもどすわけにはとうていゆかない。ところで勇気は気分的一种で、救助と転換がくるまで、ひとはつねにいくらかの努力をもってこれを持続しうるものである。戦争においても同様である。人生もまた戦場に臨むのと酷似している。それゆえに同様な戦術的諸原理に従っていとなまれる。(I・6・15)

真正の内的進展のおこなわれる道にはつねに三段階がある。第一段階は、熱狂的感激（入神）で、さながら枯れ柴から立ち上る炎々たる火炎のごとく、激しく爆発し高く火柱を立てて燃えあがる。第二段階は、その熾烈な燃焼がいかほどか消滅し冷却した状態で、それがちょっと前には純然たる火炎であったその同一人であるとはまったく信じられないことがしばしばあるほどである。第三段階は、たえず燃焼している炭火の灼熱が静かでもしかも変わりなく、そして確実な暖気を広げてくれるのに似ている。ここではもはやいかなる動揺も変転もなく、その心地よきはだれにもあきらかである。もし人間の精神がある偉大なことがらにおいてこの最後の段階に到達したならば、彼はそのとき、内に向かって平安といわれ、外に向かっては偉大といわれる、かの活動的な平静を獲得するのである。

カンブリのジャンヌ・マリーは人間のたましいの神への最初の飛躍について次のように語る、「たましいがその自然の性を克服して、従属的な低い傾向性や欲望を拒否するにいたれば、曙光は現われて照らす。神の恩恵はたましいを、そのすべての行為において聖霊のままにみちびく。完成のこの第一段階が達せられると、たましいはまったくおのれ自身を捨て、神がたましいから求めんとするすべてのことにたましいは同意する。いまは神はたましいの願望、思惟、および愛の唯一の対象となる。たましいは今こそ満ち満ちた美德の百花爛漫の花園となり、それらの美德はたましいを飾り、たましいの上に浮き世では見られない輝きを展開する。主はたましいときわめて近密になり、たましいがすでに主ときわめて肉的に合一しているようにみえる。おお、ひとびとがもしこの恩寵をつかみうるならば、彼らは三千世界を捨て去って、この法悦の楽しみを、ただの一日でも享受せんものをお願いであらう」。

これはまったく真実でなんら誇張した表現ではない。だが、いつまでもこのとおりというわけのものではない。それはまさにこれがなおたましいの一個の快楽であるからである。これはなおまったく別なものにまたはるかによくならねばならない。なんとすれば、ある他の崇高なたましいが告げているように、神の欲したもうところは、われわれが自己の利益や好奇心からこのような地上の樂園（なんとすればこれはほんとうにそういうた樂園なのだから）を求めるようなことのないことである。それにもかかわらず多くのひとびとはそれをする。だから彼らが思いもおよばないときに、利己主義のためにもういつぱん欺かれるのである。これが現代でもやはり多くの宗派開山の輩（やから）の経歴である。（I・9・7）

*

克服（こくぷ）すること、この人生においてあらゆるよからざること、美しからざること、踏み越えて勝利者たること、これが人生のほんとうの標語である。これはしかし万事を輕視し、あるいは戦いをできるだけ回避したりごまかしたり、あるいはついにはストア的（冷静な）無関心（アタラクシア）をもって首をたれて、敵人に道の全幅をあけてやるというようなことを意味するものではない。否！ それは神が戦士に与えんとしたもう力によつて戦い、しかして後「すべてを受け嗣ぐ」ことをいうのである。

ヨハネ黙示三・二、二一・七、八。

まさに一個の成長であるところの内的成長には忍耐（にんたい）がある。しかもこの成長のいずれの部分も、そのじゅうぶんなる時間を要する。しかも戦いは、それにもかかわらず、空想がしばしば思うごとくにいつも継続しているというものではない。むしろヘブルの美しい書簡が告げているように、すでにこの地上にあって「神の民には安息が現存し」、そして「すでに神の安息にはいった者は神がそのみわざから休みたま

うごとくに、そのわざから休む」のである。（ヘブル四・九、一〇参照。）（Ⅰ・11・29）

*

人間の力の秘密は神の道具であるという性質である。なぜなら持続的な真の力はすべて神のものであって、人間のものではないからである。利己主義と、超感覚的な世界にたいする不信仰は弱さの元素である。ヨハネ七・二六、三八。（Ⅱ・1・30）

*

よい衝動ならどんなものにも、すぐにしたがうという習慣は、楽園にいたる最短の道である。（Ⅱ・4・12）

*

犠牲や自己克服という偉大な行為は、われわれにおいても、悪のくさをたちきり、善の障害をとりのぞき、過去の思い出を消し去り、捕えられて卑屈になっている他人のたましいをも救うことができる。このように広く、しかも世を救う意味のことであっても、われわれはもし神の恩寵（がんとく）によって召されるならば、主にならうものとなりうるのだ。（Ⅱ・4・18）

*

新生のことは、キリストがたぐいなくみごとに、ヨハネ三で語っているが、ふしぎなことにわれわれの宗教改革者はほかの教師たちにくらべてひどくないがしろにしている。この新生は三十歳をかぞえたころ

にはじまるものである。それ以前に多少あったとしても(一、三の天逝者ようせいの場合はずべてとして)、それは、藁火わらびのようなものだ。だから堅信礼もそうしたいとききめがない。五十歳をこえると、ほぼ山上の垂訓すくくんにまとめられているキリスト教的生生活規則にしたがって生活するほうが、世間ふつうの生活をくらし、もつともすぐれたひとにもありがちのさまざまな罪をかさねるよりも、もつとらくで、もつと自然に思われるにちがいない。そうなれば、キリスト教教理問答の初歩は無視してもよく、教会もこれまでほどに重視しなくてもよく、それによって「完成をめざして」すすむことができる。この完成は、十年また十年とよわいをかさねるごとに容易になるであろうが、しかしいつになっても完成と思われないであらう。思うにわれわれは、永久にこういう段階的進歩の途上にあるのだ。そして、かのたて琴と歌による「永遠のいこい」ではなく、活動力と行動における完全な平安こそが、われわれの希望するところであり、これはすでに地上においてわれわれの生の最高の瞬間によく感じられるとともに、われわれの追求すべき眞の生活要素をあきらかにかたちづくっている。マタイ五・四八、一一・二八—三〇。(Ⅱ・5・1)

*

われわれにいま必要なのは、精神の鼓舞であり、いやそればかりか肉体の鼓舞だともいいたい。それはたとえば、原始キリスト教や、宗教改革のはじめ、あるいは、フランス革命の初期、ドイツやアメリカの独立戦争時代、南北戦争や(十九世紀の)イタリア統一運動のころに見られたものである。そのころ、老化しきった世界に、勇氣と力のいぶきがふきわたった(それがいますっかり欠けて、現代のどんな技術の進歩、芸術・学問によってもつくなわれない)。そのような時代には、それ以前には見られなかったようなすぐれたひとびとが、とつぜん登場し、新しいことを創造する。新しいことはこんなふうにしてのみつくりだされるので、その先頭に二、三のあさはかなひとがいるにすぎない大衆運動によるものではない。

大衆^{マス}の作用を重視し、たくさんさんの新聞にのることばかり重んじているひとは、通常、ほんとうの偉大なことには役にたたない人間である。(Ⅱ・7・19)

(1) 一九一四年以降、すべての交戦国の青年たち、とくにドイツ、それにはじめは正しい評価をうけなかったフランスの青年たちにおいて、この事情はかわってきた。

*

自己自身について語ることはぜったいにしないのがもっともよい。話の上でも手紙でも、しないのがいいが、日記がいちばんいけない。賞賛に類することは、まずい味がするものであり、非難は、わたしたちの存在と生活が神のわざであってみれば、それをとがめることになるから、これもあってはならないことだ。

他人がわたしたちにむかってする評価は、だいたいにおいて正しい。われわれはそれに気をもむ必要はない。いまだかつて有為のひとが、いつまでもかろんぜられたためしはなく、そうなるのは多くのひとがよりどころとささえとを必要として、おのずから有為のひとにすぎるからである。われわれ自身には、あらゆる自己評価のかわりにそれでじゅうぶんである。第一テモテ一・二六、六・二三。(Ⅱ・9・10)

*

詩篇九一とルター^{ルター}の賛美歌「神はわがやぐら、わがつよき盾^{たて}」と、アルテンブルクの「気おちすな、小さき群れよ」(同胞教団賛美歌六五七、七三五)は大きな危機にさらされたときのもっともよいなくさめの歌である。あるいは、われわれのひとりひとりによくあることだが、なにを考へてもひどく劣等感にさいなまれ、それが人間精神をおしひしぎ、すべてのたたかいを放棄させてしまおうとするときの、なぐさ

めの歌なのだ。そういうときには、この歌をくりかえし読み、元氣をとりもどさなくてはいけない。勇氣をもちつづけることが、この世におけるすべてである。(Ⅱ・9・29)

*

「勇氣を失わず、勇敢なひとであれ。なぐさめはしかるべきときにならずくるであらう。」

この老トマス・ア・ケンピスのことばが、苦しいときわたしの心のうちによびかけることがよくあった。するとなぐさめもかならず与えられるのだった。どうしても必要なときになってようやく与えられるのがふつうで、それより前ということとはなかった。それは、われわれに、なぐさめを神以外のなにものにもとめてはならないことを、おのれ自身の力をたくわえてはならないことをもまなばせるからである。

第二コリント四・七九、一一・七一〇。ヨハネ一二・四八―五〇。ルカ一八・八、二一・二八。(Ⅱ・10・2)

*

徹頭徹尾
てつとうてつび

しっかりつかまれ、わが心よ。たとえしばしば
勇氣のうせることがあるうとも、手をはなすな。

なにひとつおまえだけの勇氣でなされたものはない。

そんな勇氣はするのだ。

そうすれば、おまえの生のあゆみも向きかわり、

恩寵おんちようがここにはじまる。

そのとき主は、力をえたまい、

その力のはたらきで、

おまえはもはやおまえでなくなり、

やみと光、

人間とキリストが

ぶつかることがない。(Ⅱ・11・28)

五 信仰について

いわゆる「内的な戦い」というものは、きわめてしばしば、人間の我意の、これに対立していること、あきらかに認められる神の意志への戦いのほかななものでもない。しかもわれわれはその際、神をわたしたちの意図に賛成せしめようと思っっている。民数二二、三一・八、一六。

舟出

事は起こった。わたしはこの世を立ちいでた！

その杯は千々に砕けた。

わが小舟は岸べを離れた。

海のはてにかそけくも陸がほのめく。

見渡せば道もない奇しき海よ。

わが継ぐべきもの今よりは望みひとすじ。

わが地位はきみらの執るにまかせよ。

きみらに現世はあれ、わがためにみ国開けよ。

わたしはあえてした、久しい課題を、

悩ましきときをへて思ったことを。

わが巡礼の舟あしは岸に着くまじ、

とこしえの国を見いだすまでは。

月桂ゴウレンの枝はわがために花を咲かせない。

柏葉ハクエツの輪もわが額を飾らない。

この世かぎりはたらきはいたずらである、
永遠トワの冠をわたしはなお見いだしうるのみ。

はるけく高きこのめあて、夢ではないか。

霧にもまごうこのすじは岸でないか。

よししかるとも、わたしは気高いたわむれにふけるのではないか。
この荒い大海原を越える道がはたしてあるのか。

小暗い舟路の果てに莊嚴の神都を見うるか。

苦難はいかに重くとも、わたしはこの道をゆかざるをえない。

なんじ、わが生みのふるさとよ、地よ、いざさらば！

苦しみはしばしだが、よろこびはとこしえである。(I・2・28)⁽¹⁾

(1)〔訳者注〕一八三三年二月二十八日はヒルティ誕生の日である。しかし彼のたましいはここに第二の誕生をうたっている。

*

朝より夕に至るまで、つねにただ神の意志のみをおこなえよ。そうすればあなたはすでに地上において、現世の目まぐるしいこと、齒車のような生活の迷路からあなたを天上の国へみちびき入れるアリアドネのひもを手を持っているというものである。

神の意志が必ずしもただちに明白でない場合にはあなたは神の意志を探し求めなければならないが、その探し求めることのなかにすでに祝福があることに留意せよ。(I・3・12)

*

「よき計画でしきつめられているのは地獄への道である」ということわざは、総じてしごく当たっている。しかし、それはなぜそうなのだろう。それはたんに人間の心が移り気であるためや、われわれをまわりから取り巻いている諸反対勢力のためばかりでなく、またまことにしばしば、われわれのよき計画そのものが実際には実行しがたく、自分の力や時間やいろいろな外的事情と合わないからである。

これとまったく異なるのは神の「みちびき」である。ここでは、そのひとがなしえないこと、あるいは

時機に合わないこと、あるいはそれをなす力がいまだ現に与えられてないことは、なにことも人間に無理には要求されない。

あなたがもし神のまじびきに身をまかせるならば、あなたはいっさいの「計画」なしでやることができる。すべてのことが、まったくあきらかな要求もしくは機会という形で、連続的にしかも正しい順序であなたに近づいてくる。これは、あなたをほんとうに進歩させるものである。このことをイスラエルのある預言者が美しくも「愛の綱で歩く」と呼んだ。すなわち小さな子のように引き綱で歩ませられる意味である。これは人間の計画よりもずっとまざっている。

ホセア一・四。ルカ一・六、七八、七九。ヨハネ一・五一、三・三七。(I・5・5)

*

神の遠謀深慮えんぼうしんりょの徐々たるまじびきは、このようなことをみずから体験しないかぎりには、だれも信じえないもつとも不可思議な経験の一つである。それはつねに苦痛と憂慮を通しておこなわれる。人間は自分のもつといっさいのものを犠牲に供する覚悟をたえずしていなければならない。とくに、これのみはわがものと呼んでいるところの自分の意志をこそ、つねに神にまったくまかせきる心がまえであらねばならない。そうすると、突然、またあらたな段階が開ける。そしてこの段階にきてみると先に起こったことがあきらかになり、幸いにもよき道を選んだこと、いまやあらたな自由で豊かにされていること——しかも永遠に与えられていること——がとくにはっきりしてくる。

なんとすれば神のまじびきの道では、ひとたび過ぎ去ったことはふたたび立ちもどらないからである。これが人間的自己改善をしようとする自己選択の道と大いに異なる点である。このような自己改善の道はおおむね無効な羽ばたきと世間一般のつきなみな考え方の疲れたあととどりとるにすぎない。

よろこべ

わが心、おまえが捕われていた
その悩みから、起きあがれ。
おまえの上にかぶさっていた
痛みのおまへはみんな過ぎた。

きょうは世界がすっかりきれいだ、
まるであらたに生まれたように。
おまえはこの緑の丘で
もう大部重荷を解いた。

どの小草にも露がきらめく
きらきらした朝日を浴びて、
澄みきった青空には

「乙女」山の白銀しろがねの峰がひかる。

どの枝にも小鳥が楽しげに
多彩な翼をゆるがせている、
最後の鳥が山へ飛び去った、

その黒い影は帰って来ない。

いましばらくがまんせよ。

もう心を痛めるな。

すばらしい夏の歓喜が

春のあらしのあとに来る。(I・6・1)

*

わたしたちの生活に影響をおよぼす超感覚的諸力の存在についてのきわめてたしかな信念をわたしに与えてくれたものは、わたしの生涯におけるいちじるしかったできごとが⁽¹⁾つねにわたしの意志なしに、しかり、まことにしばしばわたしの意志に反して、起こったという経験である。(I・6・2)

(1)〔訳者注〕イザヤ五五・八一―参照。

*

出エジプト二四、および詩篇一一〇・二、三〇。

人間の生涯においてはかなりの期間を通して、詩篇一一〇にある待望の勧告のみが不断の指示として役だつことがしばしばあるものである。けれども突然、それと反対の命令が下る、「来よ、わたしはおまえをエジプトにつかわそう」と。これにたいして「主よ、他の者をつかわしてください」と答えることは許されない。この二つの指令に心から従い、かつその両方の時機をよく用うる者を知る者は、内的にもつともすみやかに進歩する。ふつうの人間はそのいずれにも従えないのである。

悪しきひとびとがもはやなんらの力強い悔いを感じえないなら、それはそのまま彼らにとつてのもっとも重い刑罰である。悔いのなき自分の悪の意識は、すでにこの世の地獄である。この場合、ついにその終局がしばしば狂気にいたることは、まったくなすきうるところである。

これに反して、彼らが救済の要求を感じるならば、まさにそのゆえに、悪しきひとびとは、ふつうの意味でのよきひとびとよりもしばしば救いに近い。

ルカ五・三三、七・四七、一八・一三。マタイ二一・三二。(I・6・17)

(1)(2)〔訳者注〕出エジプト三・一〇、一一参照。

*

だれであろうと神に自分の意志をまったくささげたならば、しかもこの意志は彼が神に供しうるたゞ一つの贈り物であり、また神はこれにのみ価値を置いてくださるのであるが(そのほかのすべてのものはまことに神のたまものである)、そのとき、これは大胆に聞こえるけれども、神はそのひとに神の意志を与えて彼のものとしてくださる。かくて神はその後彼にたいし、あらゆる彼の願い(それすらもしかし神はみずからみちびくのだが)を聞き入れてくださる。いまや彼はただ願いかつ受けさえすればよい。しかも神はみずから彼をうながして詩篇八一の次のことばを願いとさせる、「あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう」(詩篇八一・二〇(原典は一一節))。

さて神は、およそわたしたちが神について知るかぎり、かぎりなく愛に満ちた存在であり、神が心をこめて願ひなざるところは、人間にとって彼が大いに頼みある者であること、まことに、いっさいであることであり、またすでにこの地上において、人間の弱い性質をそこなうことなくして、およそあとうかぎり多くを彼に贈りえんことである。しかし、遺憾ながら、人間の生まれつきというものは弱くして一度には

比較的、わずかの幸福にしか耐ええないのである。(I・10・5)

*

「キリスト論」、これは實際奇妙な語である。この語になんの躊躇もなく捕われないことができる。なんとすれば、いっぽうに考えられることは、キリストがもしわれわれとおなじ種類の、またおなじ生活条件をそなえた一個の人間であつたなら、彼の生涯と事業とを説明するためには、なんら特別のキリスト論なるものを要せず、むしろよい伝記が必要であり、またそれでじゅうぶんであろう。しかしそういった伝記をたしかにだれもいまだ書いていない。また他方に考えられることは、彼はある別な人間であつて、少なくとも、ある程度、あるいはさらに適切に言えば、空前絶後と言わなければならない種の霊を受けたのであつて、この性質を、もしくはそれをさらに呼びたいのなら、この二重性を、説明することはまったく不可能である。

彼自身それについてはきわめて明確に繰り返し述べている。そしていかなる説明をもまえてしりぞけた。けれども彼の本質に関して正しくない観念をいだく者たちを彼はしりぞけはしなかった。かかる観念のことがらは、彼にたいする誠実な愛好に比べては問題にならないほどのものである。いわゆるキリスト者は幾千となく、彼らがさしあたり理解しあたわらないところのキリストの性質に関する伝統的な教義などにしりごみして、キリスト教を敬遠してしまうのである。

きみはこれらの問答示教書定型のごときにあまりこだわることなく、キリストがみずから自身について言っておられることにむしろたよるがよい。どこまでも信仰、いつてんばり。なんとすれば、古往今来、さらに説明を加えることは不可能なのだから。

マタイ五・二〇、八・三三、一一・二七、一二・三三、三二・四八―五〇、一五・七、八・一四、一七・五、二一・四二、四四、二

三・九・一〇、一四・三五、一六・六三、六四・二七・四三、六三・二八・二八、マルコ三・二八・二九、一三・三一・三三。ルカ五・
一七・七・二三、九・五〇、六〇、一〇・二三、一一・五二。ヨハネ二・三五、三・三六、四・三四、五・二三、三〇、六・三七、四〇・五一、
七・二七、三八、八・三一、三三、九・三九、一〇・三〇、三四・三六、一一・二六、一二・四四・四六、一四・二〇・二三、一五・七、
二六、一七・三、一八・三七。(I・10・10)

*

ルカ一・三六。わたしたちの内心に起こるもつともよい、もつとも決定的なものは、概していつも電光石火の性質をもっている。すなわちそれは別の世界からの恩恵のひらめきであり、光明の輝きである。おおかたそれはたんに一つの見通しであるばかりでなく、同時にまた積極的行動を起こす刺激である。そこで、この決意を同様にすみやかにつかみ、そしてそれをただちに遂行するのは人間にゆだねられた仕事である。そうでなければせっかくの恩恵のまなざしは過ぎ去ってしまう。しかしわたしたちがこの決意をつかんだならば、この決意は金色こんじきの翼ある鷺わしであって、ふつうは越えあたわぬ障害をも越えて、わたしたちをたくましく高揚させる。神の国「天国」への道はまさにまったく独特のものであって、学習のふつうの規則ではなかなか測りがたいみちなのである。けれどもこれを経験したことのないひとは、これを信じようとしてもないのである。

落ち葉

—

深みゆく秋、山また谷をさすらえば、
べにぞめの木の葉の落ちゆく。

鳥の歌たえて聞こえず、
この森宿のいずこにも。

霜と雪とはやがて包まん
あやをなす錦の森を。

いかなれば嘆きなくこのたび汝れはいう、
「秋の暮れ、などかくはおそくきたりし」と。

もとのわが身にわれは敵となりぬ。
わが身はすでに明け渡たされたり。
いまや来ぬ、真剣の友なる死、
死ののちにいのちは来たる。

二

なんじの意志はわが意志となり、不安は平安に。
たましいは安らいをえぬ。
解かれしはここに結ばれ、うせたるは見いだされたり。
いのちのいぶきにわれ生かされぬ。(I・10・31)

*

神に仕える (Gott dienen) とは、自分の全力と全方途を、自己の存在のあらゆる瞬間において、神の意志の遂行のために用い尽くすことをいうのである。

かかる生活が、そしてかかる生活のみが、けっして曇ることのない明朗さをもたらす。そしてわたしたちは神に仕える人生の、このようなよろこびにあずかるべく召命を受けているのである。もう一つのいわゆる「礼拝」 (Gottesdienst) はたいして助けにならない。そして神もまた確かにこれをよろこびたまわない。

(I・11・19)

*

この世の生活からの三段の「脱却」は、創世一二、一五、一七の始めにおけるアブラハムへの神の三つのことばがすでに述べているところである。まず第一に、脱出である。すなわち、さらによき、さらに清き生活に到達せんがために、現状にとどめるようにはたらくところの慣れた環境や仕事から離脱することである。次には、神のほかなるものをもおそれず、ただ神にのみ心を傾けることであり、最後には、ひとえに神のみ顔の前において前進することである。これは今日もなお真の生活に達せんとするあらゆるひとの内的生活の経路である。そのひとはこれがためには、これ以上のことはいらない。しかしそれをじゅうぶんに完全に果たすことを要する。ただ、しかるべき時間の間隔を要する。なお、さらにイザヤ五九一六二参照。(I・12・11)

(1)〔訳者注〕創世一二・一時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしを示す地に行きなさい」。一五・一これらのことの後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであらう」。一七・一アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に

歩み、全き者であれ。

*

申命五・二五—三〇。これらのことば、およびこれに続く申命六ないし一一に含まれている約束以上に、人生のただ人爲的におおい隠されているにすぎないかくも多種多様のあらゆる悲惨にたいする明確な救助の約束を、あなたは望むことができない。この約束がところではたして今日も有効であるか適切であるか、それをあなたはたしかに試みることができる。しかもそれは、だれかがなにかを条件づきで約束した場合に、ひとがそのひとにたいしてやはりやってみなければならぬように、試みねばならないのである。するとあなたは、ある几帳面な人間があなたにたいしてするようにやかましくは、神が諸条件の厳守ということをけつして考えておられぬことをすら経験するであろう。ただしこれは、心根がいつも誠実である場合にかぎるのである。しかし完全な祝福はもちろん、これらの太古のことばに従って完全に実践躬行した結果のみであつて、これらのことばの遂行こそ福音といふべきものである。幾十億のひとびとがすでに、彼らがそれを欲したときに、彼らがそれ以前に受けた生活より幸福な生活をもつことができたのである。

今日まちがった道を歩んでいるひとびとの少なくとも相当の部分は、それらのまちがった道をそれらへの本来の傾向から踏んだのではなく、むしろ彼らは、他の方途をもつては今日の世を渡ることとはとうてい不可能であるという広く世におこなわれている意見をいだいているからである。この見解にたいしてはすでに旧約聖書に、その反対の明白な保証がたくさんのおいてある。これら保証は知られたかぎりにおいては、いまだかつてだれをも欺いたことがない。少なくともわれわれは、かなり長期の自己の生活経験にもとづいて（いわばたんに生半可な、無氣力な、一時的な試みにもとづいてではなく）、このことを主

張しうるひとに、いまだ出会ったことがない。けれども、「世俗の道」によって、おのれの生涯の幸福を根本的に喪失したひとびとは、現今幾百万となく数えられよう。

マラキ三・二三・二〇（一九、二〇節は邦訳では四・一二）。エレミヤ二・一三、一七、一八、一九、三・二五、八・七、一一、三二・二九、二三、三八・四二。イザヤ四八・一八、四九・二一・六。

このことがすでに旧約において、ユダヤ民族にたいしてこのようであつたならば、わたしたちはそもそもなんのためにキリスト教徒となつたのであるか。またもしわたしたちがいまやさらに悪しき地位に置かれていたというのなら、なんのために「救世主」がわたしたちにとって生まれたのであるか。新約聖書はこれらの約束をただもつと内的に、もつと深くとらえたのであつて、けつして破棄したのではない。

マタイ五・一七・二〇。

奇跡の信仰

神の国を慕い求めて、

かがやく幸を見ようとならば、

この現世のおもいをさげすみ、

神のことばによりたのむがよい。

ふしぎにも召されて救われて、

奇跡によつておまえはゆるがない。

夜から昼へうつる旅路の

すべての段階はなんとふしぎだろう。（Ⅰ・12・20）

「神がなんであるかを表現しえぬように、まさにそのように、神のうちにわれとわが身を滅却するに際して経験することもみな名状しがたい。」バイエルンのエリーザベットのこのことは、「神秘」とか「内的生活」とかいうものが本来どういふものかをもっともよく言い表わしている。この事態自身を記述するのは不可能である。またわたしたちにそれがたとえ可能であるとしても、記述を必要としないひとのみがわずかにそれを理解するであろう。ひとはただ、このような靈魂の状態の個々の効果を一般的にあきらかにしようと試みうるにすぎない。そしてそれすらもたえずなお、欺瞞や妄想ではないかとの疑惑にさらされるであろう。

しかしながらひととは、もし彼が平生からものの分別理解あり、世の経験を積んだ人間であるならば、その生涯の全福祉を空想の上に置くようなことは軽率にもしいはずである。しかも反対にまさにこの世の経験は、世間人の幸福というものがいかにまったく空想的な、もしそうでなければまったく支持しがたい基礎の上に立っているかを日ごとに示してくれるのである。それゆえに彼らこそおそらくほんとうの夢想家であって、神秘家ではないのである。

しかし、わたしたちは次のことをきわめて確固と断言することができよう。すなわち、神に聞き従い、真剣に、確実に、信実に神の意志を実行すること、ただこれのみが到達しうるかぎりの完全性にみちびくのであって、いかなる他の種類の道もだめである。他の種類のあらゆる神秘説ははなはだしい誤謬であり、しかもそれが非常に素朴でなく、よい信仰でないならば、それだけ大きなましいの破滅となるものである。(I・12・30)

ある人間の真の偉大さは、彼が善の、あるいは——もっとはつきりいえば——彼という人間を通じて語りまたふるまう神の霊の完全な道具かどうかという点にある。そのひとがこのことをみずからさとればさとのほど、彼はますます確実におのれの道を最後まであゆみ、ますます多くのことをなしとげるであろう。たとえ世間が彼をぜんぜん理解せず、あるいは部分的に、徐々にしか理解しないであろうとも。そんなことは問題ではなく、それどころか、きわめて有能なひとびとはたいいてい死んでからようやく理解されている。生きているときは、彼らの自然人としてもつある種の性質が、彼らのうちにひそむ精神人の霊性をさまたげていることがよくある。

イザヤ四二・一二九にあるような完全な「神のしもべ」というものは、きわめてまれであり、けっきょくキリストのなかにのみ存在したものである。「僧職授与」や教職任命によってこういう性質をさすけることは、まじめにとりあげることとはできない。

ヨハネ一四・六、一〇、一二、一五、一七。(Ⅱ・三・一)

*

神の近くにあることをいちど体験すると、あなたはその感銘をけつしてもはやわすれることはできないであろう。しかしそれは、祈りの儀式や、あるいは断食や、それに類するものによつてはひきおこせないこととであり、それはもとめることなく、いきなり、まるで旧約の天使のようにやってくる。もちろん、とめればえられる幻像もあるにはある。けれどもこれは、このような熱狂的聖人たちの神経を錯乱させる。ところが真の神の接近は、このうえない健康の自覚と、来世の生命の予感とをのこしていく。なおそのう

え、それはつねに告知であり、委託あるいは命令であつて、錯覚したときのように、楽しいものではけつしてない。それにしても、現代人はこのことについてなんと無知であらう！（Ⅱ・5・17）

*

サムエル上三・四、一九一二。申命一三・三、五、九、二。

もしあなたが一生に一度でもこのことばをきいたなら、この人生において自分ひとりのためにはもうなにもとめず、あなたの人生計算書に莫大な利益を記入して永久に閉じ、そのほかの生の財貨はもはやなにも要求しよとなさるな。要求をその後もつづけるのは、不可解な弱点であり、最上のものの軽視であらう。したがってこのことばは、だれにでも語られるわけではなく、あまりに早いうちに起こるということばぜったいにない。（Ⅱ・6・9）

*

神のみちびきをうけているひとびとを見ると、まことにふしぎなことに、彼らに課せられていると思われた皆さんの任務や仕事を、彼らにはもともと適しない、あるいはもはや適しなくなつた場合には、時をはずさずとりのぞいてもらえる。そのために神はよく敵を用いる。そして敵は、神自身にはあまりびつたりしないこのよいわざを、こよなくみごとにやつてのけ、そうでもなければとうてい決心しにくいことも、楽に決心させてくれることが少なくない。そのことをわたし自身しばしば体験したものだ。神とほんとうに正しくまじわっているものには、けつきよく敵というものはやないのである。すべてみな神のしもべであり、敵でさえ（ちょうど大祭司カヤバのように）、不正をはたらきつつも、神意をはたしていることを、ぼんやり感ずることがよくあるのだ。創世五〇・二〇。（Ⅱ・7・22）

*

よく肝に銘じてわかつていただが、神の声には、ひたすらよるこんで、すなおに、自発的にした
がうべきである。たとえば神をおそれたり、人間をおそれたりして、あるいはなにかの下心したごころがあつて反抗
的になってはいけない。事によつては、なかなかそうはいかないこともどうかするとありえようが、その
ときは、神がこのことにもよろこびを与えてくれるまで待つほうがいい。誠実に待てば、かならずかなえ
られる。しかし、逃げ口上をさがしたら、ぜったいにだめだ。サムエル上一〇・九。(Ⅱ・８・３)

*

ヨハネ一二・三八―五〇。このことばは⁽¹⁾この世でなんらかのかたちで神の国をまもらなければならぬひと
びとすべてにとつて、よい教訓である。まず第一に、多くのひとが信ずることができなくとも、それをい
ふかつてはいけない。そのつきには彼らのことばをひそかに信じていながら、それをまだはつきりおもて
にして言えないひともしなくなること、冷静に知らなくてはいいけない。第三に、彼らは世をさばくもの
ではなく、世を救おうとするものでなければならぬ。これがだいじなことである。そして最後に、彼ら
のことばをあなどるものたちは、そのさばきをすでに自分自身にもっていることを確信すべきである。
彼らがつとめねばならないことは、ただ、神の命じたことを、多くもなく少なくもなく、みずからつね
に語るようにすることである。(Ⅱ・９・２１)

(1)〔訳者注〕「……わたしは自分から語つたのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が、わたしの言うべき
こと、語るべきことをお命じになつたのである。わたしは、この命令が永遠の命であることを知っている。それ
ゆえに、わたしが語っていることは、わたしの父がわたしに仰せになつたことを、そのまま語っているのである。」

*

生きとし生けるものは、自己の特性にしたがって自己を發展させ実現しようという自然衝動をうちにひめている。これはやむをえないことで、不当なことではない。自然をいたずらに「やぶる」のは、精神的な意味での自殺である。

しかしわれわれの真の本質を發展させ実現させることは、われわれの洞察どうさつよりもすぐれている神の洞察にしたがい、しかも神の道においておこなうようにすべきである。一般的には聖書により、具体的にはわれわれの生の内的な運命を通じて示されるこの神の意味を、つねにためらうことなくおのれの意志とみなし、それによるこんで一致していくこと、これが人生最高の課題であり、また神意にかなう供え物である。それ以外の課題はもはやない。この供物くもつを毎日そなえるひとは、今日の内的宗教によれば、自分たにし、家族にたいし、そして国民にたいし、神から祝福されたひとりであり、神の祭司である。(Ⅱ・12・2)

六 愛について

わたしは、現代の人間がたんなる哲学的思索の道において、あるいは現代の自然科学を宗教と結合せんとする試みによって、確固たる神信仰に到達したという実例をかつて一度も認めえなかった。神信仰の到達は、まさに実践的要求の途上において起こる場合がはるかに多いのである。その理由は、外的幸福に、またとくにたえざる内的満足にいたる道は他にまったく発見されえないからである。高きをめざして努力する個々のたましいにとつては、もつとも広大な理想主義にまったく相照応するとき霊的存在にたいする信仰、および人間性の最劣等の本能によってではなく最高の理念によって支配される世界にたいする信仰こそが、緊急不可欠の生活要求である。この信仰なくしては、彼らは自分の生存を理解することができず、また人生が彼らにもたらすあらゆる苦難に抗して自分の生存をおちついてゆつたりと持続することができない。現代のイギリスのある女流作家の次のことは彼らにふさわしい。

「否、きみよ、ためろうな——いとも氣高きを

求めるは確かな善である——それがきみの唯一の善。

いまやきみは悟った、あの高い幻は

あらゆる卑しい選^とびをば永遠にしりぞけるから。」(I・1・19)

*

上を仰ぎみる純一でまったく正直な愛のまなざしは、どんな美しい形式的な祈りよりも、これを受けてくださる者にとって価値があることは確かである。われわれもまた小さな子の、ほんとうにまた小さな動物の、そういう印象深いまなざしを、あらゆる美辭麗句よりも愛する。(I・2・25)

*

人間のあらゆる性質のなかで、最善のものは、信実 (Tiere) である。信実は、ほとんどあらゆる他の性質をつぐなうとも、それ自身はなにものによつてもつぐなわれない。

この性質は、遺憾なことに、人間にはむしろまれに、動物にはよりしばしば見られる性質である。したがって人間はこの重要な点で、事実、動物にまさっていないわけである。あらゆる他のことにもまして、このことがあれば、生きとし生けるものの段階的發展の可能性をわたしは納得しうるであらうが。

また概して言うに、高等動物よりも人間のほうが恩を知ることまれである。それゆえに他人の感謝を期待しないがいい。しかしみずからはつねにその名譽ある例外者でありなさい。忘恩のもつともふつうの形は、訪問とか、その他あらゆる感謝の義務の「承諾」をもつてすでにその義務を果たしたと考えることである。君主国家においては勲章授与という形でなされるが、それによつて関係はかえつて逆にさへなるの

である。このようなあまりにも安価な支払いを、できるだけ避けて、むしろ貸したままでいなければならぬ。(I・2・26)

*

もっとも幸福な生活においても試練と憂慮とはなかなか多くあるものであるが、これをたえがたい重荷とみるか、それとも自分の主義を実行し習練するために神からたまわった機会とみるかは、ものの感じ方によって大きな相違である。しかもけっきょくすべてはこのような感じ方いかんにかかわるのである。

この後者の把握のしかたはただ信仰をもつてのみ可能なことで、またそれは信仰のもたらすもっともいちじるしいプラスの一つである。

望み

十字架は重い、けれども不思議だ、

それがきみをにらんでいる、きみはそれをほとんどになわなかったのに。

はじめはまっくらだ。けれども終わりに

真昼が待っている。——そこへいたる道の名は「断行」。

われらの力かすかなりとはいえ、きみのうちまかせている

主の力は偉大である。

きみの星はやみの夜に輝いている、

「きょう」に死んだね——「あす」はいのちだよ。(I・3・13)

イザヤ三〇・一五、一八。

主は、あなたのために恵みを施しうる日を待つてゐる。だからあなたはけつして心配したり、将来の計画を立てたりして、そんなことでだいじなだいじな仕事の時間をたくさんむだに費やしてはならない。神を信じて、神の道を歩こうと率直に励むならば、万事はひとりで、しかもあなたが自分で考えるよりはるかにうまくいく。かくして生活は非常に楽になってくる。というのは、くるかもしれないと思つて不幸を心配することは、実際に現に存在してゐてそれを耐えなければならぬ不幸よりもはるかに多く人間の力を消耗させるからである。不幸はしばしば外的な手段や努力でうち勝つことができるが、心配は神にたいする力強い信頼によらなければ根本的にこれに勝つことはできない。この経験はだれでもなしうるところである。

ところが、まったく敬虔なひとびとのなかにもまた、その誠実な篤信にもかかわらずなお多くのたえまない思いわずらいのなかに生活し、そのうえきわめて多くのことがらにおいてやはり世間並みの道を歩んで、とくに地上の財宝の評価に関して世間とおなじ見解のひとたちがある。この最後の点は別としても、きわめて敬虔な心ばせをもちながら、そういつたたぐいの富裕な身分の高いキリスト者が今日非常にたくさんいる。これらのひとびとのものに、神がともかくしばらく待つのは、たしかにあきらかな恩恵のしるしといわねばなるまい。なんとすれば、ひとは神と宝とに同時により頼むことはできないからである。一か他か、どちらかが心のなかで席をゆずらねばならない。そこにはいかなる和解の道もない。

あなたがたのなやみをすべて主に投げかけよ。

主は、あなたがたのために心を用う。

きみの家族のための思いわずらいを、

キリストにゆだねよ。

きみがなしえるのはただ思い計らいだけだ。

主はゆく道、ゆく末をあきらかに知っておられる。

主は憂いを好まないが、

きみがささげる祈りをよろこんで聞いてくださる。

きみが一策を案ずるだけなのに、

主は千策を計ってくださる。

だから、だれもかって気ままに

きみをそのうことがないように、

キリストはきみの心を流れのように

みちびいて恵みを与える。

苦しみもよろこびも彼のみ手から

安んじて受け、断じて氣を落とさぬがよい。

主はすみやかにきみの運命を変えてくださる。

それを嘆くなら、きみの運命はかえって悪くなる。

苦しみ^がきみにやってきたのは、理由^{わけ}なしに

きみを苦しめるためではない。

ただ信ぜよ、まことのいのちが

植えられるのは、悲しみの日にだよ、と。(I・3・15)

*

信仰はそれ自体すでに一つの幸福である。あるものがえられるというほんとうの確信は、たとえば木に咲く花をみるようなもので、あとで手に取って食べられる果実よりも、かえってひとの心の理想的要求に事実ふさわしい。

これはまた、未来に考えうるあらゆる幸福な生活にたいし、またそれと比較さるべき地上の生活の美しい花である。世を去って後はこの幸福はなくなるであろう。ひとはこの幸福をひとたび経験してしまわねばならない。でなければ、後の日に悔いをおぼえ、天国にはいるにふさわしからぬこととなろう。

「あなたがその瞬間から追い出したものは、永遠もまた返してはくれない。」⁽¹⁾

あらゆる幸福感のうちでもっとも美しい瞬間は、所有の瞬間ではなく、所有寸前の瞬間である。すなわち希望の成就が近づいて、すでに確実にそれが現われてきたときである。このことをもっともよく言い表わしているのは、イフィゲニエのあのすばらしい独白である。⁽²⁾「おまえ《成就》よ、いとも大いなる父のもっとも美しい娘よ、おまえはとうとうわたしのところに降りてきた。」⁽³⁾(I・3・16)

(1)〔訳者注〕シラーの『諦念』という思想詩ちゅうの一句。

(2)〔訳者注〕ゲーテの『タウリスのイフィゲニエ』第三幕第一場における女主人公イフィゲニエのことば。

*

疑惑への誘惑はつねにまず信仰によって克服されねばならない。こういう瞬間には理知の理屈ではふじゅうぶんなのである。克服しうればしかしマタイ三・一七のことが示す天上の余韻のようなあるものがたましいに残る。われわれにさらに勇気があるならば、こういう経験をするこの機会をむしろよろこぶであらう。しかしこのことはいくたびかそのように経験されるとやんでしまう。それらの機会が目的とするところをもはやもたなくなるからである。たんなる快楽のためには、神はわれわれにこのよろこびを贈りたまわない。(I・4・16)

*

すでにボエティウスは彼の有名な論文『哲学のなぐさめ』(五二六)において、人間は神の生活に参与することによってのみ真に幸福になりうることとを詳論しているが、以来ほとんど千五百年をへて、なおだれにとつても、このことに変わりはなかった。

このことに際してとくに称美すべきは、神が人間のように欺かれないということである。それゆえに彼にいくら形式的にだけ接近してみても、曇れる心に太陽の光をまやかかし入れることはできない。またいかなる宗教的熱狂や感覚的刺激も、この目的を達することはできない。神の身近にあるということは、これらとははるかに事情のかけ離れた、むしろまったく独特な平静にして平和に満ちた感情である。

出エジプト三四・六。列王上一九・二。

それでいて、この神の身近にあるという実感は、あらゆる人間的感情のなかでもっとも強烈なるもので、しかも他をはるかに凌駕^{りようが}している感情なのである。神の共在のこの実感が、心の完全な満足にたいしてのみならず、またさまざまな抑圧からの精神の高揚と解放とにたいしておよぼす作用たるや、友情も恋愛も、その他いかなる感情もとうてい比較にならないのである。しばしば引用される聖アウグスティヌスのことは、それがまったく真実であるには、この点でなお重要な補足を必要とするであろう。

このような力をもった感情は、ある実在的対象から出てくるに相違ないということは、これをみずから知っているひとびとにとっては、別になんら証明を要しない。彼らはただそれを知らなかった過去の日を残念に思うのみである。(I・5・11)

(1) [訳者注] ボネティウス(Anicius Manius Severinus Boethius, 480 といひ-525)ローマの哲学者で政治家。アルピヌス反逆事件に嫌疑^{けんぎ}をうけて刑死した。その獄中の手記がすなわち『哲学のなぐさめ Consolatione philosophica』である。ダンテはこれを愛読した。畠中尚志訳(岩波文庫版)がある。

(2) [訳者注] アウグスティヌスの『告白』巻頭のことば「あなたは人間を、彼がよるこびをもつてあなたをたたえるごとくつくりなされた。なんとすればあなたはわれわれをあなたの所有^{もつ}となるようにつくりなされたからである。われわれの心は、あなたに安らうまでは平安をえない」を著者は念頭においているのであろう。

*

愛は他のすべてのものにもまして、ひとを賢明にする。愛のみがよく、人間や事物の本質にたいし、また彼らを助けるもっとも正しい道と方法にたいする正しい透徹した洞察^{どうか}を与える。

それゆえにおおかたの場合、なにがもっとも賢明であるかを問うかわりに、なにがこのこと、またはか
のことにしても、もっとも愛の深いしかたであるかを問うのがよい。なんとすればこのしかたのほうが、か

の問の方よりもはるかに知られやすいからである。なにが愛の深いしかたであるかについては、もっとも才能の乏しい者でも、みずから欺かれまいとするかぎり、さほどたやすく自己欺瞞きまんにおちいることはない。ところが、きわめて才能豊かなひとですら、たんに賢さをもつては、あらゆる将来のできことを正しく予見し、かつ判断することはできない。(I・5・23)

*

真に神を信ずるひととは、實際異なつた種類の人間であつて、世間にあつて見知らぬような奇異な感をおぼえることが往々にしてあるものである。なんとすれば、この真の信仰は、キリストがすでに言つてゐるように、ふつうの信仰とはいささか異なつたもので、たんに山を移すばかりでなく、さらに難事たる人間の心をも思想をも変転させるものだからである。この信仰は神を愛するたましいへの神の積極的な近づきなくしては、成り立たない。この神の側からの近づきは、これにくらぶべきなものもない奇跡であつて、この奇跡にくらべては、この奇跡から生ずるところのあらゆる異常な作用も霊的な力も自明のこと、ほとんど自然のこととしか思われない。この事実がその昔實際おこなわれたからには、このすべては今日もまた可能であらねばならない。そしてこの救いをこそわれわれは今待ち望んでゐるのである。

創世四九・一八。マタイ二一・二二、二三。(I・6・3)

*

ブルームハルトその他の歴史的に確認されている奇跡をおこなうひとの「力」を構成するものは、おそらくたんに私欲なき愛であつた。この形容詞を付加しなければならないのは遺憾であるが、必要なのである。このことは、彼自身において動搖があつたこととこの力がときおり減退したことを意味するもので

あつて、それはこのような異常な人間の模倣をする無数のひとびとにおいてはなおさらのことである。なんとすればこの愛は、（これとわかつべくもなく連関する）信仰と同様に、福音における大きな真珠であつて、これをうるためにはあらゆる他のものを捨てねばならない。そしてこの愛は間断なく試練を受けかつ使用され、どんな瞬間にも現に存在しているのでなければならぬ。またこの愛は、火とおなじく、たえず盛んになったり衰えたりする。それゆゑ、つねに一定の水準に保たれるわけにゆかない。のみならず、これは欺かれえない。ひととは自分をも他人をも、つまりは信仰ありと思ひこませたり説きふせることはできようが、愛はそうはいかない。ここでは真実のみしか考えられない。あらゆる見せかけが試練の日を身近かに体験しなければならぬ。そのときにまことに恐るべくも報いを受ける。人間性のこの聖所が偽造されるならば、それは罰せられずしてはおかないのである。

信仰の鍵はもとと愛である。神やキリストにたいして反感のただわすかばかりの痕跡でもなお心にとどまつている間は、信仰は困難である。のちほどこの痕跡がひとたびまったく消え去つたならば、信仰は楽になる。神学はこれを超越する助けとならない。ほんとうの信仰に到達する唯一の道はこの反感の除去にある。だれかが自分は信ずることができないと主張するなら、それはたいていの場合正しい。しかしそのひとは、ひとからじかに非難をこうむるに価するこの原因をもっているわけである。

聖霊降臨祭の前夜

（サムエル下五・二四）

「いまやきみら清くあれ。」なおもひと日の耐え忍び。
わが昔ながらの信頼よ、いまひとたびを耐え忍べ。

すでに動いた、神の恵みは

川とあふれておまえの上に注ぎくる。

おおわが心、氣落ちすな！ あと数分だ。

桑の木の間にさわめきをわたしは聞く。

主よ、みことばを宣べたまえ「起きよ、光あれ」と。

そうすれば朝がきて、夢はみな終わりを告げる。(I・6・10)

*

みずから幸福感をもつためには、つねに遠謀深慮^{えんぼうしんりょ}の頭脳と愛に満ちた心臓とをもたねばならないというのは、正しいことばである。けれどもクレルヴ^{クレルヴ}の聖ベルナルドゥスの次のことばは、万人にもっと実行しやすいから、さらに正しい。すなわち「真実にして最大の歡喜は、被造物からくることなく、創造者から授かるものであり、あなたがひとたびこれを所有したら、だれもあなたからこれを奪うことができない。この歡喜にくらべれば、快樂はみな苦惱であり、よろこびもみな苦しみであり、美味もみな苦味であり、華美もみな見ばえなく、歡樂もみな卑しむべきものである」。

聖ボナヴェントゥラ^{ベントゥラ}のことばにいわく、「神がある人間に、神を愛する恩恵を与えたならば、それでじゅうぶん祝福となる」。これは宗教や神学と呼ばれているもののもっとも簡単な總計である。これらのものにおいての最大の博学も、けっきょくはこれ以上のもの、またはこれ以外のものを含んではない。このほかになにが含まれているとしても、それは祝福のためには必要でない。

神への愛のみが、利己心からわれわれを根本的に解放しうる。そしてまたこれのみが、あらゆる真の改

善の始めである。神への愛がわたしたちの心のなかで優勢となつてしまわぬかぎり、人間愛、人道、倫理と言つてみたところで、それは背後になんらの力も秘めていないたんなるそらごと^{そらごと}にすぎない。

第一コリント一三・一三。(I・6・13)

(1) [訳者注] クレルヴォー (Bernard de Clairvaux, 1090-1153) クレルヴォーは地名、「清き谷」の意。彼が僧院を結んで生活しかつ生涯を終わつた所。誕生の地はブルガンデー、貴族の出。篤信の母に育てられた。戦争におもむかんとするや、なき母の幻を見、飄然として悟り、武門をいでて僧院にはいる。二十三歳にして上記の地に僧院を建て、荒地を開拓する。才徳すぐれ、その教説、中世としてはきわめて福音的であつた。『蜜のしたたる師父』として仰がれた。後年、ルターは彼の影響もよき意味において受けた。当時の宗教界、政治界への影響力は強かつた。第二回十字軍は彼の熱烈なる遊説によるところ。国際問題も彼の調停によつて解決を見たものが少なくない。賛美歌もすぐれたものをかずかず作つた。現行賛美歌「血潮したたる」(一三六)、「心にしのぶも楽しき主の」(三四七)、「泉とあふるる生命」(三五三)、がそれである。ただし、「血潮したたる」はその後、同種のをドイツのゲルハルトが作つて、彼の主旨を継いでいる。

(2) [訳者注] ボナヴェントゥラ (Bonaventura, 1221-1274) 十三世紀のスコラ神学者のひとり。学的追求と共に禁欲的神秘的精進をする。パリ大学に学んだことは前掲のベルナルドゥスとおなじ。アッシジのフランチェスコ伝をあらわす。神への帰一に彼の調和的な人生把握^{はさぐ}の中心があつた。

*

人間仲間の交際においては、内的確信が非常にたいせつである。なぜなら、彼らのうちきわめて多くのひとびとは、自分たちを指導する他人を求め、このような自信満々たる指導者たちのすこぶる強剛な主義にさえ随喜しているしまつであるからである。こういった例は今日いたるところにころがっているのだ、とりあげてさすまでもない。過去においてナポレオン一世がそのきわめていちじるしい一例であつた。

最大の内的確信は、力強いがまた同時に粘液質の氣質から生ずるか、あるいは確固たる神信仰からくる。この後者は、少なくとも一時は、強い宿命論でおぎなわれうる。信仰を欠くときは、大なる動揺がくると予期してまちがいはない。これに反して、上記の両者が結び合わさっているときは、大事件の処理遂行にもっともよき性格素地を形成するものである。(I・6・18)

*

「遠く彼の後方に、わたしたちすべてを捕える
卑しきものが、実体なき仮像のなかにあった。」

シラーにささげたゲーテのこの追悼の辞は、ひとがもし教育理想あるいは文化理想なるものを樹立しようとするなら、カールイルのたんなる英雄崇拜や、いわんやニーチェの「超人主義」よりも、いっそうよくこのような理想を表わしている。われわれをあらたな民族移動の時代にひきもどすような、なんら教養の顧慮のない粗野でたくましいゲルマン氣質、かの「金髪の野獣」なるものは、力のためには他のいっさいを売らんとする神経衰弱症患者の、あるいはまた生粋無雑なドイツ民族がいまだけっして生息していなかった国土の、妄想的理想でもあろう。これに反してこの民族はさらに大なる理想を有し、その文化の最初からただ二つの特性をつねに保持してきた。それはすなわち、他のいかなる民族ももたないような信実を愛する生まれつきの心根と、すでにローマ人タキトゥスが当時のドイツ人を見て驚嘆したところの、男性ならびに女性の純潔を愛する心ばせとである。ドイツ人の世界支配の使命もまた、まさにこの二つの特性のほかななものにも結びつくものではない。ドイツ人のこの使命への有用性は、これらの特性いかによって増減する。(I・6・23)

*

信仰の本領は、神への努力にあるのではなく、神への帰依にある。われわれが神の戸をたたくのではなく、神がわたしたちの戸をたたくので、われわれは神にたいして戸を開かねばならない。

そうすれば、いっさいが階段的にまったくひとりずついてくる。まず緑の野、次にみのりを約束する穂、次に熟したよい穀物、最後に、よく暮らしたむなしくなかった生活のあとに、安息のための刈り入れ。イザヤ四五・二五。ヨハネ黙示三・二〇。ルカ一一・三六。

「神を愛する者には、すべて、の、ことよく役だたざるをえない」⁽¹⁾（ローマ八・二八参照）。真にこの真理を信ずる者にとっては、ふつうの意味においての「幸」「不幸」の概念は、すでに存在しない。そのひとはもはや、「快樂への渴望と、苦難にたいする恐怖とによって昏迷^{くら}まされるようなひとびと」の仲間ではない。

ゼパニヤ三・一四—二〇。（一・七・一五）

（一）〔訳者注〕ローマ八・二八の現行訳はこれとちがい、ギリシア語原典には現行訳が忠実である。

*

まことに注目し価すべきは、どの使徒も、それから現代の神のしもべのほとんどの人物も人間的にユダヤの王ダビデほどわたしたちに近く、また髓の髓までわかりやすい人物はないということである。ダビデはほとんど現代から三千年も昔にまったくわたしたちとは異なつた外的事情のもとに生活していた人物であるのに。このことは、いかなる事情によつても影響をこうむらない神とのまじわりにおける「永遠の」真理の最善の証拠である。この真理は、将来もまたおなじく変わらないであろう。いくつかのダビデの歌を、たとえば詩篇一八のごときを、わたしたちは今日もなお、わたしたちの心境さえ正しければ、わたし

たちのもつとも本来的でもつとも内面的な考えとして解明することができる。

生死をつかさどる全能の主とのまじわりにおいてのこの単純な誠実なしかたは、実にこのひとが始めて実行したものであり、それゆえ、非常に大きな過誤があったにもかかわらず、（すでに彼の名がそれを指示するごとく）いつまでも神の「寵児」⁽²⁾であった。どんな名目の「宗教」によっても、わたしたちからこの親密な神との関係が奪われることがあってはならない。

人間が神との結合のこのまったく可能な様式から遠ざかるや、人間の最大の仇敵たる動物官能主義か、恐怖心を起こさせる迷信の支配下に容易におちいつてしまう。この両者は近き将来においてきわめてあらわになってくるであろう。なんとすれば、すべての文明民族が、すでにこの「強力な迷妄」⁽³⁾の明瞭な兆候のもとに生活しているからである。彼らはさきに唯物主義の時代と「現代の自然科学的進歩発展」に心を奪われたある種の誇大妄想狂の時代を経過することによって、神との生ける関係をおおかた喪失してしまった。

エレミヤ二・一九、三・一五、二二・二五、四・三六。

わたしたちはいまやまず第一に、一見はてしない探究のこの不愉快な時期にはいる。しかし次には、あらたな発見がこれに続く。すなわち諸民族は、各個人が現今すでに自己の内部で通過し終わったところのものを体験するであろう。（I・7・29）

（1）〔訳者注〕詩篇一八はサムエル下二二とおなじ内容。詩篇一五〇篇ちゅう、約半数が「ダビデの」歌のごとく標記してあるが、しかし事実ダビデの作はきわめて少ないであろう。

（2）〔訳者注〕ダビデは、原語では Dawid で Dod「愛せられた者」と相通する。

*

人間の生涯においていつかひとたび、突然、単純なものがきて、神への正しい愛なくしては、信仰も、神の意志についての歴史的なあるいは教義学的な知識も、すべてなんら前進に役だつものではなく、この愛をひとたび心にいだけばすべてはあきらかに、容易に、簡単になるということをそのひとに示すのである。この境地にわたしたちはぜひと到達せねばならない。しからばわたしたちはわたしたちのすべての哲学ならびに神学の書籍を閉じることができ、またそうすることを欲するようになる。

神学は、超感覚的な事象に関する人間の学である。かかる対象に関する学が成立しうるかぎり、非常によくかつ非常に高く評価されるべきものである。けれどもまた超感覚的な事象に関する直接の確かさもあつて、それはただ神のみが贈りうるものである。ただしこの場合、広範な常識や、豊かな真の教養がどうしても必要であり、いずれの場合においてもきわめて高度の誠実な謙虚が必要である。そうすればいかなる自己欺瞞ごきまんにおちいることもなくなる。

マタイ一・二九、一二・一八・三六。ローマ八・二四。第一コリント一二・三一二。第一ヨハネ四・二〇・二七〔これはおそらく第一ヨハネ四・二一六のあやまり〕。(I・8・2)

*

神の国においてひとがまず第一に学ばねばならないことは、いっさいの善は信仰によつてわたしたちのうちに生ずるということ、そうでなければ、それはなんらの成長力をもかちえぬということである。さらにまた知らねばならないことは、いっさいは成長に必然、時を要するということである。あまりに早く進んでしまったことは、二度三度と繰り返されねばならない。かくてけつきくはもつとも長く時間がか

かつてしまふ。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。」⁽¹⁾ただ人間のみがいつもあせっている。

あるひとびとにはこの世にたいして守勢以外の態度をとることがむずかしい。彼らは奮激の衝動を欠いているのである。あなたがもしそうであるならば、ただつねに聖霊の影響に向かつて心を開くようにせよ。それでまったくじゅうぶんである。ヨハネ一四・二六、一六・二三。第一ヨハネ二・二七。(I・8・30)

(1)〔訳者注〕伝道三・二のことば。なお伝道はむしろ「コーヘレス」(集会の司会者)とそのままでの名称のほうがふさわしい。三・一一は「万事に時がある」ことを語っている有名な個所であるから参照せよ。

*

あなたがもし健康になりたいならば、幾月も幾年もいたずらにひとの助けを待つことなく、ただちに元氣よく、多くの人間の媒介などなしに、いつでも助けうるし助けようとしておられるあのみ手にすがれよ。医者への助けはこの先行的な救助あつて後、迎えられるのでなければならぬ。

うたがう者やあざけるひとには、さてそこでおもむろに答えるがよい、あなたよりずっと以前にあるひとりの者が答え、それ以来なお無数のひとびとが答えたことを。

ヨハネ五・五一八、九・二五、三九・四一。(I・9・4)

*

いわゆる人間愛はすべて、神にたいする強い愛の根底がなければ、一個の幻想であり、一片の自己欺瞞である。なんとすれば、この場合ひとは、たんにいとも愛嬌ある者たちを愛するか、または自分を愛してくれる者たちを愛するかにすぎず、いつにてもこれらの条件が脱落すると思われるや否や、つねにいちじ

るしく急速に決意して、愛を減するか、さらには愛をまったく捨ててしまおうとするからである。でなければ、人間愛とは一般に、かなり冷淡な一般的な好意にたいするやや美名といったもので、実際はむしろ、飽食した猛獣でさえその周囲にたいしてもつような無実な態度である。

このような人間愛では、年ごとに幾百万の人間が精神的にあるいは肉体的に餓死しようとも、そのためにこの愛はいたく心をなやますこともなく、あるいはきわめてわずかの耐乏をも自分になうことがない。(I・9・11)

*

も、つ、と、も、確、実、な、いつも現に存在する信仰は歴史的信仰である。神がわたしたちの心に近いので神をあまりに感じたり、あるいは個人的な経験がわたしたちをあらゆる疑惑から解き放ってくれたりするときに確かにあるにはある。がしかし、他のときには世界歴史に、しかもそのなかでとくにイスラエル民族の運命にわたしたちの心の平安を求めねばならない。イスラエル民族は今日もお一民族として神に捨てられないでいるではないか。しかるにかのギリシア人とローマ人ははるか昔に消えて跡もない。

またキリストを信ずるにしても、それが歴史的であるときにのみ、真に堅実であることができる。ロゴス理念のごとき形而上学的内実は、すでに「キリスト信仰の」確信のない者にとつては、その論証力は非常に薄弱なものである。

神の正義や慈愛に絶望的になり始めると、たちまち神の存在をもうたがうにいたるであろう。なんとすれば、義でもなければ、善意もない神は、高尚な人間にはたえがたい、またいとわしいと思われる一個の偶像であるからである。(I・9・16)

*

もつとも力強い人生哲学は、勇氣と神の意志への信頼との正しい混合から成り立つ。そのいずれか一つが正当にこうぜられないならば、うまくゆかない。

精力が、弛緩^{ちくわん}もせず、いつてまたけつしてひどく興奮もしないある程度の粘液質と結合するとき、それは戦時といわず平時といわず、この人世のすべての業務^{ぎふく}においてもつともゆきつくところまでことを成し遂げるものである。

「成功の秘訣^{ひけつ}は目的にたいする恒心のねばりにある。」(ディズレーリ) (I・9・18)

*

わたしたちがひとたびまったく愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであらうとも、なおこは美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きたための機会から成り立っているからである。(I・10・7)

*

「敵を愛すること」はきわめて美しいことばで、キリスト教教義学が大いに誇示しているところである。しかしキリスト教界の実践においては、見受けるところ多しとはとうてい言えない。

この愛は、神との結びつきにより人間を恐れることを忘れ去ったときのみ現実^{じやんじつ}に生じてくるものである。かくしてはじめて、わたしたちの生活において敵が最大の奉仕をわたしたちになしたことをさとり、これにたいしてすべての敵を抱擁^{ほうよう}しうるような気分になりうる。もし彼らにしてそれを誤解^{ごかい}するようなこ

とがなければ。(I・10・14)

*

信実 (Treue) は、まことに、もつとも美しくもつともたいせつな性質である。信実は動物をも非常にとうときものとなし、彼らをほとんど人間的価値と品位にまで高めるほどである。けれども信実のまったく欠如しているところでは、もつとも才知あり教養ある人間も、社会一般に危害をおよぼす野獣にすぎない。(I・10・16)

*

およそ神を信じようと願うならば、また彼の正義と神の慈愛とを堅く信じなければならぬ。なんとすれば、これらの属性なくしては彼は、わたしたちにとり一個のしかももつとも重大な不幸にすぎないかもしれないからである。それなら、むしろ神は存在しないことを望まざるをえないであろう。かかる仮定は考へうべき最大の冒瀆^{ぼうとく}となる。このことは至極あきらかに理解されることであるにもかかわらず、わたしたちは事実、わたしたちの運命のどこかの部分について不満をいだくことによって、日々この罪を犯しているのである。エレミヤ三二・二七―九。(I・10・19)

*

ひととはけっして聖につき、あるいは徳につき、あるいは義についてあまり多くを語るべきではない。義は、聖書が言うように、透徹した目の前には、なおつねに「汚れた衣」にすぎないからである。

ひとが地上において達成することのできることは、また他人の益になることは、神への愛であり、した

がってまたあらゆる真と善にたいする愛であり、すべての同胞にたいするまことの善意、親切である。このことをたえず自分の身に感ずるひとは、最高万能の人生目的を達したというものである。(I・11・3)

(1)〔訳者注〕イザヤ六四・六にあることは、現行口語訳では「われわれの正しい行い」と訳してある。旧訳文語では「われらの義」。

*

信仰についてあまたの書籍が書かれていることをわたしは知っている。けれども信仰について言われたもので、ヘブル一〇・三五・三九それからまたあのすばらしいヘブル一一が含む内容にもましてすぐれたものはかつてなかった。

このようなのが今日でもなお、この牢固たる信頼をもち、どんな事情のもとにもこれを堅持する勇ましいひとびとと、目に見える物のみを信じ、それによって身を処するかしこいひとびととの間の大きな差異である。信仰よりほかにわたしたちの心を完全に満たす道のないことをひとたびあきらかに洞見したならば、信仰は不動になる。(I・11・5)

*

ジェノヴァのカタリナは正當にも問いを發して、「神への愛は他のすべての愛をしりぞける。それでもなおわれわれは隣人を愛すべきであるのか」と言った。彼女はこれにたいして次のような答えをえた。「神を愛する者は、わが愛するすべてのものをもまた愛する。なんじはできるかぎりなんじの隣人の靈的また肉体的福祉を促進するようにつねに心がけねばならない。真の愛は隣人をそのひと自身において愛せず、神において愛する。」

これは隣人にとつてもいっそうけつこうなものである。なんとすれば、隣人がおのれ自身のために愛されるそういう愛は、ときとして特殊の動揺を体験し、どのみち、変わらずまた確かであることが少ないからである。(I・11・8)

*

わたしもまた、わたしの生涯において、そのときがきてみれば全然起こらなかったが、あるいは容易に耐ええた将来の厄難のいきいきした空想的観念によつて、邪路にみちびかれたことが往々にしてあった。そしてこの厄難をのがれようとする試みは、その結果においてときには、厄難そのものがおそらくもたらしたであろうわざわざいよりも悪しきものであった。これに反して、神は、わたしが神に信頼したときには、つねに、助けてくださった。この信仰なくして、およそこのごらんのとおりの現世を渡することは容易なことではない。しかしこの信仰があればいよいよ渡ることができ、かつだれにもできる。

この信仰は、これが実際にあるならば、すでにそれ自体一つの幸福である。そのわけは、信仰はたましいをよろこびと確信で満たし、信仰から生ずる究極の收穫とまさにおなじようにひとをよろこばすからである。これに反して、厭世観は、不幸そのものとまさにおなじようにひとを不幸にする感情である。そこであなたははしずれかを選びなさい。そのことはあなたの心しだいである。

わたしたちはもし少なくとも詩篇三二・八、九〔邦訳では七、八節〕の教えに従わんとするなら、わたしたちの生活をはるかに容易に形成していくことができる。(I・11・20)

*

神がその真のしもべたちにたいしていだかれる個人的な信実は、このようなただひとりの人間が一国の

不運をささえうるとなすほどにきわめて大なるものである。

この不運が避けがたいものとなる前に、彼はまず召されてしまう。そういう範例はまれてない。最近の実例はポーア戦争に先だつカーライル、ゴルドン、スパージョンおよびグラッドストンの死である。イザヤ五七・二。列王下二二・二〇。創世一八・二七。

しかしこれは、彼らが神を愛するがゆえに、みずから進んでしかも永遠に神のしもべたらんとおのれをささげたひとびとのみである。出エジプト二一・五、六。その他の「神のしもべ」はこの力をけっしてもったことがない。(I・12・10)

*

愛があれば、あらゆるものを克服することができる。愛がなければ、一生のあいだおのれ自身や他人と戦争状態をつづけることになり、けっきょく疲労し、ついには厭世^{えんせい}、あるいは人間憎悪^{ぜうお}にさえなりかねない。しかし愛はつねに、最初は困難な決意であり、つぎには、それができるようになるまで、神の手にみちびかれて長くたえずまなぶことであって、われわれはこの愛を自然に、あるいは生まれながらにもっているものではない。人間が愛をついに所有するとき、他のなものにもまして、愛はその人間に力を与えてくれるばかりか、知力と忍耐をも与えてくれる。なぜなら愛は永遠の存在と生命の一部であり、あらゆる地上のものとちがつて老化する^{お化する}ことがないからだ。(II・1・9)

*

愛のもっともありがたい点は、愛しかえされることで、これはもちろん愛がすこし長つづきし、強くありさえすれば、ほとんど例外なくおこるものであるが、そればかりではなく、自分自身の本質がただちに

強められ、いきいきとすることである。愛は世のなかにあたたかさを生み出すので、さもなくば世のなかにはなんとつめたいものである。これだけでもすでに、そのあとに生ずることはいっさい度外視しても、ひとつの幸福である。愛はまさにたましいのいのちであり、愛をすっかり放棄するものはそのたましいをうしなう。永久につぐないがたい損失ではないか。

たましいをうしなつたひとは生きつづけることもできない。いまの、そして未来のいのちをうしなう。
(Ⅱ・2・3)

*

神はわれわれよりはるかにひろい心をもち、われわれがとつくにもはや見はなしてしまつたような多くのひとたちを、まだうしなわれたものとは見なさず、自分の子にかぞえることは、歴史を知るひとならだれでもうたがわないうにちがいない。だが、あの説明しがたい祝福、「神の祝福」にはいささかちがったものがある。これはもはや忍耐、同情、広大な寛容ではなく、そこには積極的な愛情があるので、われわれが誠実な愛情をつくす場合にのみこたえてくれるものであり、懷疑主義とか、たんに形式的なむりやりの信仰をもつてしてはだめである。申命六・五。(Ⅱ・2・7)

*

愛にたいしては、いつも心をひらいていさえすればよい。愛は神の靈として世界をみたしている。しかしわれわれは愛に心をとざす力をもち、長年の習慣や遺伝的傾向のために、たえず多少なりとも心をとざしている。愛をまなぼうとか、練習しようと努力する必要はなく、あやまつた哲学や偏狭な享楽欲によつて愛に心をとざさないようにすればいいのだ。愛は一瞬一瞬われわれの心をみたし、他のすべてのものを

心から追いはらおうとしている——その結果は、世界苦や世界不安ではなく、生のよろこびである。(Ⅱ・2・22)

★

あなたが目下、信仰はよわまり、行動には生気が欠けて効果がないように感ずるなら、イザヤ五四、五五、および第二コリント四が有効になくさめてくれるであらう。こういうことは、もっともりつぱな、もっともすんだひとたちにおいてもなお起るものである。しかしそれはいつまでもつづくものではなく、さらに(イザヤ五七のはじめに言っているように)ド、イ、でいまにもあるかもしれないが、大きなわざわいの時代がせまると、正しいひとびとはあらかじめ連れ去られ、安全にされる。これはあてにしてよいことである。——あなたは誹謗者(ひぼう)をすこしもおそれることはない。彼らはあなたになんら害をくわえることはできない。あなた自身せつたいに正しい道からはずれないようにしさえすれば、そんなことは一時の不快にすぎない。イザヤ五四・四一七および五三・二〇一二。これらはみなあきらかに、自分のゆたかな経験にもとづいていることばであり、それゆえにこそ、これらのことばには力がある。(Ⅱ・2・25)

(1) 忠実なニッカルトが死ぬまえに警告したように、やはり事実なつてあらわれた。

ほんの一例をあげれば、平和運動の高貴な先駆者ベルタ・フォン・メットナーが〔第一次〕世界大戦勃発直前に急死したことを考えてほしい。

★

ひとびととのまじわりにおいては(それゆえとくに教育においても)、彼らの好意をうることも、そもそもほかならぬ眼目である。このことは——残念ながらおそろく言わねばならないが——子どもであ

れおとなであれ、野蛮人であれ文明人であれ、非常に多数のひとびとにあっては、大げさなあいさつや忠告によるよりもささやかな贈り物によるほうが達成しやすい。贈り物はまたしばしば、なかばあるいはまったく不和になったひとびとにあってもふしぎに和解の作用をもつものである。

贈り物にいちばんふさわしくないのは、花屋や温室からたずさえたかさばった、したがって「高価」な花たばで、これはたちまちしおれて、わずらわしくなる。いちばんいいのは、もし季節がゆるすなら、自分でつんだ野の花の小さいたば、庭からとった一輪の薔薇ばらなどで、そのほかなにかの日用品でもよい。一度ためてみたら。(Ⅱ・3・2)

*

申命六・四、五。「あなたは心をつくし精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ。」それにたいして、「そうです、主よ、わたしはあなたの恵みによってのみそれをなし、あなたとわたしとをへだてるなにもなく、あなたにまさるなにもない」と言えるなら、あなたは生の目的と目標に到達したのである。

そうなくてもなお神が、あなたにとってもはやなんの目標もない生からあなたを召さないなら、それは、あなたがなお他のひとびとに生の可能性と結果との範をしめす(たんに教えるのではなく、そのためなら主はほかのひとをいくらかでも有している)ために主がそうしむけたのだ。

隣人をしかしあなた自身とおなじように愛さなければならぬと、キリストは上掲の戒めになおつけくわえた。あなたとおなじようにとは、あなたより多くではなく、神を愛するのとおなじでもない。多くのいわゆる理想主義的な、情感あふれる伝記にえがかれているように、隣人を神とならべて、あるいはまして神の上においてははならない。こういう態度はむしろ病的であって、真の生にみちびくことはぜんぜんな

く、よくあるようにたんなる修辭でないなら、隣人をも自分をもほろぼしてしまふことになる。

ひとびとがあなたを愛しているかどうか、そのこと自体は、あなたの内面の進歩にとってはぜんぜんどうでもいいことである。したがってまたひとの愛情を熱心にもとめてはならない。しかし神は、あなたにとって役だつと思うなら、あるいは人間の弱さとしてやむをえないと思うなら、必要なだけの愛をひとびとがあなたにそそぐようにするだろう。

しかしそれを名譽ととりちがえないように。それにはヨハネ五・四四の主のはっきりしたことばがいかにもするどくあてはまる。ほまれをすてて、それを神にゆだねることができ、ということは、世間とあなたとの最大のちがいをさえつくるものである。

どのような意義と影響とを神はあなたに与えようとするのか。「わたしの恵みはあなたに対して十分である」⁽¹⁾これがなによりもいいものであり、神の与える最上のものである。

これはわれわれのもつような愛ではないが、地上生活の「賞品」であって、贈られたものとはいえ、達成され、た、た、か、い、と、ら、れ、た、も、の、で、あ、る、。

ヨハネ一・四二。(Ⅱ・三・13)

(1)〔訳者注〕第二コリント二・九。

*

預言能力は強力な信仰とむすばれたときにのみのぞましいものとなる。さもないとこの能力はひとを悪にたいしてあまりに臆病^{おくびょう}にし、卑屈にする。なぜなら信仰を欠くときこの能力は、たんに中間原因とその結果とを予見する以上に出ないからである。それゆえ神はイザヤ四二・一九において、はじめは奇妙にみえることばを、神のしもべたちは他のひとびとよりも目しい、耳しいていなければならないと語っている。

彼らはけつしてなにものをも、なにびとをもおそれてはならない。もしおそれるようならそれは彼らの最大欠点となり、彼らを大事に役だたないものにするであろう。(Ⅱ・3・17)

*

どのような種類のものであろうと、あることがらにおそれをもつかぎり、そのことがらの関係においては、心のなかに足りないものがあるので、これはとりのぞく必要がある。これが悪人やわがままな人間の欠点である。こういうひとびとは一生恐怖を脱することがない。そうでないなら彼らは「光の子らよりもかしこく」、多くの点でまさるであらう。しかしこのおそれということが彼らの弱点であって、これは完全に信じてよいことである。それゆえツィンツェンドルフは彼の賛美歌のひとつで、すぐれた人間通としてうたっている。

「神にしたがう生活をいとままないものは、いたずらに恐怖のとりことなる。」

これをよく観察すれば、つねにそのとおりであることがわかるであらう。これは逆に言ってもおなじこととで、非常に臆病な、もしくは人間恐怖にみたされた篤信者は、正当には篤信の名にあたいしない。この世にまだ執着をもっているのです、おそれをいただくのは当然である。(Ⅱ・3・18)

*

愛というものがなければ、この世界は、どれほど自然美に富み、芸術・科学を有しようとも、ひどくみ

すばらしい不満足なものにすぎず、人間が賢明であればあるほど、よけいそのことを感じ、それをさとのが早いものだ。ただおろかなものだけがおしばらく、この生の享楽というみどりなす牧場の上を、そこで彼らが主人でいられるあいだけ、楽しげにかけずりまわる。

またべつな種類のおろかもは、神への愛をもたなくとも、人間を、少なくとも数人の人間を「永久に」愛することができ、そこに一生の幸福を見いだしうと思っている。これはとかく比較的高尚なひとびとのおちいりやすいあやまちであるが、このあやまちのほうがつまらないかたちをとる場合でも、ゆるしを見いだしやすい。ルカ七・四七（Ⅱ・3・20）

*

全体からすればいくぶん危険な内容をもつステッド（「イギリスのジャーナリスト」のある注目すべき著書に）つぎのようなことばがある。「あらゆる方面におよぶ完全な愛が神の理想である。たとえ不倫の愛でも、それがあなたをあなたのなかから高めてくれるかぎり、利己的な、愛のない結婚よりもあなたを天国に近づけてくれる。」はなはだ危険な真理で、とうてい教会で説教されるわけにはいかないであろうが、しかもなおこのような真理を、わたしたちの主が理解したように理解しうるひとびとにとってはやはりひとつの真理である。ルカ五・三三、七・四七。（Ⅱ・3・29）

*

どれほどわずかなひとしかこのような愛、というかむしろ友情というべき愛の力がないか、その実状をあなたは人生においてやがて経験するだろう。しかしそれにおどろいて愛からしりぞいてはいけない。それはなんといても、神の近くににいることについて、地上でもっともよいものなのだから。（Ⅱ・5・3）

(1) おなじことをウイルソン大統領も、イタリア国会にたいする講演で使っている。「友情あついい心とよい意志のみが、諸国民をも結合させうる」と。

*

あなたは、しばらくのあいだ、どうにも心の楽しまぬことがあつても、彼と主キリストにたいして愛と信頼の正しいまじわりをむすんでいるのなら、けつして、びくびくしたり、悲しんだりしてはいけない。これは、新しいよい段階の霊的進歩を生む陣痛なのである。(Ⅱ・7・23)

*

ほんのもう少しばかり、祈りにより、目をさましつつ、あなたの身近かなひとびとのためにも、耐えしのぶがよい。そうすれば、いまにあなたの最上のときがおとずれる。

「主よ、わたしはあなたの救いを待っています。」

詩篇一九・二六、九七・二。創世四九・二八。ルカ一八・七、八。(Ⅱ・7・25)

*

なにかの善行というものは、いったんよく納得がいき、うけいれられてしまうと、子どもにもできることのような気がし、ほとんどわかりきったことのように思えて、なぜ、もつととうの前からしなかったんだらうと自問するものである。しかし多くはそれに理由がじゅうぶんあるもので、神の教育は段階的であり、偽善ほど神のこばむものはないからである。公然と悪いおこないをするひとのほうが、神は偽善者や見せかけの聖者より好きである。

しかしそれでも、多少の差はあろうが、人間はだれでもその生涯のおわりにのぞんで、アンゲルス・シ
レジウスの美しい歌に声をあわせて唱えないわけにはいかないだろう、「ああ、われなんじを愛せしこと、
いかにおそかりし！」同胞教団賛美歌四八一。

あなたは、わたしよりも、はやくはじめていたきたい。(Ⅱ・8・6)

*

人間を愛しえないときは、人間をおそれるにちがいない。ひとびとにたいして無関心でいることはでき
ないし、それにまた、彼らからすっかりはなれることもできない。(Ⅱ・8・11)

*

サムエル上二五・二八、二九。心にくしみの芽がもえるまもないうちに、わたしたちのすべての敵とか
悪意あるものとかを(なんらか活動的な生活をしていると、彼らの攻撃はかならずある)、ただちに神の
手にまかせてしまうのはたんなる習慣にもせよ、ひじょうにいい習慣である。まかせれば、われわれの道
はわるいどころか、むしろよくひらける。わたし自身それをたびたび経験したものだ。イザヤ四一・一二、
一二、一三。(Ⅱ・8・21)

*

ときには反対者のいうことが正しいこともある。人間の心というものは、うまれつきたいへん偏狭なも
ので、どんな攻撃でも侮辱と感ずるものだからだ。すべての復讐(たぐひ)を神にゆだねる習慣がつくと、ずっとか
たくなでなくなり、やはり相手のいうことも心にとめて考えるようになる。これに反し、ある人物にたい

する反対がなすべき義務であるばあいには、よく考えて、すぐつぎの機会に好意を示すようにすべきであろう。そうすれば、相手の側でもくしみが根をはらないであろうから。できるだけ早く、好意のこもったひとことでもかければ、それでじゅうぶんなことがよくあるものだ。(Ⅱ・8・22)

*

マタイ二六・六―四。この(ナルドの油つぼとユダの)物語ほど福音書に欠かしたくないものはない。それは、この物語が、家庭のなかでもよく破滅的な働きをする狭量でちっぽけなけちくさい根性を、キリスト者の心からとりのぞいてくれるし、さらにこの点で寛大を示してくれるからである。この寛大をわれわれは、主の示された非のうちどころのない例から、くりかえしあらたに感じとって、ありがたく思う。主のようにわれわれもあらねばならぬし、あってよい。ユダはこの正反対で、せまい、ちっぽけなキリスト者であり、万事ある種の秩序か方法にしたがってするひとで、なるほどこれも原則としてはいいかもしれない。しかし、彼は例外というものを知らない。彼流に考えたキリスト教にちよつとでもはずれるひとは、世俗のものだとする。彼はキリスト教について思いがいをしたのだ！ こういう種類のひとたちはいまもなお存在し、キリストをうらぎりかねない。(Ⅱ・8・23)

*

ヨハネ一五・七。(ただの使徒とか宗教改革者とかでなく)主みずからこう確約してくれたことを思えば、真に主のものたらんとするひとは、けつしてもはやなげかず、ひたすら願ひもとめるべきであらう。そのほうがけつきよく心よく、たやすいことだ。なげきをよろこんできくようなひとはいわないのだから。

たとえば、武器弾薬は山のようにありながら戦場を逃げ出す兵隊、あるいは、百万長者のくせに生計

にこまるこまると泣きごとをいいつづけるひとのようなものである。

しかしながら、この金言（実際の面からいうと聖書ちゃう第一のものが）の前提、「あなたがわたしにつながっているならば……」を見のがしてはならない。（Ⅱ・８・24）

（1）〔訳者注〕「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」

*

あなたは愛の種まきをしないではいけない、たえず、できるかぎり多く。それが教育期間をへたのちの、あなたの生涯の仕事である。

どれもこれもみな芽をふくとはかぎらない。その覚悟はしていなければいけない。けれども、みなひと石の地におちた種というわけでもない。なぜなら、世界はひじょうに愛を必要としているからであり、たとえ世界自身には愛がないとしても、いつでも愛を高く評価するであろうから。

種まきをどうするかという方法は、日に日にさとしていくのがもつともよい。いったんその決心さえついてしまえば、すべてのエネルギーをひとりに絞る自己の生活享受だけを思う気持ちがある重きをなさなくすれば、まきどきの機会はいつでもわかるであろう。

だからためしにやってみたまえ！ もっとも大きなことというものは、ためして、手をつけることによってできるのだ。そこに神の助けもたしかにある。なぜなら神自身おなじ目標を追っているからで、あなたはこれよりのち、神とおなじ仕事の助手役となり、協力者となるのだ。ヨハネ八・二三、一三・三四、一四・

二二・一五。（Ⅱ・９・９）

*

ダニエル一〇・一二三、一九三。願いがすぐにききとどけられないことがよくある。あるいは、ききとどけられても、それがわれわれにすぐにわからないこともある。それがわれわれの弱さのもととなり、さらに不信仰にかかわることさえある。こうやってまどるわけが、われわれの目のまえにはつきり示されるとはかぎらないが、神が自分のしもべにかぞえる人間は、しんぼう強く願えばかならず聞きとどけられることを、つねに信じきっているべきであろう。おそらくはやかれ、そして願いにもつともかなくなった方法でききとどけられるのだ。まるで大盤石の上に立つようにこれを信じなければならぬ。すると、神がわれわれをさしあたり安心させようとして、使いをつかわすことがしばしばある。たいていそれはふつうの間で、ちやうどよいときにやってくるにちがいない。しかもみずから忠言と助けと、ききとどけられる確信とをもとめることもよくある。わたし自身よくそういう目にあつた。

もしあなたが、もう自分の力を信ずることをしないで、つねに神の力を信ずることができるようになれば、あらゆるものの勝利はあなたの手中にあり、そのうえ、苦難をもよるこぶにいたるだろう。それにしてもこれはまことに高い段階である。(Ⅱ・9・20)

*

ヨハネ八・一二。この（姦淫の女の）物語はさまざまな注釈を生んだ。わたしは、「そのおりには私たちの良心を確信して」罪ある女をうったえ出たひとびとは、時をへてはじめのおどろきから（おどろいたことはともかく彼らの名誉になるだけのことである）さめて、キリストの言うのはあまりにいいかげんな道徳だ、と非難したのだと思う。それにもかかわらず、この物語は独特なもので、もしこれが主の所行

にいれられていなかったなら、さぞかしさんねなことであろう。この物語は、こういう罪人にたいして、愛というものからもつべき態度をまず示している、すなわち、同情に真剣をませあわせることである。われわれのふつうやりかねないように、どちらが欠けたりしてもだめである。(Ⅱ・9・26)

*

人間のたましいは、子どもでも犯罪人のたましいでさえも、自分自身と神のみに属するものである。われわれはたとえある人間の肉体的存在については法が自由な処置をゆるしているようなときですらも、ひとのたましいにたいして、力まかせに、あるいはさしでがましくふるまったり、ひとのたましいのなかに土足ではいりこむようなまねをしてはならない。

愛だけが「あなたの心をわたしに与えよ」、とまとめることができる。愛もまたおのれの心を、しかも、自分のほうからさきに与える。

神にとつても法則というものがあるとすれば、神すらもこの自然法則にはしたがうであろう。事実、多くのひとは、まず、最初に、かならずくる神の愛を見ないために、神を愛さない。いつもかわらず、神がさきに人間を愛しなされた。とほめたたえてばかりいる説教者は、おろかなことである。それはただ、必然のことだったにすぎない。

この感覚はどんなひとでももっていて、まことの愛の根底もいぶきもない「教化」や伝道などとはどんなものでもうけつけない。この愛の根底といぶきはまた、ただよそおうことも、むなしきことばでかえることもできない。

だからこそ、たいがいの子どもが両親や教育者を愛さないのである。(Ⅱ・10・10)

*

愛はみていてつねに心楽しいものである。ほんの小さな子どもが小猫や小鳥や兎うさぎや、それどころか木製の人形でもだいいじにかわいがっているときでさえ、いかにも人間らしい自己教育がなされていると感ずるものだ。これに反して、名譽心をかき立てるやり方は、学校教育の方法であり、若いひとを生涯せいかそれだけを追っていけばいいような妙な軌道にのせてしまい、ついには野心家で、完全なエゴイストにするばかりだ。だから、キリストも、愛がかたちを変えたような種類の罪にたいしてはいたって寛大である。なぜなら、そういう罪は少なくともほかの罪ほどに心を「かたくなに」しないからである。このひとびとはそれゆえゆるしと悔い改めののぞみがまだあるのだ。われわれは、この点でキリストに見ならうのがよい。

ルカ七・四七―五〇。エゼキエル三六・二五、二六。(Ⅱ・10・15)

七 信実について

いつでもいいから、しばらく試みに批判すること、をまったくやめなさい。どこでも、力のかぎり、なんでもよいことがあったらそれを鼓舞しまた支持しなさい。そして凡俗で劣悪なことは、それをむなしはいかないこととして無視しなさい。そのようにしてあなたは、さらによろこばしい生活に達するであろう。まさにこんなことに、いっさいがかかっていることがきわめて多いのである。(I・2・5)

*

つねに真実を語るといふことは、それを真剣に意志するときでさえ、けっしてそうやさしいことではない。虚偽はなかなか執拗にわたしたちの生活に編みこまれているために、おおかたのひとは、なんらの目的をも結果をももたえない独語や祈りのようなひそかなことにおいてすら、なお真実でないほどである。これに反してひとびとは他人の虚言にはたやすく気づき、その虚言が彼らにへつらうか、さもなければな

にかつごうのいい場合にのみ、それを信する。

あの教養あるローマ人(ヨハネ一八・三八)の懐疑的な叫びは、そのまま今日の教養ある階級の心持ちである。彼らは、人類の歴史が存続してきたかぎり、この世のどんな学問も哲学も真に誤謬(ごご)のない真理を与えてくれなかったことを、じゅうぶんよく知っている。それゆえにたんに個々のそのときどきの真理だけではなく、およそ真理そのものをもちたいと願うひとは、次のみちよりほかにとるべきものはなからう。すなわちこの世における歴史的な独一な課題が、まさに真理そのもののあかしであつたあるひと、そのひとに自分を結びつけるという道があるのみ。

ヨハネ一八・三七、一七・八、一七、一六・一三、一四・六、一一・二五、二六・八・五、七・四六。マタイ七・二九。

このあかしが果たしてまったくひとの心を満足させるに足る真理であるかどうかを、みずから試みる、ことができる。そのひとは自分の感情において、それが真理であることをじゅうぶんにかつ確信をもつてあかされるのを知るのであらう。

ヨハネ九・二五、八・一二、七・三八、一六・一七、六・六八、四・一四。

しかしこれをつて一度も真剣にやってみたことのないひとは、またはやってみようと欲しないひとは、このことについて論争する権利がない。そのひとは自分の知らないことを論じているわけである。

(I・2・14)

(1)〔訳者注〕ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。(ヨハネ一八・三八)ポンテオ・ピラトは紀元二六年から三十六年までユダヤ総督の任にあつた。洗礼のヨハネ(ルカ三・二)も、イエス(マタイ二七、マルコ一五、ルカ二三、ヨハネ一八)も、彼の治下にたおれたのである。フィローによれば、彼はがんで過酷な人物で、政治は腐敗していた。イエスの無罪を認めながら、公正と勇気とを欠き、民衆の動行、カイザルの鼻息をおそれ、イエスのはりつけの刑をゆるしてユダヤ人の手にイエスを渡したのである。

*

毎朝目ざめたらすぐ神に感謝せよ、善をなす機会が日ごとにあなたに与えられることを！　そして一日じゅう活眼を見開いてその機会をとらえよ。

箴言一五・二五、一七・二三、四・一八―一九。伝道二・二三。(I・3・19)

*

善にたいする怠惰はきわめて大なる欠陥である。おそらくあらゆる欠陥のなかの最大なるものである。それはどんなよい側面もそのひとに見いだされえないからである。それにもかかわらず、多くのひとびとはおのれについても他人についても、この欠陥をあまり高く見積もらないことがしばしばある。というのは、この欠陥は純粹に受動的であつて、しばしば容易に認められないことさえあるからである。

ひとがまったく賢明でさえあれば、善行のためできるだけ多くの機会を望みかつ求めるであらう。ところが実際にはひとびとはそれをむしろ避けることさえしばしばある。それでわれわれは天国というものは、よき行為へのかぎらない動因と、それをなすかぎらない力とよろこびとのあるところだと考えている。これとは異なつた天国は、いやしくも思索的な人間にとっては価値がないように思われる。目の前の瞬間的な休息欲は全生涯をも、もしくは永遠の生活をも満たしあらわすものではなく、一時の過ぎゆく感情にすぎない。

それと反対に、目の前になんらなすべき善がなく、また善をなす力も欲求もないというなら、それこそすでに地上の地獄である。世に益するところ多かるべきいのちをいだきながら、無益の生を夢と暮らす者のなんと多いことか。ハガイ一・六―八、二・四―九。

われわれがつねに満足な金銭関係において生活しようと願うならば、自分の収入のなかのたとえどれほど小さなパーセンテージにせよ、慈善的目的のために一定の金銭を使うことから始めねばならない。これはだれしもできることであり、そしてそのために貧乏になるなどと思うのは、とんだ錯覚である。事実はその反対である。他方には、自分でこれしきの労をすらいとうほどの怠惰な金持ちがたくさんいる。しかも彼らは彼らの余剰の金銭の一部を、選択もなく、またしばしばたいして善意をもつことすらなく、なかの会か設備といったものに寄付をしようものなら、たいしたことをしたと思っている。これはまったくの謬見である。これはまさに使徒パウロの第一コリント一三・三のあの有名なことばに当たるものである。今日ではけっしてだれにでも、とくに古代や中世の有名な範例においてしばしば生起したようにおのれの財産をことごとく貧者に施与することを勧めるわけにはいかない。むしろそのひとは財を保ち、よく管理して、その収入を神のみこころに従って使うべきである。あるいはもしそのひとが自分でそういったことを心得ていないならば、自分のかわりにしてくれる信用ある人物を求むべきである。すべての富めるものが多少ともこのように生活しようとするなら、これまでよりはるかに多くのことが果たされるであらう。そして彼ら自身もそのときは、現在よりも幸福になるであらう。(I・4・10)

*

ひとはつねに、なにか善をなすことをのみ考えるべきである。考えがそのほうに向けられていれば、それへの機会がいつなりとも見いだされるというものである。このことは生活を楽にさせる。とくに生活が困難なときにとりわけそうである。またこれは順境に際して輕薄と淺薄から守ってくれる。

たえまなく、不平を鳴らし、がまんのできる事情においてすらけっして足るを知らないひとびとに、神は、彼らになお改善の見込みがあるかぎり、さらに大きな苦難をおくり、かくて彼らがこのような大きな

苦難と、もっと小さな、日常生活において避けがたい難^{なだゆ}波との差異をつらつら知り、将来はあらゆる善福にたいして感謝するようにしむけなさるのである。

比較的小さいわざわいについてあまりにも多く不平を言う者は、それゆえにとかくさらに大きな厄難にあいがちであり、しかもそのときひとの同情はもうないのである。彼の不断の不平にひとびとはなれ飽きているからである。

予定

(ガラテヤ一・一五、一六)

あなたの願いと思いを捨てよ、

この瞬間に眼^{まなこ}をそそげ。

主は必ずやそのしもべらを

公道につれていってください。

おそれるな、みのりのない望みを、

信徒にふさわしいのは不動の信。

召されたひとはことごとく

これまでここにたどり着いた。(I・8・15)

*

ひとは力強く善を体現してゆく者でなければならない。神の前にはむなしく、人間にたいしては犯すべ

からざるものを堅持して、しかもおおかたはなはだつれなきこの世にたいしてはあまりにものやわらかであつてはならない。けれどもこのことは、ひとがもはや、この世にたいしてなら重大な価値をおかなくなつたときにのみ可能である。

ミカ七・二一〇。これは現今の幾多の状態の生き写しであり、苦難のときのなぐさめである。その苦難というのは、全世界の、しかもしばしばとくに身近かな環境の嫌悪けんおすべきものからできあがり、キリストすらもそれをまぬがれえなかつたところのものである。

ヨハネ七・五。マルコ三・二二。マタイ一〇・三六。

心がしかし、いつまでも堅固で正直であるならば、報いのときがまつたくおのずから、またしばしばまつたく思いがけなくしかもあふるるばかり豊かにすらやってくるものである。

イザヤ四九・二七、五一・二七、五四・一七、四、六〇・一四、一〇。詩篇九。

命令をもつてすれば反抗にぶつかることがらでも、友愛の微笑をもつてすれば、よく達せられることがいくらでもある。

「あなたがひとにのぞむところは、

あなたの剣つるぎをもつてきりかかるよりは

むしろあなたのほえみをもつて迫せまれよ。」

(シェイクスピア)(I・8・29)

*

ダンテの『神曲』地獄篇におけるフランチェスカ・ダ・リミニの有名なことば、「悲境にあつて、さいわいの日を思いかえずにまさる悲しみなし」⁽¹⁾（地獄篇第五歌一二—三行）、これは「キリスト教とは」異なつたいろいろな人生觀のまったく異なつた効果をもつともよく示している。もつとも大きな不幸においてすらたましいのもつとも内奥の中核はこれに触れることなく、過ぎた日に自分にも豊かにわかち与えられた善と美とを感謝し、つつ思いかえすことができる。けれどもその幸福がただ享樂にあつたのなら、上記のことばは、老いゆくどの人間もこれを経験して、悲痛をおぼえねばならぬおそろしい真理をもつことになる。（I・11・7）

（1）〔訳者注〕地獄篇第五歌は、有名なフランチェスカとパオロの悲恋の物語である。ダンテはフランチェスカの述懐を聞き終わって、失神してたおれた、と書いている。ダンテはベアトリーチェにたいして死よりも強き、死をも越えての恋愛をもつていた。彼の恋愛はたましいの遍歴と共にしだいに変貌し聖化されていった。彼のはまさに終末論的恋愛ということができよう。

*

善への刺激も、悪への刺激もおおかたは電光石火的である。前者にたいしてはただちにこれに応じて、わたしたちを助けようと差し伸べた手を、実行によつてつかまねばならぬ。後者にたいしてもまさに同様に、ただちに、意志の断固たる抵抗をさし向けねばならない。「かくしてひとは星にまで登りゆく。」（Sicutur ad astra）⁽¹⁾（I・11・10）

（1）〔訳者注〕ヴェルギリウス『エネア』第九卷六四一行のことば。

*

よい衝動には、（たとえば整頓せいとんするといふような）どんな小さい衝動でもただちにしたいが、その衝動をあとにのぼしたり、とりかえしのつかないものにしたたりしないように実行にうつさねばならない——また同様にわるい衝動にたいしてはただちに心中でさからわねばならない。さもないと善への気のりがしいにやわくなり、めつたに生じなくなり、わるいほうは抵抗もなく、しだいに強く、ひんぱんになる。善いずれの進歩も想像以上に些細なことからなりたっているもので、その両者のどちらが習慣になるかによって、人生の勝ち負けが決定されてしまうものだ。（Ⅱ・２・28）

*

この世にあるすべての善のみを報道し、悪や小事には注意をむけない新聞とか評論雑誌があってもいいはずだ。この世にはやはりよいことが多くおこなわれ、とくに、はじめは悪いものでもしまいには善に変わったり、善につかえたりすることがどんなに多いか、これを読めばはじめて知るであらう。「神を愛する者たちには、万事が益となる。」これは正当で根拠のあるオプチミズムである。人生ではよくこのことを経験するもので、ただの「偶然」とは思えない。（Ⅱ・４・20）

*

「主、あなたのことは強く、

心とたましいをうがちつらぬく。

あなたの軛くびきは心よく、あなたの霊はゆるぎなく、

そして天国の門はひらかれている。⁽¹⁾」

真実の善への正しい指導者であらうと思うなら、この歌のようにまたひとびとをみちびかなくてはならない。そして、あらしと、もえあがる炎とをあまり早く消すことなく、じゅうぶん必要なだけの時間をかけて、堅いからをとかさなくてはならない。そのあと、ちょうどよい潮どきにおだやかな声で、正しいことばをえらんで語るといのが教育のこつである。しかし、教育者とか聖職についているひとびとで、このこつをのみこんだひとは、いつでもごく少ししかなく、またこのこつは、どんな「体系」にも作りえない。これには豊富な自分自身の人生経験と、諸大学のふつうの心理学とちがう心理学とが必要である。

(Ⅱ・5・10)

(1) 同胞教団賛美歌九七三。

*

^{しんげ}箴言三・三五、二六。神のさばきは「正しいものにも正しくないもの」にもくだる。神にしたがうものは、かならずしも箱舟や岩の上にまもられるとはかぎらない。いや、まもられないのがふつうである。しかし不幸のただなかにありながら、神にまもられている。それゆえに彼らは、つねに勇氣と沈着とを示して、ひとびとのささえとなるべきである。

いまに、じきこのことがまただいじになるであらう。⁽¹⁾ (Ⅱ・6・28)

(1) 今次「第一次」世界大戦で負けた民族のために、まるで今日書かれたかようである。しかし、平和はわがスミスにおいても、「にわかにおこる恐慌」〔箴言三・二五〕をもたらし、困難な試験^{しけん}のときとなるであらう。

*

ドイツの英雄伝説のなかでヴァルターとヒルデグントの歌が、わたしはいつもいちばん好きだった。このふたりの英雄の子たちが、遠くハンガリアからいまのフランスまでもに、はるかな逃亡の旅をめぐるとなしとげたさまは、これこそ貞潔なドイツ的^{ミッテ}愛と婚約時代の象徴である。なんのこともかざらず、どんな感傷もないが、ドイツ文学の、またおそらく全世界文学のどんなほかの詩にも見あたらないような心情の自然な誠実と純粹とをたたえている。(Ⅱ・7・29)

*

真理を、あるがままに正確に、誇張もなく語れ。それができぬときは、黙せ。イザヤ六・六八。出エジプト二〇・一六、二三・一。エペソ四・二五。(Ⅱ・9・15)

*

われわれはまちがいない正しさをまなばなくてはならない。この地上でできなければ、べつな生にいったとき、あらたにやりなおさなくてはならないであろう。それならここで、まなぶがよい。詩篇四九・二一
一六。(Ⅱ・9・19)

*

およそこの世の悪人と悪とにたいしては、真理と愛をよくまぜあわせて、むかうのでなければ勝つことができない。悪人とおなじ武器で勝とうとしても、勝算はない。ギリシア神話の巨人アンタイオスの話にあ

るように、自分の地盤では、悪人はひどく強い。ところが、他人の地盤となると、たちまちべつな靈を感じ、それにたいする自分の弱さを自覚する。——この場合にもわたしたちの主が、悪評高い取税人、罪ある女たち、当時の賢人、高僧や学者たち、貪欲であつかましい群衆、王や総督たち、主をこばみながら、なおすくわれるベテロ、それに「すてられる」ユダなど、さまざまな種類のひとびとにたいしてとった態度は、いかにもキリストらしいものである。現代においても、これほどに多くの困難な状況にでくわして、しかもこれほどに家族、教会、国家あるいは友人にすがらないということは、だれも容易にできるわけではないであらう。(Ⅱ・9・18)

*

人間と世界との実相を知れば知るほど、キリストの偉大な人間知におどろくとともに、キリストの人間知のかわりに他の世界観をおきかえようとする人間のおろかさにもおどろきいらざるをえない。

これは、人間知がまるで欠けていることにその原因がある。つとめてこのことを理解し、もはや「理想主義」などを語らないようにするとよい。その反対に、事物をその外観によらず、あるがままにみるというのが、真の理想主義である。(Ⅱ・10・8)

八 キリスト教について

キリスト教会の歴史を精密にまた公平に観察するとき、教会の教団はいまだかつて一度もその創設者（キリスト）の考えに完全に適合したまったく正しい形成を見たことがなく、真のキリスト教は今日にいたるまで、おそらくただ個々の、しかもおおかたはひとに知られずに終わつたひとびとにおいてそのじゅうぶんの効果を達成した、と信ぜんとする強い誘惑にしばしばとらえられる。

さてわれわれがキリストのキリスト教をさらに大きく実現しようとする新しい意図を果たすであらう時代を迎えようとしていることだけは確かである。このようなキリストのキリスト教にたいしては、今日のあらゆる教会制度と、さらにはあらゆる社会的国家的事情とは、かなり強い隔たりをもっている。

現在のキリスト教諸教会については（いずれも例外なく）、それらの現実、その綱領や要求にくらべると、価値が劣るけれども、その評判よりはましである、ということが出来る。すべての教会について現今もなおあてはまるのは預言者イザヤの六五・八のことばである。これらの教会はやはり他のものをもって

おぎなわれうべきものではない。いずれの国家においても、教会がなくなった場合には、なにものによっても満たされえない巨大な空虚がそこに残されるであろう。

教会と国家との紛争はすべて、とどのつまりは教会が現実はおのれの理念どおりのものでないのに、この理念にはなるほどまったくふさわしいが、実際の実現にはそぐわない要求を提出するところから起こるのである。理想的な教会があるとすれば、それはおのれとまったくおなじ精神の担当者をもったいかなる国家をも、教会の精神をもってやがて満たし、かくして互いに融合するであろう。(I・3・8)

*

神的な霊の存在については、たとえ他になんら実証的な証拠はなくとも、次のことはやはり証拠となるであろう。すなわち、われわれ自身の精神と意志とのあらゆる努力をもってしても、もし神が結合を拒みなさるならばわれわれは神との結合をいたすことはできず、また「祈禱^{アンダヘト}礼拝」によってわたしたちの憂いと悲しみを立ち越えて自分を高揚させることもできないということである。いっぽうまた、この霊はしばしばまったく思いもよらず、臨みきたって、わたしたちの全存在をその霊の生氣と歓喜とをもって満たし、わたしたちのすべての重荷を一瞬にしてたまたみから取り去りうるといふこともその証拠となるのである。さてこのような、人間からまったく独立して自立的に作用する力なるものは、存在しえないものであるうか、それともなんら実在性があるはずがないであろうか、いったいしかしなにが力より現実的なものであるか。人間のたんなる思想は、けっしてこのような力ではない。このことは、みずからなぐさめようと試みてしばしば徒勞に終わったひとのだれでも知っているところである。それならいったいこの力というものはなんであるのか。たんなる「心理学」はここでまったくわれわれをみすてる。心理学は総じて、それ自体なんらの力をもたず、不幸に際してかつてだれをもなぐさめ励ましたことのない一つの学問

体系にすぎない。(I・7・5)

*

原、理、的、に、生、の、享、楽、を、放、棄、す、る、こ、と、は、最、初、は、至、難、な、こ、と、で、あ、る、。鈍、感、に、墮、す、る、こ、と、な、く、し、て、こ、の、こ、と、に、た、え、よ、う、と、す、る、な、ら、こ、の、か、わ、り、に、神、の、愛、を、う、つ、ろ、に、な、つ、た、心、の、な、か、に、い、れ、福、音、書、が、「聖、な、る、」と、い、つ、て、い、る、靈、に、つ、い、て、み、ず、か、ら、親、し、く、経、験、す、る、こ、と、が、ぜ、ひ、必、要、で、あ、る、。そ、う、で、な、い、場、合、に、は、と、か、く、激、し、い、逆、転、が、起、こ、る、。

マタイ一二・四三―四五。(I・7・25)

*

人、生、の、最、難、の、瞬、間、は、人、間、が、そ、の、自、己、愛、か、ら、根、本、的、に、離、別、し、し、た、が、つ、て、神、秘、主、義、者、が、「滅、却、」と、呼、ん、で、い、る、と、こ、ろ、の、本、格、的、な、死、の、や、み、に、は、い、つ、て、ゆ、か、ね、ば、な、ら、め、と、き、で、あ、る、。そ、の、あ、と、に、続、い、て、く、る、あ、る、こ、と、の、約、束、の、明、確、な、つ、ね、に、き、ら、め、く、微、光、が、な、け、れ、ば、だ、れ、も、こ、の、死、に、耐、え、な、い、で、あ、ろ、う、。ま、た、だ、れ、も、お、よ、そ、戦、慄、な、く、し、て、こ、の、死、に、直、面、す、る、こ、と、は、な、い、で、あ、ろ、う、。わ、た、し、た、ち、に、と、つ、て、幸、い、な、こ、と、は、わ、た、し、た、ち、は、お、お、か、た、や、む、を、え、な、い、事、情、に、よ、つ、て、た、だ、も、う、せ、ざ、る、を、え、な、い、と、い、う、立、場、に、お、か、れ、る、の、で、あ、る、。で、な、け、れ、ば、実、践、へ、の、力、が、欠、け、る、で、あ、ろ、う、。と、こ、ろ、で、こ、の、力、は、た、だ、自、分、を、ゆ、だ、ね、て、し、ま、う、こ、と、で、あ、り、さ、え、す、れ、ば、よ、い、の、で、選、択、と、い、う、よ、う、な、も、の、で、は、な、い、。

し、か、し、こ、の、事、態、を、み、ず、か、ら、体、験、し、た、こ、の、な、い、者、は、こ、れ、を、実、行、し、よ、う、と、す、る、あ、ら、ゆ、る、ひ、と、に、向、か、つ、て、言、う、。「パ、ウ、ロ、よ、お、ま、え、は、氣、が、狂、つ、て、い、る、」と、。

ぎょうでん
行伝二六・二四。(I・8・14)

いずこにおいても愛をこめて真理のために責任をになうこと、これが本来、わたしたち日常の実践的な生活の課題である。

*

近代の一著述家（にしてついには彼自身が非常にひとの助けを要するにいたった者）が、ひとは倒れんとするものをさらに突き倒し、ただ強きもののみが、最強なるもののみがこの世界に残存するにいたるようになければならないと言っている。これは、もし一般に応用されたら民族移動時代の道徳となろう。キリスト教道徳はこれに反して、倒れんとするものをささえ、倒れたものをふたたび助け起こすことを命ずるのである。

この世のもっとも強いものがつねに最後、競争場に残ることは、なるほどまちがいない。がしかし、それはひとの力を過大評価しているわけではなく、神の世界秩序に信頼している弱者を擁護する神の世界秩序のことである。これは今日もおお変わりなく、信頼すべきものとしてみずからをあかしするであろう。

マタイ二二・四四。ダニエル四・三二・三五。詩篇三三・九一八。第二コリント一一・二〇。第一コリント一・二二・二九。（Ⅰ・九・24）

*

ヨハネ四・二四、六・六五、九・三九、一四・六。この地上の人生において、神がなんであるか、また同様にキリストがなんであるか、また聖霊がなんであるかをわたしたちは知ることができない。このことに関して問答示教書や教義的教科書にのっているすべてのこと、それからまた多くのひとたちが教会の教師たち

の意見をただしてみても、正直のところその教師連中はご自分が毛ひとすじの幅ほどもよいにはそれらの生命についてごぞんじないので、聞いたほうではけっきょくいつも合点^{がてん}がいかなかったまさにそのため、それらの生命のことをそのままにしておくよりしかたがなかったということ、それらは多少とも正しく構成された人間の概念の産物であった。わたしたちが、神の確実な存在について、キリストへの信仰の力について、またわたしたちの霊がもっている光明性とは異なった、別な霊がもっている光明性について、わたしたち自身の経験をもっていないならば、だれでも人間のこのような口授にたいして、死せる教会的信仰のほかの信仰をもつわけにゆかないであらう。それはどうも事実いままでも多くのひとびとの信仰であったし、今もなおそうなのであるように。

わたしたちがこのようなことをもって満足すまいとするならば、キリストのことばから出発して、キリストがこれらの超自然的なことがらについて考えたような、また考えられることを欲したような見解に到達せんと追求しなければならぬ。そしてキリストのことばにしがみつかねばならぬ。しかしながら、多くのひとびとのなぐさめにもなろうから、ともかく付言することができるのは、「信仰告白」における教会的定型といえども、真理があのような定型でともかくも表現されうるといふかぎりにおいては真理に近づいているわけであるから、だれでもあれでまったく誤った道をとるということはない。が、あの形からどんなはずれ方をしても容易に危険なみちにおちいるから、ほぼ一般の承認に達するようなことはもはやけっしてのぞめないものである。

聖霊は、他の点ではまったく善良なキリスト者にとってなおしばしばいくぶんよそよそしいものであり、ほとんどあやしげにすら思われるものであって、彼らはこれにたいして一種のおおげすらいだくのであるが、この霊は生ける目ざめた真理の霊であって、事物や人間の真相や実存をみているのである。あら

ゆる人間的關係にまつわっているなまはんな虚偽、あるいは全然の虚偽からのがれ出るためには、わたしたちはぜひともこの靈をもたねばならない。

ところでこの靈をもつひとにおいて、この靈が結ぶ実がいかなるものであるかは、あなたみずからパウロのガラテヤ五・二三を読んで参考にしそれによって聖靈がおのれのなかにまた他のひとのうちにすでにあるかを容易に判断することができる。きみにおいて聖靈がまだまったく正しい位置を占めておらず、あるいはそのあり方が薄弱であるとしても、それでもなおあなたはたしかに「神の子」であり、じゅうぶん確実なよき道にありうるのである。そのことはおなじくパウロが、まったく欠陥だらけのおなじガラテヤびとたちに、おなじ書簡の三・二六で述べている。そしてそれはわたしたちすべてにとって心弱れるときの大きいなるなぐさめである。

不幸なひとたちのなかには、はたして自分らが「救われて」、いるかどうかについて、多くの無益な思考をめぐらす者がかなりあるけれども、これはあまりに大きな自信と同様に有害である。そして彼らはなおときおり、無理解なしにも熱心すぎる懺悔説教師によってか、あるいは聖書や問答示教書の個々の章節を誤解することによって、救済いかなんの苦慮を強化されるのである。

このことに関して聖書のなかのもっとも確実なものは、すでにたびたび述べたように、ヨハネ六・二七およびマタイ一・二三に含まれている。ここでは誠実に求道する者にたいして、いかなる例外も見いだされないものである。ところで自然の感情にとってもっとも確実な兆候は、キリストのことばを（だれか他の者のことばではなく、どの使徒あるいは預言者のことばといえども無条件ではなく）完全に理解し、完全に同意し、これにたいしてなんらの矛盾をもはや全然おのれのうちに感ずることがなくなつたときの兆候である。ひとはキリストを彼のすべての言行において、どの他の歴史的現象よりも良く、すべての弟子や後代の教父たちよりも良く、古代のすべての古典的なひとびとや偉人たち、あるいは中世の神秘家たちよりも

良く、宗教改革者たち、あるいは近代の哲学者や神学者たちを理解するよりもより良く理解するにいたることすら可能である。これのみが真に完全なるキリスト教である。(I・10・22)

*

キリスト自身からわれわれが聞き知ることばはすべてきわめて大なる「^{レリティー}真実性」(「現実性」)をもつ。これらのことばはいつもことばどおりに受けとられるべきである。このことはマルコ一六・一七、^(一)一八についてさえも妥当する。このことが全然、当てはまらない場合は、キリスト教は、それがありうるごとく、またあるべきごとくに、いまだじゅうぶんになっていないのである。(I・11・25)

(1) 「訳者注」 「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。」

*

ときおり思われられることは、キリスト自身が理解したようなキリストのキリスト教を真剣に解し、純粋に、善良な人間をあらわす真正な一範例たらんと欲するひとが、とにかくあったら、と。これは今日もまた、否、実際むかしよりよくまた容易にそうなりうると思われる。

しかし、そうなるにはなんら非凡の天賦も教養も必要ではない。いわんやなんらか特定の外的地位などはいらない。真実のよき意志と真理を求める誠実な不断の探求とをもつてすれば、まさにどんなひとでも、しかり樵夫^{きこり}でも最良の牧師と同様に、それをなすことができ、かくしてその隣人たちにたいして彼らの行路の灯火たることができるのである。

これよりほんとうのことは実際なものもない。あなたがほんとうにそう思うなら、ところでおそらくそのときはあなたもまた、ダビデ王に彼の生涯のある決定的瞬間に起こったことが、いくぶんちがったぐあい、に起こるであろう。すなわちある声があなただの耳に告げて、「あなたがそのひとです」という。あなたはしかし、あなたが可能であると見、また同時にわたしたちの時代とわたしたちの国民に必要であるところのものをなせ。あなた自身に比較的価値がなしと思われ、また他の多くのひとびとによってじゅうぶん供給されるところの他のあらゆる目的を放棄せよ。

おそらくそれを知ることすらないある他のひとがそれをなし、しかもそれを認識しているあなたがそのことから免除されようとするのはなぜであるのか。——そうであってはならない。あなたのこの第一の義務をなせ、他のいっさいをさしおけ。しかも今日からこの義務を遂行せよ。

サムエル上二・七。(I・12・9)

*

その時代時代の学的神学と、キリストが欲したままの真のキリスト教との間につねに存在する差別を示す典型的な聖書の章は、ヨハネ三である。学者のニコデモはキリストを訪問してまず初めに口を開いて、たしかにまじめな意味で「好意を〔辞をひくうして〕求めること」(Captatio benevolentiae)、今日のいわゆる「敬意を表すること」をなした。かくして彼は、無学者に尊敬を表示したと思った。けれどもこれにつづいて一種の教訓を与えるつもりでいた。ところがキリストはこの教訓を簡単に次の返答を与えることによってさげすんだ。「わたしたちは、わたしたちが知ることを語る。それはわたしたちはそれを見かつ聞いたからである。けれどもあなたがたは、あなたが学びかつ研究したことを語る。」これが今日もお存続している差別である。ひとはキリスト教を「教える」ことはできない。ただ他人をこれにみちびきか

つ穩やかに案内して、しだいしだいに聞いたり見たりすることができるようになしうるだけである。そのかぎり、キリスト教は實際學問の性質をもたず、はるかに秘教 (Geheimlehre) の性質をもつものである。しかもそのあらゆる部分において各人の眼前に開示されているのである。ただ多くのひとびとが、それにもかかわらず、これを洞見^{とうけん}することも把握^{はく}することもできない。しかもそれは必ずしも無學なひとびとではなく、否むしろその反対である。それゆえにキリスト自身も、神の國を幼児のごとく、すなわち多くの研究などをまたず、不動の信仰をもって受け入れない者は、けっしてそこにはいれないと言っている。神學はなければならぬ。神學がないと大いに困るであらう。しかし、神學は、キリスト教そのものであることからははるかに遠い。(I・12・23)

*

われわれの教育者や宣教師が手はじめるように、人間をまづある信仰にみちびこうとするのは、たいていまったくむだなことで、だからこそ彼らはあのように成果をおさめないのである。まず愛というものを認識させねばならない。そうすれば愛するものへの信仰はまったくひとりでに人間の心にはいりこんでくる。キリストがヨハネ一四・二三で言っているのもこの意味である。信仰をぜんぜん理解しない最悪のひとの心にも、愛は依然として席を占めている。愛をもってすれば最悪のひとびとの心をもとらえて、彼らのなかに神とのつながりをつくりだすこともできる。そしてこのことこそなによりも肝要なことであって、われわれの内部からのみ生ずることは、力に欠け長つづきしないが、神の靈とむすばれるとき、その靈がわれわれの内部にはたらいひきおこすもの、それこそがよく、そのみが生きる力をもったものである。(II・1・16)

*

真のキリスト教には雄大莊嚴なものがある。しかしキリスト者や、とくにプロテスタント教会の牧師や宣教師のなかには、そのことをほんとうに知って理解していないものがたくさんいる。彼らはキリスト教を、キリスト自身とはおよそかけはなれたこまかな考えや外面的な規定とむすびつけて、たんなる教義としてあつかっているにすぎない。しかしキリストの兄弟たち、はじめこそぜんぜん彼のいうことを信じなかったが、のちにはそれだけにいっそう熱心になり、自覚的になった彼の兄弟たちはそうではなく、また彼の使徒たちや最初の信奉者たちもそうではなかった。ルターやメランヒトンやカルヴァンに見られるよりももっと心のひろいキリスト教というものが、いまこそようやくあらわれているのだ。教義の解釈をいかげんにするというわけではぜんぜんなく、教理よりもっとよいひとびとがいることをみとめ、そもそも教理というものは主要なことではなく、キリストにたいする生と愛こそたいせつであり、それがあれば自分ひとりであつてもまぎれもない真理に到達するということをみとめるのである。マタイ四・二三、マルコ九・二四。「教理を有しなくてもキリスト者であるひとは少なくない。キリスト教は証明さるべきものではなく、生活されるべき生である。」(H・ドラモンド)(Ⅱ・1・20)

*

正統信仰(オースドクス)が生目的、目標ではなく、この点は宗教改革時代もひと思いちがいをしてゐる。そうではなく善良になること、できるだけじつさいに神に近くなることを果たすことこそ目標である。しかし真のキリスト教はまぎれもなく、そこにいたるいちばん近い、最上の、それだけが真に神のぞみどおりの、歴史的に与えられた道である。

哲学的な精神のひとびと、それにわたしの生の経験からすれば、ユニテリアン教徒やいわゆる「改革派」のひとびとも、神の恩寵に不可能はないというものの、この目標に達することはるかにむずかしい。われわれの思想体系などは神にとってなんら障害ではなく、神の霊のいぶきにふればひとたまりもなぐやぶれ去る蜘蛛のあみにすぎない。(Ⅱ・2・11)

*

あなたはこの神のみちびきを有するとき、哲学体系の歴史的知識をえようとする目的以外に、なぜ哲学体系を研究するのか。それによってせいぜいふたたび道をふみまよい、うたがいにおちいるだけだ。生にとつてたいせつなことは、あなたが「真理の霊」をもつことであり、この霊はあやまちにおちいることをいっさいふせいでくれ、時代風潮にまどわされることや、世論からまもってくれるであろう。

ヨハネ一三・二七、二〇・三三、一八・三七、一七・二七。(Ⅱ・2・18)

*

キリスト信仰のいっさいはさしあたりキリスト自身の三つのことば、ヨハネ一七・三、一四・二一・二三、および一五・七であらわされるであろう。そのほかはすべて神学であつて、たましいの進展には不必要なものながら、多くの論争をまきおこしたし、今後もおまきおこすであろう。(Ⅱ・2・24)

*

キリストがニコデモとの対話(ヨハネ三・八)に言っているように、霊は自分のすぎなとき、すぎなところ、に吹いていく。あなたは霊を呼ぶことはできない。霊があなたをよぶのであり、このよびごえには、

どんなよびこえであろうと、すべてをすておいて、ただちにしたがう心がまえをつねにしなければならぬ。なぜなら霊は、夜のしずまりかえったときにかぎらず、まさに非常に、いそがしい瞬間にやってくることもよくあるからだ。そのときはつぎのように言うべきときである、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」(サムエル上三・九)と、そしてそのたびに真と善において大きな進歩をなすべきときである。いっぽう、自分でおこなう「礼拝」はたいていパアルの預言者たちの場合にひとしい(列王上一八・二六、二七)、たとえそれによってどれほどさわがしいことになり、どれほど多くの教会、聖堂および寺院がそのためにたてられようとも。(Ⅱ・三・12)

*

原始キリスト教時代(全体としてみれば今日よりよい時代ではなかった)にあった諸能力がいまでもまだありうるといふことは否定できない。もしそれが無いのなら、それはいずれにしてもわれわれのせいである。ところでいわゆる第六感とか「透視術」というものはありうることなので、それはふつうは見えない、聞こえないものが、こういうひとびとはときおり知覚されるということである。しかしこういったことがしばしば起こるなら、それは神経の病である。まただれかがしきりにそのことをふれてまわるようだったら、おそらくなにかの不正がつきまとっている。いずれにしてもこれは非常に注意ぶかく判断さるべきことで、けっして人間の自由意志をいつまでも圧倒するような力になつてはいけぬ。

タボル山上の弟子たちの見た物語はこのように解釈さるべきであるが、キリストの復活はそうしてはいけぬ。これらのことにあなたはあまり深いりしないがよい。

人間に体験のできる最善かつ最高のことは、透視ではなく神の近くに在るという感情であり、これは透視などとは完全に無関係である。

「しかしこのような超感覺性にぞくする物事にどの程度たずさわっていいか、それともむしろこれをすっかり避けたほうがいいのか、これをどのようにして見きわめたらよいのであろう。」

これは常識だけではきめられないことである。なぜなら拒否すべきでなく、しかも聖書にさえ書いてある多くのことを、常識によつてついに拒否するにいたるのだから。わたし自身の経験によると本能的感覺能力があつて、これはたしかに嫌惡けんおという形をとり（たとえば多すぎたり健康にわるい食べ物にたいするのとまったくおなじように）、そしてこういった領域の考え方にこれ以上立ちいらないうちに警告することもある。しかしこのかすかな警告に注意ぶかく耳をかたむけなくてはならない。それは、わたしたちが精神的に健康にも慣れ、そしてそれがほしくてたまらなくなるからだ。きわめて近い将来に多くのひとがそういう目にあうだろう。（Ⅱ・４・13）

*

キリストの受難史はその復活を信じなければ、耐えられないものである。少なくともわたしはそのためにベシズムと人間ざらいになるところであらう。それにもかかわらず何百万というキリスト教徒たちは一種の冷淡な態度をむけて平然としている。（Ⅱ・４・15）

*

詩篇八九・三九からおわりまでは（邦訳聖書では三八節から）、神のしもべがみな生涯に一度か、あるいは数度なめなければならぬ経験であり、またこの経験は、「預言者は、自分の郷里で敬うやまつわれぬ」（マタイ一三・五七）と救い主の語ったことばとも一致する。

ことばにはいわれていないが、「世に敬うやまつわれているものは預言者ではない」という結論がとくにこの経

驗のおそるべき点である。どんなにか多くの新聞の賞賛や、あらゆる種類の榮譽などが、この一語ですつとんでしまうことであらう。おそろくまた、わずかなライフワークや功績などにも、色あせるものが多いであらう。

けれども、いつでも聖書のことばから、なんでもかでも論理的に可能な結論をひきだそうとしてはならない。そもそまなにごとにつけても、とくに人物評価の問題に関しては、真理の靈にまかせるのがいちばんよいことだ。われわれは人物評価となると、じつに手がるくやつては、あとになってまたあらためなければならぬ。まことに真理の靈だけが、すべてのひとについての真実を正確に知っているのだ。ヨハネ一四・一七。

万事につけていろいろに、しかも利^{せつ}那的な判断をくだし、しかも、いつでも熱狂^{せう}するかと思うと、急にほうり出したり、それどころか前にいたく尊敬していたものからそむいてしま⁽¹⁾う。これが、現代の学校がいまづくりだしている利己的で信頼できない世代の典型的な特徴である。

彼らの世代をあまり信用してはいけない。ことに、衆をたのんで、「青年」、「新学派」、「進歩」、「未来」などと自称してあらわれ、すべてふるいものをあざけるとときには、とくに信用してはならない。彼らは、それ以外に、たいいてい能がないのである。(Ⅱ・4・23)

(1) これはあるフランス人の伝記から引用すると、つぎのようにみごとにいっている。「焼きすてたものをとるとべ。とうとんでいたものを焼きすてよ」と。

*

どうしたらあなたは、聖霊と原始キリスト教のもつ能力のたまものを「うる」ことが（というよりもっと正しくは「もとめる」ことが）できるだろうか？ それはだれもあなたにわけ与えることができない

い。それはまさしく「たまもの」なのだ。もしそれを誇り、世人の耳目をおどろかし、新しい改宗の時代をまねいたりし、あるいはただ「小さなサークル」のなかだけでも賛美と感嘆をうけようとするなら、あなたはそれをうることも身にそなえることもきつとできない。もつとも確実に聖霊のたまものが与えられるのは、あなたが、あらゆる世俗のことから脱却した住居を用意するときである。しかし、よく注意していただきたいが、幾千とない善良、誠実なキリスト教徒が、そのたまものを、おそろくはその存在や可能性をまるで思いもしなかったのだ。まして聖霊のたまものをもってでもいるかのような顔をした、沈黙と控え目をまもらず、そればかりかそれで金もうけをしようとするものにいたっては、悲惨な最後をとげねばならない。(Ⅱ・4・24)

*

わたしの知るかぎりのキリスト教の教えのなかで(使徒、教父、中世の神探求者、宗教改革者、それ以来の説教者あるいは哲学的著作家たち)、わたしはキリスト自身をかくべついちばんよく理解した。そして、またこれのみがまことの、これのみが信頼するに足るキリスト教であり、教会などはすべて無視して、このキリスト教をまもるのをもつともよいことだと信じている。

わたしは自分の一生をかえりみて、ひたすらこの点にのみ重きをおく。(Ⅱ・5・25)

*

この真のキリスト教がまことにおどろくほど単純で、ほとんど子どもにもできるやさしいことのように思われる幸福な時間、日、一定の時期があるものだ。

これはまたたいそのおりである。まるで子どものように信じきって神のみちびきにしたい、こ

い願うものを与えられるということは、けっしてむずかしくはない。しかしまた、そんなことには心をむけず、世間の反対や、世間のうわさが気にかかるべつな時期もある。キリスト教諸派の代弁者たち自身も、彼らの氣にいらぬというキリスト教はみとめようとしない。そのうえ、こういう反対はしだいによわまるというのではなく、世俗的意味での偉大なものにたいする反対が、その偉大なものが成果をおさめればやんでしまうのとはわけがちがう。彼らの反対は死によつてさえなくなりはない。それは予想してよいことだ。攻撃をうけるひとの側でも、それぞれの心ぐらいときに、自分は人生でちがう道をあゆんだなら、もつととうるところがあつたらうとか、自分は生の「実相」とたんなる生の幻想をとりちがえてしまったのだとか、そんなふうにさえ思われることもある。このような瞬間をキリストでさえ、すべてののひとに見すてられ、ふたりの殺人死刑囚にはさまつて十字架にかけられ、死の時をむかえたとき、あじわうのである。けれども彼は最後の困難きわまる誘惑にうちかち、それによつて神への信頼が立証されたのだ。この事実（マタイ二七・四六）が、われわれにつたえられなかつたなら、キリストはかならずしもわれわれ同様の人間ではなく、人間最大の苦難を経験しなかつたと言えるだらう。五〇節は、ルカのあとのはうに語られている静かで崇高な「すべてがおわつた」とは、矛盾さえする。しかし、確実なのは復活である。この復活ということが局面を救っている。さもないればこの局面はひとの意気をうしなわせる重苦しい一幕の悲劇であらう。（Ⅱ・五・26）

*

マタイ二四・一二、三三、三五、二五・三、二六・四一。

これは、現代の特徴である。そのことを覚悟して、それに応じて身を処さなくてははいけない。それはよい時代ではあるまい。公けの教会、キリスト教界にとつてもそうなのだ。キリスト教はもはや、異端をと

なえるひとにたいする国家の保護がなく、それによって多くのひとがそむき去るのを見ることになる。しかしなおそのなかでキリストに似ているものは、あらしに耐えぬくことができ、ついには、もどきくる主から、よいしもべというあかしをうけるであろう。(Ⅱ・6・13)

(1)〔訳者注〕「また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。……天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」

*

ヨハネ八・一二三、一四・七。生命の光をえよ、真理を知れ——これこそ、国や教会のすべての改革者たちのもとめることだ。「啓蒙」が彼らの本来の人生目標なのである。ここにひとりのひとがいて、どうしたらそこまで到達するか、そしてあるまったく決定的なことがそれに欠けたら、到達できないということとを、説いている。このひとこそ、この世界のかつて見たうちでもっともあかるい啓蒙をうけ、もつとも多く啓蒙をしてくれるひとである。真理をのべつたえることをもってその職の一部としているひとにおいては、この「真理の霊」こそ主要点であり、どんなにすばらしいそれ以外の弁舌の才も、この主要点がないければ、なにひとつ永続的な跡も影響ものこさない。(Ⅱ・7・5)

*

キリスト教文書がときにみせる偏狭さというものを、おそれてはいけない。これは、読むすべを知らないうちに、ただ書こうとしてしばしばあまりにあせりすぎる著者にもっぱら責任がある。真理の霊は——あなたはやがておわかりになろうが——世俗的なことがらにもたいへん役にたつもので、まず、世俗のなかにもひそむほかならぬ真実のものの、益あるものを示し、通常それにつきまといがちの悪からへだててくれ、

さらになお、あらゆる仮面をつらぬいて、人間の真の顔を見ぬく。真実の相というものは、ほとんどわからないほどひそかな目の表情にこもるだけでも、この霊を有するひとには露見せざるをえない。(Ⅱ・7・12)

*

第一テモテ一・一六。キリストはおそらくあなたの生涯においても、彼のなしうるいっさいを示そうとしている。だからあなたは、つねに多くのさまざまな苦難をうけなければならぬが、それで不幸な気持ちになつてはならず、あるいはふきげんになるだけでもいけない。ドラモンドはこれについても、じつにうまいことをいつている、「試練しれんの与える大きな祝福の本質は、われわれの視野がひろがって、生きるということが、どのような永続的・永遠的な財貨のために価値のあることか、それを識別させてくれる点にある」。エペソ三。(Ⅱ・8・13)

*

マタイ一・一七。「神学」なるものは、この積極的なことばをいつでも無視しなければならぬだろう。けれどもわれわれは、この道からはずれず、あらゆる「キリスト論」やすべての「イエス伝」をすべて、われわれの神認識を、キリストを通して、じかにもとめようではないか。マタイ七・二三、二四・三五。ヨハネ三・三六、五・二四―二五、六・三五、一〇・一。(Ⅱ・9・25)

(1) 「訳者注」「すべての事は父からわたしに任せられています。そして、子を知る者は父のほかになく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません。」

*

静かに真理を語れ。少なくともはげしさやあらそいがあまりなければ、それでじゅうぶんである。しかしそれにはどうしても、真理の霊をもたなければならない。真理の霊は元来人間のうちにやどるものでもなければ、まして、教会やその他の宗教団体のなかにひそむものでもなく、神がひとりひとりの人間に与える個人的なたまものなのである。

ヨハネ一四・二七、一六・二三、一五・二六。

これらの聖句にいわれていることこそ、そもそもすべての重要な教会法とすべての個人の自由についての、基本的な考えであって、とくに真のカルヴィニズムの偉大な業績でもあり、あらゆる真にすぐれたひとびとの有する影響力の根本でもある。(Ⅱ・10・4)

*

ヨハネ二〇・二三⁽¹⁾。これは最大のたまものであり、全権委任であるが、教会とか聖職とかに与えられたのではなく、キリストの真の使徒ひとりひとりに与えられたものである。それにしてもキリストのしもべたるものは、このたまものを用い、おそれることなく、ひとびとのあらゆる長所に目がくらんではならない。ヨハネ二〇・二九、一七・二五。イザヤ五四・一七、四三・一八。(Ⅱ・10・30)

(1)〔訳者注〕「イエスはまた彼らにいわれた、へ安かれ。父がわたしをおつかわしたように、わたしもまたあなたがたをつかわす。そう言つて、彼らに息を吹きかけて仰せになった、へ聖霊を受けよ。あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであらう。」

*

詩篇二三、二五、三二、イザヤ四九および五四。神に仕える生ほど「おもしろい」生はない。その内的

運動の振幅は上下にきわめて大きく、地獄の奈落から、よろこびあふれる天上の谷をめぐり、しかも、その途上におけるどんな危険からもみごとにのがれることができる。

この生は「やすらかなしとね」ではない。しかし、地上の存在からまずなによりも「霊と生命」をもとめるとともに、ふしぎな異常なことを体験しようと願うひとびとにとっては、ほかのどんな生もこれとはくらべものにならない。しかも、これはどんなひとにも、またどんなところにおいても、手にいれうる生なのだ。自分の諸力をもっとくだらぬことについてやすひとは、さんねんなことだ。ユング・シュティングの『郷愁』は、すこしロマンチックではあるが、このことをみごとにえがいている。歴代下二〇・二〇。

(Ⅱ・10・31)

*

ときには人間が、宗教、教会あるいは哲学などについてもはやなんにも聞きたくなく、きわめて正直に、「主よ、あなたのみこころを、わたしはよろこんで、はたします。あなたのおきてはわが胸のうちにしるされています」と言えることばかりをあこがれることが、まああるものだ。

ゴードンのようなキリスト者が、確固たる信仰をもったモハメット教徒をとうとぶべきものであり、少なくともたいていのイギリス人とおなじくらいりっぱだと思つたことは、わたしにはじゅうぶん理解できる。

しかし、神自身の欲する神への道はキリストを通して行く道であり、それを回避することはゆるされていないということ、これはやはり真理であつて、ゴードンのような氣持のときでも、いつもあざやかに眼前にうかべていなければならない。(Ⅱ・11・22)

*

あなたは、たとえてみれば、ちょうどおなじ学年を二度やりなおさなくてはならないときのように、この地上の生をもう一度生きなければならぬとしたら、あなたはどのような条件で生きたいと願うだろうか。

おそらく外的には同様な、あるいは似たような環境をのぞむであろうか。もしそれなら、それだけでも、すぎ去った生を神にたいしてあつく感謝すべきじゅうぶんな理由になる。それにまた、おそらく、おなじ妻子をのぞみ、ほかのだれともかえようとは思わないであろう。たとえばわたしだったらそう言うであろう。外的なことがらについていっそう感謝すべき理由は、これによってじゅうぶん倍加する。

さてしかし、ここで、重要な内的なことがらが生ずる。内面に、あなたはなにをのぞむのか。善をなすためのもっと多くの霊と力とであろうか。けっこうなことだ。だが、もとより上よりの霊と力、すなわち真理の霊と神の力であって、あなた自身の力ではない。しかし、そういう霊と力なら、あなたはすでにこの地上の生において持てたはずである。それとも、神の恩寵おんちようにたいするもっと多くの信頼と、すべてのことにたいするもっと多くの助力であろうか。これについても、霊と力のこととはぼおなじことが言える。

最後にのぞむのは、もっと多くの愛である。いまはこれだけである。そしてこれこそが、肉体のことはべつにして、目下の生にたいする未来の生の大きながいをもなすものでであろう。そしてこのもっと多くの愛という気持ちがあったなら、あなたは地上にいるときのほとんどすべての苦悩と困難とをまぬがれることができる。

最後の上昇

最高の頂いただきに、さあいまましくのぼりゆけ、
最後のあらしがまだとどろいていようとも。

まっしぐらに上へ、いまわたしの道は永遠にすすむ。
天のはしが上のほうまでわたしに見える。

胸にあふれるは、名状しがたい思い、
ようやくあけそめた朝のいぶき、

しかし、恩寵の変化にとんだたわむれが、
まだ心と精神をなかばゆめみごちにとらえている。

高い栄光よ、ついにあなたはちかづいて来た。

いくとせかまえ、あなたはなんとちがつてみえたらう！

だがしかし——わたしはもういちど用意をじゅうぶんにしておこう、
この長い不安な巡礼の旅に出るために。

わたしは現実の危険を見なかった。

恐怖のかけもわたしにふれただけだった。

おお、ここまであきらかにわたしとともにあゆまれた主よ、
あなたの大きいなるわざをついに完成してくれるのでしょうか。

「愛はすべてにうち勝つ。」

„Amor omnia vincit.“ (Ⅱ・12・31)

九 仕事について

神とまじわらんためには、なんら特別な時間も時期も、情勢も姿勢も、まったくいらぬ。それとは反対に、ことばまたはたんなる思念のもっとも簡単なものがありさえすれば、それでまったくじゅうぶんである。それだから、多くの外面的施設のごときは、しばしばかえってさまたげになる。最善のことは、わたしたちの主と思想の連絡を不断におこなうことである。これを名づけて使徒パウロは「不断の祈り」と言った。ところがいわゆる「祈禱家」たちは、往々にしてこれをまったく知らない。第一テサロニケ五・一七。

ひとは単純に、正直に、なんらの形式なしに、祈らねばならないのみならず——ところでこのことは今日わたしたちの宗教教育においてすでにきわめてまれな技術となつてしまつてゐるのだが——、なおまた応答を聞くことができないければならない。これには、日常の喧噪と自我愛とにまつたくさまたげられない微妙な内的な耳が必要である。

これに反して多くのいわゆる「祈禱家」は、ただ彼らの祈りのきまり文句を暗唱して、それがすむと立ち去ってしまう。まるでスーブのなかに匙^{さき}をもぐらせて、あたかもなんら實際のことがらが起こらなかったかのごとくであり、まして応答のときはおよそ期待されていないかのごとくである。(I・1・21)

*

正道にあることのみが、本来的に問題で、その他のすべてはおのずから生じてくる、とある著述家が言っているのは正当である。

またこう言うこともできる。すなわち、福音書が聖霊と名づける霊を自分の生活に獲得することのみが重要である。そうすれば、この霊がそれからさきのいっさいをなす、と。

しからばさらにまた進んでこう言うことができる。聖書のほか、いっさいの宗教書をしばらく閉じよ。しかもこの聖書においてすらも、キリストの言行のほか、いっさいを捨ておけ。その他のものは恵みに必要でない。ときには有用な援助か、刺激となることはあるが。

福音が働くひとびとにのみいかに全的に作用するものであるかは、注目に価することである。働くひとにとって、それは自分の道における不断の清涼剤である。ところが閑人は、聖職者もまたそうであるが、たえずおこなわれる会合とか、祭儀とか、さまざまな種類の外的教会行事などのよいけいなことが必要になってくる。しかしそのようなものは、働くひとにはさしあたりまったく不要である。

恵みの選び

あなたよ、みわざのためにわたしを

永遠より選んでくださった者よ、

その確認のため、力を与えてください。

わたしに実行力と心がまえあらしめてください。

あなたの求めを敢行することを教えてください。

あなたのみわさを全的に偉大になしてください。

ただ信仰にあつてのみにないえます、

こんなにも美しく重い運命は。(I・2・7)

*

大多数のひとびとはつねにみずから働くことを避け、その結果のつぐないを、蓄積された資本とか、いろいろ有利な結託とか、安楽な地位とかいうものにおいて、すなわち自己のためにする他人のほねおりにおいて、獲得しようと努める。ところが彼らはそうすることによって、みずから働くよりもよりよい状態にはおらず、かえつてはるかに隷属的（隷属的）になっている。こういうことわりをじゅうぶん早期に把握し、みずから進んで仕事を選び、かくしてこの世においての唯一の自由な人間になる者は少ないのである。

あらゆる不要なことをその生活からしりぞけようとかかるならば、——正しい成果をきたらせようとするなら、そのようにとりかからねばならないのだが——そのとき生ずる空虚というものは、ただ働くことをもつてのみ満たされうべきものである。このことは多くのひとが本能的に感ずるのである。ところが彼らは働くことにたいして感激をもちえないか、あるいは感激をもとうともしないので、この第一歩を踏み出すことをおそれ、むしろ世の一般の古い因習の道にとどまるのである。(I・2・8)

*

精力の許すかぎり中絶し、有益な仕事は、たえず神の身近くに生きることを別としては、人間生活が提供しうるすべてのもののなかでもっともよいものであり、またもっともひとを満足させるものである。ところでひとは、ひとたびこの根本法則をしかと自分の生活にとり入れたならば、過度な、不必要な、あるいはあまりに性急な神経質な仕事をあまりなく早期に避けることもできる。

ことに使徒パウロが時を利用すると呼んでいるところのもの（エペソ五・二六）、この個所を近年のいくつかの聖書の翻訳では、いっそう字義どおりにするために、時を「あがなう」というまづい語にしてしまっているが、これはすでに、きわめてしばしば宗教的なこととがらにおいて、急迫や焦燥の誘因を与えたものである。これはキリストによる人間生活の把握とは全然一致しないものである。キリストはすべてのことにむしろじっくりと時をかけてやり、それ自体よいわざをせかけてやるようなことをしなかった。

このおちつきのない活動の衝動は、むしろ特別にユダヤ教的な要素であって、パウロによってキリスト教に導入されたものである。それでも、この使徒の晩年のいくつかの書簡は、彼自身が神によって、彼の気質にはなかった平靜にまで到達したから、まことにひとをさわやかにしてくれるところがあり、また初期の書簡にくらべると霊的な内容と深さにおいておおいにまざっている。いまやわたしたちにとっては、あらゆる教会的な事実やあらゆるキリスト教的宣伝運動よりも、キリストの真の精神をもっとつかむことがはるかに必要であろう。（Ⅰ・三・七）

（Ⅰ）〔訳者注〕邦訳には「今の時を生かして用いなさい」となっている。

*

巨人クリストフォルス⁽¹⁾のごとく、断固としてただこの世の最大の主にのみ仕えねばならない。さてその最大の主とは今日、物質的進歩と享樂であるか、學問であるか、芸術であるか、あるいは祖国とその代表者(國民または統治者)であるか、あるいは人道であるか、教会であるか、それとも神とキリストであるか。これについてはみずから決定せよ。しかる後に、正しく、かつた、まじい、を尽くしてこれに仕えよ。(I・3・30)

(1)〔訳者注〕三世紀の伝説的巨人で、「キリストをになう者」の意。生まれたのはシリア、ある隠者にみちびかれて改心し、神の愛を体現しようとして、橋のない川の渡しもりとなった。ある日のこと、ひとりの幼児を背にして川をわたり始めたところが、川のまん中にさしかかるや、その小児の重さがかかるに増して、さしも強力な彼が一步も進めなくなった。その小児こそキリストのあらわれであった。その場で彼は洗礼を受けた。それは彼の平生の愛の労苦にたいするキリストのむくいであったと同時に、彼が殉教の死をとげる予告でもあったと思われる。彼は手に持っていたつえをその地中に植えるように告示された。翌朝そのつえは棕櫚^{しやろ}の木となっていた。彼はカトリック教会では、渡しもりや航海者の、また急の災害の守護聖者としておぼえられている。

*

なにか不利なことが、思いもよらずあなたに迫ってきたら、これにたいしてまず常識が常規となすところにしたがって、これを防ぐために直接なしうるところをなすがよい。しかし次には靈的に——もしこのことがあなたに平安を与えるならば肉体的にも、わたしたちの主の脚下に身を投ぜよ。そしてヨハネ一五七か一六・二四を唱えながら、まず正しい洞察^{しやうさつ}を祈り求め、しかるゆえにその際あなたの真の福祉にとっていずれが必要であるかに応じて、忍耐なり、救助なり、いずれかを祈り求めるがよい。

そうしたらおちついてふたたびあなたの日課にたちもどり無益な心配に長くかかずらわぬがよい。(I・

*

ひとがひとたび決意して、神意を完全に、しかも神意をのみおこなわんとするならば、まず第一に、たえず続けて働き、そしてこれがために人間のおよびうるかぎりの方途を忠実に活用しなければならない。しかもその際なんらの憂慮を要しない。なんとすれば、上からのほんとうの知恵は、これを用うる前に、たんに無為なる保存のために付与されるようなことはたえてないからである。また通常このような天来の知恵というものは、これが使用前は内的にはまったくそんな気持ちになつていないからこそ、かえって使つてみてよく理解しうるといふものであるからである。しかも、この知恵はこれを真剣に希求し、これをつかまえようと心がけておれば、しかるべき時機に、まちがいなく確かにやつてくる。ただいつも間断なく目ざめていなければならぬが、目前のたんなる享樂にありあらば眠りこんで休もうとしたり、またはとやかくとあせつたりしてはだめである。なんとすれば、神の道はつねにそこでは、元氣にいきいきと働かねばならないが、けつして過度に働いてはならない道であるからである。さてしかし次に、つかみうるあらゆる機会に注目して正義をおこなわんとし、不慮のことがらに驚いたり、おちつきを失つたりしてはならない。そしてなによりも語るに節度がなければならぬ。多弁は往々にしてまちがった事態にひとをまき込ませる。いっぽう、将来の仕事を覚え書や仮りの記録にあらかじめ書きとめて置くのは、まことによい。しかしながら、ほんとうの確定は、これが使用のまぎわにはじめて決着するのでなければならぬ。仕事はすべてただちに元氣よくつかみかからねばならない。長いつまびらかな「準備工作」などはいらない。まっしぐらに即刻、目的に向かって、決定的な思想に向かつて、突進せよ。このような思想はその際におかた、きわめてわずかしかない。そうすればほかの片手間仕事は、仕事を進めている間におのずか

ら加わってくるものである。(I・4・26)

*

実践的にいえば、人生の重大事は、つねに自己の義務を遂行し、これに反対するいかなる心の傾向にも異議にも多く心をもちまいとひとたび決定的に断固と決意することである。しかるのちさらに、このことを成しうるためには、神を信じ、神とたえず結びついておらねばならぬという確信が生じてきたならば、事は成り、心は確かとなったのであり、直道はそこに開かれてある。しかし、義務の遂行と神との結合のこの二事が現実とならぬかぎり、宗教と道徳につき、いかにおびただしい論議を云々したところで、それはほとんどまったくむなししい騒音にすぎない。(I・4・28)

*

祈り、思索とはけつして対立するものではない。それどころか、両者は共に真理の完全なる把握のために必要である。みずから探究するにも、また神の啓示にあずかるためにも。他方なくして、いっぽうのみでは、両者ある場合のように完全には作用しえない。

今日もなお神は彼の真の子たちにはだれにでも、その生涯の決定的な瞬間に、全イスラエルの子たちにレビ一八・二五において告知したことを告げたものである。(I・5・29)

*

最大の仕事も、それを分割し、いつもただいちばん手近かなものだけを眼中におけば、小さなものにな

*

キリスト教はいつまでもそれ自体完全に健全なものであって、たえずあるいは治療を求めたり、あるいは増長してこれに押し迫ってきたりする不健康な分子や病的な分子をすべて征服しうるものでなければならぬ。

このことがすなわち、なぜにキリストがあのようになびた彼の弟子どもから身を引き離して、ひとり寂しく山に登ってそこに新しい「祈りにおいて神と深くまじわることにより」強化を求めねばならなかった理由であつたのであらう。

してみれば、とくに精神的な不健康者の群れが、間断なく集まつてくる形式的な「祈禱治療院」は、それだけことわりに背反したものである。そんなことにはだれも害をこうむることなしには長きに耐ええない。(I・10・6)

*

祈ろうとするときは、自分にあるものにたいする感謝から始めねばならない。これは心を正しい気分にあつてみちびくものである。次には自分の意志を神に明け渡し、終わりにきょう一日の信仰と愛とを願い求めねばならない。かくしてはじめて目前ののつびきならぬことがら「についての祈り」が来なければならぬ。わたしたちがおのれの意志をゆだねたときにのみ、神がわたしたちの祈願にたいしてそのみこころを傾けてくださることをじゅうぶんの信頼をもって望むことをゆるされる。そうでなければ、ひとはやはり自分で自分を助けるほかない。

さてしかし、神におのれの意志をゆだね、この誤りないみちびきに堅く信頼して、一步一步将来のやみに踏み入り、将来をあえて予見しようと願わねならば、そのとき人生のおよそ可能なゆるぎない安らかな幸いが始まる。出エジプト二二・二〇—二三、二五、二七、三〇。(I・10・15)

*

仕事に際しては、いつもまず第一にも、つとも必須なことをせよ、しかも活発に、かつ主眼をとらえて着手せよ。これが多くのことに時間の余裕をえるみちである。第二の、これとほとんど同様によき方途は、不必要な仕事や努力を避けることである。

さて次には、生涯においてしかるべき時期に、娯楽とか社交の義務とかいわれているきわめて不必要なことをなげすめることができるならば、過度に努力しなくとも、そして健康をよく保ちながら、ふつうの仕事の量の二倍も三倍もになることができる。(I・11・28)

*

仕事に満ちた世界では、—— 歓楽に満ちた世界ではそう容易ではないが—— たしかによく、「わたしの心は、わたしを助けてくださる神にたいして平安である」と正直に言うことができる。しかし同様にたんなる平静と孤独とは、もし神における強い生活がこれと結びつかないならば、いまだけつして試みにたいする保護や完成への援助とはならない。

最良のことはこの地上においてはこの両者の状態の交替である。

それゆえに宗教的団体はなんらかの実践的な仕事を持たねばならないし、事業家は閑静な時間を必要とする。神は、このような時間が彼らに必要と見るときには、病氣を通してこれを贈ってくださる。

真正のキリスト教は、あらゆる宗教や哲学のなかで、静寂主義にたいしても、^{すいせい}醉世気質^{かたぎ}にたいしても、よく守る唯一のものである。このことを徹底的に知るひとは、キリスト教が天来のものであることを告白せざるをえない。地上にはこのようなものは生まれなかった。まったく形式的になってしまっていたユダヤ教からも、また当時の古典的文化からも。(I・12・27)

*

人生というものは、神の恩寵^{おんちゆう}によって、またそれにつつまれて堅固になつていかないかぎり、容易に大得意になるかと思うと、同時にすっかり無気力になりやすいもので、往々この両極端のいっぽうから他方へ一直線にうつるというのは、真実すぎるぐらい真実である。それゆえ、つねに祈りもとめて、おのれ自身の力にたよらぬことが、あらゆる地上の道のなかでもっとも確実な道である。また、人間存在のいっさいのなぞをとぎあかし、生そのものを、われわれに満足を与え、最後にはみごとに解決をとらなかつた課題とするような哲学などはけつして見いだされはしないだろう。人生はそんなものではけつしてなく、なにびとにとつてもそんなものではない。つねに人生の大部分はそれ自体暗く重苦しいものであり、この点なびとも思ひがちにしてはならない。その心のすきまに当然神への信仰がはいってくるので、この信仰によつてのみ心はやすらぎをえ、真の幸福感がうまれてくるのである。ヨハネ一五、一六・三二―三四および三三。

(II・1・13)

*

最初の使徒時代の天与の諸力はなおたしかに存在する。それは一時期さかんになった唯物論的時代思潮のために多少後退しただけのことにはすぎない。

この力を有するひとびとはしかし、それをきわめてよく知っており、他のひとびとも本能的に彼らにそういう力があることを感じ、思いあやまることがない。ただこういう力はぜひとも用いらねばならず、いたずらに存在するだけであってはならない。それによって諸君の希望するような教会の革新も生ずるので、教会会議やさまざまな会議、諸結社や小教会などによって生じはしないだろう。多数の人間のなかにこういう霊の力がなければ、なにことも無益なものだ。

あなたがこの活力を区別しようと思うならば、この力の最上のは、ききとどけられる祈りである。なぜならそれは他の力、病者をいやし、罪をゆるし、未来を予見する力をふくむからであり、これらの力も祈りによって神からのみさずけられるもので、自分自身のただ一度かぎりの力によってえられるものではない。この意見に同調することができない、あるいはこれらの力を用いなくとも多少うまくいけると思うようなひとは、思いちがいはなはだしい。またなんらか他の生の財貨をこれらの力と同等にみなしたり、これらの力よりこのむひとでもおなじことだ。このようなひとはこれらの力をかちうることなく、かりにかちえたところでいつまでも保持することはないであらう。

ルカ一六・一二—一五、一一・三六、一〇・六、一九、一七・六。ヨハネ九・四、四二。(Ⅱ・2・12)

*

たえず、思索をわずらわすかなり大きな仕事をもちろみ、生のつまらないことからはなれ、ほとんど人生最大の重荷になりやすいいくつをとくにしりぞけることは、幸福な生活をしようと思えば必要なことである。

それゆえ、あなたはぜひともそういう仕事をもつ必要があり、もし持っていないなら、さがさねばならない。(Ⅱ・2・16)

*

あなたが他人を説得しようと思うなら、相手によくないことだが、物質的な「利益」を示すか、相手の心をつかまねばならない。そこにいたる最上の道はききとどけられる祈りである。なぜなら神はどんな心をもつかんで、時々刻々それまでとはべつなものにしてしまうことができるからだ。そしてこのうつりかわりは非常にとつぜんで、決定的なことがよくある。いずれにせよ、あなたはどんなひとにたいしても、彼のためにしんけんに、くりかえし神に祈らないうちは、彼に絶望してはならない。(Ⅱ・2・19)

*

一分か二分かのどんなわずかな時間でもなおなにかいいことや有益なことに使えるものである。最大の決心や行爲もごくわずかな時間しか要しないことがよくあるものだ。そしてたんに時間が足りないという口実でけつして善事をのぼしてはならない。善をなすまったくおなじ機会が二度とおとずれることはけつしてないことが多い。しかし、なにかはつきりせず、急を要しないときには、さきへのぼすがよい。そうすればしばしば、ことがはつきりして、それにたいする勇氣が、それ以上あれこれ思いあぐねずとも、まったくひとりでにやってくる。人間の精神は無意識でもはたらくものであり、行動するにも、正しい行動という確信によってのみせねばならない。(Ⅱ・2・29)

*

生における幸福なときとは、要するに、仕事に没頭しているときのことである。「あたたかにもえるストーブのかたわらで説教集に読みふける」まじめなタムや、家臣たちになやまいかずかれ、父親のよう

に彼らにまじり、やすらかな老境を楽しむひとや（ベスタロッチの代官アルナーのタイプ）、あるいは前世紀のある時期に出た本によくあった「柔和な」牧師さんや、えらい老教育家などのようなさまざまなセンチメンタルな人間像は、つねに幻想であつたか、あるいはともかく現代のわれわれにおいてはもはや真実とはなりがたいものである。いまはの息をひきとるまで活動的であることが、学者、牧師をふくめ現代に生きる生の意味であり、合いことばである、もしそれがわたしたちの運命であるならば！（Ⅱ・8・29）

*

ある程度他人のために心配したり、うごいたりしないと、どんな人間も精神の健康をたもつことはできない。だから、家族のためにはときに重労働もしなくてはならない忠実な母親、自分の職をただ賃金だけの仕事とばかりは考えない感心な女中、よろこんで自分の任務に服する勇敢な兵士、工場の繁栄を少しは心にかける善良な労働者、これらのひとたちは、裕福なまけものよりも幸福である。だから、いっそう前進して、「勤めいそしみ、ゆめうたがわなないこと」だ。

しかし、ただ自分ひとりのためだけにやるのではない。それはじゅうぶんな満足を与えない。（Ⅱ・10・25）

*

あなたにすすめてほしいというなら、あなたの辞書から「祈る^{ベクセン}」ということばをとりさることだ。そしてそのかわりに「願う^{ビクセン}」といれなさい。

「祈る」ことには神にたいする形式的なあいさつという奇妙なまずいそえ味がする。このあいさつはきまつた時にあるいはきまつたことばで「おこなわれ」ねばならないものであり、ちょうど、家臣が領主に

たいしてもとはできればなにもさしたくなく、いかにもいいやながら、しかも心の底ではそむかんばかりの敵意をいだいてさしたす年貢ねんぐのようなものだ。公けの祈りはすべてこういう性質のものであり、また、教会のたいくつな連禱れんぎもそうで、本をみてとなえながら、会衆一同に与える反響はごくよわかったり、なんの反響もなかったりする。またたとえば食前の祈りなどではできるだけささすませてしまつて、早いところじつはもっと気持ちのいい食事につらうというわけで、このほか似たようなことは、いくらかもある。

われわれすべてが神を相手にしなければならぬことは、形式をふんだことやとくべつなことではなく、願ねがいである。ただ相手が神というふつうとはちがつた人間を越えた存在であるにせよ、願ねがいであることにかわりはない。われわれが神と話をするときにはそもそもただ願うか、感謝をしさえすればいいので、たんなる「崇敬」では神につかえていることにはならず、またわれわれのほうにも役にたたない。

だからわたしは、あなたが自分は「祈れ」ないと言ふとき、それがじつによくわかるのだ。今日ではあなたばかりではなく、なお多くのひとが祈れないでいて、そのなかにはよいひとびとがいる。そこでまず願うことをやってみるがよい。これは、もしあなたがともかく神をほんとうに信じているなら、あなたにとってまことに自然なことと思われらるだろうし、時間やことばをきめてするような形式主義もぜんぜんなく、神にこれでなにかをしているなどというよいけいなことを少しも思わずとも、願ねがいはかなえられるだろう。

「主の祈り」は、もしあなたがそれを、あなた自身感じた、真実の願ねがいとしてとなえることができるなら、安んじてとなえるがよい。けれどもそうでないなら、この祈りもそのほかのいっさいの祈りの形式同様あなたにとってなんの役にもたたない。なるほどこの祈りは、すべてのほんとうに必要なものにはたいするもつともよく、もつとも美しい、簡潔な祈りであつて、これほどのものはまことにとなえられたことは

なかったし、となえられることもないであろうと思われる祈りである。しかしそれはあなた自身の感情に
びったり合い、あなたの個人的なじっさいの願いであるべきだ。そうでなければむしろもっと簡単な「主
よわれをたすけたまえ」をつづけたほうがよい。これもまたおなじくわたしたちの主の祈りのことばで、
おそらくは前の主の祈りよりもっと多く、しかも福音書から知られるよりもっとしばしば祈られたも
のであったろう。

神はわれわれをこのようにたすけてくれる。すなわち、「わたしたちはわたしたちの祈りを主にむける。
主はわたしたちのために語りかつ働きたもう」。(ブリストルのジョージ・ミュラー)。

「神を信頼しているとき、神はわたしをけっして見すてたことはない。」(クロムウェル)(Ⅱ・11・3)

一〇 人生について

個々のたましいが真の内的生活に到達したときに、自己のなかに経験する生成過程は、通常次のごとくである。

第一に、満足を与えることのない現世的精進をやめて、あなたが神に「転向しなさい」。悪を去り、あるいは無関心を捨てて善に「転向しなさい」。イザヤ四五・三。

次には、「まず神の国を求めなさい」。すなわち、なにはさておきであって、他の追求のついでにでもなく、あるいは同列にでもない。マタイ六・三。

それから、すべての真に必要なものと有益なものがつねにえられうるという確信が起こる。ヨハネ一五・七、一六・二四。

このことからついに必然的に生ずることは、内的な平安と現世の克服とである。その現世では最善の運命にあってもなお不安と憂慮のほかにはなにものもないのであるが。ヨハネ一六・三。

人生は不断の克服か屈服かである。その他の道はない、地上のだれにもない。(I・1・17)

*

「あすのことを思いわずらうな。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」⁽¹⁾この有名なことばのなかで、後半句はきわめてあきらかである。それでだれもただちに言うのである。前半句も実行できるものでありさえすればよるこんで賛成しよう、実際のところ生活はそれによつてはるかに容易になるだろう、と。この命題は実行できる、ただし神のみちびきによつてのみである。神のみちびきは、人間の最大の賢明よりもはるかに賢きものであり、とくにその企ての時宜をえていることにおいてははるかに人知を越えている。人知はしばしば事情や自己の力をひどく誤認して平氣でいる、しかもきわめてしばしば「自分の足をあまりにも大きくすぎる靴に入れる」ことがある。

この世でいつなりともキリスト教に対立する最大の障害は、キリスト教の外にあるひとがこの教えの戒命に従つて生きる可能性を想像することさえできないことである。これはどうもまったく当然のことである。というのは人間そのものがまさに別人になるのだから。生まれつきの同一のひとではなく、別人が後にはいままでとは別様に考えたりおこなったりするにいたるのである。しかしそうなるにはまずもつて、なお性来のそのひとが最初の「やみへの跳躍」⁽²⁾を敢行しなければならぬ。そのひとがこれをくわだてるには、もちろん、アウグスティヌスやカルヴァンが「恵みの選び」⁽³⁾と言つてゐるものが必要である。しかもこれはだれにでもその生涯に一、二回は近づいてくるものであつて、そのおりにこれをつかまえて善用しなければならぬ。(I・1・24)

(1) 「訳者注」いわゆる「山上の垂訓」ちゅうにあるイエスのことば(マタイ六・三四参照)。これに先行する彼のことは、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであ

らう」(同六・三三)。「これらのもの」とは現実問題たる衣食住のこと。

(2) [訳者注] 出エジプト記一〇・二三「Also trat das Volk von ferne; aber Mose machte sich hinzu in das Dunkel, darin Gott war.」[「そこで、民は遠く離れて立ったが、モーセは神のおられる濃い雲に近づいて行った」というのがある。密雲、雷^{もろい}、電光、火炎、といった現象をともなうて現われたシナイ山における神の啓示、モーセのシナイ登山の消息は、この「やみへの跳躍」のもっともいちじるしきものである。ニーチェのツァラトゥストラのなかに「Sprung zum Letzten」「究極者への跳躍」というのがある。いずれにしても絶対者への自己投入、決然たる自己超越の行動である。

(3) [訳者注] Gnadewahl「恵みの選び」、prädestination「予定説」、神学上の深遠な概念であるが、出エジプト三三・一九、ローマ九・一五、一八、一一・五などの聖句がこれに連関する重要な個所であらう。

*

ひとはつねにりっぱであるばかりでなく、ひと好きのするひとがらでなければならぬ。しかしこれは、きわめて実直なひとにあってはようやくその晩年に現われるか、あるいは全然現われないであらう。それゆえに世人が、少しもりっぱでないがひとずきのするひとびとを、最大の徳の模範のようなひとびとよりも好むことが多いわけである。(I・3・31)

*

偉大な思想は、大きな苦しみに深くみぞを掘られた心の地底^{じそ}からのみ生ずる。このことがかつて一度も起こらなかつたところには、ある種の浅薄さと凡庸さが残る。それはいくら竹馬に乗って背伸びをして見てもむだである。その竹馬が、宗教的なものでも、科学的なものでも、あるいは哲学的なものでも、あるいはまた人間的な方途や性情でも、むだである。けれども、だれか余儀なくされることなくして、みの

りは豊かだがおそれにみちたこの道に、みずから踏み込む勇氣があろうか！　まただれか神のみ手のみちびきなくして、しばしば道に接して間一髪なる深淵しんえんのほとりをたどりゆくであらうか！

大いなる深淵より

いざきたれ、海の潮しほと苦にがき死よ、

今しまことになんじは立つ陰府よみの門べに。

古きひと横たわるなりいまわの痛みに。

新しきひと吐息といきつく、生れしばかりに。

浮き世ばなれの国へ道はゆきけり、

あらゆる埒らちの彼方あななるおぞましき地へ。

さすらえり、われらいままで深淵のほとりを、

やみの夜に言い知れぬ思いをいだきて。

決断けつだんのくだれるを今われおぼえたり。

妄想もうそうの域へこの道はみちびくなれば。

うしろには、はやうつし世のそむき去るあり、

われ刺さをえぬ月桂樹グライデルの冠に替えて。

吐息といきして嘆く心に救いを賭として、

わが救い主！ なんじにぞこの身をゆだね。
戦いも誉れも共になんじのものなり。

死をたまえ、主よ！ いざなんじのいのちに生きん！（Ⅰ・４・１）

*

神は彼の子たちのために試鍊しれんの炉をけつてあつすぎるようにはしない。それとはまったく反対に彼はいつもきめられたものよりいくらか軽減する。人間もまた、彼らがなすべき以上に毛ひとすじほども越えて神の子たちを害することを許されない。

わたしはわたしの生涯のあらゆる困難な時期において、その時期は本来さらにいくぶん長びき、あるいはつらくありえたであろうし、またあるはずであったという確かな感情をいだいたということをみずから証言することができる。それゆえに「さあ、元氣よくとび込め、あまり深くはないだろう」といえるのである。

サムエル下二四・一六。歴代上一六・二二、二三。サムエル下一六・二二、二三。

五月一日

五月はじめの曇り空、

憂うるなかれ、わが魂たまよ。

天に向かいて霊たまは熟うむ、

か弱き殻は震うとも。

終わりよければすべてよし、
いつか必ず死は来たる。
勞を惜しまば、いのち失す。
いざわが心、世を捨てよ。

まことにいつかたそがれに、
なんじ、まみえん神の陽ひに。
道はいかほど遠くとも、
よりのみでそゆき着かん。

すでになかばをうち越えて、
この巡礼の道をへし。
されどいまだに受けざるは、
この働きのむくいなり。

なんじかしらをもたげなば、
栄はえの冠かむりを見るをえん。
なんじを迎えん聖徒らの
歌の群れをも見るをえん。

つぶやきもなく旅をゆけ、
なんじが命数^{きだめ}をかたく執^とれ。
ひるさがり、旅をつづけよ、
たそがれに、平和は招く。(I・5・1)

*

わたしたちがもしひとの世のことがらを同情の念をもって見ることができないなら、世間との接触は必ずやわたしたちの内面的人間をそこなわずしてやまない。これが僧院生活を正当化するゆえんであるが、しかしそれはただ相対的にある。なおもう一つの別な出口がある。

わたしたちはつねに事実から教えを受けることにたいして心を開いていなければならない。しかしこの教えをだれからでも感謝して受けねばならない。

これに反して一般的人生観に関しては、同様にこれをたえず思索と経験とによって自己の内に深めかつ明晰^{めいし}にしてゆくように努めねばならない。しかしこの場合どのひとの影響にたいしてもつねに解放的であるようなことではならない。しかし、ついには時代精神全体にたいして無関心に対立することにはちたろうとも、その時代精神がこちらの人格の犠牲に価するほどのものであることはまれである。かえって反対にこのような人格の個人が従来しばしば時代精神にたいして別な方向を与えてきたのである。

「民衆、奴隸^{どれい}、征服者、

彼らはつねに告白す、

地の子らの幸^{さち}のきわみは

ひたすらに人格のみと。

おのれをば失うなくば、

どの生活を営むもよし。

本領を保持しおらば、

すべてのものを失うもよし。」

(ゲーテ)

「どうして偉大なことを考えよう、

ささやかな観察に自分の心をあまりにもついやすひとは。」

(ベーコン)⁽¹⁾ (I・6・7)

(1) 【訳者注】ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) イギリスの思想家にして政治家。経験主義の哲学説で、帰納法をもって自然科学探究の方法となし、一般原則を打ち建てようとした。「知は力なり」という有名なことばがある。

*

人間の人生行路はまことに一大幻影である。なめらかにされた表面の下に隠されているものを、ひとは見ず、またけつしてそれを見たいと思わない。ただこの殻のあちこちに突如として割れ目を生じ、神が見ておられるままの内部の真相を示すにすぎない。それゆえほとんどすべての人間の判断も、あらゆる伝記もただなかば真であるにすぎない。それらはたんに皮相にふれているまでである。

それにもかかわらず、人間の正義はともかく、十九世紀の「進歩発達」の一面的な称賛のあとにきた政

治的厭世主義の影響のもとにわれわれがいまやふつうに正義の事態を認めているよりも偉大である。ひろく世に知られた人物の死後まもなく、そのひとに關して、伝説ではなく、むしろ大局的に正しい世論が必ずできあがるが、これはただちに宣伝されないでも永続するものである。

悪人でいてよき名声をとどめていたようなものを、少なくとも史上唯一の例をも、わたしは思い浮かべることができない。むしろこの反対の場合がしばしばあると見てよいならば、それはあきらかに、善良なひともしばしばその弱点をもち、あるいは容易ならぬ誤謬ごぼうにおちいることがありうるという事態によるのである。にもかかわらず、その根底が善であるかぎり、これらの誤謬はとくにゆるされるものである。いわゆる神父たちから宗教改革者たちにいたるまで、教会のほとんどすべての有名な教師たちがその例である。ビスマルク、ゲーテ、あるいはフリードリヒ大王もまたそうである。

このことからわたしたちにあきらかとなることは、人間の胸のなかには正義への深い要求が存続しているということである。そしてこの要求たるや、わたしたちが生死をかけてわたしたちの信頼を置くところの真に永存する神の義の余韻であり作用であるにすぎないのであらう。箴言一〇・七。(I・6・12)

*

なぐさめをまず第一にひとに求めることはけつしてなしてはならない。それは神においてなすべきことがらである。ひとにたいしてはじっくり腹がおちついていなければならぬ。こうしてのみ他人がわれわれにたいして好意を現わすし、われわれも彼らの忠告を正しく受けとり、これを用いるのである。

ゾイゼの四条目からなる交際規則は、一般的に言えば、相変わらずまことに有益なものである。すなわち、「だれをも親切に迎えること。談話は簡単にすまずこと。客をなぐさめて帰すこと。そのひとに自分の情をつながないこと」。(I・6・16)

*

共同生活を非常に容易にするまことに快適な性質は、できることならなんでも、即座に快く他人の希望に応ずる、親切な乗り気と気軽さである。ところが世間には、彼らの目と舌とにたえず永遠の「否」をふくみ、そしてまったくどうでもよいことがらにおいてさえ、けつしてすぐに他人の意見に同意せず、いつも必ずこちらから長々しく頼んだり、くだいたり、とがめだてたり、催促したり、追いたてたりしたあげくの果てでなければ、応じない連中が幾人あることだろう。そのために最良のひとびともまったくひとにきらわれることがある。このような悪習慣からまったく脱することを要するやまことに火急的なものがある。神がなにごとにつけても強いねばならないこんな強情なしもべどもをよろこびなさるとはわれわれもとうてい考えることができない。旧約聖書の預言者たちもまた事実、しばしばこのようなことばを述べている。

エレミヤ七・二三・二七、三一・三一・三三。(I・6・19)

*

内的生活は、鉄を鍛える場合と酷似している。内的人間はたえず繰り返し、繰り返し、火に投ぜられ、そのつど強い急激な鍛打ちで鍛えられねばならない。かくして彼はしだいに神の欲する形相ぎようそうをとり、神の目的に用いられうるものとなる。

なお似ておりかつ同時に非常に、なぐさめられることは、このような火熱のなかで鍛えられたものは、いつまでも堅剛でしかも同時に柔軟なものである。これに反して、自己の計画と精励努力をいくらやってもそれではどこか堅実ならぬものがまつわるものである。

神は神の靈をはたらかせたいと願うひとびとにのみこれを与えるのであって、この靈をただ所有し、享受せんがためには与えたまわない。

聖靈降臨節の歌

恵みに満てる、清きみたまよ。

なんじをよくとらえ、保つはだれぞ。

ああ、世に酔えるともがらに

なんじが静けさのいかにとほしき！

なんじいかにかくも深くは隠されてある、

なんじを知るはいともうちなるひとのみぞ。

なんじはたましいのふるさとよりの

春の朝よ。(I・6・20)

*

世に処して品格を保ち、とくに生活をふつうに保持することのゆえに、さらに大なる目標を視界から見失うことのないためには、ある種の熱情が必要である。そして生活をむなしきものにさせまいとするならば、その生活がどうしても本質的にこのような目的のためにささげられなければならない。

しかし適量の健全な、冷静な常識が、この熱情と結びついているのでなければならない。この調査から有能な人間の性格が生まれてくるのである。(I・6・22)

*

大なる危機の終局にあたつて人間の思念には、ふつうの人間的なものをほとんど超越した、あるとらわれない評価をもつて、自分自身の生活の過去と未来をちよつとながめる瞬間がしばしばある。この際ひとは過去において、まさに邪路におちいらんとして、しばしばほとんど奇跡的ともいふべき神の立ち入りと守りによつてわずかにまぬがれたところの、かぎりなく多くの瞬間を認めるならば、このすでにこうむつた恩寵おんちようにたいする感謝のために胸はふくれ、なお前面に横たわっている人生行路も祝福されたものであるうとのじゅうぶんの確信に精神は高まるであらう。全生涯の終局もまた必ずやこのようであるに相違ない。

ベアトウリチエは始めた「なんじは

窮極の救済にいたく近づくゆえ

なんじの目はあきらかにまた鋭かるべきである。

されば進んでそのなかにはいる前に

下方をながめ、いかに大なる世界を

すでにわたしがなんじの脚下に置いたかをみよ。

これらのまるき精氣ニチツを通じてよろこびきたる

凱旋がいせんの群れに向かい、なんじの心がその歡喜の

きわみの姿を表しえんがためである。」

(ダンテ『神曲』天国篇第二二歌一二四—一三二行。中山昌樹訳)(I・6・25)

*

われわれは生活をすばらしいものにすることができる。という意味は、人間の想像がおよそ描きうるもつとも美しいものは、まったく自由な徹底的に崇高な性質の人間のすがたであるからである。そしてそのような人間になるということがわれわれの人生の明白な目的である。その他のいっさいは、みすばらしいまにあわせものにすぎない。そしてこのことを正しく欲するひとびとには、彼らのあらゆる運命がこの目的のために役だつにちがいない。

しかしそのためには、たんなる動物的な無事安泰はなんらの価値なく、そればかりかそれはなお一つの自己欺瞞でさえあること、これに反して神に仕えることがいっさいであることを、われわれはしっかり悟らねばならない。(I・7・12)

*

マタイ六・三三―三四。

わたしたちが神の道を歩むならば、毎日、毎日のために、その力とその課題とおのずからやつてくる。これらをはねおって求めるにはおよばない。わたしたちはただそれらを受けとって遂行すればよい。

この世的なやり方による生活にくらべれば、以上のような生き方は、そこにどんなに苦闘や苦難があっても平安な生活である。そしてまたキリストがルカ二・三五で彼の弟子たちに向けて発した大胆な問いは、(弟子たちもともとわれわれと少しも変わらない心配性の連中であつた)これを今日も変わりなく、正直な心で彼に従うだれにでも彼がおなじく問いかけることができる。

これはあらゆる道のなかでも、最も確実な道である。わたし自身(きわめてわずかな程度にはある

が) これを経験した。それゆえ、これを証言することができる。(I・7・14)

*

内的生活はいろいろな点で登山に似ている。登山の旅を、案内者なしに、あるいは道に明るくないつたない案内者とか、綱ツナによるつながりなしに無能な仲間と企てようとしてはならない。同様にまた、高山登攀トウパンの共同の企てを、それが力にあまるひとびとに期待することは断じてよくない。それはただ相互の不興をもたらずばかりである。そういう連中とは、かえって低い地方や、途中の快適な旅館でなら、きわめて親密に、相互に有益に、まじわることができるというものである。(I・7・23)

*

われわれは、わたしたちの内的生活のある点に到達すると、自己のあらゆる力の無効について一種のあまりにも強い確信におちいり、またそれがため誤った静寂主義か宿命論におちいる、という大なる危険にさらされるものである。

われわれがなにをなすか、またそれをいかになすかについては、われわれはけっして無頓着むとんちやうであつてはならない。むしろ反対に、われわれはあらゆる勤勉とわたしたちのあらゆる天賦とを真剣まけんに活用しなければならぬ。けれどもそれは野心や物欲からではなく、義務感情と神への愛とからでなければならぬ。こうしてその結果は神にゆだねるべきである。

そうすれば万事は好調にゆく。なんらの宣伝もいらない。その際なおわたしたちの犯す外的誤謬ごひやうごすらわたしたちの益に変わる。それが信じられないというなら、それをためしみることもできる。

だれの生活も、預言者や使徒の生活すらも、ときとして深い落胆に襲おそわれないことはない。「主よ、も

はや、じゅうぶんです。今わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」(列王上一九・四およびその前後の和訳参照) これはすでにだれでもその生涯の暗黒の時期に告白したところである。この無氣力がどこからくるか、多くの場合わたしたちは知らない。だが、わたしたちがこれに屈服してはならぬことは、いつも知っている。地における神の国の戦いで降伏する者は、つねに裏切り者である。あなたの義務を遂行せよ、できることならよろこびの心をもってせよ。たとえこの心情なくとも遂行せよ。これはいっそう功績あるものであり、いっそう大きな成果をもたらすものである。ダンテ『神曲』地獄篇第九歌七—一〇行。(I・7・24)

(1) 〔訳者注〕

彼は始めた「必ずわたしたちは戦いに勝つべきである。

もしも……彼女がわたしに身を供した。

おお彼の者のここにいたることのいかにおそきぞ。」

ダンテのこの一句は貴重なものである。「彼の者」においてこの著者はキリスト・イエスを意味している。キリストの再臨を待つことが、日常の信仰生活の呼吸とならなければ、信仰に真の迫力は出て来ない。彼の再臨と新天地の到来を待つこと、明朝の旭日の上るを待つように待つのが終末論的構造の信仰のたいせつな内容である。また神の国は内在的な意味で地に今のぞんであることを日々体験することがたいせつである。「神の国はなんじらのうちにあり」とイエスは言った。地上の倫理の内容はこれである。しかもそれはどこまでもやはり終末論的構造の一面である。地上の神の国はいまだ危機的性格である。それは地上のもっとも美しい現象であって、神によるこばれるひとびとの地上における使命はまさにかかる神の国を体現せんと激しき戦い——愛の——にある。にもかかわらずそれがただちに直線的にきたるべき終末の神の国の実体の一つではない、それはしるしではあっても。断然たる審判の大序曲の後に神の最終の国はきたる。それは甘い夢のような神話ではなく、他のあらゆる

る現実を、神話とする神話である。だれかこの神話すなわち霊的現実にたえよう。十字架の贖罪の信仰がそこにも恩恵として与えられることなくしては耐ええない。ダンテの「われら必ずこの戦いに勝つべし」をしてそらごとたらしめないのは、まさに「なんじら世にありては苦難多し、されどおおしかれ、われすでに世に勝てり」とのイエスの実力ある保証による。イエスの力、彼のいのち、にささえられることなき人間のいっさいの力みはむなし。

*

「あまりに大きすぎる靴に足を入れるな」とは、わたしの思いちがいでなければ、たしかアラビアのことわざであった。これはよくある失敗の生活の説明である。高い地位においてさえこれはありうる。それは、このことわざのような事態から不確かな歩き方が生じ、それに気づいたひとびとにたえず信用の欠如が増してゆくからである。

ところが、あまりにも窮屈な靴も同様によくあるものである。それはたえず圧迫し苦痛をひき起こすので、やはりとりかえねばならない。正しいのは、生活の地位がいつも成長と力量とに相応じているときである。ただしこれは人間の知恵のよくしえないことで、神のみちびきにたいする堅い信仰のみがあととところである。

イザヤ四九・一五、一六。第一コリント七・二三、二四。マタイ六・三三。(Ⅰ・8・19)

*

わたしたちは宗教的真理をどれもすべて即時に把握するといふわけにはゆかない。それとは反対に、宗教的真理は、それにたいするわたしたちの感受性の成長する度合いにつれて、しだいしだいにわたしたちに贈られるものである。おおかたは、体験やひとや書籍によって、ときにはまたいつそう直接の方法に

よってなされる。キリストですら、ある困難な場合には、「この言葉を受けられる者は、受けいれるがよい」〔この例マタイ、一九・二三〕と付言しておられる。しかもその最後の説教において、彼はなおいくつかのことを語らずに胸におさめてしまったことをあきらかに告げ知らせているのである。ヨハネ一六・二三、一三。このことをおぎなひかつ継続するために、わたしたちが「聖なる」と呼ぶところの霊がまさに存在しているのである。しかし、あなたがこの霊をあなた自身の霊ととりちがえたり、あるいは混同するだけでもせぬように気をつけよ。あるものがあなたのうちに臨みきたって、そのものが、あらゆる気分とか傾向とか学識とかによって、およそあなた自身の全存在によっても、さまざまに改められることなく純粋に、つねにあなたのうちで真理を語るものでなければならぬ。しかしそれはキリストが語ったところのことにつねに土台を置いているのでなければならぬ。これから離れるものは、偽りの霊のことばでありわざである。

人間がこの世における自己の天職に迷い、意気阻喪し、あるいは後退せんとするような時期が人生には往々にして襲いきたるものであるが、かかる時期にあたってもっとも確実な慰励となるところのものは、もともとわたしたちが神を選んだのではなく、神がわたしたちを選び、自分のものとなさっているのだという思いである。ヨハネ一五・一六。エレミヤ一〇・二三。

この思いをもって「屈辱の谷」を通り抜けねばならない。そうであるなら、ついにこれらの苦難の目的が達せられるや否や、事態はまったく自然によくなくてゆく。(I・8・25)

*

人間の生活は、もしそれに正しい目的をもたせようというのであるならば、神の友愛をたえず受け取り、そしてまたこれをたえず隣人に与える、ことではなければならない。あるひとびとはこのことを若き日からあ

る程度生来のものとして他のひとたちより多く身にそなえている。この、他のひとたちにおいては、自分たちがみずから定めた他の生活目的で多くの苦難の経験をなめたあげくに、やっとこのことが現われてきたというものである。しかしここにまったたくいたり着かないひとは、なかば、さもなくばまったく失われたる人生に不平をいわねばならない。(I・8・28)

*

憂いという深く食い入る鋭い^{すき}の刃が、わたしたちの心にたえずあとからはえてくる外皮をつねにあらたにはぎ取らねばならない。かくて後、はじめて永遠の真理の^み実り豊かなるべき新しい種子が、わたしたちの心に落ちてそこに根をおろしうるのである。こういう経過を踏むことなくして、わたしたちは真に人生の根底に横たわっているほんとうに、真実なることがらにたいして無感覚のままに終わるであろう。

ひとは幾多の生活経験を積み、ついにもはやまったく苦難のない生活を願わぬという境地にいたるのである。これこそが「永遠の平安の状態」というもので、ここ地上においては、苦難はわたしたちの悪い性情からわたしたちを保護する守護者であり、わたしたちを不断にまもってくれる番人であらねばならない。そうして、そればかりでなく、苦難は、そうでなければすなわちわたしたちになお耐えがたかるべき生活の単調を活気づけてくれるのでなければならぬ。

広野より出す

(申命^{しんめい}二・七)

心ゆくまでわれら憎めり、

いまこそついにわれら愛せん！

なんじがためになおも残れる
はての荷を投げ捨てよ、わが心。

いろとりどりのこの世の宝の
綯いと殻がらにはや飽き果てぬ。

主よ、なんじが意志とまことこそ、
これよりわれらが歓喜なれ。

くさぐさのすがたのうちに
幸きとと里さととを求めたりしが、

見いでたる小さきとうときこの真珠、
いざわれはとりて離さじ。

心ゆくまでわれら憎めり、
いまぞついにわれら愛する！

なんじのはやくも決意せしことの
実践に、いまこそ移れ！（I・8・31）

*

官能的生活からまったく切り断たれたたんなる「精神的」生活は、この地上では、恐るべきことがらであ

る。それはそのひとの内にたやすく空虚の感情を生み、他人にたいしてはとかく冷淡と無情のひとにする。このような「不自然な」ことから冷酷な僧侶的暴君や信仰迫害の器が発生した。彼らは個人的には侵すべからざるものがあつたにもかかわらず、たしかに非常に多くの害悪をはたらいてしまった。

わたしはたんに彼らにたいしてのみならず、たんに理論的であるにすぎない哲学者、神学者一般にたいしてつねに反感をいだいてきたことは、わたしの幸福であつた。かような連中は、ひとにほとんど役にたつところなく、またひとの心を平安にもしなければ進歩させえない問題をとくに好んで論議する。わたしはわたしの生涯の晩年にあつて、もつとも有名なひとびとにおいてしばしば見るような、彼らの生活の主要部分を占めたようなことがらでわたしの時間を徒費してしまいたくはない。(I・9・10)

*

人生を力強く推進させてゆくのに二つの道がある。一つは、ひとが狼どもと共にほえ、そして彼らと共に、おおかたは万人にまったくじうぶんであるとは言えないが、眼前にある生の享樂の一片のわけまえをもとめて決然とあさりまわる道である。これが世の常の生活であつて、唯物主義の「生存競争」である。他は、精神を強く高揚して神との真の、誠実の、よろこばしい交友を結ぶことにより、前者の場合のような全闘争は無用となり、いかなる憂鬱も、無気力も心に残存しえなくなるような道である。

両者の中間の道は、いつもきわめて欠陥の多い結果を供するばかりである。さてこれにたいする不断の不平は、きわめて多くのひとの日々の糧となつていたのであるが、あらゆる愚中の最愚である。なんとなればひとはそれをいくらでも変えうるからである。神にたいしまた同時に世にたいして不断の闘争をいとなむのは、多くをあまりにも早く消耗させる。にもかかわらず、これは今日、まったく悪くならうともせず、さりとて決然として力強くよくなるうとも欲しない種類の人類の生活である。ダンテはこれらの連中

を「地獄前界」に、すなわち自己自身の不安と二つのより、強力な仲間（次の詩句をみよ）からの侮辱とをあらわす不断の陰鬱な状態に置いた。

ダンテ『神曲』地獄篇第三歌

「憐憫も正義も彼らを蔑すむ。

われらも彼らのことを語らず、ただ見てなんじ過ぎよ。」

（五〇、五一行。中山昌樹訳）

あなたは少なくともすみやかにかつ断固として決意せよ、かかるたぐいにはどんなことがあっても、加わるまいことを。

イザヤ六一・一三、一〇。ヘブル一〇・三五―三九。ヨハネ黙示三・二、一五、二一・七、八。

昼夜平分

はたらきのうつわ砕けぬ。

最難事 果たし終わりぬ。

わざはみな無にぞ歸したる。

主よ、なんじがわざの始まるはいつなるぞ。

ほのぼのと深き夢より

たち上る一つのすがた。

はるかなる遠ちの方より

響きあり、「耐え抜けよ、やがて成るべし」。

死にあらず、生にあらず、

なんじは今、静けきたのみ。

夜にあらず、昼にあらず、

なんじは、あけぼのの快きゆらぎ。(I・10・1)

(1)〔訳者注〕

すると彼は私に「汚名もなく誉れもなく

世を送ったものらの悲しいたましいが

このみじめなさまをつづける。

神に逆らいしにもあらず、また

忠なりしにもあらず、ただおのれのことをはかりし

天使の卑しい一団が彼らにまじっている。

天は美を減ぜざらんため彼らをおい

深き地獄は罪人らのこれによって

誇ることなきよう、彼らを受けない。」

*

(ダンテ『神曲』地獄篇第三歌三四—四二行。中山昌樹訳)

結婚はけっしてどうでもよいことではない。真におそるべきことである。それは個人にとって

も、諸民族すべてにとつても祝福の源泉ともなれば、彼らがもはやたちえないほどの呪詛じゆその起源ともなる。これは個々においても全体においてもしばしば例証しうるところである。

婚姻の日が生涯におけるもっとも決定的な日であるのは、たんに婦人にとつてのみではない。そうであるから婚礼の多くの祝宴歓楽は、しばしばこの事態の非常な嚴肅を当事者とその家族とのためにいくぶんおおい隠すという秘められた意義をこそもつのであるのかもしれない。(I・11・14)

*

どんな人間も生を享樂したいという本能をもっている。この本能を人間からおいはらおうとすれば、かならずや人間の精神を——ことに青年期において——そこねてしまふであらう。それゆえ、適当なときに人間を正しい生の樂しみにむけることが肝要である。それは、たがいに愛情にみちて神とまじわることであり、いっさいの被造物にたいし親愛をいやくことである。正しい道にあるひとなら、この樂しみによつて心を満たされるにちがいない。それ以外の生の樂しみはすべて人間にうまくいくものではなく、この樂しみがなければ、俗にたいくつとよばれるあの不快感が生じてくる。

この真理をひとびとに示し、ひとびとを、できるだけこの真理にしたがって生きられるようにしてやることこそ、教育というものだ。これとはちがう教育はすべて、あやまつた方向を追うものである。(II・1・5)

*

いつまでもおなじ考えに、あるいはさらにおなじ思い出にかかずらわってはいけなない。すぎたことはかたづいたものとして、いまの、いま正しいおこないをしなければならぬ。「生活の知恵は、あることをなして、それをなしとげることだ。なしうる最善の、もっとも正しいことをなすようにつとめよ——しかし

そのあとは、それをはなれることだ。」(Ⅱ・1・10)

*

菜食主義の生活法は、原則的に言うなら、たしかに最上のものである。しかしそのためには、文明化された人類をまずもう一度菜食に、要するにいまよりはるかに簡素な生活になれさせる必要があるだろう。ほかならぬ文明とよばれるもののために人類は簡素な生活からはなれてしまったが、それは人類の損失でしかなかった。(Ⅱ・1・11)

(1) いまこのスイスでも簡素な生活になれているが、これは「第一次」世界大戦のためである。この戦争のおかげによるめったにないいい傾向は平和になっても、もちつづけたいものだ。

*

わたしがこの世に長く生きるにつれ、また大衆の力、大衆の自覚、あらゆる種類の社会組織や組合組織が世間でしきりに問題になるにつれて、個性の意義というものがわたしにはますますあきらかになってくる。「肉体化こそ万物の窮極である」というエティンガーのあいまいなことばでさえ、いまのわたしには納得がいく。精神的なものも個性として具体化されねばならず、この意味の具体性は理念の形成であり、進歩であって、理念は具体化されてはじめてじゅうぶんな力をもち成熟するにいたる。それゆえおそらくつぎのように言えよう、現にある理念はそれぞれ、その理念そのものをあらわすような人間を見だし、生みだすまでは休むことがなく、そこからまた、理念がいく千のひとの頭や心にとらえがたいかたちをとってやどったとき、理念そのものであるひとたちがその時代を支配するようになる力も生じてくるのだ、と。(Ⅱ・1・18)

*

いい結婚というものは、おそらくこの世のあらゆる財貨のなかで最上のものであるが、ともかくもつとも独特なものにちがいない。なぜなら結婚は、この地上生活においてのみおこなわれ、来世ではや地上とおなじかたちでは存在しないと思われるからだ。

これにはしかし、相互の真の愛情とならんでなおふたつのことがぜったいに必要である。第一に双方とも純潔で結婚生活にはいらねばならない。第二に夫が家計の維持者であり扶養者でなければならぬ。ほかの点ではきわめて厳密な名譽感をもつ身分あるひとたちが、この点では逆に妻の財産にたよることを甘受し、あるいはすすんでもとめさえするのは、現代のもっとも奇妙な矛盾のひとつである。しかしこのことは、生活様式と教育とを、とくに少女たちの教育をはるかに単純化するだけでも変えられる。彼女たちはまたむかしのように主婦になるべきで、たんに美的な享樂人になつてはならない。さもなければ彼女たちは持參金なしにはもはや結婚ができなくなる。いまよりもずっと単純なすがたにかえることが婦人たちはなによりも急を要する問題で、ぜいたくは彼女たちの最大の敵である。(II・1・22)

*

どんな些細なものの浪費してはならない。時間も、労力も、不必要なしがいのないことへのほねおりも、力や視力も、金やその他の物資も。これが人生を楽にわたる最上の道である。

それは神の意志でもある。なぜなら神は「秩序の神」であり、どれほど「天才的な」無秩序であろうとも、無秩序にとどまることはないからだ。なんらかの無秩序のなかにいることを心地よく思うひとは、神とのおりあいもすつきりとはいかない。あなたはあるひとの書きものの机を見れば、彼の書きものを見るよ

りも、そのことがよくわかるであろう。

しかしこのことは、外的秩序のたんなる狂信者たちが神に近いという意味ではない。さまたげになるものがひとつ少ないだけだ。そしてこの狂信者たちが秩序を愛するあまり、はためいわくな存在になるなら、さまたげがないどころか、たんにひとつの悪魔が他の、もっとわるい悪魔によっておきかえられたにすぎない。(Ⅱ・2・8)

*

生の意義というものは、生を、ますます高い目標にむかって前進する一段さきの存在にたいする学校とみなさないかぎり、哲学や宗教によってすっかり会得するというわけにはいかない。この学校時代にわれわれは、自由な精神存在になるために、この地上でいつまでももっている動物的なものを、肉体的なものとともに最後には完全にぬぎすてしまわねばならない。人間のおくのおくなるたましいの欲求もそれをめざしているのだ、それに対抗するのが悪であり、悪はあらゆる手段をつくして人間の完成をさまたげようとする。地上生活をおわるときに、肉体のない霊の生活をつづけるほどじゅうぶんはまだ霊化されていないひとびとや、あるいはさらに精神のないたんなる物質に化してしまったひとびとはどうなるのか、これはわれわれにはわからない。福音書さえこのことについてはすっきり語ってはいない。だがわれわれは、彼らがおそらくもつときびしい「後期課程」にはいらねばならないとしても、この学校をくりかえすことができるように願っている。

ルカ二一・三六、二〇・三五、三六。(Ⅱ・2・10)

*

重荷をよろこんでせおう、これが生の最大の「わざ」であり、このわざをなしうるひとが、真の「世わたりじょうず」である。しかしこのわざは、あすという日を思いわずらいながらおこなうものではなく、ひたすら神を信じ、日に日に信仰をあらたにしてのみやれることである。

マタイ六・三—三四。ルカ二一・二八—三六。(Ⅱ・2・13)

*

マタイ六・三—三四⁽¹⁾によせて。

すぎ去ったことをあまり考えすぎず、おなじように将来のことも、あまりくよくよ思いわずらわぬ習慣を、いったん身につけてしまえば、時間と心情の平安はいかにも多くえられる。しかしそのためには、忠実で思いやりのふかい神をもつことが必要である。そうでないなら、ことに思いわずらいのない生活は不可能であり、それこそ軽率、というものだ。神にたいする力強い愛とむすびついてこそ、思いわずらわぬ生が可能となるので、すでに多くのひとがその生で経験したことである。わたし自身にとっては、思いなやむもとなった多くの苦しみを、すっかりまぬがれるか、あるいはずっと軽くしてもらったのである。そしてわたしの生ですべてほんとうによかったものは、思いがけず、不意にやってきたのであった。ただわたしはたいいとき、それにじゅうぶな用意をそなえていなかった。というのは、神の道をあゆませないよけいな諸計画に多くの時間をついやしていたからである。人間を信頼するということは、つねに危険なものである。しかも彼らの身分と地位が高ければ高いほど、いっそう危険なものである。エレミヤ一七・五—九。(Ⅱ・5・14)

(1) 「訳者注」 「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであらう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであらう。一日の苦勞

は、その日一日だけで十分である。」

*

現代の世俗人たちの表情や態度のすべては、「おれは、おれのまわりの、おれ以外のひとをすべて軽蔑する。おれはやつらとはなんとも無関係だから」と言っているようだ。このことは、表情、態度のどちらもそんなふうにはみえず、ふつうはさらに大きな不安と、ひとに印象を与えたいという願いを秘めている場合でもかわりはない。この願いはたいですでに外的なおめかしにあらわれている。

われわれは、あらゆる手をつくして、われわれの子どもたちをこういうやり方から遠ざけ、ふたたび人間らしい品位をもつ態度にしたしませねばならない。しかし、しばらくは、富裕なひとびとがこの自信たっぷりの調子をとるであろう。彼らはほとんどみな、上から見くだすようなけわしい目つきをしている。ところがさんねんなことに学者たちもよく彼らのまねをして、なにかという「上品」ということばを口にする。こういう風潮を生む学校は、お屋敷とならんで近代的湯治場とうじばで、そこに行くとき多くのおよそ種種さまざまなひとびとと内心は冷淡に、あるいはぶあいそうにさえつきあひながら、地元本来のひとたちには目もくれないのがふつうである。湯治場はそれゆえ、とくに子どもにはわるい滞在地である。(Ⅱ・

5・30)

*

世間はほうつておくがよい。いまの世のなかのありさまは、パウロの手紙が書かれたところとちょうどおなじ状態である。第二テサロニケ二・一二―一三。第一テサロニケ五・五―九、一六、一七。ピリピ四・四―七。いま目前にどちらもまちがっている同士がもやしている闘争におちいらないことによって、正しさを示すのがわれ

われの任務である。そのことから、さしあたりはまだたいしてよいことはうまれないが、これらの争いからのがれて救助船に救いあげてもらいたがっている遭難者をたすけるために、真のキリスト教がつねに存在してはならない。

人間は生きて努めることをくりかえしやりださねばならないが、いまこそそれを最後にあらたにはじめるときである。いまあなたは、神学書・哲学書の多読を、いわばすっかりやめるがよい。あなたはいまや行動にじゅうぶんなほど強くなった。いずれ行動こそは、教会も書物も説教もなく、ただ生命と行動ばかりがある国、この地上では苦しい努力のはてにかちえたものが、自明の天性になりきってしまう国においてわれわれの唯一の任務となるであろう。「主よ、わたしたちはあなたの救いを待ち望む。」(Ⅱ・6・8)⁽¹⁾

(1)〔訳者注〕創世四九・一八。詩篇一九・二六六。

*

マタイ八・二三⁽¹⁾によせて。

それ自体おしむべき少なからぬよいものが過ぎさって行く。それは、過ぎざるにまかせて、しいてとりもどそうと思つてはならない。生はたえまない前進であつて、すでにあつたことのたんなるくりかえしであつてはならない。最後の瞬間まで、毎日毎日をひとつの作品とすべきであろう。(Ⅱ・6・11)

(1)〔訳者注〕「イエスは彼に言われた、へわたしに従つてきなさい。そして、その死人を葬ることは、葬儀屋に任せておくがよい。」

*

なにもよい結果を生まないのに、時間と精神力をひどく消耗させることから遠ざかるがよい。大多数

の団体、会議、委員会、講演会（するの、聞くの）などがそれにかぞえられる。そういうものが生きる力をもった有益なものであるかどうか、どういう場合に支持を与えたらよいのか、あるいは、社会や新聞に名を売ったがっているひとたちのなくさみごとにすぎないかどうか、それを見きわめる正しい本能をもたなくてはならない。（Ⅱ・7・18）

*

青年男女の言行をあまりまともなうけてはならない。ことに、すべての真理が平気で公然と討議論難されている現代、しかもあらゆる愚行悪事があつかましくも世に出るたびに、やがて無数のファンにとりまかれ、ついにパンテオンにまつられるにいたるこの現代に、若いひとたちは、とくにいま、キリスト教的、一元論的あるいは唯美的（やみ）人生観のあいだをいくえにもゆれさまようことであらう。しかもさんねんなことに、最後の決定作用をおよぼすのは、ほとんどほんの偶然といってもよく、経済状況とまでは言わないが、一冊の書、ある仕事、結婚、幸いな、あるいは不幸な出会いなどである。ふとしたことでべつな道を歩む可能性もまた同様にあったかもしれないのだ。三十五歳から五十歳までのひとの言行は、まだそのひとの完全な意見ではなく、最終判決でもない。まだまだ上告が考えられる年なのである。（Ⅱ・8・30）

*

ほんとうにいい結婚とはそもそもなにか。本質的には、来世の新生を思うとき、先だって逝った妻と来世でふたたび相まみえることが、当然なばかりでなく、ほかならぬ必要なことだと感じることによって、その意味を知るのだ。さもなくば、自分の精神的自我の一部がいたましくも欠除していることになる。

（Ⅱ・9・6）

★

詩篇八一・二一七。これはある民族全体にとっても個人にとっても、そのとおりこころみてやりがいのある申し出である。この申し出のかわりに、「現代的世界観」からなにがえられよう。たえざるおそれ、多くの労苦、それにはたいはいはかない官能の楽しみか虚栄の満足にすぎない幸福である。エレミヤ一・一三、一九・三・二五、一五・一五一二、一七・五一〇。

だれかたよりにできるようなひとがいないとこまるものだ。だれも、最大のひとといえども、つねにひとりで立つことができるほど強くはない。あるひとびとが、たとえ最善、最強のひとであっても（そのうえそういうひとがいつでもえられるともかぎらないが）、あなたにたいして、すっかり神の助けのかわりになってくれると、ほんとうにあなたは思うであらうか。

かならずしも哲学を職業としていないたいいのひとびとにとっては、純粹に実践的に考えれば、世界観の問題はけっきょくこの点にしばられてくる。（Ⅱ・9・27）

★

こうしてわれわれは、まず最初は信者であり、ついで禁欲の苦行者であり、最後に伝道者となる。この状態のどれもそのときどきに、徹底的にやりぬくべきものであり、またそういうわれわれの性格に各段階のきえがたい痕跡をのこさなければならぬ。そして、ある人間が彼の精神的存在のこのような通過形式のひとつに、たとえば、つまり効果のない信仰や愛のないあきらめなどに、いつまでもふみとどまっているのは、よくない。（Ⅱ・11・23）

＊

生活の単調さは、恵まれた境遇であつても、ひどく年をとるとたいへんましてくるもので、力強い宗教的な樂觀主義がなければどうしてたえぬけるのか、わたしにはわからない。宗教的でない樂觀主義だと、ものごとをありのままに見ることをあきらめるか、それとも、ほんとうはもっと若いときならふさわしいような享樂、享樂ははかないのがたてまえであるが、そのかりそめの享樂をたえずくりかえして確保しようとするか、あるいはそれとも、ただ思い出にのみ生きるかしなければならぬ。

しかしいつさいの基調音は、伝道に表現されているようなベシミズムであり、神の近くにあることにもとづいていないすべての哲学的人生觀にひそむベシミズムである。

「いつさいは空である」、そして多く学びすぎてもついに「からだが疲れる」ばかりで、これまでずっと知らなかった新しいことへ到達するわけではない。神との強烈なまじわりだけが、つぎることのない生命をもっている。伝道一二・一、七、八、九、二二、一四。(Ⅱ・12・15)

＊

ヴィネがあるときつぎのように言った。キリスト教が全生活にしみわたっていないところでは、生活は周囲に空虚をひろげてしまっている。キリスト教にいだかれていながらキリスト教的でないひとは、心に砂漠をもっている、と。われわれはこの多少一般的に言われた考え方については、さしあたりはまだなにも言わずにそつとしておこう。

ゲーテ崇拜者ばかりでなく、古典的教養をつんだ多くのひとびと、なかでも歴史家は、この考えの絶対性に反論するであろう。しかしこの考えは、キリスト教を信じていると自称するひとびと自身には、じつ

によくあてはまる。彼らのキリスト教とは、彼らの生活ぜんたいをみたしているものではなく、たんに教会のある種の外面的形式にのつとることであり、あるいは、なんらかのせまい種類のキリスト教団体に所属していることにすぎない。こういうところには、社会的教養と同時にふかい内面の形成が欠けるといふ様相が生ずる。たましいが高い考えにいきいきととりくんでいないと、真理の霊がたましいにたえずやどりはたらくことは考えられない。たんなる神学的知識を身につけるだけでは、そのじゅうぶんなおぎないにはならない。これは、今日でもときおり容易に見うけられる。

マタイ二三・二三。(Ⅱ・12・23)

一一 結婚について

神への関係は、なにはさておきわれわれの側からまったく誠実でなければならない。この関係に、大きな動揺や全然の不信実が来ようとも、そのあとで回心がくるなら、耐えられるが、冷淡な無関心とたんなる義務の遂行をやっているにすぎないならかの形式主義には耐えられない。

これはすでに人間相互の真の友情においても、同様である。友情もまたたんなるおつとめの感情だけでは保てるものではない。

この点にこそ今日のあらゆる教会の重大な欠陥が存する。事実、教会は他の外的な方法ではおぎないえない多くのことをなし遂げてはいるが、なしうる最善にして最高のことをしてはいない。(I・2・1)

*

宗教上のことでは、絶対的な真実性と現実性のあることだけが必要である。たましいのこもらない

あらゆる形式、たとえば、注意を欠いた食前の祈り、気のすまない教会通い、いやいやながらの家庭礼拝のごときは、信仰に益のないどころか、信仰をそこなうものである。いわゆる敬虔な家庭の幾千の子たちに関する経験が、これを雄弁に証明している。(I・5・14)

*

ヨハネ一三・三四においてキリストが語り、弟子たち^{でし}にいわば彼らの憲法としてさずけているあの「愛のおきて」は、すでに当時「新しい」おきてであったし、その後もずっとそうであった。今日もなおこのおきては、大きなキリスト教会にはないが、小さいキリスト者群には存在している。一般に人間の相互関係の原理とされているものは、せいぜい権利のおきて、相互の法律義務のおきてであり、最高の場合に公平(aequitas)と人間性(humanitas)、あるいは良心の「絶対命令」であるが、ふつうは強者の権利や、生存競争であつたり、あるいはたんなる美的感覚や「享樂生活」である。あなたがキリスト教のこの基礎的なさだめをあなたの生のおきてとしてみとめ、正しく身につけるかどうかによって、あなたはキリスト者であり、さらにそれにむすびついている超自然的な保護と祝福とを期待していいのである。さもなくばあなたはただ自分でできりぬけていかなければならない。この愛の新しいおきてはしかし、習いまなばれ、実行されねばならない。それは自然に効力を生むのではなく、このおきてにたいする真剣な決意によってのみ力をもたらすのであり、このおきてはわれわれの本性や今日の教育にはぜんぜん存在しないものである。ひとびとを正当に判断して、しかもなお愛する、これが生における最高度の人間の英知と経験であり、これが成就するのはたいいて晩年である。(II・1・8)

*

いわゆる社会政策とか平和運動とかその他これに類することに、あまり熱中しすぎてはいけぬ。これらはどれもたしかに重要で、しかも大部分は賞賛すべき努力であるが、しかし、これが社会的問題や、そのほかの問題を解決するものではない。この世のありとあらゆる種類の非常に多くの悲慘は、それによっていくらかも減るわけではない。そして、人類はけっきょくもっと多くの愛によって、しかもひとりひとりの、きわめて強い愛によってのみすくわれるのだ。だれにとってもこの愛は、まず自分の「隣人」からはじまる。真のキリスト教の精神でもあるこの愛の精神のみが世界を救う。他のものはすべてこれに反し、ただ声ばかり高いむだごとである場合が多い。世間はこのことをもう少し明確に知るべきである。そうすれば、われわれはもはやあやまつた理想を追わなくなる。そのあいだにわれわれ自身、まずおのおのがまつたくひとり、また、身のまわりから、これまでとはちがう考え方をし、真剣に愛をもつて生きてみようではないか。そして、ただ權利とか現実政策とか「全体のために」などといって働かないようにしようではないか。なるほど、こういう生き方をしたほうが、世間にはずっとよくみとめられるであろうが、しかし、神とおのれの良心のまえではそうはいかない。しかも「この世の君」の支配はつねにかわりのない。だからこの世の君は全力をつくして、じゅうぶんおそれるべしと思われるひとびとを、できるだけ早く集会や協会や政党などに加入させる。そうすれば、彼らも悪にとって、ほとんど危険なものではなくなる。ルカ一〇・二五—二八。(Ⅱ・4・2)

*

わたしはいろいろある教会のうち、どれかが、キリストの考えていたとおり、の教会だとは思わぬが、どれかある教会に反対するものではけつしてない(カトリック、ギリシア正教、イギリス国教にも反対するものではない)。むしろ反対に、真のキリスト者は、この世のおわりにいたるまで、すべての教会民族

のなかでいつもただ少数派をなすにすぎない、と思う。これはまた主が、「女がとって三斗の粉のなかにまざるパン種」といわれたことばにも実によくあたる。粉はパン種のおかげで食用になるが、それ自身ではパン種ではない。われわれもそれで満足すべきであり、パン種ならば量より質をはるかに重視すべきであるが、粉ならば、食べられて多くのひとの栄養ともなるパンが、それからつくられれば、それでよしとすべきである。そうはとらず、ことがらをそう考えないと、ひどく要求をさげて、ただ受け身で教会に属し、その儀式にくわわるのみになってしまうねばならない、あるいは、キリストはごく少数のひとを救い、それ以外のひととは救いもなく、ほとんど冷淡なくらいにあつかわれ、人間のわけまえとしてこの世の君にゆだねられるのだ、とそう考える宗派的な考え方にならずや達するにちがいない。

ふたつの考え方も、主がみずからの生涯の活動について考えていたことではありえないので、したがってまた、われわれの生涯の活動としてもならない。

それゆえ、ふつう考えられている最後の審判は、いつでも、全民衆が永遠の罰をうけるという印象の強いものであり、いとわしい印象のもののだが、わたしにはそういう審判は想像もできない。わたしの思いえなくさばきは、ひとりひとりどのたましいもが、忘却の流^レれをわたると、その生命の自然な継統をうけるというものである。さばきは、めいめいの精神状態^{スピリチュアル}いかによるものであり、またさらに、その精神状態が、思想がすべてで物質はもはやなにもでもない新しい彼岸^{ウエル}の生活条件に、どれだけ適合していけるか、その多少の度合いにもよる。(Ⅱ・4・22)

*

マタイ五・三三があることを知りながら、離婚したひとたちに再婚をゆるすことは現代ヒューマニズムの要求であり、したがってまた現代の法においてみとめられているのは当然のことだと、どうしてあなたは

言いえようか。これはむしろキリストのまことに決定的なことばに反するものだ。したがってそこにはまたなんの祝福もない。わたしはまだ一度も、こういう結婚がほんとうに幸福だったのをみたことがなく、そしてその必然性もみとめない。離婚はときにはどうしても必要なこともあり、もともとその点に問題があるわけではないのだ。キリストはただ再婚を禁じただけであって離婚はかならずしもそうではなかった。カトリック教会はわれわれとちがってこの点正しいのだが、このいましめをことばどおりきびしくまもっていたなら、おそらくもっとよかったであろう。べつの結婚をしようと考える離婚は、わたしの考えるところでは、その当事者たちをキリスト教会から精神的にしめだすことになる。前述のように、ある事情によつては離婚の必然性はあるかもしれないが、しかし再婚する必然性は道徳的教養をつんだひとにとって、ぜったいではない。ことに、男から男へとわたりある婦人は、たしかに、困ってお金のためにそうするあわれな街娼^{がしやう}よりも神の心になわなないことがむしろ多い。たいていの場合は、この場合にもやはり金銭が一役かっている。

それどころか離婚した婦人と結婚する牧師にいたってはいまわしい現象である。

姦通^{かんつう}やそもそも道義的純潔というものは両性にまったく平等の問題であり、それゆえ夫婦のどちらにおいても道義的純潔が幸福な結婚を形成するのに必要な要求であり基本的条件であるということ、わたしたちはさらにそこまでいかななくてはならない。ことにドイツではこれがもう一度一般人の確信とならなくてはならない。(Ⅱ・4・29)

*

カトリック教会は、われわれよりも結婚を厳粛にとりあつかっているが、しかし、カトリック教会が、みずからきめた規則を、しばしば結婚無効宣告によって回避し、その宣告がついに離婚のかわりになるば

かりか、再婚をもゆるし、けっきょく最悪の事態をすら生むようになってゐることを、われわれはとがめたい。結婚問題はいつの世にも人間生活の主要問題を形成するものであり、ある民族の道義の水準一般に、きわめて大きな影響をおよぼすものである。教育も、わるい結婚がはやっていては役にたたなくなる。それにしても、いま二、三の目標を注意しておかなくてはならない。

一、相互の愛がなく、ただ外的理由からむすばれた結婚は、不道德な関係であり、したがって非難されるべきものである。

二、夫婦の負う義務は双方に平等なものであって、夫よりも妻にきびしいというわけではない。肉体的義務は、けっしていちばんたいせつなものではない。

三、よい結婚はもつとも美しい人間関係である。しかし、どうしても必要なものではけっしてない。人生の享樂よりもっと高い興味を知っていれば、結婚なしでもじゅうぶんうっせな一生をおくることができきる。

この点についてキリストはきわめて明確で、完全なことを語っている。生の享樂を過大視することをやめなければ、すべてのひとの結婚がもはや不可能になるので、われわれは国民の道義を維持しえないであらう。しかし、結婚外の性的関係は一種の動物状態への逆行であり、したがって教養あるひとや、ましてキリスト者にはふさわしくないものである。マタイ一九・四—二。

結婚は人間の、神の心になつた生活状態であり、どんなしかたであれ、これに反対するひとは、かならず、わざわいをまねかすにはいない。それは最悪の意味ばかりではない、——というのは、姦通したひとの子はけっしてさかえず、また結婚外の結婚生活をおくろうとするひととは、やがて理想にたいする

すべての心をうしない、それに無感覚になつてしまふことは、よくみられるところだから——、そればかりか、結婚そのもののなかに、正当で、神の心になう本質があり、男女のあいだの力の正しい自然な分配があるにちがいないからである。(Ⅱ・4・30)

*

巡礼のまとなるべき聖地は、強い感銘をうけたところであり、さらに神の呼び声までもきいた場所である。それはかならずしも教会とはかぎらない。おなじように、自宅の居室であることや、野や森や、山のいただきであることもよくあることだ——。ところでこういうつねに個人的な神の近在が、多くのひとたちに決定的に影響を与えようものなら、後世のひとびとはそこに教会堂を建てる。しかし、教会は靈を自分にひきつけてはおけない。あるいは、このような神の近在のもぬけの殻の上に、教会を建てたりもするが、これは、生前着ていて、脱ぎすていった衣服同様、神の近在と関係はないのである。なにかを崇拜したい欲求は、人間の本性であるが、偶像崇拜は真の崇拜よりもずっと容易である。真の崇拜とは、精神的内容の把握であり、模範として積極的にはげむことである。だから、崇拜者がもつとつごうのいい崇拜の対象を発見したり、崇拜されている側が自分たちにじゅうぶん影響を与えてくれないと、崇拜者もかんとんに背教者や裏切り者になる。すべての宗祖たちが、適当にはやばやと世をさらなかったときは、みなこういう目にあっている。(Ⅱ・5・16)

*

善事における進歩の段階というものはそれぞれの段階に多少のちがひがある。したがって、あるキリスト教団や、さらに一教会全体を、ひとりの牧者にみちびかれる一様な羊のむれと考えるひとは、まちがっ

ている。これは、福音書にでてくるこの種のたとえ話から、あまりに強引に教会的觀念に移しかえられたものにすぎない。個々のどんなたましいでも、まったく独自の精神存在であり、たましいの幸福のためにはそういうものとしてあつかわれねばならない。画一化からは、ともすれば無気力やさらには偽善さえも生じやすい。そして、いまや困ったことに現代のあらゆる文明国民のうちに根をおろしてしまったふかい教会嫌悪も、このことに由来する。これはしかし、改良しなければと思ひながらその正しい思想をまだ見いださなかった真理感情の反動なのである。なおしばらくたち、「死人が死人を葬って」⁽¹⁾しまったのちに、はじめてその正しい改良思想がみつかるであろう。それはますますではじまっている。(Ⅱ・6・10)

(1)〔訳者注〕マタイ八・二三参照。はじめの「死人」は「葬儀屋」の誤訳。二〇一ページをみよ。

*

あなたは政治をすっかりあきらめてしまふべきであろうか。けっしてそうではない。あなたはあなたの国をたすけて、ささなくてはならない。国家はまさにいまそれが必要なのだ。

しかしいわずに「時代精神」に仕えてはいけない。また、その標語にはどんな敬意もはらってはいけない。そして哲学、ぜんたいをも、安心してひとりで拒否してもよい。哲学は、成功する生活の基礎をみつめようとはねをおっているが、まったくむだなことである。真理の霊を吹きこまれたよりよいひとびとが哲学の仕事につくまでは、哲学にはかりそめにも祝福はない。ヨハネ一四・一七。(Ⅱ・6・30)

*

ヨハネ六・六三⁽¹⁾。宗教を職業とすることは、たいそう危険である。それは(ルカ一・八二〇にある)老ザカリヤ以来何千という祭司たちや、あるいは、律法学者、神学者、あらゆる種類の聖職者たちが、その身に

経験しなければならぬことであつた。宗教は生命の塩であり力である。しかしわれわれはただ歌い祈るばかりではなく、働き、自分の義務をはたさなくてはならない。機械的なもの、たんなる形式にすぎないものは、キリスト教がもつとも思ふところのものである。だから主は、ひじょうに激越なことをもはばかりず用いて語つた、いやしい女と取税人のほうが、当時の敬虔なひとびとよりも天国にはいりやすい、と。このことが福音書にも録されていること、キリストを大祭司にしようとするうごきがはやくも出てきたものの、キリストは、そういう祭司的なところや現在のプロテスタント的な意味における牧師くさいところはさらさら身につけていなかったといふことは、大きなぐさめである。

それゆゑ、もしあなたにとって宗教が習慣的になつてしまひ、もはや心に生氣をふきこんでくれなくなつたなら、危険な深淵のふちにのぞんでいるのだ。宗教についても、読む本のなかでも、職業化し因襲と化した印象を与えるものは、ことごとくきれいさっぱりとそのなかから抹殺してしまふがよい。そして教会での説教がこんな種類のものだったら、もう教会にもいかぬがよい。——わたし自身その態度をとりつづけてきて、神にこの点を感謝している、——とくによわいをかさねたいまになつて。キリスト教は、主みずから述べたように、「霊と生命」であつて、いついまでもそれに変わりはないであらう。

(II・7・11)

(1) 「訳者注」 「人を生かすものは霊であつて、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」

*

イザヤ五五。このことばが真実であるなら、なにゆゑこれほどに社会的苦悩がはなはだしく、それをなげく声がこれほどに多いのか。そのまゝに、労をおしますあのことばどおりにやってみるべきではない

か。(Ⅱ・7・26)

*

社会主義者たちにもすぐれた点があり、彼らの民衆とのつながりをもっとも直接的なものであり、彼らの民衆につくす配慮はじっさいある面では、彼らをとおして神のおこなうみわざであるということである。彼らの基本的見解のこのような部分的正しさが、彼らの強みをなしているので、彼らの扇動^フのしかたが、強みになっているのではない。彼らは無意識ながらもやはり神のしもべなのだと、われわれは考える必要がある。したがって彼らも、彼らの無神論にもかかわらず（さらにわれわれもみなおなじことだが）、神の寛容のもとにあるのだ。(Ⅱ・10・27)

一二 生命について

完全な健康体でなければりっぱな仕事はできないから、なにはさておき健康でなければならない、という意見をあなたはそうだと思つてはならない。これは現今の多くのよいひとたちの迷信である。大昔にはひとびとはある程度の病弱をもつて天才的獨創性のしるしと認め、がんじょうな健康を「凡庸」と見なしたのであるが、今は反対にからだの心配があまりにはなはだしくなりすぎている。

病弱はよい仕事にたいしてなんらさまたげとなるものではない。最大の業績がすでに病身者によつて果たされている。しかも非常な健康が、必ずとは言えないにしても、實際精緻な精神的感覺のある欠如を招くことしばしばである。あなたが健康ならば、それを神に感謝しなさい。しかしあなたが健康を欠くなら、できるだけこれに拘泥せず、これにさまたげられぬようにしなさい。そしてたんに健康のために生きることを欲する考へは、教養ある人間にはふさわしくないと思ひなさい。(I・3・4)

*

自分の思考、自分の意見のある人間が、もっと多くいたら、世のなかは何れほどよくなるか測り知れない。そういったひとたちが反対意見をもっていたとしても、その意見の正しくないことを納得させて、説を改めさせることはできるが、たんなる付和雷同者^{ふわらうどう}は自分で考えようともしないのであるから、まったくしまつがわるい。

このことをロックが多少ちがったことばで次のように述べている。「世間には、まちがった意見は一般に想像されているようにたくさんあるものではない。なんとなれば、おおかたのひとはまったく意見をもたず、他人の意見をうのみにし、あるいは伝聞や風評で満足しているからである。」あなたはそういう仲間であってはならない。(I・3・17)

*

今日の教養あるひとびとにおいて見られるもっとも嘆かわしい現象の一つは、彼らが健康にあまりにも大きな価値を置くことである。健康保持の関心がまさにあらゆる他の関心を凌駕^{りやうが}するほどのものであるのを実にしばしば見受ける。世界歴史において多くのよわよわしいひと、病弱^{びじやく}のひとが、それにもかかわらず、否し^{いな}しばしばまさにそのゆえに、最大の事業や苦難によく耐えたことを、まったく忘れてるように思われる。

第二コリント四・一六、七・二〇、一〇・二〇、一二・二〇。コロサイ一・二四。イザヤ五三・二〇、二一。

けれども、健康と力とへのこのあこがれの真の背景は、なんらよきことをなしえないという気づかいではなく、むしろ彼らがはばまれていると感ずる生の享樂へのおさえがたい貪欲^{どんよく}である。そしてこの事実が

またかえつて、往々にして実際にしかもきわめて楽しみをばまれてなやみのなかにあるひとびとにたいしてじゅうぶんの同情をおぼえることを、まことにむずかしいものに行っているように思われる。

健康はたしかに大きなたまものではあるが、しかしこれを過重してはならない。むしろ健康の減退、あるいはその喪失すらをも、品位をもつてたえ忍ぶことを学ぶべきである。なんとすれば、健康はけつして最高にして、また不可欠の善福ではないからである。(I・7・2)

(1) 〔訳者注〕シラーの劇詩『メッシナの花嫁』の詩句にいう、

「いのちは宝のいと高きものにあらず、
わざわいのいと大いなるは罪過なり。」

*

病的状態は、それをあまり意に介しないできるとまったく自然に消えうせてしまうことがよくあるものである。また病弱なひとびとで、いろいろな療養を自分に適用してみる外的境遇に置かれていないために、長年にわたって忠実にしかも欣然として自分の職責を果たしている者があることは、さらにしばしば見うけるところである。しかるにいっほうでは療養の公共施設に、たえず滞留して無益な、内的になぐさめのない生活を営んでいるひとびとがある。こういうひとびとの多くは、彼らになにかすべき義務あることを簡単にわからせえたら、救われるであらう。つねに病弱なひとびとにはしかるべき義務と使命のほかななものも実際欠けていないことが少なくない。彼らになにか彼らが力い、つばいにやる仕事を課したら、彼らはそれによって、あらゆる治療やあらゆる静養や看護によってよりも、健康になるであらう。このことはどの御者も自分の馬のために知っているところである。ところが多くの医者や看護人は、自分たちが補導

しなければならぬ彼らの患者のために、このことを知らない。

多くの場合もつとも健康に益あるものは、正しいまことの愛である。かかる愛は当然の結果としてあらゆる卑しい利己主義を拒否するからである。しかしこの妙薬はこの町にも見られるというわけではない。まただれでもが自分にこれを適用できるわけのものでもない。ことにこれのもつとも貧弱な模倣（もほう）をもつてすでに事足れりとしているひとびとには、もつとも施用がむずかしい。（I・7・3）

*

むずかしい病というほどのものではけつしてないのだが、現今非常に蔓延（まんえん）している神経衰弱症（しんけいしょうじく）のやつかいな点は、これがきわめて容易に意志力の衰退をまねくばかりでなく、道德的判断力のおとろえをもたらし、かくしてこの病に襲われたものは、醜惡（みにく）なことを考えまたみずからおこなって、もはやそれにたいしてじゅうぶんな嫌惡（きら）を感じることもできないようになることである。これはついに、イギリス人がいうところの「破倫狂」（moral insanity）にみちびくものであるが、現代の「美」文学の少なからざる部分是不幸にしてこの影響をこうむっている。たしかに今日においてしばしばこのような生活はまったくふつうの狂気に終わるのではあるが、それにもかかわらずこの唯物的文学（やうぶてき）の大洪水はなおその盛時をたもちまたあじわい尽くさねばならない。そのあげく多くのひとびとの目はふたたび、救助のきたる山々に向かつて目をあげることができるのである。（詩篇一二・二、二参照）

ともあれ、少なくとも各個人は、もしこの病にかかっていることを自覚したならば、文学・芸術・社交における神経衰弱症との接触をきわめて慎重に避くべきである。神経的不健康は（健康と同様に）感染するからである。正しいじゅうぶんの仕事とよい家族関係とは、外的な手段としては、最善の保護である。内的には、あらゆる健全な生活の根源たる神へのまったく誠実な信頼がそれである。とはいえ、まさにそ

れゆえにこの関係はなんら空想的なるものをともなうことを許されない。ややもすれば信仰的な小説によく見られるような敬虔けいけんと感覚的描写との混交をともなうことはまして許されない。これはまさにこの病におけるもつとも有害なものである。それは治療手段をみずから偽造するからである。

ダンテ『神曲』地獄篇第三歌一〇三一—一〇八行、第五歌三四—三九行。⁽¹⁾⁽²⁾

ともかくも、神経衰弱症という時代病は、その原因が一部は遺伝的であり、一部は現代世界の一般状態のなかにあるのであるが、その時代病にたいして、三つの肉体的手段と二つの精神的方法とがあつて、それらは相互的に作用しなければならない。すなわち、睡眠、新鮮な空気、肉類が少なくアルコールをまったく含まない良き栄養、堅き信仰と地上における神の国のための仕事、その他に有効な治療手段は存在しない。そしてこれらは必要な場合には家庭においても適用することができる。(I・7・17)

(1) 〔訳者注〕

神とおのが両親と人類と

また彼らがまかれ彼らが生まれたところと

時と種とをけがした。

かくて彼らは皆激しく泣きながら

すべて神をおそれないひとを待つ

わざわざの堤に寄せ集まつた。

(2) 〔訳者注〕

その突進のまえに彼らを苦しめる。

ここに悲鳴、愁訴また悲嘆がある。

彼らはここに神の力をけがす。

かかる呵責かじくに罰せられおるは

理性を本能に従わす

肉欲の罪人であることをわたしは悟った。

(中山昌樹訳)

*

死の思い、これは若きひとびとにとっておおかたは恐怖をいだかせるものであろうが、正常な事情のものとてしかなんら良心の不安がこれに加わらなければ、死の確率が増大するにつれてかえってこの「恐怖の」性質を失うものである。

そうすれば、死は日常の夜の眠り、朝の目ざめという移り目とさほど本質的には差異のない大いなる移り目と思われてくる。この事象そのものについての権威ある報道をわたしたちは一つももたないこと、あたかもまだだれでもとにかく就眠の事象をつまびらかに思い浮かべえないごとくである。ところが近代の有名な作家(トルストイ)は死の歩み、寄りに際しての感情について次のようなことをのべているが、これは多くの他のひとびとの経験と符合する。「わたしはふだん死生に結びつけていた思想からいよいよ遠ざかって行つた。死はわたしにとってその恐ろしさを失い、死はやむことを知らぬ生への一つの間奏曲(間奏曲)を演ずるものだとの認識にわたしは日に日に近づくのであった。わたしは耐え忍んで、しかり、欣然として死を待ち、死を迎える境地に達した。永続する生にたいする確信はわたしのうちに強固になり、あらゆる疑惑は力なく消えうせ、しばしば新生の子の嬉々たる声のようなよろこばしい叫び声がわたしの胸からわきたとうとするほどであった。かぎりない幸福感がわたしのたましいを満たし、わたしは親友を待つたのごとく死を待った!」

大なる過失とはごしがたい紛糾(ふんきう)にたいしては、神の与えた死がたしかに、しばしばあらゆる問題を解決

する唯一のなお可能な出路であり、多くの憎悪と憤懣^{ぞうお}とをなだめうる調停者である。これに反してただ「死にたがる」ことは、人生の難渋^{なんじゆう}をまぬがれるための不誠実な手段である。これはあたかもへたでいちぎな遊戯者がカルタの札^{ふだ}や将棋のこまをかきまぜるようなものである。われわれがこの人生に召しいだされているのは、わたしたちがもはやなんらの興味をも見いださなくなつたときにかつてにまたこれから遠のくことができるためではなく、わたしたちにとつても他人にとつても有益な生存を営み、神がしかるべき時機にわたしたちを呼びもどしてくださるのを待つためである。ヨブ五・一七―二六。

そして思うに、かつて気ままな死で、ことがけつして終結するわけでなく、おそろくはるかに困難な別の生活がこれに続くであろう。ことがこのようであるならば、わたしたちはどんなことがあつてもかつてにこの人生を断ち切るわけにはゆかない。(I・11・1)

*

ルカ一六・一九―三二。「富者と貧者ラザロのたとえ話。」いわゆる「永遠の休息」にふたたび帰らぬ逗留^{とまりどまり}をしている者が、なお地上の生活のあきらかな追憶をもち、かつこの生活にたいして影響をもつか否かについては、聖書はわたしの知るかぎりではどこにも明白に述べていない。上記の物語はなるほど直接にはこれに反対していないが、ともかくもこの物語から、しかもまた論理を自然にはこべば、ただよからぬひととは必ず、やその失われた生活を追憶して深く悔いるに相違ない、ということをもしる認容すべきであろう。

ひとがこの地上で偶然同時代に生活したすべて、のひとびとと、たとえおなじ恩恵にあずかつたひとびとの間でさえ、しかもこのたびは永遠に、ふたたび互いに相まみえるということは、けつしてとくに心を引き立たせるような考えではない。このことは、おそろく、むしろまったく終わつてしまいたいと思うよう

な、またすでにこの世で終わってしまったところの、理想的とはどうも言いえない関係へのなかなか消えがたい思い出を前提とする。忘却はすでにこの地上における祝福の始めである。もし忘却の川⁽¹⁾がなければ、あらゆる困難の思い出のために、この祝福はなり立ちえない。

ダンテ『神曲』煉獄篇第三一歌。

しかしながら、この明確な追想がありえそうもないことがあきらかであるにもかかわらず、すでに地を去った真に愛したひとびととの永続的結合を信ずるのは、まことに拒みがたい心の要求である。そしておりにふれては彼らを思い出し、彼らが身近かにあるのをあきらかに感ずるように思う。(I・11・2)

(1)〔訳者注〕レーテ(Lethé)ギリシア語で「忘却」を意味する。ギリシア神話において、陰府の泉水で、これを飲むと亡霊たちは過去のことを「忘却」するのである。ダンテの『神曲』煉獄篇第二八歌から、淨罪山の頂の楽園に流れる川の一つとして「レーテ」のことが出てくる。他の一つは「エウノエ」(Eunoe)の川で同第三歌一二七―九行に出てくる。『神曲』においては、おなじ源泉より流れ出る二流で、レーテの水は過去の罪業を忘却せしめる力をもち、エウノエは善行を想起せしめる効力をもつ。

*

ひとはおそらくもはやたえてひとを激しく怒らなくなるだろう。もしもかの日を、かねてつぶさに知っているのなら。かの日とは、そのひとが一握りの塵^{ちり}に帰る日。(I・11・11)

*

われわれはつねに神の手のなかにあったし、いつまでもそうである。このように考えるなら、われわれが死とよぶ滞在地の変更は、なんら重大ではなく、おそろしいものではなくなる。(II・1・2)

★

世間で信ぜられているよりもはるかに多くのなやみが、神、經、的、なものである。すなわち神經の健康状態に左右されるもので、神經の藥、とくに睡眠、空氣、運動、よい栄養、および心のおちつきによってなるものだ。(Ⅱ・2・15)

★

もっとも進歩したひとびとにおいても、精神がからだのことに束縛されているときがよくあるが、からだのことがもとで、元気をなくしたり、ふさいだりしたならば、あなたはそのことをじっさい以上に重視してはいけない。からだというのは、それ自身のためではなく、精神のために保持せらるべき機械である。それで、からだのことに必要以上に心を勞したり、ましてただ「自分の健康のためにのみ生きる」ことや、あるいはまずなによりも第一にからだのことを考えるというようなことは、精神的人間にはふさわしくない。せめて重病のときならば、これもゆるされる。だが、その場合にも、できるだけ早く、じゅうぶんに精神はその支配力をとりもどさなければならぬ。完全で持続的な健康と力との自覚は、われわれがもうまったくからだに束縛されなくなったとき、はじめてわれわれのものとなるであろうが、すでに地上においてからだに依存しなくなったひとのみが、その自覚をもつであろう。自分の肉体のために生き、それにだけつかえてきたようなひとが、どうしていきなり死をへて純粹、自由な靈になれようか。だからわれわれは地上においては、きわめてほどの健康で満足しようではないか。「主なる神よ、どうぞあなたの祭司たちに、救の衣を着せ、あなたの聖徒たちにその持つてゐる恵みを喜ばせてください。」歴代下六・四一。しかしわれわれは、いまわれわれの近づきつつある未来の健康をよろこぶのである。(Ⅱ・4・17)

*

人間の性格でも、神経と関係しているものが多い。神経をいつまでもしずめておくことができれば、わがまま、怒りっぽさ、こわがり、心配性、ひとおじやひとぎらい、怠惰などの欠点もしだいにまったくのずと消えていってしまふ。ところがいつぱう、それができないと欠点が猛威をふるうようになる。けれども、神経は外用薬のみによつてしずめられるかどうかとか、すでに病状のすすんだときにはなおせるのかどうかという問題は医師、教師、人道主義者にとつてなんとしても、もつとべつな問題である。この点についてわれわれは現代医学とまだ完全には意見が一致していないが、しかし、現代医学は唯物論的傾向のより少ないもつとよい見方に目にみえて近づいている。(Ⅱ・4・27)

*

健康で、心よい、じゅうぶんな睡眠をとるようになさい。もちろんだれにでもできるとはかぎらないが。それにしてもこれは、やはりいちばんよい神経治療法であり、また心の興奮にも卓効がある。よく寝たあととはものの見かたがまるでちがひ、前夜はまだまるで巨人のように思われたさまざまな困難も、すっかり気にならなくなる。さらに、望みさえすれば、こういう健康な状態にあつて、からだのことばかりいふも心配せず、よい仲間とばかりつきあひながら、これからの全生活を送りうるのだと、そうひたすら考えれば、そのほかになおなんらかべつのことを思うのはおろかなことだと自責し、ひとびとがいやに熱心に追ひもとめるたいていのものも、ただばかげたことだとすてさるようになる。そうなれば、真の生活にいたるまっしぐらな道をあゆんでいるというものだ。(Ⅱ・5・12)

*

老年時代には、つぎにあげるふたつのことは、体験したことのないひとにはだれにもわからない、ふたつの、まるで、ちがったことである。

自分ではまだ相当に若く、元気があり、ときにはそのうえ、まだまだ生活欲があるという自覚をもつこと。第二には、現在の肉体とはなんのかかわりもないぜんぜん新しい、ぜんぜんちがった種類の生命力が自分のなかにはじまるのを見ることである。これが二種の力と述べたもので、両者は混同されてはならない。後者はけつしてただの空想ではありえない。どうかすると思ひあやまりやすい人間的な高揚感情とはなんの関係もないのだから。それにこの力は、多くの場合神経の強さであることもぜんぜんなく、死をも克服しうる別世界の諸力にほかならない。この力には、死も生のおわりという存在の意味をもちえない。

ルカ二・三四五、四七。ヨハネ一〇・二八、一一・二五、二六、四〇、五・二四、六・四七、八・五一。(Ⅱ・7・30)

*

体力をもだいじにして、できるだけセーブするようにつとめ、そのためには、医師のよい助言を用いるなら、それはたしかに、ほんとうによいことである。なぜなら、われわれはこの生命をなおざりにしてはならないのだから。けれども、これが老年時代の主要事とは言いきれない。そうではなく、だいじなのほううひとつつな力をできるかぎり強めることである。この力は死をも克服することができ、人間をしてその精神の力をいきいきとじゅうぶんに持ったままで死なせてくれる。たとえばちようど、じゅうぶんな根拠をもって、キリストについてつたえていることと同様である(マルコ一五・三九)。これを医者たちは、ふつうあまり知りたがらない。それは、彼らの聴講ノートにいまのところまだのっていないからだ。しか

しそれでも、これはありうることである。たださんねんなことにおよそめったに見あたらないだけである。高齢に達したひとが、このようなより高い生命と来世の力とをなにしつつ身にそなえていないさまは、自分にとっても他人にとってもなげかわしい光景であり、ついには自他いずれにとっても負担にしかならないことがよくあるものだ。

あなたはそういう事態におちいらないようになさい。(Ⅱ・7・31)

*

エマソンは、「靈魂の不滅、たましいはなにかに忙殺されていると、これを思わなくなる」といつている。人生の大部分の時期にとってこれは真実である。現世をこえた彼岸のことはかりたえず考えていることは、じつさい、存在と思考の一種の虚弱を意味するのだから。だが、高齢にはあてはまらない。かなり年をとるとその反対になる、というのはつまり、現世のさまざまな事象にはいちじるしく興味をうしなひ、精神は本質的に彼岸の生にむかいはじめ。ちょうど大がかりな引っ越しをまえにして、最後のときになると住みなれた家のことよりも、新居のぐあいのほうが気にかかりはじめるのと似ている。それでトルストイも、重い病いが癒えたとき、死ぬ心がまえからまたはなれねばならないのは、まことにさんねんだ、といったのである。

「わたしの道はいまや過ぎ去りはてて、

おお世界よ、おまえになんの注意をむけよう。

わたしには天上のほうがこのましい、

そこへわたしは、のりこまねばならない。

旅のしたくもじゅうぶんで、

ひどい重荷も負うことなく、

神の平和と恩寵おんちようのなかへ、

よろこびをもてすみゆく。」(Ⅱ・9・13)

*

ヨハネ一〇・二七、一八。復活の約束は、十字架上の主をもなくさめたにちがいないが、しかしこのことばはただそればかりでなく、いくらかちがった意味で、われわれのひとりひとりについても言われているのである。われわれは自分の生命も、独力でできずいた人生をもみずからすすんで放棄し、そのかわりに、神の力によっていつそよい生命をつかまねばならない。これは容易なことではないが、できることである。(Ⅱ・9・22)

(1) 「訳者注」 「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである。」

*

神経衰弱はまず音にたいする過敏や、頭脳とか足の疲労感、ついには不眠によって気がつくのがふつうである。これにたいする処置は、じゅうぶんな睡眠、あたたかさ、新鮮な空気、運動、軽くてよい食事(しかしアルコール類はぜったいいけない)、これらに精神の張りがともなうことだ。そういうとき、しば

しは、「主よ、お助けください」とさげぶと、「信仰のうすい者よ。なぜうたがうのか」という答えがきこえることもある。そして、こういう答えがあつても、助けは与えられるのだ。ヨハネ一四・三〇、三一、八・三六。どんな強い風もやがてはしずまるものである。強風が吹きつづいたところで、一日か二日寝ていれば、なおつてしまう。神経を無視することはできない。しかし、神経をかってほうだいにあまやかすのもよくない。(Ⅱ・10・24)

*

あなたが心にかけているもつとも美しい死とは、おそらく、たましいと肉体とのやすらぎのなかから、肉体のいのちだけが静かにおわることであろう。こういうやすらぎは、年をとるとしばしば生ずるものである。

心臓のかすかな鼓動が、そのときほとんどだれにも気づかれずに、とまりさえすればいいのだ。ただ、人間の有するこの地上の生命だけを唯一の生命と考えているおろかな医者たちが、人為的に刺激を与えて心臓の鼓動をひきのぼそうとしなければよい。

おなじように美しいが、むずかしいべつな死は、あきらかに英雄の、あるいは殉教の死であつて、キリストも精神の力にみちみちて、弱さをみせず、そのような死をとげたのであつた。

あなたはこのことについてこれ以上考えないほうがよい。考えても、なんの益もない。あなたはむしろ生への愛着をすてて、しかもよろこんで生の任務のために、神の心になうかぎり、生きつづけることだ。これこそは、老衰のきざしをすこしもおびない最上の老年のありかたである。

そのさきは、新しい青春のくるのを待ちのぞもうではないか！

一三 よろこびについて

よろこびは生活に必要である。ほんとうに、からだがまったく強健でありたいならばよろこびがたいせつである。それゆえになにかにつけ正しいよろこびをもつように心がけよ。だがあなたが賢明ならば、なにか永続的なもの、つねに獲得できるもの、断じて不正でないもの、あるいは自責や悔恨の念をとめないもの、そういうよろこびを求めよ。ところがふつうのよろこびの大多数は自責や悔恨をともなっている。(I・3・11)

*

いかなる意欲もいかなる享樂もはや知らぬということは、とてもすばらしいことである。そうなると来る日も来る日も新しいことでよいことが現われる。人間の生来の怒りは消えうせる。他人にもうなひとつ求めなくても、望むところのことを皆がしてくれる。以前には長いあいだ戦ってみたがどうにもなら

なかつた幾多の短所や欠点は、ひからびてもはや枝にとどまる力を失つた枯れ葉のように落ちて風に吹き去られる。(I・3・23)

*

いつわりの平安とまことの平安

(タウラー、説教一二六)

主よ、なんじの民が

胸底の深みにいだくやすらいは、

黄金の高杯に似たりとも、

盛られし水は苦味に満つ。

ひとの世の旅路は、

やすらうためのものにあらず、

ここにやすらいを求むるも甲斐なし、

憩うものは滅びん。

人生は、その始めよりおごそかなれ、

たわむれごとの場もなし。

ただ一つあるやすらいは、

大いなる目的の確かさのみぞ。

主よ、わが願事^{ねがごと}を、聞きたまわば、
もはやわがやすらぎをねごうまし。
わが目は、もはややすらいに昏^{くら}まじ、
与えたまえ、勇者の力を。

ここ、仇敵^{きうてき}のただなかにして
かたき仕事の戦いをせん。

天上の恵みの幕屋^{まくぐら}にて、
われ、平和の棕櫚^{しちろ}をかざさん。(I・3・25)

*

箴言^{しんげん}一六・三⁽¹⁾。わたしたちはわたしたちの感情と気分とにわけもなく従つてはならない。これらはわたしたちが力を加えなくとも自然にあるもので、しかもわたしたちの全存在に影響を与えるものである。いわば天候に似ている。わたしたちはこれを変えるわけにはいかないが、しかしこれにたいしては身を守らなければならぬ。かくすることにより、性格はしだいに強靱^{きやうじん}性をかちえ、やがて感情は副次的なものにすぎなくなり、しかももっぱら生活の単調に変化をもたらすに役だつこと、あたかも四季や天候の変転、昼夜の交替のごときものとなる。

とくに子どもたちは幼い時から、その感情に負けず、かえってこれを支配するように、厳格に育てねばならない。また彼らの気分^{きぶん}にたいしては、いささかも譲歩を示してはならない。また彼らの気分を尊重して

はならない。そうでないと、役にたたない不幸な人間ができあがる。そういうたとびとが今日まことに多いのである。

このようにすればついには単一な持続的な情調が生まれる。それはイザヤ二五および六一⁽²⁾が述べているところのものである。

わたしたちのうちなる悪や凡俗は、わたしたちが力強く善を欲するや、たちまち退くものである。しかしそれは後日のために攻撃を保留するにすぎない。すなわち、わたしたちが、内的成果を確かに収めてまずよることで、いくら疲れをおぼえ安心もしたら、そのときは、悪のほうではその損失を回復せんとして、相変わらずかかってくる。しかもそれがしばしば効を奏する。(I・4・3)

(1) 〔訳者注〕

「怒りをおそくする者は勇士にまさり、

自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」

(2) 〔訳者注〕 両章とも信実と恩恵においてか、わらない、神にたいする信頼と終末的希望をうたっている詩章である。神の国にたいする確固たる終末的希望は、神の国を心のなかにもち、かつ体现する終末的実存に生きて不動となる。

*

正しいひとは、だれでも生涯に一度は「悪者の数にかぞえ」られるにちがいない。こう言うことが起こらなかったら、それはけつしてよい兆候ではない。そういう目にあったときに、彼は人間のあらゆる批判をかぎりなく立ち越えてなくさめうるなくさめの神をなくさめとしてもち、この救助の意識から生ずる悔いることのない良心（このほかに真の恥なき良心というものはない）をもつならば、人間の批判を容易に

耐え忍び、しかもそれは實際はけつして想像するほど悪くもなく危険でもないということをそのひとは悟るのである。

このようにしてはじめてそのひとは、神が戦わんとされるときご用にたちうる勇敢な人間となる。それまでは、だれでも、危急のときに神の側に立つことをおそれる卑怯者である。(I・4・5)

*

「かくせざるをえず」というひとの心が偉業を成し遂げる。」これはなんたる真理であろう！ それゆえわれわれはしばしばこの「かくせざるをえず」という境地にわが身を置かなければならない。したがって、ある偉大な決意についてあらかじめ熟慮し、そして、いよいよそのことをなすべき当意と、またなさねばならぬ必然があきらかになったら、断固としてそれをなさねばならない。なんとすれば、人間の生涯の最大の瞬間には、つねにある種の悔恨の念かあるいは平常の自然性への復帰がともなうものであるから。これは一つの反動で、やがて堤防のようなゆるぎない事実に突き当たって破れざるをえない。このようにしてはじめて勝利がえられたというべく、それはこのように決意し行動してこそ容易に達せられるわけである。(I・4・14)

*

神の恩寵^{おんちよう}によって、真に深く心に感動をおぼえるよろこびをわれわれが経験したならば、われわれはただちに敵を、あるいはわれわれになにか不当なことをなしたひと(そういうひとはきつとあるものだが)をだれであろうとも、ゆるさねばならない。このようにしてのみはじめてそのよろこびは、神の目にまさしく正しい取り消されることのないものとなるのである。マタイ一八・二三^下(I・5・8)

貫け！⁽¹⁾ この短言は、内的生活の危機にあたつていくたびとなく、ほとんど魔術的な効力を發揮するものである。

この語はいまだ無力になり果てていない理性に、断念してはならぬことを、あるいはしばしばまったく肉体的にすぎない気分屈服してはならぬことを示してくれる。また同時に、残存している一片のよき意志に衝撃を与え、無性格な厭世主義や肉体的あるいは精神的印象への卑怯な屈従にたいして反抗させる。いわば一つの衝撃が起こる。崇高なたましいはふたたび自由になり、真なるもの、正しきことに立ちむかう。

このような瞬間はしばしば全生涯にとって決定的である。それゆえ、あなたがそのようなものにならばられていると感じたなら、貫け！（I・7・1）

（1）〔訳者注〕アイヒENDORF（一七八八—一八五七）の「貫く！」という詩を紹介しよう。

貫く！

驚一羽、弓なすがけに座していたり。

みはるかすわだつみを越え、あらしの呼べば、

すでにして大空高く舞いて上れり。

岩が根のその果速くも見えわかず、

みおろせばくるめくばかりの下界なり、

沓としてかすむは森か、陸か海べか。

大空にはてはあるとも、

この驚はいや高くかけりてやまず。

*

他人に与えることを学ぶのは、多くの大事と同様に、ただくりかえし実践することによってである。これを学びうれば、それはまた人生最大のよろこびの一つとなる。

詩篇四一・一二三〔原典およびドイツ語訳では四一・二一四〕。(I・7・21)

*

神の恩寵にあずかっている罪びとの心の奥がどんなようすであるかをいつか実社会でじゅうぶん精密に観察せよ。そのときあなたはもはや憎悪ではなく深い同情をすべてのひとにたいして感ずるであろう。

なにかにつけ怒りをいだく間は、そのひとはおのれを統御していないのである。どんな悪にたいしても沈着平静な抵抗が、もつともよく勝利をうるものである。(I・9・21)

*

朝、目ざめてすぐに、またはや負わねばならぬ自分の十字架のことを思うならば、それはあまりにも重苦しいことになってくるのではないか。またその日が将来にやってきそうなことを思うならば、あらゆる感情のうち、もつとも不快なものである恐怖がそのひとをたやすく襲うであろう。

けれども、この朝もまたわたしを呼びさました神の恵みを思い、神の国のためになすべき奉仕のことを考えるならば、彼がそのためになしえ、またなすことを許されることがらを思う心のために、容易によろこびの情がその活動的な人間を捉える。そのよろこびの情は一日じゅうつつく。(I・10・23)

*

わたしたちは、わたしたちの真的生活の犠牲にすることなしに、外的敵対者からまぬがれるわけにゆかない。これとは反対に、あるひとがキリスト教団の有為な一員になり始めるや敵対者の増加してくることがしばしばである。それゆえにわたしたちは勇氣と内的平和を求めねばならない。その他のいっさいはなんらわたしたちを助けない。そしてこれへの力はわたしたちのものでは断じてありえない、「聖」靈によつてしばしばきわめてあきらかに与えられるのであつて、そのために、わたしたちは不幸のただなかにあつていわゆる幸福にあるよりも幸福でありよろこばしくあることがときおりあるといふことは、ただに大なる慰安であるばかりでなく不可見のものへの信仰を強化するものである。このことは見えざる世界の現実性の真実にして拒否しがたき証拠である。(I・11・18)

*

いつか、老年期の始まるころのある日、ひとは過去と結末をつけねばならぬ、怒りの心もなく、悔いの思いもなく。過去の本を閉じてもはやそれを開いてはならない。そのなかにあるすべてのよきものに感謝し、すべてがよき結末にきたことをとくに感謝しなければならぬ。そして最後には、すこぶる多くのことがもはや起こる必要がなく、永遠にかたづいたことを感謝せよ。

こうなつたら、まったく別なものである「永遠の」生活に向かつて突き進むがいい。その生涯への立ち入りの諸条件は、ヨハネ一七・三および六・四にある。前途の見通しは今後無際限なものである。

「のぼりゆく巡礼の旅路で」

教えをさらに大きく深く学びつつ、

なおもわれらは恵まれたわざをはげんで

けっして疲れず、断じて休むまい。

またつねにあらたな力をもって

聖なる者、まことなる者につかえよう。」

(ディーン・スタンレー)

これになお付言さるべきは、これはたんに「罪のゆるし」であるのみならず、なおそれ以上のこと、すなわち罪の自己忘却であるということである。

「ゆぐた」(Vergehen)と「おおう」(Bedecken)との間の区別をローマ四・七も詩篇三十一もたてていると思われる。これは時間的にも互いに遠く隔たりうる二つの異なった段階である。けれども人間自身における悪のあらゆる追憶の消滅をもつてのみ、神のゆるしは完成される。なぜならばまさにこの痛ましい追憶がいまだなお防がねばならない後転のうれいが追憶消滅の晩にはもはやないからである。

忘却の流れにおいては、およそ生涯におけるあらゆる罪過の追憶、また同時にあらゆるいとわしいこと重苦しいことの追憶が沈み去って、神のかぎりない恩恵の祝福された感情のみが残るといわれているが、あのレーテ「忘却の川」はダンテにおいて彼岸なる天国界にあるのではなく、なお此岸なる浄罪の山を流れているのである。けれども、あらかじめ自分の過誤をすべて正直に認め、真実に悔いた者のみが、すでにこの地上において過ぎた時のあらゆる痛ましい思い出から完全に解き放たれる。

ダンテ『神曲』煉獄篇第二八歌一二七、一二八行、第二九歌三、七一行、第三〇歌一四二—一四五行、第三一歌四〇—四二、九四—一〇三行。

忘却レシテの川

「ゆるし」とは恵みに満てることばなり。

さわれこれはいやはてのことばにあらず。

われら願わじ、われらの罪を

恵みの座にて思いいずるを。

われら願わじ、おのが心の

聖ず龕しにかの追憶のあらんとは。

いとも明るき陽あかりのもと

あらたなるいのちいまや榮えよ。

われら願わじ、ひとのわれらに

なせしところをおぼえおらんとは。

「ゆるし」につきて語る口は、

しからずば、また胸中みねうちにて嘆く。

われら願わじ、天あまつみ国に

地の思いのいたらんことを。

われらは願う、いやはての

かげもあせたる光の川を。(Ⅰ・12・1)

*

創世二八・七。このことばが、ただ教会にだけあてはまるものと、あなたは思われるだろうか。

それ以外の建物にも、これはじゅうぶんによくあてはまることで、むしろ、日曜日にしかひらかれないわれわれの教会堂よりも、もっとびったりしているものもあるだろう。

少なくともどんな牧師館でも、ほんとうならこういう建物であるべきだ。

しかしそうなるためにはなお、上よりの力がもうひとつくわわる必要がある。ところがわれわれは、さしあたって、ごくはじめのうちにそれに気がつくだけである。(Ⅱ・8・1)

(1) 「訳者注」 「なんとという恐るべき所だろう。これは神の家である」というヤコブのことば。

*

イザヤ三一・五、三二・一〇、三三・二、四一・二〇―二四。

「神をおそれよ、そのほかはだれもおそれるな。」いくぶん得意気なこのビスマルクのことばは、それ自体はりっぱといえよう。しかし実情がこれにあうかどうか、言いかえれば、それは今日のドイツおよびその他の世界にあてはまるかどうかとなると、これこそまったくべつな問題であって、答えはぐつとすぼんでくる。わたしとしては、「悪をおそれよ、しかし、悪にうちかつことのできる神につねにたよれ」、というほうがはるかに実際的だと思う。真の英雄たち、例えばクロムウェル、ルター、ツヴィングリ、カルヴァン、ブリニッハーとシャルンホルスト、アブラハム・リンカン、ゴードン、いやそればかりか、根本においては、万人のうちの最大のひとキリストみずから、そう考えていた。キリストも死のまえにはげし

くためらうことなく従容として世のために死におもむいたわけではけっしてない。マタイ二六・三七、三八、二七・四六。ヘブル五・七、八。どんな連戦の勇士もみなそう考える。まったくそれにちがいないのだ。あなたも、年をとるにつれて、トルストイが感動的にえがいた「やみの力」をますます真に理解し、それと同時に神の力をもますます真に理解するようになるであらう。悪はけっきょく神のしもべであつて、マニ教のいうライバルではない。われわれは悪についてこれ以上は知らないが、これだけは確信をもつて言える。エペソ六・二三。(Ⅱ・11・10)

*

サムエル上七・二三。「エベネゼル。主は今に至るまでわれわれを助けられた。」

この意味は、さあ、われわれはほねやすみをして、楽しもうというばかりではなく、神はいままでもそうだったから、これからもたすけてくれるだろう、ということだ。

真のキリスト者の人生は最後には、内的な外的なたえざる勝利からのみなっているにちがいない。しかしけつして、生涯の最後の瞬間以前に決定的な勝利があるわけではなく、あるいはあとで平和条約をむすぶような勝利があるわけではない。われわれの地上の敵である悪を相手にしては、そういう勝利はそもそもないので、ひとりひとりの人生にとって、その生の最後における終局的勝利があるだけである。それまでは、子、孫の代にいたる敵とのたたかいがあるだけだ。だんじて平和はない！ とはいふものの、これはとるにたらないことではなく、困難な、たえずあらたになさるべき決意である。われわれの出会い強力な抵抗のために困難であり、さらにまた、たいていは敵である悪に心ひかれ、たたかいのあとと不当な休息欲をおぼえるわれわれ自身の弱さのためにも、困難なのである。

ヨシュア二四・一九、二〇。出エジプト二三・二四―二三。(Ⅱ・11・16)

一四 自由について

利己主義がつねに有害な結果を自分自身にもたらすものであるということを、人間が理性的に理解しないかぎり、たとえ信仰がこのことをそのひとに告げようとも、その信仰はおおかた、生活に實際の影響力をほとんどもたないまことに弱々しいものたるにとどまる。しかしこの洞察をえたひとは大胆な歩みを踏み出すのである。(I・1・12)

*

朝、目ざめてすぐ、まず第一に意識にのぼる思想がなんであるかはきわめてたいせつなことである。あなたはさまざまな偶然的原因をまねきうる瞬間的な「気分」にふだん自分をゆだねるか、それともみずからあなたの生活の手綱をしっかりと掌握しようとするか。あなたは、相変わらずすぐ目の心配ごとやめんどうなことにとりかかろうとするか、あるいは生活の新しい朝にたいする感謝の念をもってことにあたろ

うとするか。あなたは神との結びつきをあらたにしようとするか、もしくは自主的にふたたび「生存競争」にとりつこうとするか。これによってその日の運命は決するのである。(I・1・22)

*

ピテカントロプス(直立猿⁽¹⁾)あるいはその他どんな類人猿⁽²⁾の発見もなお聖書の真理をゆるがすものではない。あたかもそれはブトレマイオス⁽³⁾からコペルニクスの宇宙体系への推移や、あるいはどこかの新陸地発見、新星発見などが聖書の真理をゆるがさなかったと同然である。

ひとはとにかく、まずキリストの教えと地上における彼の出現にともなう諸事実とに堅く信頼するならば、とくに旧約聖書に向かって多くなされているこれらの近代的疑惑をかなり容易に踏み越えうるであろう。そして人間とその他の被造物との間の懸隔が少しく縮小されてこれらの被造物に有利となり、したがっていままでよりはいくぶんよい取り扱いを受けるようになるから、この疑惑を是認⁽⁴⁾することすらできるのである。

近代の自然科学と宗教とを調和融合させたり、あるいはあらゆる自然現象をただちに宗教的に説明しようとするすべての企ては、ほとんど効果がないことであり、現代人の精神にたいしてはむしろ無効というべきである。自然科学はその全分野にわたって、できるだけよく解明することを努むべきである。そしてその際科学的に説明されうべからざる仮定から出発してはならない。ところで自然科学はまさにその活動範囲で満足すべきであって、究明しがたいいっさいのものは、ただ学問(科学)にとつてのみでなく、一般にも存在しないのだ、と主張してはならない。ここに本来の論点が存する。われわれも自然法則を信ずる。しかしまさにそれが「法則」であるがゆえに、それらの法則はけっして偶然に、あるいはおのずから成立したものではありえず、自然を在^あらしめて自然を支配している精霊^{ガイスト}こそ前提とする。もし世界にして

純然たる混沌であつて、世界存立のあらゆる法則を欠くものであるならば（総じてこのような可能性をしばしなりとも考えうるかぎりには）、そのときこそ世界は確かに神なしに存立するであらうが、そうでないかぎり神なしに存立することはありえない。だが神がなんであるかは、いかなる人間の学問も、それが神学、哲学、あるいはその他なんといわれようとも、これを究明し尽くすことは永久にないであらうし、またこれを定義しあとうものでもなからう。そんなことを企てるのは、礼拝のもつとも低級な表象や形式からたんに程度上異なるのみである。キリストすらこれについては、ヨハネ四・二四に示るされている以上にくわしくはけつして述べなかつた。それだからその他の場合にも、ただ事実そのものによつてゐるし、あるいは父子関係というきわめて人間的な比喩をそういつたならかの説明としてもかく引用したにすぎないのである。全旧約聖書も同様に、出エジプト三四・六七のいとも美しい章節以上に立ち入った説明を含んではいないのである。

神が実在したまい、神の本質は完全で善意あるものであるという事実は、われわれをこの地上の生活にたいして満足せしめねばやまない。そればかりでなく、われわれのうたがわぬところは、神が人間のさまざまな行為を審判するに当たっては、われわれの想像しうる以上に、そしてまたしばしばわれわれの願望する以上にさえ、無限に偉大であられるということである。われわれは神を把握することも、定義することも、また定式的に表現することもできるものではない。けれども神を愛することはできる。愛すればまた、出エジプト二〇・五、六および三四・一〇においてすでに古代イスラエル民族に約束されたことを、しかもそれが今日もなおまったく同様に経験されうることを、経験することができるといふことができる。

これがすなわち、『ファウスト』のなかのあのしばしば引用されるところのそれ自体美しい句に欠けているものなのである。「名は響きであり煙である。」それはまったくそのとおりではある。そして、「だれが神の名を唱えて、わたしは神を信じていると告白することができようか」。(5)しかしわれわれの生活の上

に影響力をもつべきものは、たしかにその名の背後にある実在である。この実在にぶつかったなら、ファウストの生涯は——そしてゲーテの生涯も——、別な、しかもさらによいものとなりえたであろう。

(I・1・27)

(1)〔訳者注〕ビテカントロプス(「猿人」の意)始めはヘッケルが人類の始祖的なものとしてひとと猿との過渡的形態として、このような存在を推論した。その後一八九一年に中央ジャワのトリニール付近のベンガワン川左岸の火山礫層のなかから人間らしい骨片が発見された。その発見者たるオランダの軍医デューボア氏はこれをビテカントロプス・エレクトス「直立猿人」と名づけた。これはその後の調査によって第四紀洪積期の初めに氷河期の近い時期のものとして推定されている。類人猿に酷似するといわれる。その後中国北京付近の周口店で発見された「北京人類」シナントロプスもこれに類似する。

(2)〔訳者注〕ブトレマイオス 紀元二世紀にエジプトに生まれ、アレクサンドリア市に住んでいたギリシアの数学者、地理学者、天文学者、哲学者。彼の宇宙体系は地球中心説。コペルニクスの地動説が出るまでは支配的であった。

(3)〔訳者注〕ニコラウス・コペルニクス(一四七三—一五四三) 宗教改革者マルティン・ルターとまさに同時代であることが興味深い。ルターが近世の精神界の開拓者であったように、コペルニクスは近世天文学の礎定者であった。すなわち彼の地動説は、およそ事態の、真理の大転回、主客転倒的な現象にたいして「コペルニクスの転向」という語が用いられるまでに有名なものとなった。

(4)〔訳者注〕『ファウスト』第一部、「マルテの庭」の場で、ファウストとマルガレーテとが宗教について問答しているくだりに出てくる第三四五七行の台詞。

(5)〔訳者注〕同右、第三四三二—四行。

*

列王下五 二五—二九、ダニエル三・二八、六・二七。創世三・六、一六。⁽¹⁾文明国民の宗教史をイスラエル民族宗教史

からまったく分離することは、けっして成功しないであろう。イスラエルの宗教は、わたしたちの見解によればキリスト教においてその必然の「改革」を見たわけであるが、ユダヤ人はこれを不当な革命と見なしている。それはあたかも旧教（カトリック）の新教（プロテスタント）にたいする関係に似ている。これらの歴史的対立関係が将来いかにしてさらに高き統一に融合されるものであろうかということを、読者みずから考えてみるがよい。このことが起こるであろうことは確実である。なんとすれば、この三つの信仰告白はすべてまったく同一の根源と出発点をもっているからである。その根源と言ひ、出発点というところのものはすなわち「イスラエルの神」であつて、唯一の「真の神」で、われわれの表現をもつてすれば、人間の理解力をはるかに超越したある事実（このような絶対界から相對界への下降的事実を啓示的事実という）に関する唯一の完全な人間の把握（はあく）といふべきものである。「神に楯（たて）つくまねをする」ことはすこぶる容易で手軽なことである。今日これをあえてする多くの者は、權勢ある人間にたいしてはその半分の勇氣もない。彼らは無神論を蔽（おほ）ふに処するやうな国家秩序があつたとしたら、そのなかでは沈黙してしまふであらう。しかしわたしたちは、かれらにくわしく定義づけられた神の解釈のいかなるものにも反対するある種の權利を保有するという相對的（ぞ）是認（にん）を、彼らに拒むことはできない。なんとすれば、このような神の解釈はいつもあまりにも偏狹な、したがつて誤つたものをもなっているであらうから。神はまったく確かに、かつて人間が考え出したあらゆる「神の概念」よりも無限に偉大なものである。

それゆえに今日は、われわれの教義学や哲学を全部押しのけてしまつて、わたしたちの子女に單純に歴史的な「イスラエルの神」と「キリストの神」とを信ずることを教えるほうがよいと思う。この神は、すでに古代のもっとも強力な諸王すらも是認することを余儀なくされた事實的できごとにおいてみずからを証明しており、今日もなおまったく同様におのれを感じ、せしめる神なのである。

道德的世界秩序が、昔も今も自由意志性に基づくものであり、この自由意志性あるがゆえに、惡も善も

生起するにまかせて、善がま^つつた^く善であるときにのみこれに勝利を保証し、ときにはまた悪によって悪を滅ぼす^すべきを知り、「死者をして死者を葬らしめる」ことができるものである。ということは、以上の神にのみふさわしいことであつて、これはわれわれにはしばしば、この小さきわれわれ人間どもの倒錯したあり方やり方^{ありかた}にたいする崇高な皮肉のように思われる。このわれわれ小さき人間どもは、そのほかに「哲学」や「政治」をもってこれを変えうと思つてゐるのであるが。詩篇二・一四。出エジプト三・六、三三・六。(I・1・28)

(1) 「訳者注」創世三・六、一六は出エジプト三・六、一六の誤記と思われる。モーセに自現したヤハウェーのことばで、独一の啓示神、歴史の主宰者たる神が、モーセを選びの器^{うつわ}として召命した重要な個所で、この場合、引用個所としてふさわしいわけである。

(2) 「訳者注」「わたしは在^あつて在る者」、「わたしは在る者」というヤハウェー(イスラエルの神)の名のりいでが示されている個所で、きわめて重要。この「在る者」と邦訳してある原語は「ハヤー」という語源からくる語で、一般に「存在する」の意とされている。「ヤハウェー」というイスラエルの神の名(従来の邦訳で「エホバ」とよんでいたもの)も、おなじく「ハヤー」から由来するものと解せられる。「ハヤー」からの派生語名詞たる「ヤハウェー」は「存在者」「実在者」でよろしいわけだが、むしろ「実存者」という訳語をもって啓示神たる性格をあらわすべきもの^{もの}と考える。そしてこの「実存」の意味は、「わたしは在る者」、「わたしは(自他を)在らしめる者」、「わたしは自現する者」、「わたしは在^あつて在る者」ではなく、「わたしは在らしめて在る者」と訳したい。それはヘブライの文法的に必ずしも無理ではない。「他を」の場合は《der ins Dasein Rühende, Schöpfer》創造者の意となり、再帰的な意味をふくめる「みずから」の場合は《der sich offenbarende, entretende, lebende Gott》生ける啓示神の意となる。そしてこの啓示神は同時に創造神であるから、この阿義は実は不可離で、「ヤハウェー」は啓示、創造、実存の神の意となる。これは聖書神学的に正しく、ヘブライ語の弾力性からみても考ええられることである。

*

人生の幸福は、苦難が少ないとかないとかいうことにあるのではなく、それらのすべてをつねにかがやかしく克服するにある。

力というものは、弱点欠陥の克服を訓練するところから生ずるものである。

「どんな罪もあなたがそれをほふると、その罪の精^{スピリット}が力に変貌^{へんぼう}して、あなたのなかにはいつてくる。」

(ロバートソン)(I・2・9)

*

人間のあいだの友情と愛情とは、この関係の最良の場合ですらきわめてしばしば起こるように、上品な享楽欲に墮してはならない。むしろつねに相互の内的進歩を眼中に置かなければならない。

急激^いな内的進歩は、強烈な、ゆり動かすような事象を通してのみ起こる。それゆえ、そのような進歩を望むならば、このようなゆり動かすような事象に出会うことをひどくおそれてはならない。(I・2・24)

*

夢⁽¹⁾はあるひとの本質的な生活内容を成すもののしるしである。夢がたんに肉体的なことからのみかわらず、さらに精神的になり始めたならば、それはよい兆候である。そしてこの段階にいたってのみ神のはたらきについて語る資格がえられる。そのときこの神の作用は看過されてはならない。

幻⁽²⁾は夢とはまったく別のものである。すなわちこれは内的に見ること(あるいは聞くこと)の一種で、

すべての覚醒状態において非常な明瞭さをもって起こる現象である。これはいつもきわめて真剣な事象である。

いつもよろこばしく、元気がよいというのは、これとはまた少しく別なものである。それはわたしたちの精神の所産ではなく、むしろ自然的抑圧からわたしたちの精神を高揚せしめようとするもので、人生の最大の歓喜の一つである。この歓喜だけは、ひとがこの思想を内面化することにより、また神にたくよりすることがよって、いくぶんこれを喚起することができる。(I・3・2)

- (1) 「訳者注」夢のうちで啓示の歴史上もっとも美しいものの一つは、ヤコブの夢である。「さてヤコブはベニルシバを立て、ハラシへ向かったが、一つの所に着いた時、日が暮れたので、そこに一夜を過ごし、その所の石を取ってまくらとし、そこに伏して寝た。時に彼は夢をみた。一つのはしが地のの上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。そして主は彼のそばに立って言われた、へわたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。あなたの子孫は地のちりのように多くなって、西、東、北、南にひろがり、地の諸族はあなたと子孫とによって祝福をうけるであろう。わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう。ヤコブは眠りからさめて言った、へまことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。そして彼は恐れて言った、へこれはなんと言う恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ。ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いで、その所の名をベテルと名づけた。その町の名は初めはルズといった。」(創世二八・一〇—一九)その他、夢についてのいちじるしい個所として、創世三七・五—一のヨセフの夢がある。またイエスの誕生の前後に際して父ヨセフの見た夢(マタイ一・二〇、二・一三、一九・二三)がある。
- (2) 「訳者注」預言者は幻(異象)を見た。これは預言者にいちじるしい現象で、彼らがいかにも内的なすばらしい目をたまわっていたかを知る。イザヤ六、エレミヤ一、エゼキエル一・二八、二・二、三七・一一—一四、アモス七—九、

ゼカリヤ一六、などが見のがすことのできぬものである。なお使徒パウロのものとして第二コリント一二・一四の「第三の天」。しかしてヨハネの与えられた黙示全体はもつともすばらしいものである。

*

つねにただ正なるもの、また善なるものでありなさい。ひとは確かにそういう存在に気がつくものである。世間はけつして見る目がないわけではない。

見誤られたひとびとの大部分は、けつして気がつかれないではない。その他のものも、長いこと誤認されてはいない。いつまでも誤認されたままであることはありえない。少なくともわたしは、史上にそういう実例を知らない。また自分の生涯においてもかつてそんな例を見たことがない。(I・3・5)

*

ひとの世の生活において見られる憎悪（ぞうお）の大部分は、嫉妬（しと）かあるいは報いられぬ愛にほかならない。

われわれがわたしたちの主の側にはつきり身を置いて見れば、このような感情は確かに罰せられずにはすまない。しかしそういうことは想像しないがよい。またこれとは反対に、ある強力な隠れた手が、あらゆる方面からさまざまなわざわいをおびき寄せ、敵をかりたて、従来の友を冷淡にし、あるいはひきはなさせるかと思われしめられることがしばしばある。

それでもなお利益は損失よりもはるかに大きい。しかもたましいがいつかは、「あなたをさえもつならば、わたしは天にも地にもなにを求めましよう」と告白するようになるならば、たましいはすでに「貫徹」した。人生の目的は達せられたのである。(I・3・21)

(1) 【訳者注】詩篇七三・二五参照。

*

わたしは自分の生涯のうち、まるで夢遊病者のような状態になったことが数えきれないほどたびたびあった。そしてそのつど見えざる手にみちびかれて危険きわまる小道を越えてきた。おそらくわたしがうつつの目を見開いてかかる危険を直視したなら、とうていこの道を通ることをあえてしえなかったであろう。ただときおり、自分の考えとおおかたのひとびとの考えとの間に非常なへだたりのあることをさとった。この相違がなんであるかは、格別告白する必要はない、そんなことをしたら不安になるであらうから。

それだからわたしは、いくぶんつむじ曲がりの批評家がわたしに言ってくれたことがあるように、この批評家のことばはきわめて正当である、すなわち現代のひとたちよりもはるかに多く故人と精神的にまじわり、幾百年も前に生きていた幾人かのひとびとを、わたしたちの同時代のひとびとよりもよく理解している。わたしがもっともよく理解したひとびとは、キリストでありヨハネでありダンテである。またトマス・ア・ケンピスでありタウラーでありクロムウェルである。なお最近のひとびとについて言えば、カーライル、ブルームハルト、ブース夫人、トルストイなどがある。ただしトルストイについては、かなり例外とすべき点がある。(I・3・26)

*

いつもなるべくある種の曖昧さあいまいさのなかに身を保って、しかもある徳の外観をすら装おうとするのが、悪の手というものである。享楽はものおしみでないと主張し、憎悪ぞうおと嫉妬しとととは真理愛であるとし、野心は活動の衝動をもって弁解し、怠慢はすべての成功欲にたいする反感をもって弁解する。ただときおり、独自の哲学者や現実主義の政治家が現われて、大胆にも悪の素顔をあらわし、「いっさいの価値の転倒(1)」を企

てる。しかしそのときは、すでにこれと同時に健康に益ある復帰が始まっている。いっさいの善にたいするこのような大胆な挑戦のために始めは茫然自失しても、大多数のひとびとはかかる企てを欲しない。そうすると悪もまたしばらくの間はもはや仮面をかぶることができない。仮面は一時悪の顔から落ちてしまう。まったく自然のままの醜惡さをもって悪はひとの前にさらけだされている。われわれはいまやこのような時代に生きている。キリスト教はおそらく、なんらかの哲学あるいは倫理学をもってこれにかえようとするあらゆる試みが失敗と認められえたあかつきに、本来の姿にかえるであろう。(I・4・2)

(1) 「訳者注」ニーチェ哲学の有名な主張。いっさいの虚偽にたいする激しき戦い。平俗にたいする嫌惡、「真実の苦惱」を苦しみ、真理の住む「故郷」を求め、「孤独」の道を突進した悲劇的実存哲人ニーチェ(一八四四—一九〇〇)であった。

*

虚榮にたいしては、これを輕蔑する高慢が最善の防御である。しかし虚榮よりはるかに危険な敵であるこの高慢にたいして身を守るものは、ただ神の身近にあるということのみである。神のみ顔の前では、あらゆる人間的価値というものはむなしさに沈み、あらゆる人間的差別も無意味なものにおとろえ果てしまう。

常人はおおかた、自分たちの称賛を誘発もしなければ侮蔑もしないところの虚榮心のない平靜にして確固たる自意識ある者に会うと、これを是認するに躊躇しない。彼らの称賛を誘発したり侮蔑したりすることとは、彼らの反感を買うか、もしくは少なくとも意見の発表をさしひかえさせてしまう。

自己修養によってわずかばかり謙遜の徳を養いえたひとは、彼が名譽の表彰を心の底では相変わらず快しとし、しかもし表彰が提供されなかった場合にはあきたらなく思うにもかかわらず、名譽の表彰を拒

んでみる。これより謙遜の徳あるひとは、自分のほんとうの福祉にたいする慎重さからこれを避ける。さらにいっそう謙遜なひとは表彰のごときものにたいして真に無関心である。なんとなればかかるひとはそういうものにもはや心を動かされることがないからである。

その辞退がひとに知られるのを見たいと切望しながら名誉を辞退するひととは、少しも謙遜であるとは言えない。しかも彼らはおおかた、ひとびとがそういった彼らの気持ちに気がつかないとの甘い信念のもとに生活しているのである。(I・4・11)

(1) 「訳者注」「高慢」はサタンの惡徳で、ダンテが『神曲』地獄篇第一歌四六—四八行で獅子をもってその象徴となしている。高慢の反対はここに著者が述べている「謙遜」で、ダンテが『神曲』煉獄篇第一〇歌九七—一三九行に両者を対比させている。

*

今日はだれもはや他に、仕えることを望まない。まず第一に神から、次にはいずれの倫理的世界秩序からも、いずれの国家秩序からも、いずれの教会からも、いずれの家庭的なきずなからも、自由でありたいとのぞんでゐる。しかし彼がそのことをある程度達成すると、そのときは空虚の感情に、あるいは野卑な享樂欲に、あるいは陰鬱な厭世主義におちいり、この最後のものは破壊欲にまで亢進することがありうるのである。

彼はこれとは反対に、自分自身から、彼の情調と性向から自由になることから始めるべきである。しかるのちみずから進んで神と地上における神の大なる事業に仕えるべきである。これが幸福にいたる道である。

人生の学校における最上級は、いまやもはや自己の改善に意をもちいることなくおのれをまったく他人

の福祉のためにささげよとの天命を受けたときに、達せられたというものである。われわれが想像するところの来世の生活では、おそらくたえずそのようなあり方であろう。

完 成

(ローマ六・二三。ヨハネ七・三八。ダンテ『神曲』煉獄篇第二八および二九歌)

踏破されたり、なんじ、つらくしてけわしかりし道よ。

なんじ、月をへ、年を重ねし不安の旅路よ。

キリストの血による恵みを、この身親しく

われうけざりせば、はやくも踵を返せしならん！

しかり、血に報ゆるに血！ 地獄はしよせんまぬがれず、

現世はおのが宝をやすく放たず、

贖代は大にして資力およばず！

かくてはだれか自由をかちえん。

自由をえんとせば、自由に死せよ。

なんじ、身をゆだねて神のしもべたれ。

これが報いはここにては日々の糧、

かしこにして永遠の霊に永遠のいのちぞ。

かくてなんじは自由なり、されどただ一つの軛くわ、
愛のきずなの強くなんじをしぼるあり。

かつて思いもよらぬ道なれど、さりながら——
人生のさちとめあてをなんじは見いでぬ！

小道はややに登りゆく、なおくあきらかに、

うたがいてもふりむきも歩みを止めえず、

けわしき道も深き淵ふちもあやうきをおびやかしえず、
狭霧さぎりもめあてをくらしえじな。

日はあかあかとさし上り、

そのよろこびの光もてなんじを照らす。

主よ、救い主よ、なんじにこそ感謝をささぐ、

なんじわがために血をあえてそそぎたまひし。

なんじ貫けり——この心ごとくなんじのものぞ！

われも進みてこの思いをぞなんじにささげぬ。

なんじ恵みのわざをひき受けたまいて、われをして

ただなんじに在あってうつし世をわが終わりまで生かしめよ。

真理と力に燃ゆる聖霊

このむなしき器にそそぎ入れかし。

聖霊のかの仕事場にいとなみしものを

あまねくひとの上にあふれしめたまえ！（Ⅰ・４・１５）

*

人間のからだ、善なるもの真なるものを健康に有益なるものと感じ、悪や不誠実や不純を、これらがどれほど快き形態においてであるにせよ、これらを抑圧的なものまた不健全なものと感ずるにいたってはじめて、そのひとは彼があるべき、また最善の場合には、ありうる人間となったのである。それまでは最善の原理によるにもかかわらず、なお悪の影響下に立っている。キリストはヨハネ六・五三―五六のことばでこのことを意味したのであるが、これはユダヤ人からは逆理矛盾の教説として受けとられたのである。しかもこれがまたドイツ神秘主義者たちの捕捉しがたいあの箴言のしかも肯定さるべき意味である、いわく、「具体はあらゆるものの終わりである」。

春

冬去りて春たちくれば、

晴やかに谷は明けゆく。

草原は緑にもえて

かがやかしこもかしこも。

青空の光なごみて

おだやかに日は照りわたる。

昨日きのうの世の暗きにも似ず

よろこびの満つるこの日や！

芽はふきぬ梅花ばいかうつぎ空木の

若枝わかえよりみずみずしくも。

わが心、なんじは今もぞ

若きかな、昔ながらに！（I・4・17）

*

かつて哲学とか神学とか呼ばれていたすべてのものが、真理性が半分しかないことばたるにすぎないまことに貧弱なものと思えないことがしばしばである。それらのことばは、その表現しようとすることがらの本来の根底に、とうてい達することができないのである。

ところが、このあらゆる人間の知の暗やみの空に、経験の事実が輝いている。これは自分自身の生活から出て、しかも現実的にしてあらゆる神学・哲学の記述の試みを超越する偉大な神についてもつ経験で、永遠にして動かすべからざる、しかもあらゆる人間の解明を越えた崇高な真理の星のごとく燦然さんぜんと輝いている。

ただかかる経験の事実からのみ、確固かくこたる信仰が生まれる。しかもこれは深い神秘主義であって、これをみずから体していないどんなひとによっても正しく理解されないものである。他のひとびとにはこれは

一つの「愚」であるがわれわれにとっては神の力である。(I・4・18)

*

キリスト教的世界観の堅確にして真個の基礎は、世の悪も個々人の悪も法理上 (de jure) すでに征服されているということ、それゆえに肝要なことはただ、この勝利を事実上 (de facto) 個々の場合にも妥当するようにし、かつ追及していくということである。これが「あがない」の秘密といわれているもので、このあがないはすなわちキリストによってただ一度かぎりあらわれ、そしてこれにより頼もうとするすべてのひとびとにとつてうたがう余地のない、否むことのできないものである。

もしそうでなければ、善の勝利にたいして絶望的になるのもたしかに可能であろう。そのようにかかる絶望感をもつことはつねに個人的勇気の欠乏を語るものであり、この絶望が事実となるならば、人類の事態にかかわる大逆罪である。(I・4・19)

*

人生途上でひとの会合うことのあるもつとも不愉快なものの一つは、嫉妬^{しつと}である。これは耐え忍ばねばならない。嫉妬者はなだめられえない。

これに反して、彼らに不断のたくましさをもっておちついて接することはできる。もとはたぶんゲートに発したと思われるいくらかあらっぽいことわざがこのことを次のように言っている。

「ひとの嫉妬がぶっこわれるには、
てまえの見えをふつとばせ。」

ところでひとは自分の長所や所有などをわざと見せびらかして、嫉妬心をかきたてることのないようにつつしまねばならない。そういうことは、隣人を大いに内的にそこなう誘因となるのであって、そのために「憤懣」の呪咀を招くにいたる。とくに婦人はこの点でやりそこなうことがしばしばある。すなわち彼女らは、その婚約者、夫、子ども、衣服や装身具、訪問のこと、快適な家庭のことなどを、これらをもっていない他人の前に誇示したがる。これは婦人の性格のもっともみにくい面の一つである。(I・5・9)

*

人間相互のまじわりにおいても有害なものは虚栄である。すべてのひとが、もっとも愚鈍な者すら、これにたいする正確な本能をもっている。彼らは虚栄の影を認めないかぎり、進んで服従する。

虚栄はいつも見透かされる。しかも虚栄はだれにもすかれない。しかるにはかの悪徳はその崇拜者を見いだすのであるが、虚栄はけつして目的を達することがないから、虚栄は悪徳のうちもっとも愚劣なものである。(I・5・15)

*

人間のたましいを正しい道からそむかせるのは、なかなかはねのおれる仕事で、悪魔もたいていの場合崇高な動機の助けなしにはそれをけつして成し遂げえない。いっぽう神へのただ一回の仰ぎ見、または叫びかけは、悪魔の仕事をとごとく無に帰せしめるのにじゅうぶんである。以上の消息は莊嚴な事態であって、『ファウスト』詩劇の第一部は感動深くこれを表現している。ところで悪魔のわなにかかつてこれからのがれるのはそのように容易であるから(およそわなを避けるよりも容易である)、こればかりのわずか

な努力をさえしようと思わないいくじなしや厭世主義者が苛烈な判決を受けるのももちろん当然である。

ヨハネ黙示二一・八、二二・七。

あなたがみずからとらわれていると感ずるくさを断ち切れ。それらのくさは自分自身の力にたいしてのみ鉄のように堅いが、神の力にたいしてはもろい。しかもこの神の力はどうな瞬間にもえられる。この神の助けが来ないというなら、それはあなたが変えうるなかがあなたのなかに欠けているからである。それをすら神はあなたに示してください。もしあなたがそれを知らないのなら、ところがたいいの場合あなたはそれを知りすぎているはずである。(I・5・17)

*

現実にはわたしたちの内部に起こることはみな事実であってわたしたちの思想ではない。これまで実際なかつたことが生起する。この生起を誘導する道は、ことが起こるといふ確信である。「あなたがたの信ずるようにながたに成るであろう。」この信仰を深くもつほど、受けるところは多大であろう。

難事はすべてあらかじめ想像のなかにもっているときのほうが、後に現実に出会ったときよりも困難なものである。キリストですら、そのゲッセマネにおいて味わった苦悩は、祭司長やローマの法官の面前におけるよりも、しかり、おそらくは十字架における苦難にもまして深刻であつたであろう。もし彼になお、たじろぎ、ゆずり屈服する可能性があつたならば、それは必ずやゲッセマネにおいて起こつたであろう。

(I・5・20)

(1) 「訳者注」マルコ一四・三二―四二、マタイ二六・三六―四六、ルカ二二・三九―四六の記事について「ゲッセマネの祈り」をみよ。神のあがないの意志をして成らしむべくゴルゴタへ向かつたイエスは、すでに受難に勝利しているイエスであつた。十字架の事実、神における事実でたんなる極刑という相対的な歴史の事実ではない。

*

真の聖さは、神の意志をつねによるこび、樂々と、——しかり、さながら自明のごとくにおこない、かつたえ忍ぶことである。その他のいかなる聖さも本物ではない。

信仰というものにとって悪いこと（あるいはおそらくよいこと？）は、もっとも強烈な信仰体験はこれをつけて語りえないこと、あるいはこれを語るも、他人にとってはつまらぬもの、あるいは信じがたきものと思われることである。（I・5・21）

*

われわれが悲しいときは、つねに、「自我」がその責めにあずかっている。

この「自我」を捨てれば必ず精神力が高まる。

ひとは原則として、助けうる者に訴えねばならない。人間に訴えてもだめである。人間はおおかたの場合助けえないし、またしばしば助けようとしめない。のみならずほとんどつねにひとを助けることに多少の恐怖か、あるいは忌避を感じるのが人間であるから。（I・5・26）

*

多読がすぎることは、いわゆる良書や宗教書の場合でさえ、まだ正しい定見のないひとびとにとっては、不健康である。そのわけは、おそらくくっつけてじゅうぶんに純正でないような、またはかれら自身の事情にじゅうぶん適合しないような他人の意見や気分をあまりにも安易に自分のなかに取り入れてしまっ

て、そのためにかえって自分の要求についてくなくなり、自分の確信や、またしばしば自分の生涯の使命についてさえ、迷うことになるからである。

これに反して、完全な良書若干について深く思索することは進歩をもたらす。(I・6・14)

*

プラトン、アリストテレス、使徒パウロ、ダンテまたはゲーテの思想を、わたしたちがいつか完全にわがものとする域にまで達しうるかどうか、そればかりでなくまた、はたしてわがものとするのがいずれの点からしても願わしいことであり、かつわたしたちの今日の見解や生活体験よりもすぐれたものであるか、このことに関しては理由ある疑問が成立しうるのである。

これに反して、わたしたちはキリストのことばとは完全に合一することができ、その真理にすっかり浸りきることができる。これはうたがいもなく可能である。そしてわたしたちの見るところでは、「キリスト教とはなんぞや」とのたびたびの設問にたいする簡潔な答えは、まさにこのなかにある。(I・6・27)

*

多くのひとは、たんにキリスト教にすぎないものを「神秘主義」と呼んでいる。まったく「合理的」なキリスト教、だれにでも理解しやすいキリスト教、それを求めようと求めなかりと、それにたいする感受性をもつていようなかろうと、だれにでもわかるといったキリスト教、そんなものはもととあるものではない。そのようなものを作り出そうとするあらゆる試みは、際限がなく、あげくの果てには必然キリスト教の真理にたいする完全なる不信に終わるほかはない。

キリストそのひとが欲したと思われるキリスト教における独特なものは、なんらの狂言三昧ざんまいをもとまな

わぬ、まったく明晰めいせきにして冷静なる常識と、超感覚的なもの、ことばに表現しがたきものを経験するための精緻せいせいな感覚および適応性と、まさにこの二者の結合である。これは、もし欲するなら、神秘主義と呼びうるものである。この言い表わしはしかしまったくふさわしいとは思わぬが。この結合から自然に、あまたの岐路が生じ、その道のおのおのはそれをさらにたどりいくときは、キリストが欲したものは全然反対のものに到達することがありうる。もしわれわれが、いっぽうにおいて、すでにすこぶる多くの問題を解いているその非常に具象的に表わされた実例を目前にもたなかったならば、また他方において、やはり旧約から由来し、その真実はすでになりに多くの読者がみずから経験しているであろうところの保証をわれわれも身に体していなかったら、この狭いまったく正しい道を見いだすことは困難であろう。

出エジプト二三・二〇—二三・ヨシヤア二一・四五。(I・6・28)

*

精神的闘争においては、ひとはけっして中立を保つてはならない。しかし相手にたいして好意を寄せ、理解をもつことはほとんどつねになしうることである。

神と親密にして個人的関係にあるという確実な自覚は、わたしたちをしてもっとも確かに他人にたいして寛大な心を、また他人の判断にたいして平静な気持ちをいだかしむるものである。

まったく神の友となったひとにとっては、これからの生涯には幸いなきことがさらに増すばかりである。(I・6・29)

*

唯物論ぶつろんにしろ、あるいは一元論にしろ、あるいは汎神論はんしんろんにしろ、あるいはその他の神への不信仰を学問的

に表現するためにおよそ世にあるところの論説にしる、それらのものの設問を、真剣に論駁しないがよい。ただ感覚的に認識しうるもののみが現実存在するという考えは、氣ままな、そののみか真実らしからぬ、日常反駁されている主張である。また路上のどの石も、どの木片も神であるという理念も、同様に非理性的な嫌惡すべきものである。知覚されうる世界の背後にはある英知インテリゲンツがなければならぬ。それは人間のあらゆる製作物の背後にそういうものがあるように。そしてこのような英知をわたしたちはまさに神と呼ぶ。しかし人間の思想をもつてしてはこの英知的存在はきわめがたい。唯物論がたんにこのきわめがたいということだけを主張するのであるなら、その点に関しては正当であるといえよう。

それゆえにゲーテも言っている（エッケルマン、『ゲーテとの対話集』一八二七年四月十一日）、「自然には近づきやすいものと近づきがたいものとある。この事態をひとは弁別しかつよく考えかつ尊重すべきである。あるものはどこで終止し、他のものはどこで始まるかを見分けることは、つねにまことに役立つものである。いま述べたことをいたるところで知っておきさえすれば、それだけでまことに役だつものである。これを知らぬひとはついに真理に近づくことなく、おそらく生涯の間、近づきがたいもののために苦しむであらう。けれどもこのことを知る賢きひとは、近づきやすいものにたよるであらう。そして彼はこの圈内において、あらゆる方面に向かって進展し、自己を確立しながら、この方途で近づきたいものからもなおなにおなにかをとることができであるであらう。とはいえ彼はここでもついに、かなり多くの事物はただある程度までしか近づきえないこと、自然はその背後になにか問題のなものを保持し、これを探究することはついに人力のよくおよびえぬところであるということを告白するであらう」。

少なくともここまでは、今日道理になつた自然科学はいずれも、ゆきつくべきである。そうならば真理を追求する多くのたましいをなやましている自然科学と信仰との間の解きえざる闘争については、もはや語られえないであらう。

ここまではまことに確かにそうなっていくであらう。純然たる唯物論あるいは汎神論は、もはやだれをもじゅうぶんには満足せしめないし、またたんなる無知と無信仰をもつてはもたが、それよりもただ瞬間を思慮もなく享樂するというのでは、崇高な性質のたましいはけっしてみずから満足しえないであらう。

あらゆる宗教は、もともと表現しがたきものがある程度まで表現し、これによってその表現しがたきものについてひとびとが互いに語り合うことのできるようにしようとする試みにはかならない。そうでなければ、このことはまったく不可能であるから。そしてキリスト教は、なんのうたがいもなく、この事態にきわめて適合した表現である。

あなたがたがもしどの福音書をも注意深く読むならば、キリスト自身が神の「本性」や「属性」について語るところ、今日の宗教授業で児童が教えこまれているより少なきを、ただちに気づくであらう。(I・6・30)

*

わたしたちは神の身近かにあることを欲するならば、そしてこれこそ真に人間福祉の神髄であるのだが、しからばわたしたちはまた悲哀をもどれほどか望まねばならない。まことにこれは、他のいかなるときにおけるよりも、また他のいかなる方法におけるよりも、悲哀においていつそう神に近づくという生活経験をゆうするひとのだけれどもが知っていることである。(I・7・10)

*

勇氣と謙虚とはつねに並存していなければならぬ。——わたしたちを正しく助けることも、大いにそこなうこともないひとびとへの勇氣。わたしたちのなかにあらゆる善を創造する者であり、その恩恵によってのみわたしたちが今あるごとくありうる神への謙虚。ところで真の謙虚は勇氣と近親である。

なんとになれば、およそ神を真に実在する者、人格的な者と思うかぎり、神の面前に出ることは、勇なくしてはあえてなしえないであろうから。

「人間が、その神の似姿となり始めるのは、すなわち本来の人間であり始めるのは、無私の献身をもって同胞の福祉を作り出し、建設し、増進せんと努力するときである。人間がただ自分のためにのみあるときは、彼ははいったいなものであるか。」（ヒルシュ、イスラエルの祈禱^{きとう}）

これはまったく正しい。しかしまず第一に人間は真の謙虚さをもって真の神聖に到達していなければならぬ。この神聖はなんといっても、主「神」と世界とにたいするあらゆる正しい活動の基底であるからである。この点はほんとうに顧慮を要する。でないとなかなかの活動も有害になりやすい。（I・8・12）

*

正しくいとなまれたどの人生にも、いつかこういう日が見舞う。すなわちその日には、「この世の君」〔サタン〕が検閲にやってくるが、少なくとも意志の上では、もはや彼に隸属^{れいぞく}するなものも彼が見いだすことを拒まれるわけなのである。しかしそのとき「最後の力戦苦闘」が始まる。この一戦でなお堅忍^{けんじん}することが肝心である。ヨハネ一四・三〇、一二・三一。エペソ二・二。

シオンは公平をもってあがなわれ、

そのうちの悔い改める者は、正義をもってあがなわれる。⁽¹⁾

（イザヤ一・二七）

その意志をあなたのなかに住まわせる

まことに満ちた全能の神でさえ、

あなたの心をあらたにしえない、
あなたの心が逆らううちは。

ただ義をもつてシオンをあがなうのが
神の永遠のはからいである。
あらゆる悪からおのれみずからを
そむかしたひとこそ自由である。

華美と栄誉とのない生活を、
むなし、気のぬけたものとあなたは思うか。
しからばこの莊嚴なわざの

重きをあなたにはないえない。(I・8・21)

(1) 「訳者注」このイザヤ一・二七は現行邦訳によったが、ヒルティのドイツ語訳原文は、「シオンは公義^{レセト}をもってあがなわれ、その捕囚人は義^{ツダハ}をもってあがなわれねばならない」である。「公平」または「公義」の原語「ミシエバート」は審判を意味する語で、この場合「公正な審判」の意である。「悔い改める者」は原語は「立ち帰る者」で、「悔い改め」ということは、行為的に立ち帰ること、心の方向転換をなすことが原義であることに注意を要する。「正義」という訳は語意が狭くなる傾きがある。「セダーカー」という原語は、むしろ端的に「義」と訳したほうがよい。神とひととの関係が正しく立つこと、神意がおこなわれる事態を「義」という。そしてこのイザヤにおいては、それが贖罪的な角度で意味されているので、恩恵的な義であるから、「恩義」と訳してもよい。イザヤにおいては「義」はしばしば「恵」と同義に用いられている。

それで全節の意味は、シオンをもつて代表されるイスラエルの民のうち、神に立ち帰った者、すなわち回心者

たち（信仰をとりもどした者たち）は、恵み深い神の贖罪の義をもってあがなわれる、というのである。

なおドイツ語訳の「捕囚人」は「立ち帰る者」がバビロニア「捕囚」からの「帰還者」との関連において言われた者と解するならば、「捕囚人」という訳もなりたちうる。

*

人間は次の二つのことによって、あらゆる善からもっとも力強くまたげられてしまう。そのことはだれしもその生涯で一度や二度はじかに経験したことであろう。すなわち、あるひとがなにか悪いことをまさにしようとするとき、そのひとは自分に言い聞かせて、これはちっとも悪いことではない、世間一般の慣わしである、こんなことをしたとてけっきょくは善人たるにかわりはないだろう、と。ところがそのことをやってしまうと、彼には突然、いまさら立ち帰ってゆるしを見いだすすべもないと思われてくる。この悔い改めの断念はとくにつねに克服されねばならない。神はどんな悔いをも必ず受け入れてくださる。その悔いがどんな時機おくれのものであろうとも、またその悔いがどんなにたび重ねた悪業のあげくであらうとも。まことにわたしたちの主は力や平安を求めて彼によりすがるだれをもしりぞけない。わたしはもう一度力をこめて言っておく、どんなひとをもまことに例外なくどんなひとをも。

イザヤ一・二八、四三・三五、四四・三三、四五・三三、五五・一一。詩篇五一。ヨハネ六・三七。マタイ一一・二八―三〇。

かかるひとは後になって反対に、もっとも信頼できるひとであることがしばしばである。なぜなら、彼らはいっぽうにおいて享楽生活のみじめさを、他方において「たましいの」平安がどんなに幸いであるかを、深い経験から学び知り、どちらをとるべきかを知っているからである。

「わがためにわれなやみ尽くしぬ、
わがためにわれ生き足らいたり。
おのが建物、それは碎け散りばい、
これが跡より家あらたにぞ建つ。

永遠を期してぞ建てられし家、
ときの津波にうずもれはせじ。
天つ火はそこに燃え立ち、
犠牲の煙ぞ日ごとに上る。

み、怒り、去りぬ——戸は開かれてあり——

あわれなる魂、いまこそ自由！

行く手にははてなき希望と

奇しき時、劫の横たわるあり！」

(出エジプト三四・一〇)(I・9・1)

*

イザヤ三八・一五。謙遜はおよそ人間的にとつて、その心のあらゆる性情のなかで自然性のもっとも少ないものである。人間は生来つねにあまりにも傲慢であるか、あるいは怯懦、臆病にすぎる。真正の謙遜というものは他力の不思議な感情である。それは徹底的に力の感情であるが、神の恩恵であるという意識を

ともなっている。しかも神の恩恵という意識こそ力の唯一の無害な感情である。しかしこの謙遜は、イスラエルの預言者（イザヤ）が、かの王（南王国ユダの王、ヒゼキヤ（紀元前七一九―六九二））をして告白させたように、ただ重い苦難のときをへてのみ人間のうちに生ずるものである。

ヨブ四〇・四一五、四二・一六。列王上一七・三四。

この謙遜をもつにいたつたその時にしてはじめて、人間は神が彼に全的な幸福を贈りうる境地にいたり着いたのである。歴代下三一・二。（I・9・6）

*

多額のもうけをするひとの話を知りたら、そんなことは今日とくに商工業界にだけ起こることであるが、ひとはいつもただちに次の問いをこれに結びつけねばならない。「そのひとはその金をどうするのか」と。およそつまらぬこととて、また教養あるひとにとつてふさわしからぬこととて、なんらかの目的もなかつた金をため、けつきよくは、長いこと待ちわびていた相続人どもにすべてをのこしてゆくにすぎぬ、という以上のことがらはない。これと大差ないのは、心身になんら有益ではない贅沢三昧な生活に浪費することである。これら成金の多くは、以上の事態はとくとわきまえている。がしかし彼らは生くるかぎりはその金から容易に離れられないのである。またみずからなんら合理的なこと、慈善的なことを、始めることも知らないのである。しかし、もし彼らにして、かような財をこれに適したひとの手に、そういったひとはいつもの生活圏内にもいるものだが、ゆだねるならば、人生の悲惨な現状の少なからぬ部分が救われうるのであらうが。

ルカ一六・九一六、二〇・三二にしろるされている富者はうたがひもなく、このような男であつて、彼はまったく悪人ではなく、彼はただ自分の富を合理的に使用するすべを知らなかつたまでである。今日もなお富

める者はしばしばかくのごとくである。しかも牧師さんたちはおおかた彼らにこのことをあえて忠告しようとしないう。(I・9・26)

*

神の秩序に従えば、統治を合法化することは、統治者がもはやおのれ自身のことを顧みず、ただ万人のしもべたることにある。その他のいかなる合法性も誤謬である。すべての主権者はこれによって判断さるべきである。(I・10・8)

(1)〔訳者注〕「わたしは国家の第一のしもべである」と言い、民意上達をこれ努めたプロイセンのフリードリヒ(一七二一—一七八六)はかえってやはり民から「大王」としてたゞとばれ、「フリッツおやじ」「Vater Fritz」と呼んで親しまれた。天地万有の創造主、人類の歴史の主宰者たる絶対主権の神が、人類救済のためにそのひとり子のすがたをついにベツレヘムの旅籠屋の馬屋に現わしたということ、貧しさとみばえなさのどん底においてイエスをつかわしたということほど逆説のきわみの事実があるうか！神の子イエスは「人類のしもべ」としてみずからを自覚しかつ献供した。これがまさに「人類の王」にふさわしい無私の実存であった。

ルターの名著『キリスト者の自由』の冒頭の有名な命題、「キリスト者は、万物の上に自由なる主であつて、だれにも仕えない。キリスト者は、万物に奉仕するしもべであつて、だれにも仕える」。この一見相反する二命題に実は民主主義の根本精神がいかに説かれていた。「キリスト者」を人間と置き換えればよい。人格の自主自由は、それが自由なる愛の奉仕としてはたらくときにもっとも健全であり、社会も世界も本質的な平和へと進展するからである。インドのガンジーはその体現者のもっともいちじるしいひとりであった。シニヴァイツァー博士もまたそうである。

*

最善のひとつとですら彼らの生涯の大部分の間、彼らが受けるに価する以上に多くのさいわいを受けている。ほんとうに、最大多数のひとつとに比べてつきよくその全人生行程の間このことが事実なのである。人生のもっとも重要な時期の一つは、神がある少数のひとつとにいくぶん与えることを減少し、恩恵や寛容の立場に立つかわりに、いわば彼らと共に公義の立場に立つことを、彼らにたいして始めることができ、いわばあえてしても、彼らがただちに失望したり、神からそむき去ったりするおそれがなくなったところである。これは神が彼らに付与しうる最高の光榮であるが、彼らはこれをいささかも理解せず、それどころか突っ返すことさえするのがきわめて多い。このことを預言者イザヤが「シオンは公平 (Recht) をもってあがなわれる」(イザヤ一・二七)と表現しているのである。そしてこの点にまたキリストの受難による万人救済の一種哲学的な理解が存するわけである。けれども代理する〔あがな、この〕義 (Gerechtigkeit) はまさしくつねに恩恵であって、公義ではなく、根本に横たわる問題はいまだほんとうには解決されていないのである。(I・10・24)

(1) 〔訳者注〕著者が意味する「代理する〔あがな、この〕義」は、イザヤ四〇—四五のいわゆる第二イザヤにおいてむしろはっきり預言されている。「わたしは義なる神、救主であって、わたしのはかに神はない」(イザヤ四五・二)。その他、同五一・五など。「義」が「救い」と「恵み」の義で、その救いの義を身をもって与えるメシヤ的個人を、イザヤ五三が、いわゆる「ヤハウエーのしもべ」の歌の一つでいみじくも預言している。人類の罪があがなう義人イエスへの預言である。

(2) 〔訳者注〕このキリスト・イエスによって贖罪しよきの大業は完了したことは、ヘブル九・一二に「やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」と言われているとおりであるが、われわれの側において、この与えられた「義」を信受して「義とされて」はいるが、現実には「義人」たる完全さに達していない。聖化されてゆく過程にある。それを著者は「問題はいまだほんとうには解決されていない」と言ったのである。

*

わたしたちがその生涯のある時期において、ひとたび悪意ある中傷誹謗をじゅうぶん耐え抜くことを余儀なくされたならば、わたしたちはその後人間の称揚にたいして不死身のごとくなる。この（人間の称揚の）ような薔薇水はこの「誹謗」きたなさをもはやたましいから洗いおとすことはない。ただ神の癒やす義の炎のみがこの汚穢を焼きほろぼしてくれる。

ともかくおおかたは非常にあげけない人間の称賛は、悪意がその灼熱の矢を投じて、そこにほとんどその消えあたるぬ傷あとをとどめた心臓の層までは、もはや断じてしみとおらないのである。（I・10・25）

*

多少ものをおちついてみるひとびとにとって、彼らがある人物から受けた第一印象は、もつとも正しい、つねに標準たりうるものである。おちつきのない、冷酷な、あるいは狡猾な目つき、神経質な、またはおずおずした手、肉感的な口、品格のないあご、総じて上半部よりも下半部が勝っている顔、これらの特徴は隠しきれないものである。女性における（それはわれわれにさいわいなことだが）無邪気な表情（それは老婦人に多く、今日の若い女性には無邪気さの欠けた者が少なくない）はまったくまねのできるものではない、これの欠如は、なにものによってもおぎなわれえない。女性から欺かれる者は、いつも、同罪である。

この無邪気な表情をもたない婦人に、きみは絶対に心を許さぬがよい。どんなことがあっても彼女らをしてきみの生活にたいしていちじるしい影響力をえさせてはならない。これに反して、そうでない婦人たちとの交際は精神的に非常に有益である。女性を軽蔑することは、つねに悪い兆候である。

女性のほうでもまた、もし彼らが誤った文化や教育によってそこなわれていないなら、どういうひとた

ちが有為な男性であるかについて非常に確実な本能的な感情をもっているものである。(I・10・28)

*

われわれは生来みな「怒りの子」⁽¹⁾である。これは生来の人間においては老年にいたつていよいよ顕著となってくる。そのために、多くの老人たちは自分自身にとっても他人にとっても荷やつかいになるほどである。

けっして軟弱ではなく、真の柔和や親切は、より、高い生活のもつとも完全な証拠である。がこのような生活は、そのひとの自己の生活が「破滅の荒野」を通じて、「婚姻」の約束の地に到達したときにしてはじめてそのひとに現われうるものである。しかしこのことについてこれ以上述べるのは無益である。それは別の世界からの音響^{トーン}であつて、それにたいして耳の開いているひとはまれである。(I・10・30)

(1) 「訳者注」 「怒りの子」はエペソ二の初めに出ている。「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによつて死んでいた者であつて、かつてはそれらの中でこの世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従つて、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従つて日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行ひ、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であつた。」すなわち聖書は、人間は本来神の怒りに値する子らであるというのである。なんとすれば、神の意志に従わない「不従順の子ら」(同二・二)であるからである。神の審判を、神のバトス面から表現すれば、「神の怒り」(ローマ一・一八)であつて、ルターは、この「神の怒り」を深刻に体験し、神の怒りは神の義のあらわれであり、神の愛がその義の奥に秘められているところから、神の怒りを神の愛の「異なるわざ」として感ずることができたのである。とにかく、審判されるべき人間ということが「怒りの子」の原意である。

(2) 「訳者注」 イスラエルの民がモーセの指導のもとにエジプトをいで、荒野を通過して、神の約束した目的の地、カナンをさして旅した故事にちなんで表わしたことは、神と共に、カナン(今のパレスチナ)に永遠に住むとい

う意から、カナンに到着することを、「婚姻」の語をもって表わしたわけである。それはまた自己の生活が、真の信仰生活にはいること、神と共なる生活にはいることを意味せんとしたものにはかならない。

*

世には二種の間がある。そのいっぽうはわたしたちが幸運にあるときは、すこぶる愛嬌あり世話好きであるが、わたしたちが引き続き不運に見舞われるや、はやくもそれとなく身をひく連中である。他方は、しばしばこれよりはるかに愛嬌は少ないが、わたしたちを不運に見捨てぬひとたちである。愛する読者よ、あなたはいずれの群れに属するかを判断せよ。もしあなたの属する群れが第一の群れであると知ったなら、どうあってもこのような群れをしてあなたの胸にもはや根をおろさせるな。彼らはたんに順境のときの楽しみであって、それ以上のなものでもない。(I・11・4)

*

真の知恵がどこからくるかを、他に知りようがないときでさえ、ヨハネ五・一九、三〇の聖句はこれについてわたしたちにさとさないではおかない。キリストですらこの法則のもとにあったのに、どうしてわれわれは、知恵をわたしたち自身から見いだしたり、あるいは世知の学校で学んだりする僭越をあえてし、われわれにたいしても開示され、しかもわれわれがキリストの言行にあきらかな実証を見るところのおなじ源泉をたずね出そうとしないのであろうか。

ヨハネ七・一五—一八、六・六三、六八。マタイ七・二九。(I・11・15)

*

わたしは、わたしの生涯において、人間けんねん軽蔑者になればなりえたときが幾度もあった。わたしがそうはならなかったのは、人間社会の上層階級のひとびとと知りあったことによるのではけつしてなく、反対に小市民階級の生活や考え方への洞察くわんさつに負うのであった。

ひとは世の小さき者にたいする目と愛好をもつにいたるや、現代の悩みたる厭世感えんせいから永久に救われる。これに反して、だれでもなおたとえたんにひそかであつても、高きもの、とうときもの、あるいは外観のりっぱなものを好む傾向を内心にもつ間は、そしてこれは今日まことに教養あるまたなかば教養ある階級においてほとんど例外を見ない現象であるが、そうであるかぎり「この世の君」⁽¹⁾がなおその権限を失つておらず、したがって確実な幸福はのぞめない。付言したいのは、小さいものはふつう、とにかくそれを相手どつてみようと思えばはるかに興味あり、愛すべきものであるということである。巢をつくつて一匹の蟻あり、あるいは勤勉な蜜蜂みつばち一匹、あるいは一羽の鸞らんどりは、獅子とか驚おどろとか、いわんや鯨くじらといったものよりもはるかにみる甲斐のある心のひかれる動物である。それからまた小さなアルプスの小花はどの一つを見ても、きわめてはでなチューリップやあらゆるモダンな観葉植物よりもはるかに美しい。人間においてもまたそのとおりである。この世の小さいものに目をそそげ。それは人生をもっと豊かにし、もっと心地よいものにする。(I・11・17)

(1) (訳者注) サタンのこと。ヨハネ一・二・三一、一四・三〇、一六・一一。

(2) (訳者注) 詩篇一四七・九に「神は食物を獣に与え、また鳴く小がらすに与えられる」という小さきものを顧みる神をうたった句がある。

(3) (訳者注) マタイ一八・二一四に「小さいもの」にたいするイエスの深いことばがある。

*

神の恩恵によるいかなる高揚にも必ず先行するものは、人間からの屈辱か輕蔑である。これはまったく確実な兆候である。人間は自己の有する価値(意義)というものが、ひとびとのよき意志あるいは悪しき意図によってではなく、神の摂理によって与えられるものであることをあきらかにさと、この摂理に従って行動すべきである。

それゆえに、このような高揚はひとを謙虚にこそすれ、傲慢にはしないのである。それゆえこのような侮辱はひとをかえって堅固にし〔神にたいして〕信頼深くする。これは世のゆき方と正反対である。

ミカ七・八一〇。ゼバニヤ二・三。ハバクク二・四、二〇、三・一六、一八、一九。エゼキエル三四・二四―二七。イザヤ四三・二―三、四六・二。(I・11・22)

*

あなたがもしあなたの胸の奥がいたく傷つき痛む心地ならば、あるいはもはやあなたの神経を正しく支配しえないのを感じるならば、かかる状態においては、ひとびとに会うことを避けるがよろしい。それを神に嘆き訴えよ、ひとびとには訴えるな。彼らにはある程度おちつきをまたとりもどしたうえで接するがよい。それができない間は身を引いているがよい。それはあたかも動物が不快を自覚するときには、本能的に閉じこもっているように。ところが今日のひとびとはそんなときにきまって他人のところへ押しかけてゆく。しかしこのひとたちはおおかた彼らに助力を与えることができない。

ひとがもし相対的に言って健康者として、かような意気消沈した意志の病者や神経の興奮したひとびととまじわらねばならぬときは、彼らを激しく非難したり、しっかり自覚するように督励したり、彼らのな

やみをくだぬものとして思いとどまらせようとしたりしてはならない。それはすべて彼らをにがにくするばかりである。心やさしく彼らとまじわり、あらゆる刺激を取り除き、安息と慰謝がなければそれを与えてやり、彼らの刹那的な興奮したとばにあまり重きを置かないようにする。こういったことが多くの場合目前の最善の策である。非常に優良なひとびとにおいては、彼らが弱っているときには、彼らが他人を助けねばならないということによってみずから助けられることがしばしばある。彼らはそれによってもっとも容易に立ちあがることができる。(I・11・23)

*

キリスト教信仰のもっともすばらしい点は、人間はもはやまったく自分自身と勘定をしたり、討議をしたりする必要がなく、ただ神とのみそれをすればよいことである。かくて、神の完全無欠すら、神をして不完全きわまる者と友愛関係にはいることをさまたげさせない、友愛関係にはいらんとの意志が、相互にありさえすれば。この神との友愛はあらゆる人間相互の友情をはるかに越えるものであって、この友愛においてわたしたちのたましいは完全な満足を見いだすのである。

悪とは実際なんであるか、われわれは少しもこれを知らない。おそらくまた、それを知ることにはわれわれは耐えないであろう。わたしたちにとつては、それは神との友愛関係の断絶と放棄とをわたしたち自身の自由意志できたらしむることである。

かかる「悪の」事態への始めは、神の約束や、神のことばの真实性や、実際しなれば聞きおぼえのない声によつてのごとく心に種まかれる神の命令の実行可能、これらをいつもうたがうことである。このことから不信、疑惑、そしてついに堕落、その後は悔恨が生ずる。しかし、けつして忘れてならないことは、立ち帰る道はいつも開かれているということである。(I・12・13)

*

われわれの本来の生は思想の世界である。そのなかに真の愛が多くふくまれていなければならないほど、われわれの生はいよいよ神に近く、したがって幸福を約束するものである。

天国と地獄はある心の状態である (état d'âme)。この天国と地獄をあらわした単純自然な比喩的表現を、われわれキリスト者はなおかついかなる時もとんとあつかねばならない。おそらくイエスもこの信仰をやはりもっていたようにみえるからだ。(Ⅱ・1・4)

*

人間のあらゆる性質のなかで、嫉妬はもっともいまわしく、虚栄はもっとも危険なものである。心中にやどるこの二匹の蛇からのがれることは、すばらしく気持ちのいいものである。もっとも、べつな二匹である人間侮蔑と傲慢が、まえの二匹を追いついて、かわって席をしめるのではなく、これらは嫉妬と虚栄をまぬがれたものには、ふつうよくあることだ。自己欺瞞におちいらぬよう、この点に注意をはらってほしい。(Ⅱ・1・25)

*

われわれのひどく理解したい道徳的世界秩序の二、三の法則はつぎのようなものである。

一、悪はかならずはじめ一見いかにも勝利をおさめ、凱歌をあげるが、その後くずれ去る。はじめからくずれることはない。

二、この世の真の善にたいしては、それがじゅうぶん強化されるまで、世のなかや世のなかのまろもろ

の機能はつねに愛と承認を与えることをしないであろう。しかし、それでもなお善は作用をおよぼし、こうしたさびしい孤独のうちにあって成長をとげる。それゆえ、真に有為なひととなるべき人間はだれでも、生涯に一度は、それどころかしばしばいくたびとなく、成功をとまなう生活と真の信仰とのいずれかをえらばねばならない。

ヨハネ五・四四。

三、比較的小さなことがら（神の尺度にしたがえば）を神は、神のしもべ以外のものたちにもやらせることがある。彼らはそれを神のしもべと同様によく、往々もつとじょうずにさえやるものだ。

四、まことの善人たちの最大の十字架は、彼らをまったく理解しない弟子や仲間たちである。むしろ敵のほうがよきひとびとをはるかにやく、はるかによく判断することができるので、まず誘惑し（ルカ四）、それがうまくいかないとき、はじめて攻撃する。この場合誘惑のほうが危険な段階である。（Ⅱ・3・16）

*

神にみちびかれるひとびとの一特質は、彼らのまなばねばならない多くのことをゆめのなかでも体験し経験しうることである。これは彼らに現実の生と同様な印象を与え、彼らは、多くの場合たいい警告としてあらわれるこの生の経験をほとんど現実同様によく記憶にとどめるものだ。

神のみちびきはまことにかすかな、なさけふかい多くの暗示からなりたっていて、ただちにこれにしたがうときは、たいそうおだやかである。さもないといましめはいくぶん強くなる。（Ⅱ・3・22）

*

「高ぶった思いをいдаかず、かえって低い者たちと交わるがよい」(ローマ二・二六)。このきわめて真実なことはもやはり多少の説明と補足が必要だ。申しぶんなく正しい人間にとって高大全のはひとえに神だけであり、ほかにはもはやなにもものもない。このうえなお比較的偉大と思われるものがあるなら、それは慈悲によって真にきよめられたひとびとだが、こういうひととめつたにない。それゆえわたしたちの主もルカ一六・一五において、「人々の間で尊ばれるもの」は、神のまえでは忌みきらわれると、われわれにははじめ多少苛酷に思われることを語っている。今日の説教者たちもこれを引用することはきわめてまれである。主自身はどこにおいて、貴人や富者のもと、太守や国王のまえであらうと、まったくこのことばのとおりにふるまい、しかも、(こんなことを彼に用いてよいなら)おどろくほど如才なく、われわれの最良の牧師でさえも富豪や貴人のいるところではかならずしもつねに有するとはかぎらないような如才なさである。いつわりの高貴と対立し、小さいものを愛し、必要とあらば、尊大ぶるものに静かに、しかも品よくむかいあうことのできる真の「高貴」を身につけることが、ほかならぬ生のわれわれに課するもっとも困難な課題のひとつである。人間として真の偉大さに達するためには、多くの謙虚な態度とならんで、自分のより高い任務と使命にたいする堅固なゆるぎない信念が必要である。詩篇一八・三六。(Ⅱ・3・24)

*

ときにとつぜんありとあらゆる宗教がみなただの空想にすぎないように思われることがあっても、そのことであなたは、あなたの道をあゆむ途中で、けっしておどろきおそれたり、立ちどまつたりしてはいけない。そういうことは、わたしの知っているところでは、人類の精神的たたいや経験について、いくら

かくわしい知識をもっているかなり教養高いひとならだれにでもあることだ。すべての歴史学、哲学、倫理学、教育学もみな論難の余地をじゅうぶんのこし、他面、いくぶん動物以上のものとなった人間には、超感覚的なものへの欲求が深く内在してどうしてもなくならず、他にはかえられないということ、この二点をたえずくりかえし見ぬくことによって、教会そのものは維持されている。この見かたをこぼむひとは、どんなに教養があっても、その教養とならんで、獸性が、洗練と粗野の程度の差はあるうが、しだいに優位を占める。このことこそわれわれの望まぬところであり、それは、こういう状態を越え、もっと高貴な生活形態をもつ力を身につけようとする人生の全目的を逸しないためである。(Ⅱ・4・9)

*

金、錢、上のことではいつもよくきまりをつけて、自分の身分境遇にふさわしいようにしていなさい。しかし、必要以上に金銭のことにかかずらわってはいけない。度をこすとけちになったり、欲ばりになったりする。そうなると益よりむしろ害のほうが大きい。社会主義がこの点についてブルジョアジーを攻撃していることは、だいたい当たっている。だが、社会主義の是正策は正しいものではない。

あなたは、子どもたちに早くからお金をもたせ、それを合理的にあつかうくせをつけさせなくてはいい。フランス人はこの点でドイツ人よりもすぐれた教育をうけていて、自分たちの身分不相応な暮らしはしないが、これは彼らのドイツ人にまさる最大長所のひとつである。この点からフランスでは、ゆたかな国土ということによるよりもはるかに多く、国民の裕福がうまれている。(Ⅱ・6・3)

*

もはや「石の心」⁽¹⁾を持たないということは大きな神のたまものである。神の聲にたいして心をひらきは

じめると、人間はそのことをもじゅうぶんによくさとする。(Ⅱ・6・25)

(1) (訳者注) エゼキエル 一一・一九。

*

あなただったら、なにをいちばん書いてもらいたかったであろうか。聖書の個々の部分はこのさい考えにいけないことにしよう。またダンテも競争相手にならないものとし、さらにもうひとつ、なにをつねづね愛読しているか、というすこしちがった問いも考えないことにしておこう。

わたしの答えはこうである。『アンクル・トムの小屋』、デ・アミーチスの『クオレ』、それにテニソンの『国王牧歌』だ。それにつづいて、ゲーテの作二、三。シラー、グリルパルツァー、カーライル。それよりずっとあとに二、三の教養書、たとえばカント、スペンサーなどがくる。古典のものでは、けっきょくエピクテトスひとりだ。

膨大な量の書物も、そもそまだひとつ本質的なこの問いを自分に発してみると、ばらばらとまばらになって、ついにはまったく消えはてしてしまうのは、ふしぎなことだ。それだけにいつそう真剣になって、ひとまず見わたして、自分なりのたしかな根拠のある判断をえたら、すべての真に価値あるものを知り、はるかにくだらない書物に時間を浪費しないように決心しなくてはなるまい。もっともこれにはむろん半生以上を要するのだが。(Ⅱ・7・16)

*

サムエル上七・三四。ひとびとや、あるいはあす一日のことを、あまりにおそれないように。偶像の神と、今日威力をもちかえしたアシタロテとを、あなたの生活からすて去るがよい。そうすれば哲学者た

ちも、あなたにたいして、もうなにもできない。そうしたら、あなたはひとびとにたいして、もつと親切にならなさい。

ほんとうに親切なひとと出会うことは、一般庶民にとって、しばしばひどく苦しく単調な生活のさなかで、一条の陽光のようなものである。これらの庶民は、職業がら多くのひととつながりがある（あらゆる種類の商人とか、郵便配達夫、郵便局員、銀行員、車掌といったひとびと）。それにしても、彼らにこのささやかなよろこびをわかつことを、思いつくひとがあるだろうか。彼らの勤務について支払いをし、それ以上はなんの恩も感じないのではないか。（Ⅱ・８・４）

*

毎朝かならずよい考えをもつてはじめなさい。けっして心配やためいきをついてはじめてはいけない。そうすれば暗雲をつきやぶる日光をわずかなりとも一日じゅうもつであらう。（Ⅱ・８・５）

*

詩篇九四。悪霊は、あなたをとらえることもおどすこともはやのぞめなくなると、こんどは手下や機関の全力をつぎからつぎとあなたにむかつてつかわし、世間の評判をだいなしにしようとする。世評などというものは悪霊のゆるしがなければ完全には成りたたないのだから。そのうえ、いちばん近い家族のものまでがいっしょになってその手助けをすることもままある。使徒マルコだけがそういう様相をさいわいにものこしたえてくれた。マルコ三・二二。

このたたかいがはじまるのは、ふつういい兆候である。われわれはしばしばまったくいやおうなく動員されるのだから。

問題はけっきょく、時と永遠にわたる国の大争奪戦について勝つのはだれか、ということ、地上はその舞台ともなり、ときには血なまぐさい戦場ともなることにきまつているかにみえる。たたかいは疲れてしばらく休んだのちに、くりかえし規模をいつ、そう、大きくしてはじまる。現在どうやらたたかいはまたしてもはじまりつつあるようだ。

仮面の一部はすでに落ち、また落ちかかっているものもある。そしてその旗じるしはもうあきらかだ。すなわち、自然科学的唯物論や一元論、唯美主義、社会主義、合理主義、降神術、心靈論、いやそればかりか仏教や回教までがいま共同で、密集部隊をなして歴史的キリスト教を攻撃している。キリスト教はまず散らばっている戦闘力をあつめ、そのうちその指導者を吟味しなくてはならないであらう。いずれにしてもたんなる「律法学者、パリサイ人」でも、イエズス会でもない。さしあたってはただ「先駆者」と「その道をまっすぐにする者」しかない。イザヤ五八・二。(Ⅱ・8・18)

(1) 〔訳者注〕 マタイ三・三。

*

臆病者、卑怯者はこの世では善にたいして、少なくとも意識的な「この世の君に仕えるものたち」とおなじくらしいの害を与えることに、やはりうたがいはない。かの王にはひとの思うほど多くの忠実で、完全に徹しきったしもべはいないので、彼がむしろそのしもべたちに不満たらたならなのもむりがないのである。

忠実とはそもそも人間に与えられた神の国の一部であり、悪の世界秩序に属するものではない。悪はたいてい不忠実な奴隷を相手に仕事をし、それに甘んじなくてはならない。だからほんとうをいうとヨブにびつたりふさわしいのは『ファウスト』の第二部かエピローグであって、いつの日か才能あふれる作家が

そういうものを書いて、サタンにそのみじめな悲運をなげかせるであらう！ 人間はサタンにただ幻滅だけを与える。わが事成れりと悪魔が自信満々であるときにもそうだ。これがまさにサタンにくだる判決である。

しかし軽蔑すべき中間品にあたる連中は、新聞の賞賛や非難に左右され、新聞の聲が、それもいちはんくだらない種類の聲があるひとを攻撃すると、最善の人物や物事でも、すぐ見すててしまふ。そして、彼らを攻撃して、文筆家その他の最大の専制君主や悪ものどもが新聞・出版関係で成功をええすれば、その地位を回復せしめ、そればかりか国家の記念神殿にまつたりする。こういう連中こそ、とくに共和国のなかに、いわゆる「世論」以外の權威を成立させず、国の破滅をまねきよせるひとびとである。ダンテはすでにゆたかな経験からこういうひとびとを知っていて、そのために地獄の第三歌で筆誅をくわえているが、あなたは、こういうひとびとのひとりになってはけっしていけない。これこそほんとうにサタンの親衛隊で、それさえなければ、守勢がなくてサタンも地上の王座をとうにうしなっていたにちがいない。南阿戦争はじつによい説明になる。為政者たちにいたるまで、いかに多くのひとたちがはじめと意見を異にしたことか。イギリス皇帝の王冠にちりばめられた大きなダイヤモンドは永久にこの思い出をうしなわないうであらう。王冠は、善悪両者の中間層に特有な近視眼的世知のために自分でそういうはめになったのである。(II・8・28)

(1)〔訳者注〕ゲーテの『ファウスト』第一部天上の序曲は、ヨブからそのテーマ舞台をかりたものである。

*

楽な生活をしたと思うたら、マタイ六・三三、三四にしたがって生活しなくてはいけない。この両聖句はわたしの生涯のある時期に、あらゆる哲学のなしうる最善の奉仕をわたしにくれた。マタイ一一・

(1)「訳者注」「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであらう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであらう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」

*

世界のどこの国でも、あるりっぱな大事業をしてすぐに多数のひとびとを味方にできるなどと、けっして期待はできない。すべて大きなことはささやかに、小人数ではじまるものだ。あなたはそれを覚悟して、あなたの子どもにも、少数党に属することはなんでもないことだ、と教育しなくてはならない。フリードリヒ・フォン・ゲンツがあるとき「悪魔的なよろこびをもって」日記帳に記入したことは、まことに正しくさえもある。彼は、大きなことがらは、というよりむしろ大々的にはじめられたことというものは、ときおり見るもあわれな終わりを告げることがあると言っている。しかし、もしほんとうに大きいことであつたのなら、けっしていつまでもそうではない。初代のひとよりもっとよい鼓舞者をえて、なんどでも生命をふきかえず、初めのひとはまだ人間的なもの、「あまりに人間的なもの」がついてはならないことがよくあるからだ。

人間にとって、そもそも光をある程度純粋にとらえるということは、きわめて困難である。

まだ純粹に靈的でないこの世と、この世のすべての努力との本質はなにかば暗いものだ。われわれはやみのかわりに光だけを愛し、できるだけのことをして、たえず光に近づき、そうすればのちには完全に光に耐えうるようになる。ヨハネ三・一二、八・一二。ルカ一一・三六。(Ⅱ・九・30)

*

「起きよ、光を放て。」

あなたの光が臨み、

主の栄光があなたの上にのぼったから。」

(イザヤ六〇・一)

——あなたは光であり、さえすればよい。そうすればかならず光りかがやくであろう。やみは、なるほどあらんかぎりの手をつくして、あなたを吹き消そうとするだろう。やみがさまたげずに光りつつけさせるのは、いつもおのれに属するものである。なぜなら、やみもやみとよばれないで、光と開明とよばれたいからである。ヨハネ八・一二、九・三九。(Ⅱ・10・6)

*

悪は、攻撃をうけると抵抗する。これはまったく当然のことだ。ところが(あまり理解されないことが多いが)、善がなんの「攻撃の意図もなく」あらわれようとするときでも、やはり悪はかならず抵抗する。これはたいてい、悪の擁護者の弱さをしめすだけのことだ。やみは、光がかがやきさえすれば、すぐ屈服しなければならぬからである。したがって光の存在そのものがつねにやみへの攻撃である。やみは光とならんで存続することはできないのだから。そこでやみは光をしめだしてしまおうとせずにはいられないわけで、いろいろ手をつくし、とくに、光とみせかけることによってみごとに成功することもある。つまりたいていのひとにあっては光そのものも、一種のやみなのである。とくに多くの哲学者やさま

さまざまな種類のいわゆる「啓蒙^{けいもう}」が総じてそうなのである。これは光ではなく、光のように見え、光とみなされようとする一種のやみである。

キリストの顕現は、かつてこのくらい世にはなたれた最大の光であった。そのとき以来、その光がもはやすっかり消えさったことはない。ときには光が妙にゆらぐこともあるが、いちだんとしずかにもえつづけるにちがいない。ヨハネ一・六—二。ルカ一・五二。(Ⅱ・10・7)

*

人間を愛そうと思うなら——そしてこれこそどんな人間教育にも必要なことなのだが——さばくことをやめなければならない。

どんな子どもでも、どんな生徒やそのほかのひとでも、あなたと精神的なつながりができると、あなたが自分をさばいているかどうか、すぐ本能的に気がつくものである。ついで、キリストがマタイ七・二でいっているとおりのことが、彼らにも起こるのである。彼らもさばく、しかもきびしい尺度でさばく。こうして信頼のきずなはもうやうしなわれ、真の教育をばむにくしみと不信の壁にへだてられてしまう。すべてのわれわれの学校や、多くの家庭がこの病にかかっている。高等動物を教育する場合でさえことがらはおなじで、馬や犬をよく知っているひとならだれでも言えるようなことである。(Ⅱ・10・9)

*

金銭、名誉および享楽という、神にかわって人間を支配する三つの力といったん関係を断つたならば、おそらく自由を自覚するであろう。しかしそのつぎの第一瞬は幻滅である。なぜなら自由は——個人的自由も政治的自由も——たんに消極的なものであって、それだけではなんの満足も与えないからである。そ

のためには人間は、民族と同様、積極的[、]な使命を必要とする。(Ⅱ・11・24)

*

キリスト教はふしぎなほど積極的な要素である。たんなる教[、]えだけとしては、人間は長いうちにはがまんできなくなる。人間はキリスト教を実行にうつし、その霊にふれて、また「化体^{けたい}」しないではおれなくなる。あるいはそれで満足することなく、ありとあらゆる無益な質問や考察をかさね、信条、儀式あるいは集会などをつくって虚無感をのりこえようとせずにはいられない。このような宗教上の道楽者に用心し、もつとも身^①近^①かなつとめをはたしなさい。しかしなにつけても、あなたが信頼をよせている霊につまれてなすように。(Ⅱ・11・25)

(1) 今日成長しつつある、かなり人間的なばを有するたいへん活動的な青年は、男女両性とも、霊のなかに生きないで、むしろただ伝習の形式主義に堕しているような、無定見の好ましくないキリスト者をとくにするべく批判している。そのかぎりでは、彼らの経験と労苦によってまだ浄化されていない判断にも正しい点があり、真正のキリスト者と、「石の心」の持ち主と、それにあの宗教的道楽者たちとのあいだを、かなりきつぱり区別している。

*

ある人間の生涯の最大の日は、自分の歴史的使命、すなわち、神が地上で彼を用いようとするいわれがはつきりわかり、これまでみちびかれてきた道はすべてそこに行きつくのをさとする日である。(Ⅱ・11・30)

*

いったんこの世の君、悪と絶交したならば、よく用心して、彼の領土でつかまらないようにしなさい。彼は、そこではあなたを支配する力があるが、それ以外のところでは、無力である。彼が人間を自分に仕えさせるおもな領域は、金銭、名誉そして享樂であり、それになお欠くことのできないものに、うそと思わずらいとがある。(Ⅱ・12・1)

*

ミカ七・八・九、ナホム一・二、アモス三・七、四・二、五・三、八・二一四、ヨエル三・五、マラキ二・一七および三・一八の諸節は、いわゆる「小」預言者たちのことばであるが、現代にもふたたびあてはまる。人間の本性がいまもむかしも似ているという点からだけでもそうなので、人間の本性は、われわれの知っている歴史的知識のおよぶかぎりといわなければならない。とくにしかし、われわれのますますすすんだ自然科学的知識と成果にもかかわらず（というより、たぶんそのために）あまり高貴になっているわけではない。部分的にはまた現実政策に徹する強大な権力国家に相對する理想主義的な考えをもつ小民族にとっては、当時といまと時代が似ているというせいもある。強国というものは、いつも多くのひとびとを国自体の考え方にさそいこむ。それにもかかわらずこれらの強国はあとかたもなく消えてしまったが、このイスラエル小民族の警告を発する預言者たちの声は、今日にいたるまでなお生命をたち、力をおよぼしているではないか。(Ⅱ・12・12)

*

ほんとうの博愛は、神の慈悲と博愛との反映であって、人間のうちにやどることができ（テトス三・四）、その人間の肉体のすがたをすらてらし出し、とくに目の表情にそれがあらわれてくるから、この神的名ものの反映には、他人も気がつく。このことがモーセについても（出エジプト三四・二九・三〇）、キリストについても言われている。これに類する多少のことをわれわれもすでにこの目で、さんねんながらその例はほんのわずかだったとはいえ、何人かのひとびとにたしかにみとめることができた。

これと反対に、これ以外の博愛や親切はどれもわざとらしいまねごとで、これとおなじ感銘をよびおこすことがない。

上からの博愛は、気だてのよい子どもや、非常に年をとったひとにもつともよく見られる。博愛はまた、ある種の病人たちのほとんどこの世ならぬ美しさをも生みだす。芸術家が使徒や聖者たちをえがくおりに用いる光輪は、この博愛をいくぶんでも暗示するつもりなのだ。もちろん、彼らは人物の顔にこの表情を与えることができれば、いっそうよいわけであらう。しかしたいいていこの表情は顔にあらわれていない。

もつとも有名な聖母像のなかでも、ラファエロ作サンシストの聖母像と、ムリリオの「マリヤ昇天」だけが、この表情をいくらかつたえている。もつともつぎに述べる理由から完全に正しい表情とはいえないが。というのは、この変容のかがやきは、いったん見ると、もはやわすれがたいものとなる。しかし、それは、敬虔（けいけん）の表情とか、さらに、その敬虔を告げる上を見あげる恍惚（こうこつ）たるまなざしではなく、こよなく光にみたされたあたたかい博愛のいかにも自然な表情なので、どんな画家の筆もえがきえなかつたようなものである。（デフレッガーはおそらく彼のかなり小さい絵のひとつでそれをえがいたといえよう。ある庶民の老女のまなざしがそうだが、幼児イエスを抱いた彼の有名な聖母像のまなざしはちがう。）（Ⅱ・12・

どんなひとにも真に丁重^{ていじやう}にふるまうということも、人間にやどった神の博愛の同胞にたいするあらわれにはかならない。いい教育によって、たとえば外交官やその他の洗練された世俗人が身につけているような別種の丁重さは、なっていない礼儀作法にくらべればたしかにころよいものかもしれないが、しかしつねにどことなくわざとらしい印象を与え、如才^{じさい}のなさとか、偽善と紙一重の見せかけのようななんともいやな感じをのこす。それは、代用物としてはわるくないが、それ以上ではない。

動物たちでさえ、ほんとうの博愛には感づくもので、聖者たちの説教に耳をかたむける鳥や魚の伝説とか、アッシジのフランチェスコの生涯における「兄弟狼^{おつか}」のふしぎな物語には、みなこういう真の背景がある。

植物栽培でも、あるひとびとはとくに「腕がいい」といいならわされている。しかしこれもけっきょくは、この博愛にはかならない。(Ⅱ・12・26)

完全からだが健康であるというありがたい感じは、老年になるとたいていはただかりそめのもので、からだがよく休まれて、あたたまっているとき(たとえば朝、床のなかにいるときとか、秋トゥーン湖畔の日あたりのいい場所にいるようなとき)にあるものだ。ところがそれはしばしば、なんともいえないたえなる感じで、来世の生命の予感ではなからうか。われわれが年をとってこういう感じをたえずもちえたならば、円熟と静かなはれやかさのこの時期——フランス語の「セレニテ」(清澄)のほうがもっとびつたりする——は、まことに人生最上のときであり、いわゆる青年のよろこび、壮年の力などはとうていく

らべものにならない。だから日没の美しさともむろん比較にならず、むしろ、よりよい生の日の出のかがやきにたとえられよう。しかし、それがすっかり昼になってしまうと、われわれはこの生にたえられないであろう。

これが老年の最上の幸福である。老年の幸福は、いつでも家庭の楽しみや、思い出のなかにのみあるのではなく、もっといいものでありうるのだ。(Ⅱ・12・27)

*

すでに地上で神からはなれて生きていたましいは、その肉体が朽ちてしまうと、どうなるものであらう、それをまったく正しく想像することはむずかしい。もしたましいが、肉体の一機能にすぎなかったならば、もちろんたましいもおなじようにくずれてしまいうちにちがいない。それでもおそらくたましいにとってはいちばん寛大な運命であらう。

そうでないと考えると、たましいはかならず光の世界からはなれ、福音書のどこにもしるされていないようなおそるべき空の状態にいてはならない。このようななくさめも希望もない隔絶にくらべれば、ラザロと金持ちの寓話(ルカ一六)がつたえている状態は、まだしもずっと高い段階である。なぜなら、この状態では不幸の自覚と、自分以外のものたちのために、さえ、よりよいことを願う自覚とが暗示されているようにみえるからだ。(ルカ一六・二七、二八)しかし、これとてもあきらかに、神から見はなされたというひとを、比喩的にえがいたものにすぎない。福音書にある歴史上の実例は、福音書の解釈者はだれも黙して語らないのがつねであるが、ユダの運命である。彼について、キリストは生前も死後も、もはやなにも語っていない。このように神と人間とからすっかり見すてられたひとがありうるであらうか。そしてその運命はどのようなものであらうか。

あなたの家族を、どんなことがあろうとも、自覚して神とむすびついているようにつとめなさい。そうすれば、彼らは、霊がはなれさったのち、真空のやみのなかにただひとりたたずまなくてもすむであらう。(Ⅱ・12・28)

一五 天国への道

わたしたちの宗教教育の一欠陥はおそらく、まさにあるべきまたありうるとおりの完全な生活をすでに墓のこちら側で見いだす勇氣と希望をあまりにもはなはだしくひとから奪い去り、そのかわりにあちら側を指示していることであろう。ところがそのあちら側については、唯一の信頼すべき源泉たる福音書から、わたしたちは、たんにあちら側があるということを知るにすぎず、それがどのようなものであるかはけつして精密には知らない。

旧約聖書は、なるほどときおりあきらかに、「配偶の地」⁽¹⁾について語り、すでに地上でそこに到達することがわたしたちの使命であり、しかも可能な使命であるとなしている。またダンテもその煉獄篇⁽²⁾の最後の教歌を、この「地上の楽園」の驚くべく美しい描写にささげているが、その描写たるや、天国生活⁽³⁾の彼のいくぶん不明瞭な記述よりもっと具象的である。ところが、わずかの例外をのぞきほとんどすべての現代人の思想の世界は、この地上生活の行程がその終局に近づくにつれて幸福と歡喜の増大するものであ

りうるということをなかなか認めるところまでいっていない。この場合、この差異はまったく次のことにある、すなわちあるひとびとはあらゆる存在のこの避けがたくも悲しい終結に多かれ少なかれ諦念をもつて身をゆだねるのであるが、他のひとびとは死を通して顛落の最低段階から生命の最高段階に飛躍せんことを希望する、というにある。

(1) イザヤ六二・三―五。パンヤン『天路歷程』第二〇章参照。

(2) 聖アウグスティヌスの『神の都』の終局もまた、地上において可能な状態の叙述である。

—

イスラエルのあの預言者〔第三イザヤ、イザヤ五六―六六の記者を学問上こういう〕が、彼の「ベウラ」をもつてなにを意味したかは、じゅうぶんあきらかではない。しかしおそらくそれは、たましいが意志の面で神とまったく合一するにいたり、自己の内的なあらゆる反抗からもまったく自由になったことを自覚している状態を意味するものであろう。

(1) 「訳者注」「ベウラ」は「ベウラー」「配偶ある者」を意味する。イザヤ六二・四、五に「あなたは〔イスラエル〕はもはや〔夫たるわれヤハウェーの神に〕《捨てられた者》と言われず、あなたの地はもはや〔荒れた者〕と言われず、あなたは《わが喜びは彼女にある》〔すなわち、神のよろこびとしてのイスラエルの意〕となえられ、あなたの地は《配偶ある者》となえられる。主はあなたを喜ばれ、あなたの地は配偶を得るからである。若い者が処女をめとるように、あなたの子ら〔これはたぶん「シオンを建てる者」、すなわち「ヤハウェーの神」の誤り〕はあなたをめとり、花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」とあるように、ここに神ヤハウェーとイスラエルとの関係はホセアにおけるように、夫婦の関係に比せられている。一心同体的な不可離のものとして、ヒルティがここに意味したごとくであらう。

いろいろな事情にもとづきうる外的反抗は、たましいを暗くしない。外的反抗にたいしては、たえず用意

された救助があるから、⁽¹⁾もはや問題とならない。この救助については、すでに「たましいの」自由をえた人間がただ彼のためにのみ規準となるようなより、高い理由からか、または他人の利益のためにこの救助を求めようと欲するかいなか、⁽²⁾が問題となるだけである。

(1) ヨハネ一五・七。マルコ一一・二四。マタイ七・七。サムエル上七・三。ヨシュア一・五十七、七九、二一・四四、四

五、二三・八一、二、一四、二四・一九、二〇。歴代下九・六。イザヤ六五・二四。

(2) ルカ二四・二六。マタイ二六・五三、五四。

おそらく、——それは他のなにものもはやどんな場合にも救助の力がありそうにもないことがあきらかとなるので、やむをえず——ある時機が到来するであろう。その時機には、外的にキリスト教に属している文明国のひとびとがキリスト教のこのようなもろもろの約束をも真実のものと認めることになるう。けれども今はまだその時機は熟していない。

なんとすれば、平常あらゆる偶然にゆだねられているこの人生において、人間はなにものかに信頼することができなければならない。ところでこの種の確実な救助がなければ、よりたのむところは自己の力と知、すなわち「是認された利己主義」の体制であらねばならぬであろう。この是認された利己主義というものの限界を定めるのは困難なことで、この事態から、実はわれわれをおびやかすあらゆる害悪が発生してしまうのである。

「この世の国々」は、いつになっても自滅しようとはなかなかしないであろう。この国々において万人のため、そうでなくともただ大多数のためにさえ平和と歓喜を求めるのは、高度に進歩しつつある「文化」にもかかわらず、むしろ少数者がいなく幻想にすぎない。

この文化が最高最善の場合にもたらずものは、スペイン⁽¹⁾、ラスキン⁽²⁾、エマソン⁽³⁾、カーライル⁽⁴⁾、ゲーテ⁽⁵⁾などの、このような方途をもってする〔地上に平和と歓喜の文化の楽土を直接的に実現せんとする人文主義的な

方途〕あとうかぎり、善意な処世知の哲学である。そして今日もなお教養あるひとびとの善良な部類はこれに従って生活しようと心がけている。この哲学は、それがまことに幸福な秩序ある外的事情によって保たれている間は、ほぼそのとおりに実現される。しかしそうでない場合は非常に危険であって、時あつてか厭世主義や人間逃避に転ずるおそれがある。この哲学はただ諦念に終わり、歓喜にいたらないことにおいてまづ、たく軌をおなじうしている。そしてこの哲学が真理を語る場合ですら、低度の真理であつて、より高度の真理によって反駁される。

(1) 〔訳者注〕 スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) イギリスの哲学者。ダーウィンの進化論と同種の考え方。「進化哲学」を展開する。彼の「総合哲学」の基礎論はその『第一原理』(一八六二)である。

(2) 〔訳者注〕 ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) イギリスの評論家。主著『近代画家論』(一八六〇完)、『この後の者にも』(一八六二)、『胡麻と百合』(一八六五)、『野橄欖の冠』(一八六六)。「勤労なき芸術は罪であり、芸術なき勤労は野蠻的である」のスローガンに彼の考え方の性格があらわれている。

(3) 〔訳者注〕 エムソン (Ralf Waldo Emerson, 1803-82) アメリカの思想家。「コンコードの哲人」といわれる。カーライルと親交あり。超絶主義者一団の中心人物。彼は人間自然の個性の進展を宗教的な直観主義と結びつけてはかる。『自然論』(一八三六)、『随筆集』(一八四四完)、『代表的人物』(一八五〇)などの主著あり。

(4) 〔訳者注〕 カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) イギリスの評論家、歴史家。ゲーテと文通し、ゲーテの文学に傾倒。氣迫あり、雄渾な精彩ある文章を書く。物質主義、功利思想を排する人生観、社会観をもって一世に預言者の警世的文人として活躍する。『衣服哲学』(一八三八)、『英雄および英雄崇拜論』(一八四一)、『過去と現在』(一八四三)などの論説、『フランス革命史』(一八三七)、『オリヴァー・クロムウェルの書簡と演説』(一八四五)、『フリードリヒ大王伝』(一八六五完)などの歴史的名著あり。

(5) 〔訳者注〕 ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) ドイツ最大の世界的詩人。

(6) このいちじるしい一例としてエマソンの次のことばを引用しよう。すなわち、「神は各人に真理か安息かの選択を与える。あなたが好むいづれかをとれ——あなたはけっして両者をもつわけにゆかない」。これは通常あるがままの人間生活にとってはまったく正しい。けれども、真理と安息とを合一的にもつような生活もたしかに可能である。〔マタイ一・二九、三〇参照〕

これが今日の教養人のなかのもっとも天眞豊かなもっとも幸福なひとびとのふつうの人生行路である。最善の場合にもこれが結末を成すものは、古代文化世界の専制君主であり、絢爛たる成功をおさめた皇帝アウグストゥスの辞世の懐疑的なことば、「友らよ、喝采せよ」であるか、あるいはまた、わたしたちの時代とその外的文化面で酷似しており、野蛮人の侵入に先だって文化の頂点を形成した時代に、ハドリアヌス帝が小歌をうたいつつおのがたましいに訣別を告げたが、あの哀調ひとの心を感動させる小歌かである。その歌にいわく、

「不安な、柔弱な、散漫なたましいよ、軀のあるじで仲間だった者よ、おまえはいまや色あせた、かたい荒かぶの地にゆく。そこではいままで慣れてきた快活は、もうおまえのために見当たらないだろう」。

(1) 〔訳者注〕アウグストゥス (Gaius Octavianus Augustus, BC.63-14) 帝政ローマの初代皇帝。元老院から「アウグストゥス」(尊敬者)の尊称を贈られる。また Pater Patriae (国父)の尊称も受ける。政治、軍事、経済、産業、学芸などあらゆる面に進展せしめ、ローマの黄金時代を現出させた。その臨終にあたり、「諸君はわたしが生涯を通してわたしの役割をよく果たしたと思うか」と友人たちに問い、さらに声を高めて、「間然するところなければ、きみら声をあげて演者のため喝采せよ！」というギリシア詩人の詩句を吟唱したということである。

(2) 野蛮人のローマ大帝国攻撃による古代文化の没落に関する五世紀のサルヴィアンの記述は、現今の状況そっくりであることを思いあたらせる点が多々ある。

(3) 〔訳者注〕ハドリアヌス (Publius Aelius Hadrianus, 76-138) 平和政策をとり、サルヴィウス・ユリアヌ

スを筆頭に法学者を重用して『永遠の法』(Etdictum perpetuum)を編んだ。

今日、古典的教養あるひとびとはおおかた、以上のような考えである。彼らは成熟したよろこばしい老年にたいしても、よりよい来世の生活にたいしても、なんら真実の希望をもたない。このようなことは、ものごとを考えたり、また観察したりするひとならだれでも、自分の環境においてすでに経験している。

これとは別にありうる人生行路は、神の「啓導」⁽¹⁾による行路である。それは次のときことを約束する。「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)。「それを望まないなら、わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」(同二七・五)。「あなたの耳はあなたの後べからへこれが道だ、これをゆけ! 右にも、左にもゆくな」とさとすことばを聞くであろう」(同三〇・三一—私訳)。「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる」(同三二・一八)。「弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができ。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」(同四〇・二九—三一)。「見よ、あなたにむかって怒る者はみな、はじて、あわてふためき、あなたと争う者は滅びて無に帰する」(同四一・一二)。「あなたは主によって喜び、イスラエルの聖者によって誇る」(同四一・一六後半)。「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」(同四三・一八、一九)。「わたしは東から猛禽を招き、遠い国からわが計りごとを行う人を招く。わたしはこの事を語ったゆえ、必ずこさせる。わたしはこの事をはかったゆえ、必ず行う」(同四六・一二)。「見よ、わた

しはよろめかす杯をあなたの手から取り除き、わが憤りの大杯を取り除いた。あなたは再びこれを飲むことはない。わたしはこれをあなたを悩ます者の手におく。彼らはさきあなたにむかつて言った、「身をかめよ、われわれは越えていこう」と。そしてあなたは「その背を地のようにし、ちまたのようにして、彼らの越えていくにまかせた」〔同五一・三、三三〕。「あなたは義をもつて堅く立ち、しえたげから遠ざかつて恐れることはない。また恐怖から遠ざかる、それはあなたに近づくことがないからである」〔同五四・一四〕。「すべてあなたが攻めるために造られた武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立つて、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である」〔同五四・一七〕。「主は常にあなたを導き、良き物をもつてあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる」〔同五八・一二〕。「あなたは主の手にある麗しい冠となり、花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」〔同六二・三前半、五後半〕。

「彼らの勤労はむだでなく、その生むところの子らは災にかからない。彼らは主に祝福された者のすえであつて、その子らも彼らと共にあるからである。彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、彼らがなお語っているときに、わたしは聞く」〔同六五・二三、二四〕。

「まことに、母のその子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める。あなたがたは見て、心喜び、あなたがたの骨は若草のように栄える。このことを見て、主の手はそのしもべらと共にあり、その憤りがその敵にむかっていることを知る」〔同六六・二三、一四〕。

(1) 『幸福論』第三卷、第三章「わがなんじになさんとするは、驚くべき事なり」〔白水社版『ヒルティ著作集』第三卷所収〕参照。

(2) これらの聖句はすべて預言者イザヤ〔の書〕からとられたものである。これにたいする人間の答えは詩篇一

八である。

このような種類の生活とふつう世間にあるような生活とのちがう点は、このような生活においては憂慮もなければ娯楽や多くの保養の必要もなく、けっきょくは自己欺瞞の必要もなく、つねにいろいろな事物や事情をそのあるがままに直視しうるということにある。しかもこのような生活においては、事物や事情をいつなりともまたどんな場合にもなんらかよき事態へと形成されねばやまぬように、それらを変様させたり、あるいは不利をこうむらないで耐え抜くことができるという不動の確信がある。

(1) ヨハネ一六・二〇—二七。士師五・三一。ヨシヤ二一・四五。ローマ八・二八。

こうなつてくると、この道においては健康も不屈の力さえも別に必要としない。事実はこの道では健康や力がかえつてよく見受けられるであろうが、むしろ虚弱なひとや病患をもつひとがなお変わらずによろこんで働くことができ、他の道にあるもつとも健康なひとびとよりも、人類のために貢献するところ大なることがまことにしばしばである。

さらば選べ。この両道はあなたにまかせられてある。

あなたが「世間一般の道」を、すなわちハドリアヌス時代におけるように、貴顕のひとや卑俗のひとの大多数が、また彼らと共に教養ある中流階級の相当多数のひとが、いまやまた實際踏んでいる道を選ぶならば、あなたの運命がときにはつらく感じられても、もはやかこつようなことがあつてはならない。あなたはまことにそのような運命を望んだのであるし、自身他の運命をもたなかった先人たちの跡にしたがったのではないか。

これに反してあなたがキリスト教の道を選ぶならば、あなたは次のことをあきらかに自覚しなければな

らない、すなわちいまや重要なことは、信仰告白や教會的形式を大いに改革することではなく、むしろまったく健全な自然な、ひとをよろこばせ忍耐強くし、だれにでも善意をつくすキリスト教を體現することである。このようなキリスト教は自明的なものであつて、たえず鼓舞激励するの要がなく、おりにふれたの事態が現われるにつれてよきこと正しきことをなすべくつねに用意あるものである。⁽¹⁾

(1) ミカ五・六(七)。

「その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、人によらず、また人の子らを待たずに主からくだる露のごとく、青草の上に降る夕立のようである。」

「実行の実を結ばない感情の過剰は道念を刺激するよりもむしろこれを弛鈍^{ちどん}ならしめる傾向があることは、われわれの天性に關してよく知られた法則である。」(レッキ)

このキリスト教こそまさに現代が要求し、幾千の人が衷心から本能的に熱望し、近き将来に期待するものである。なんとなれば、かかるキリスト教にまさるものは世になく、ただこれのみが現代世界を有効に改良しうるからである。

二

預言者イザヤ(の書)から最後に引用した章句(イザヤ六六・一三、一四)は、肉、体、の、健、康、についても語っているのであつて、これに關しては今日の教養ある階級のひとびとが靈魂の健全についてよりも、さらに心を用うるのを常としている。さてまず、眞実の神はまた肉体的病患にたいしても支配者でありえまたあるにちがいないことはまったくあきらかである。またこういつた事態になら關係がなくとも、常識に問うてすでに明白であるのは、内的なおちつきと意志の先行的強化なくしては、たんなる医術的方法をもつてしては、少なくとも神経病や感情性精神病の日ごとになお増大しつつある無數の大軍はいやすにまことに困

難である。⁽²⁾これらのまた多くの他の病患のほんとうの原因は、しかしながらもつと深いところにある。

(1) 出エジプト一五・二六「わたしは主であつて、あなたをいやすものである」。申命五・二六、七・一五、三二・三九。

(2) このことを証しているのは、マタイ九の中風患者の物語、および現代のブルームハルトの経験である。アメリカの「サイエンチスト」もまたこれを正当に主張している。

われわれの世代の健康と体力とは、ゆゆしくも欠陥がきざし始めているが、そしてすでに昨今のあらたな民族移動の襲撃にほとんど耐えかねるであらうが、これは今日いかなる科学いかなる技術によつてもはや本質的には改善されえず、また増進しつづける類落から防護されえない。これはただまったく、あらゆる健康な肉体的生活の根底に横たわるところの道德的戒命に、教養ある階級が自発的に復帰することによつてのみ可能である。これらの戒命をいつまでも無視していることにたいする警告は、すでにもろもろの文化国民の多くの家庭においてじゅうぶんあきらかに見受けられる。そしてこの現状がなお数世代にわたつて持続するならば、諸民族の生活にも禍害が現われずにはおかないであらう。

改善はぜひともまず哲学的領域から着手されなければならない。衛生学だけではじゅうぶんの効果を収めるには遠い。この際根本問題となるのは、そしてその答えに将来の医学ならびに将来の哲学の形成が依存しているわけであるが、次のこときものである、すなわち、肉体との緊密な関連をよそにしておよそ人間の精神「霊」が存在するかどうか、あるいはまた、われわれが精神「霊」と名づけるものはたんに肉体的器官の一作用にすぎないのか。そして前者の場合、精神「霊」の肉体への影響が可能なるものであり、その逆よりもいっそう強力であり、少なくともそうありうるか、という問題である。

われわれの見るところでは、これは、今日いたるところその影響力をもつところではわざわざいをもたらず唯物主義との論争における決定的問題である。そして医学界においてもだいたい、天秤のさらはしだいに唯物主義に反対して傾き始めているように思われる。病気にたいして多かれ少なかれ主たりうる精神力

があつて、この精神力の共同作用を医者はずいとも要求しなければならぬという事態が、認められ始めてきた。ところが、病人にはまず通常まことにこの力が欠如しており、そして病人はこの力を自分自身のかで生み出すことができず、またこの力を医者や看護人の側からのたんなる説得や暗示だけでうるわけにもゆかない、という駁論^{ばくろん}だけがいまだ除かれていないのである。してみるとここで最後の論理的に拒みがない結論が欠けていることになる、すなわち、人間の外部にあって、自分の力ではないが、しかし自分の力になりえ、また自分のなかで作用することのできる、そういったある力があらねばならない。これは理想主義的思惟^{しゐ}の連鎖における必然的な最終の一環である。これがなければ唯物主義は、あらゆるその不可避的なまた宿命的な^{しゐ}みじめな状態をもつていつまでも現世に君臨することになる。

(1) およそ世にある最善の哲学たるカント哲学の欠陥もここにある。この哲学は精神的に強力な素質のひとつにのみ適するが、彼らにも必ずしもすべての場合に適するとはかぎらない。この哲学はけっきよく最後のことはではなく、ただとくに教育と自己修養にとりわけ適した思索の中間段階であるにすぎない。病氣を（したがってまた死をも）たんになんら真実なるものでないと見なしたが「サイエンチズム」の誤謬^{ごびやう}もこれと同然である。

三

人生は、教養ある階級において今日また實際、ダンテが『神曲』の冒頭の数句のなかで描写しているような疑惑、迷誤、邪路の乱れずさんだあの森にも似ている。現代教養のあらゆる要素、すなわち哲学、文学、芸術、神学の一部すらも必ずしもこれらにおとらず、それぞれおのが分をこれに貢獻して、この迷宮からの脱却を容易ならしめるどころか、かえって難渋^{なんひつ}にしている。これに反して、無教養階級や現代の半教養階級の大部分のためには社会主義があるが、これはそのうたがいもなく正当な反対を多くの現存のものに向けてはいるが、無神論の基底に有用な（社会主義の）哲学を樹立するという無能さを同時に暴露し、

そのために健全な精神生活から彼らを阻止している。これらのなぐさめなき思想の広野に、真理を熱心に追求する才氣煥発^{かんぱつ}の人間が多年途方にくれて安らいもなく、あちらこちらとさまよい歩き⁽¹⁾、あるときはこの「体系」から、あるときはあの「体系」からと、確実性を要望することしばしばである。またいっぽう才能少なきひとびとは、浮薄な享楽生活の凡庸に身をゆだねるわけである。

(1) 彼らのなかにはこうしている間についてはまったく狂気におちいるひともしばしばある。ニーチェの運命もそれであつたし、彼以前の他のひとにもすでに同様の人が幾人もあつた。

ダンテがまったく正しく認識し叙述したように、この前者においては、まことになおある種の健全常識の光が照らしているだけのこと、その光が彼のうちにおいても、彼の善意志のゆえに、神の恵みによってつねに保たれ、そして彼に少なくとも人間のふつうの状態の不幸をあきらかにしかまいよいあきらかに示しうるのである。さて彼はしだいに、彼にとって真剣であるかぎり、地獄の深淵^{しんえん}を通じて、淨罪山の狭いけわしい登山道をよじのぼり、そして最後には、彼が以前はほとんど嫌悪^{けんお}していた自己の生活が、いまや彼には、清らかな大氣と明るい日光と、また低いところにある人間のあらゆる住みかを見渡す遠望をもっている美しい自由な山嶺^{さんりやう}であるように思われる。そのとき彼に、あらゆる哲学、あらゆる外的な教会制度のなから、ただ神にたいする真実な愛のみが残る。それは、うたがうべくもなく存在しており、悟性的には認識されないが、しかし容易にかつあきらかに感得^{かんとく}されうる、いっさいの善の原因にして原動力たる神への愛である。また、かつて歴史的に存在し、不可見ではあるが現存している、この霊の地上における化身としてのわたしたちの主、キリストにたいする愛が、彼に残る。このような愛からこそ、まったく自然に、人間のさしずや見解にもはや多くわずらわされずに、できるだけこの模範にならって生活しようとする努力が生じ、その能力も生ずる。これは、人生の重要事たる死をもよく克服して、今後⁽¹⁾もはや他から断じておかされることなく、目ざめて独立し、解放されたたましいの、無上の幸福感情である。

(1) ヨハネ黙示二・一二。ダンテ『神曲』煉獄篇第二七歌。

「なんじの道はこれより先、けわしくもなく、かたくもない。

もはやわたしの合い図も言説もまつにおよばない。

なんじなにを欲するとも自由であり、正しくかつ健やかである。

またおのが意のままにせざるは過誤である。」

なんとすれば、これは、どんな他の道によっても到達されえない地上生活の高峰であるばかりでなく、また同時に、まったく別な生活段階への、自然にして確かに唯一の真実な渡り道でもある。「天国」をこれ以外の思想や気持ちで考えることはできない。また、あきらかにすべて地的性質で、またこの世のために定められているわたしたちの科学的もしくは教会的努力を、天国にもち込むこともできない。そしてさらに、現世の憂慮と「この世のむだばなし」に耽溺した精神生活から、突然、しかもまったく他者の功績によって、かくもまったく別な状態に到達しうる、と信ずることもまったく不可能である。

(1) このことはまたまったく明白にヨハネ黙示二・一二に言われている。

(2) もしこんなことが起こりうるなら、できるだけ早期の死こそ人間の運命の最良のものであり、地上の生活は不幸のほかのなにものでもないであろう。そのような見解もキリスト教界にしばしば現われはした。第一テサロニケ四・一三―一八。たとえば中世の教皇レオの最大者たるインノケンチウス三世（セグニのロタリウス）が、このことを文字どおりに、注目すべき小冊子「世界の侮蔑、すなわち人間の状況のみじめさについて」のなかで言っている。すなわち、「日の光を見ないうちに死んだ者、生を受けないうちに死を味わった者は、幸福と称揚さるべきである」。このような厭世主義はキリスト教からふたたびしめ出されねばならない。そうでなければ、旧約聖書のほうが新約聖書よりも真実であり、なぐさめあるものとなるであろう。

この点においてわれわれは、「キリストの犠牲の死」に次のようなひとびとにとってさえ贖罪の力を

帰するやうなひとびとのいわゆる敬虔けいけんな見解とは大いに趣きを異にする。そのひとびとというのは、彼らの生活全体においてキリストの人格とまたその生涯のわざになんら現実にかかわりをもたないで、事実にはつねにただ他の神々に、「一般の文化財を偶像として」仕えておきながら、さてキリストの「死」からのみあまりにも身がってなご利益を引き出したがるひとびとなのである。神龍しんりゅうの世界においても、ことはそう機械的にゆくものではない。神龍を受けんとし、他のあらゆる生活財よりもこれを重んぜんとする意志が、時代の波から救われんと欲するひとにおいては、その生存ちゅうにすでに現存していなければならぬ。たとえこの意志がおおかたは、なかなか多くの迷誤と中断をともしないながら、たんに週期的に起こり、またしばしば人生の最終的な諸段階にいたってはじめて起こることさえあるとしても。

われわれはいまや、教養あるひとびとをまず次のことに關してしだいにまた説得することができなければならない。すなわち彼らが超感覚的な事物への信仰なくしては彼らの人生目的をけつして達しえないということ、しかもそればかりか、その肉体的健康さえ彼ら自身およびその子々孫々にとつてもけつして保持しえないということである。われわれはまた、地上における真にして善なる生活への勇氣を彼らにとりもどしてやらねばならない。実にこの勇氣は、わたしたちの眼前からすでにいちじるしく喪失している。

おそらくは——われわれはそれを知らないが、確信をもってそれを望むのであるが——前に引用したとおなじ預言者「イザヤ」が言及しているやうな時代がやがてふたたび到来するであろう。「その日、耳しいはこの書物の言葉聞き、目しいの目はその暗やみから、見るこがでける。悲しみなやむ者は主によつて新たなる歡喜を得、人のなかの貧しい者は、イスラエルの聖者によつて樂しみを得る。あらぶる者は絶え、あざける者は失せるからである。迷えるたましいは悟りを得、つぶやく者も論さとしをうけるからであ

る」〔イザヤ二九・一八、一九、二〇、二四〕。

これが全人類にたいするわたしたちの希望である。このほかにわたしたちは希望あるを知らない。真の生命にいたらんと欲するひとはだれでも、二、三世紀ごろの一古哲と共に次のごとく言うがよい。

「なんじ、永遠の計らいにより万象の存在を統御し、

天地を創造し、原始より時劫^{ヒジウ}をみちびく者よ。

父よ、われをもまた明朗なる高所にいたらしめよ、

救いの泉に飽きたり、光に向かいて歓呼しつつ、

わざわいよりまぬかれ、地上の物質の重みより解かれて、

恵まれたる霊眼を永遠になんじに注ぎつつ。」

（いわゆる「ボニテイウスの祈り」より）

解説

ヒルティの世界的名著『眠られぬ夜のために』Ⅰ（第一部）Ⅱ（第二部）から抜粋し、その内容にしたがって一五項目に分類し、一書にまとめてみたのが本書である。原著は一年間三百六十五日（第二部には、うるう年の場合も考えて二月二十九日の一文もある）を通して毎日一文ずつ読めるようにしてある。各文に表題がついているわけではないが、ひとつたるものの生き方について深く思いをいたし、力強く語られている随想の一つ一つである。内容にしたがって分類してみても、そこに論理的な線がひきうるたちのものではない。それは玉の緒でつらなっている珠玉のようなもので、色調・光彩の交錯・照応が各文各項の間にあって、渾然として全一体をなしていると言うべきであらう。

第一部の冒頭には、眠られぬ夜の誘引となる精神的または肉体的原因についての考察と、それらの欠陥・病患をとりぬく道を道しるべしている相当長い一文がのっているが、これは全文を省略した。

同巻の巻末に「なおりたいのか」と題して、心身の健康への道を語っている文章がある。これは前者、道しるべの積極的内容であるので、本書の第一五項に「天国への道」と題してのせた。

おなじく白水社版『ヒルティ著作集』ちゅうの第四巻と第五巻が『眠られぬ夜のために』Ⅰ、Ⅱであるが、前者は編者自身の訳、後者は登張正実・小塩節両氏の共訳である関係上、訳文のおもむきがちがうのはやむをえない。各文の文末にⅠ、Ⅱの別と月日付を参考のため付記しておいた。編者の原訳のややむずかしい漢字や表現は、なるべくこれをやさしい漢字や表現に改めた。第二部の訳語訳文においても、そのような立場から、編者の責任において少しく変えさせていただいたところがあるが、在独ちゅうの両氏のご了解を感謝するしだいである。

各項について一言するならば、一 ヒルティは「聖書」を万人が、肉体のためには食事をとるように、たましいのために毎日親しく読むことをなよりの念願としている。だからほとんど各文に聖句の引用がつけてある。読者は丹念に

これにあたり、その前後をついでにぜひ読むよう心がけてください。聖書を教訓やお説教だなどと思う先入感があったなら、そんなものは吹きとばした気持ちで読むことである。聖書は一大ドラマで、事実をもって迫ってくる書であるから体あたりの心がまえで読んでください。二 ヒルティは別に『幸福論』全三巻を書いているように、ひとのほんとうの幸福がなんであるかをねんごろに語ってくれたひとである。この「幸福」ということばもイエスの「幸いなるかな」のあの山上の大告白にその源を発していると思われる。三 「苦しみ」はつづやいたり避けたりするのでなく、そこにひそむ意義を身をもって受けとり、四 「勇氣」をもって突破、前進すること、五 勇氣の源泉はまさに「信仰」にある。信仰は神の存在を信ずるとか、十字架のあがないという命題を信ずるとかいうことではなく、自分をなげだしてキリストの生命につらなること、そのふところにやすらうこと、無比の親友として信頼すること、そういったヨハネ的性格の深い人格的信頼、霊的な没入がヒルティの信仰告白の基調である。六 それゆえ信仰は神からの愛、キリストに化身している「愛」をわが胸のうちに受けて同質の愛のひとつかぎりなくつづくことのほかのものではない。この愛こそ、ヒルティのすべての文字のおくに流れている生命の質なのである。七 対神関係が信仰であるなら、対人関係は「信実」であらねばならない。信は縦にも横にも貫く線である。ドイツ語のトロイエという語の訳語として編者は信実という語を用いたい。必ずしも対人関係を意味しない心情のまことさとしての真実と区別したいわけである。この「信実」をヒルティは非常にたいせつな心根^{しんこん}としている。信義^{しんぎ}といってもよい。下心^{しんしやう}やうらざりやいつわりのない心である。社会生活で実^{じつ}にたいせつな心根である。八 「キリスト教」といってもそのつかみ方はピンからキリまである。ヒルティはいっさいの条件づきなものをぬぎすて、ただキリストが意味したキリスト教とはなんであったかを端的に告白しようとしている。むしろそれは福音、すなわちよろこびのおとずれであって教えではないのである。実にキリストそのもののほかのなにものでもない。九 ヒルティは生涯を通して実によく「仕事」をしたひとである。それは義務ではなく、生活そのものであり、楽しみであった。一〇 「人生」について豊かな経験や体験をもつ著者の人生知である。一一 彼は良妻に恵まれたひとで「結婚」に関する良識もその体験なしには考えられない。一二 「生命」はヒルティにとって地上にあってすでに永遠的なものである。彼は『永遠の生命』という書をかいている。一三 ひとは「よろこび」のともなわれないことに長く耐えうるものではない。そして心いっばいに生きるところにはよろこびの泉がわい

てくる。一四 眞の自覚と使命とに生きる人格は「自由」である。ひととはだれでもかけがえのない存在である。人格とはそういうものであり、自由のないところに人間のたましいは窒息する。まことの自由は深い責任を自覚して浮きあがることのない健全なものである。一五 「天国への道」は「わたしは道である、真理である、生命である」といったイエスを道しるべとして進むところに、天地を貫く大道のあることを語っていると申してよいであらう。

さて『眠られぬ夜のために』Ⅰは成立からいうと、一九〇一年、著者の六十八歳のときに出版されたものである。内容的にはⅠもⅡも彼の晩年の円熟した人格とゆるぎなき信仰と卓抜なる見識とがそこに豊かに盛り込まれている。同書Ⅱは、彼みずからが編み出したものではなく、原著の序文にあるように、ヒルティの令嬢メンタ・ヒルティが編んで父の召天後十年、すなわち一九一九年復活節のころ出版したものである。この出版の動機はこうである。ヒルティの在世ちゅう、一九〇八年二月のこと、著者の未知の一読者から著者に「必要に応じて一年ごとに第一部と交替させて読めるように、こういう書の第二部をぜひ書いてほしい」という申し出があったので、著者みずから、この願いに応じて第二部にあたる原稿をほぼ完成し、しかもそれに「交替版」とし、日付もつけておいたのである。令嬢は、これに「書簡や未発表の小文」をおぎなうて、第二部としたわけである。ヒルティの生涯については読者は、白水社版『ヒルティ伝』（アルフレート・シュトゥッパ著、国松孝二・伊藤利男共訳）、『幸福論』Ⅰ（水上英廣訳）の巻末の同訳者の紹介文「ヒルティの生涯」を参考されたい。なお本書の姉妹編として『ヒルティ幸福論』（斎藤栄治編）のあることを付言しておきたい。

なお、本文ちゅうにみられる「」カッコでくくった箇所は本文の理解を助ける意味で訳者が注記したものであり、本文ちゅうの傍点の箇所は原文で強調してある箇所である。本文または注記のなかでとくにドイツ語を付記した場合は、訳語の性格をあきらかにするためであるとご承知ください。

ヒルティ

眠られぬ夜のために

〔新装復刊〕

編者

◎

小池辰雄

一九九六年六月二〇日 印刷
一九九六年六月二五日 発行

訳者

◎

小池辰雄
と張正実
登塩正実
小塩正実
藤原一見

発行者

藤原一見

印刷所

東洋経済印刷株式会社

製本所

松岳社(株)青木製本所

発行所

株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三〇三三九二七八
編輯部〇三〇三三九二七八
振替 〇〇一九〇一五二三三六
郵便番号 一〇一

ISBN 4-560-01986-X

Printed in Japan

〔日本複写権センター委託出版物・特別扱い〕

本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物ですので、包括許諾
の対象となっておりません。本書を複写される場合は、日本複写権セン
ター(03-3401-2382)を通してそのつど当社の許諾を得てください。

■斎藤栄治／編

ヒルティ 幸福論

名著「幸福論」全三部から「仕事をするこつ」「時間をつくる方法」「幸福」「人間とは何だろう」「人間知について」「教養とは何か」「高貴なる魂」等九編を収録。平明な注を加え親しみやすいよう配慮した。

◎A5変型 二八四頁 定価二八〇〇円

■金森誠也／編訳

フロイト

性愛と自我

性愛を手がかりに無意識の世界への扉を開いたフロイトの業績は近代知の柱の一つである。本書は膨大な著作・講演集の中から理解しやすいものを選んで収録した「フロイトによるフロイト入門」の書。

◎A5変型 二三六頁 定価二四〇〇円

■原 亨吉／訳

アラン 人間論

「人間は獣と神の中間者」だという。アランは、こうした二重性を含む人間の問題を、比類なく醒めた態度で考究し、観念論とは無縁の豊かな人間論を展開する。「幸福論」と並ぶ名著。

◎四六判 三五六頁 定価二四〇〇円

■串田孫一・中村雄二郎／訳 辻邦生／解説

アラン 幸福論

「イデー選書」

デカルトやスピノザの情念論・感情論をふまえて「幸福とは何か」を追究したアラン畢生の名著。抽象的な思考に終始せず、きわめて日常的な場面に問題を展開する知恵の書でもある。

◎四六判 二九五頁 定価二三〇〇円